

タイと共に歩んで

泰国日本人会百年史

タイと共に歩んで
ขอบคุณน้ำใจคนไทย



タイ国日本人会

タイと共に歩んで
ขอบคุณน้ำใจคนไทย



タイ国日本人会

泰国日本人会100年史 編集委員会編

タイと共に歩んで

泰国日本人会百年史

祝辞

タイ国日本人会創立100周年にあたり	タイ国日本人会第50代会長	大橋寅治郎	4
タイ国日本人会100周年史祝辞	在タイ日本国大使館特命全権大使	佐藤 重和	6
タイ国日本人会100周年に寄せて	盤谷日本人商工会議所会頭	采野 進	8
日本人会創立100周年の祝辞	財団法人 日本タイ協会会長	北山 禎介	9
タイ国日本人会創立100周年に寄せて	泰日協会会長	コップカーン・ワタナワランクーン (Ms. Kobkam Wattanavrangkul)	10

通史「タイ国日本人会」

戦前期タイ国の日本人会および日本人社会：

いくつかの謎の解明	早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授	村嶋 英治	13
タイ国日本人会史(1953～2013年)	大阪外国語大学名誉教授	赤木 攻	50
タイ国日本人会 歴代会長			73

年表

タイ国日本人会の軌跡 1913-2013	81
戦後の歴代理事一覧	101

歴代会長、会員から「100周年に寄せて」

会長在任当時の思い出	第31代会長	園山 裕三	109
会長在任当時の思い出	第36代会長	佐藤 一郎	111
タイ国日本人会百周年に寄せて	第37代会長	清峰 太造	115
タイ国日本人会の思い出	第38代・41代会長	藤永 隆博	116
日タイ友好親善	第43代会長	三村 洋三	118
慶祝100周年	第44代会長	丸子 博之	120
王様の誕生日	第46代会長	豊田 資則	122
タイ国日本人会100周年 おめでとうございます	第47代会長	吉田 龍彦	124
第1回日・タイ交流盆踊り大会開催	第48代会長	石平厚一郎	126
日・タイ 皇室と王室の御交流について	在タイ日本国大使館特命全権大使	佐藤 重和	128
流動化するタイ政治	元在タイ日本国大使館特命全権大使	小林 秀明	131
2011年中部タイ大洪水	前在タイ日本国大使館特命全権大使	小島 誠二	136
個人的体験を下に概観した日タイ文化交流	前チェンマイ総領事	柴田 和夫	142
2人の明治人が見たバンコクにおける日本人と中国人	愛知大学教授	樋泉 克夫	156

長政の果てた地・六昆		岩城雄次郎	160
クルンテープ誌の思い出	外務省研究所	安藤 浩	164
太平洋戦争に巻き込まれて	写真家	瀬戸 正夫	166
バンプアトーンキャンプの出来事	写真家	瀬戸 正夫	175
山本一元日本人会長と「錬武館」の思い出	タイ国空手道連盟名誉顧問	貞廣 鉄夫	182
日本人会青少年サークルを立ち上げたエピソード		日高富士夫	185
私とクルンテープ誌について		川満 富子	189
タイでの現地入営・除隊時代の回想		西浦 三郎	194
懇和会		日高 龍雄	201
日高 秋雄について		日高 幸子	205
戦中戦後－タイでの忘れ得ぬ思い出		藤嶋 健	213
百周年のお慶びの言葉	第二代(戦後初)日本人納骨堂堂守	長原 敬峰	219
日本人納骨堂のはじまり	第二十代日本人納骨堂堂守	神田 英岳	221
戦前・戦中の世相－日本人学校を軸に振り返る	タイ国日本人会理事	佐藤 実	224
母について		松浦 荔子	230
山本みどりさんの遺稿から	タイ国日本人会理事	稲富 哲夫	232
昭和15年の頃(1940年)大峽 一男さん(第28代会長)の遺稿から	タイ国日本人会理事	佐藤 実	235
「反日運動」西野順治郎さん(第30代会長)の遺稿から	タイ国日本人会理事	佐藤 実	238
小谷亀太郎さん遺稿「授戒」 故人を偲びながら	タイ国日本人会理事	石井 良一	241
追想一世紀(自伝)瀧川虎若先生の遺稿から	タイ国日本人会理事	小野 雅司	247

サークル同好会 百周年に寄せて

文化部	255
ブリッジ同好会／将棋同好会／女声コーラス／バンコク混声合唱団／歌謡コーラス／絵画同好会 クルンテープ写真倶楽部／タイを知る会／陶楽の会／国際結婚友の会／バイリンガルの子供のための日本語同好会 編み物・手芸の会／クルンテープかるた会／メナム句会／バンコク短歌会／社交ダンス同好会	
運動第二部	285
女子テニス同好会／バレーボール同好会／バドミントン同好会／ラグビー同好会／卓球同好会／走遊会 太極拳同好会／剣友会／ヨガ同好会	
青少年部	297
水泳サークル／テニスサークル／演劇サークル／バレーボールサークル／野球サークル／剣道サークル／柔道サークル バスケットボールサークル／サッカーサークル／茶道サークル／ブラスバンドサークル／空手道サークル	

写真で見る日本人、日本人会史 319

1. 王室皇室交流 2. 戦前、戦中の日本人と日本人会 3. 戦後の日本人と日本人会

日本人会各部の活動 347

婦人部／青少年部／広報部／厚生部／会報部／運動第一部／運動第二部／チャリティーバザー実行委員会
チャリティーバザー基金運営委員会／ラムウォン盆踊り実行委員会／その他の日本人会の活動

タイ国日本人会創立100周年にあたり

タイ国日本人会第50代 会長

大橋 寅治郎



タイ国日本人会創立100周年目を迎えるに当たり、会員の皆様にご挨拶申し上げます。

不肖、私は、タイ滞在が、今年で48年目になりますが、4年前に会長職を託され、会員の皆様の安全な生活と会員同士の親睦を図り、更には、タイ人とタイ社会との信頼と親善、親睦関係を更に深化させるべく、理事の皆様方とともに、小生なりの努力をしております。その私が、タイ国日本人会創立100周年と言う御目出度い節目の年を迎え、今を生きる会員全員の皆様方と一緒に祝うことが出来ることに、なにか、運命的なものを感じている次第でございます。

タイと日本の関係は、遠く600年前まで溯ると言われて居りますが、(詳しくはこの度発行されました100周年誌をご覧ください)、特に、徳川時代初期に、タイという新天地へ移住してきた武士や、商人の日本人集団が、当時のアユタヤのソングタム王の庇護を受け、1500人ほどの、日本人町を創ることを許され、活躍した時期がありました。しかし、残念にも、その後のアユタヤ王朝内の政変や、徳川家光の時代の鎖国令発令により、日本人町は消滅してしまったと言う悲しい歴史を経て、明治、大正時代頃から、新たに日本人達が、タイへ再渡来し、工業、商業等

を興し、タイ社会との親善関係を保ちながら、今日に至っているのだと思います。

そんななかで、大正2年の1913年、バンコク在住のおよそ150人の日本人の先輩の方々が、語り合い、バンコク日本人会を創立したのでした。以来100年間の時代が流れる中で、第二次世界大戦が勃発し、1945年には、日本は敗戦国、(タイは戦勝国)となり、その当時のバンコク在住の日本人、(数千人といわれています)はタイ政府の命令で、全員バンコク近郊のバンプアトーンと言う場所に抑留され、その捕虜収容所みたいな場所で、約一年間抑留生活を強いられた歴史的事実があります。しかし、その経験を蒙った小生の友人(今は故人ですが)の話では、そこでの生活はけっして楽なものではなかったが、収容所の管理者、近所の住民達が、日本人に対して迫害や、嫌がらせを加えるどころか、陰日向となって色々な面で助けてくれたものだと言っておりました。タイの家庭では、仏教の教えからくる、ナムチャイー慈悲の心、を日頃実行することが、人間として一番大切であると教えられて来ておりますが、正にその発露が、バンプアトーンの一例ではないでしょうか。

戦後、天然資源が少ない日本国は工業製品の輸出を主体とした貿易を生業として国

の発展を進めてきましたが、年々規模が大きくなり、日本国内だけでの、労働力、土地等の調達だけでは間に合わず、海外にそれを求めるようになったのが戦後20年を経た1960年代でした。ちょうどタイミングよく、そのころ、タイ国政府が、B O Iという、海外からの投資案件奨励法を実行する母体を設置したことを契機に繊維業界、自動車業界を先頭に各業界が、タイ国へとラッシュして拠点を設けて企業活動を開始して以来今日に到るまで、大局的には各業界は頓挫することなく、成功を収めて来て居ることは皆様ご存知の通り御座います。

私が申し上げたいことは、その成功を導いてくれた根本的な要因は、タイ王国という寛容な大家さんの軒先をお借りし、温厚なタイ人労働者に恵まれ、各日系企業が思う存分奮闘することが出来たからこそであるということにあります。加えて、タイ王室と、日本の皇室との絶えることの無い親密な関係を醸成すべく歴代の日本国特命全権大使殿を始めとして担当官の方方がご尽力されたこと、そして、我らタイ日本人会の先輩の方々の皆様も、この100年間タイ人とタイ社会との親睦、親善関係を色々な、草の根的活動を通して、地道に築き上げ、継続して来ているからこそと云うことでもあります。別な言い方をすれば、官民一体となつての、この100年間の色々な、沢山の努力の結果が、常に花を咲かせ続けて来ていると云うことなのです。ですから、今を生きる我々は、改

めてこのことを、感謝の念をもって、しっかりと心に留め、次代へと繋げて行かなければならないと思うのであります。

近年、日本に一番近い隣国二つの国の我々に対する仕打ちを考えるにつけ、タイ王国は日本国にとってなんて有りがたい国だろう思うのは、私だけでありましょうか。重複して申し上げ恐縮ではありますが、創立100周年記念式典挙行という、100年に一度しか巡り合うことが出来ない貴重な今の時代に生きている、我々日本人一人ひとりが、大家さんであるタイ王国とタイ人に対して、軒先を貸して下さって有り難う、ナムチャイありがとう、と言う感謝の心を、思うだけでなく、会員の皆様それぞれが、遭遇する色々な機会に、態度で、行為で、示しましょう。そうすることによって、タイと日本の絆が尚一層強くなり、更なる100年後へと繋げて行くことが出来、タイに住む日本人も日本企業も未来永劫発展し続けることが出来ることを、心から信じて、私のご挨拶と致します。

コックプン ナムチャイ コンタイ、
タイと共に歩んで、100周年(ポスター訳文)

タイと共に歩んで
ขอบคุณน้ำใจคนไทย



タイ国日本人会100周年史祝辞

在タイ日本国大使館特命全權大使

佐藤 重和



タイ国日本人会100周年を心からお喜び申し上げます。大使として、また、この地に在住している日本人の一人としてこの慶事を迎えることができますことを大変嬉しく存じます。

日本とタイの間には我が国皇室とタイ王室との交流をはじめとして、長年にわたる交流の歴史があります。タイが大きな変革発展を遂げる中で、特に近年の日タイ間の経済関係の緊密化には目を見張るものがあります。タイには約5万人の日本人の方々が住まわれており、また、タイを訪問する日本人の数も年間130万人を超えております。

100年前に創立されたタイ国日本人会は、世界でも有数の伝統のある日本人会です。残念ながら当時の記録が残っておりませんが、1913年9月に日本人会が創立されたときには、在留邦人の殆どが会員(当時150名程度)となっておられたであろうことを考えると、その後、現在に至るまでの間、タイの日本人コミュニティがいかに大きく発展してきたかが伺えます。この100年を日本の年号で言えば、大正、昭和、平成の三時代、タイでは、ラーマ6世以降の治世となります。1935年には、ワットリアップに日本人納骨

堂が建立され、現在も、毎年、春と秋には日本人会により法要行事が行われております。同様に現在も、日本人会が毎年慰霊祭を行っているカンチャナブリの慰霊塔が建立されたのは1944年のことだそうです。

この100年の間、タイの社会に深く溶け込み、本当に様々なご苦労を経験してこられたであろう何万、何十万もの諸先輩方の功績の上に、今の私たち日本人コミュニティの豊かで安定したタイでの生活が成り立っているのだと思います。

今年7月、日本政府は、日タイ両国の交流を今後、質的にもまた、量的にも大きく変えることになるであろう重要な決定を行いました。今年7月1日以降、タイ国民の皆様が短期で日本を訪問される際には、ビザを事前に取得する必要がなくなりました。昨年、タイから日本を訪問したタイ人は約26万人となっています。今回の査証免除措置により、これが2倍、3倍に拡大していくことを期待しております。日タイ両国の双方向の交流が更に深まっていくことは、単に友好関係の増進というだけでなく、政治、経済、社会、文化、教育等あらゆる方面における具体的な協力関係の拡大につながっていくものと確信しております。

今年12月には、4年振りに日本人会主催によるラムウォン盆踊りが開かれます。ラム9世86歳を慶祝して行われるこの盆踊り大会は、在留邦人の方だけでなく、タイの皆様も数多く参加される最大の行事であると伺っております。今年のラムウォン盆踊りは日本人会100周年という記念すべき年を象徴する素晴らしいものになると思います。

日本人会の歩んでこられたこの100年は、日本にとってまさに激動の100年であり、当国タイを含めアジアがその歴史の中で重要な舞台となってきました。長い交流の歴史を有するタイとの関係においても、この100年の間に様々な紆余曲折を経てきたことはご承知の通りです。幸い、今日の両国関係は極めて良好な状況であり、交流、協力を更に深めていこうという気持ちが広く共有されているように感じます。そうした中で、日本人会が100周年という歴史的な節目を迎えられることは真に喜ばしいことでもあります。これから新たな100年に向けて、皆様のタイでの生活が更に充実したものになるように、そのためにも日本とタイの関係が更に揺るぎないものになるように、日本人会が引き続き重要な役割を果たして行かれることを心より期待いたします。日本大使館と致しましても、日本人会の活動に全面的な協力、支援を行って参りたいと存じます。

今後とも、タイ国日本人会が更にご発展

されることを祈念して私の祝辞とさせていただきます。

タイ国日本人会100周年に寄せて

盤谷日本人商工会議所
会頭 采野 進



タイ国日本人会設立100周年、誠におめでとうございます。

このたび、「タイ国日本人会 100周年記念誌」の発刊にあたり、ご挨拶をいただく機会を賜りましたこと、誠にありがたく、また光栄に存じます。

さて、歴史を紐解きますと、貴会設立年にあたる1913年といえば、第二次バルカン戦争が勃発した年にあたります。第一次世界大戦突入直前というまさに極限状態の中、当時の在タイ日本人約150名が集まり、自らの安全確保、相互補助を目的として貴会が発足したというのもこういった世界情勢が一つの背景であったと推察致します。

以後100年間、二度の大戦を経て今日に至るまで、日本を離れ、多種多様な思考やバックグラウンドを持つ先人達による貴会運営の道のりは、容易いものではなかったと存じますが、そのご尽力こそが、今日の日タイ両国の緊密かつ良好な友好関係の礎となったことは論を待ちません。

タイを中心としたASEAN経済は、現在、非常に活況を呈しており、日本からの投資活動も益々盛んになっていますが、2015年のASEAN経済統合によって、地域経済のコネクティビティは更に拡大し、ダイナミックな変貌を遂げることが期待されます。その

中であって、今後も様々な分野で、日タイがさらに連携し、人的交流が活発化していくことが重要であり、貴会の果たす役割、期待をさらに大きくしていくものと考えます。

設立100年という区切りの年を迎えられるにあたり、今後とも、タイにおける日系組織として当地の日本人ネットワークの向上や日タイの関係の深化、ひいてはタイにおける社会、経済、福祉、文化の向上のためにご尽力・ご指導をお願い申し上げます。

来年、本所も60周年を迎えますが、貴会と共に連携、協力し合い、在タイの日本人の皆様が安心して生活され、ご活躍をさせていただくためのご支援ができるように、努めて参りたいと存じます。

貴会の益々のご発展を、次の100年に向け祈念申し上げまして、お祝いの言葉と致します。

日本人会創立100周年の祝辞

日本タイ協会会長／日タイビジネスフォーラム（JTBF）会長

三井住友銀行 取締役会長

北山 禎介



日本人会100周年、おめでとうございます。その長い歴史のごくわずかである95～97の2年間に参画させていただき、また、帰国後も今日に至るまでタイファンの一人としてずっとタイとの関係親密化に非力ながらも努力してまいりました私といたしましても本当に嬉しく感じております。

タイと日本との関係は古くは14世紀ころのスコータイ時代の交易に遡るそうですが、公式関係成立は明治時代の1887年「日タイ修好宣言」調印です。従って昨年2012年が125周年にあたるとのことで、私自身も東京でのタイ外務省・大使館主催のシンポジウムに出席するなどさせていただきその長い関係に思いを新たにしました次第です。

日本人会は100年前に発足されたわけですから、この公式関係125年前から25年後ということになります。大橋現会長の新年ご挨拶によれば、100年前在タイ日本人数百人の方々が日本人会を組織され、タイ人社会との親睦を培ってこられたとのこと。今日に至るまでの一世紀の間幾多の試練も当然あったと想像しますが、こうした先達の大きいなご努力に改めまして敬意を表したいと存じます。

私が駐在した頃の90年半ばは今と同様日本企業の進出ブーム時であり、日本人会においてもサトーンの本部に加えスクムビットの別館が計画された頃で、躯体に近いコンクリートむき出しの候補ビルを見学したのも懐かしい思い出の一つになっております。また、盆踊り大会やチャリティバザーも忘れがたい思い出です。

帰国後はタイの友人・知人と交流を続ける一方、日タイ協会（昨年6月から会長就任）、日タイビジネスフォーラム（JTBF）会長などタイとの関係は継続深化しております。JTBFは11年前タイ駐在経験者と在京タイ大使館とで設立された言わばタイファンの団体であり、企業の立場を離れ日タイ関係の更なる親密化を目指していろいろな事柄について大使館と交流、加えて有志十数人で毎年1度ミッションという形でセンチメンタルジャーニーを楽しんでおります。このような世代を超えた駐在経験者団体の活動は他の国では見られないとも聞いております。これも日本人会、JCCなどタイに根ざした関係各位のおかげと感謝申し上げる次第です。

100th Anniversary of Japanese Association in Thailand

泰日協会会長

コップカーン・ワタナワランクーン



To carry on the torch of Friendship Spirit from Japanese to Japanese and from Japanese to Thai for over a century is a remarkable achievement done by united hearts, hands and heads from generation to generation of Japanese Association in Thailand. Salute to all especially Mr. Ohashi who have made this Association successful and sustainable in strengthening the bond between people and the love between two Nations.

Kobkarn Wattanavrangkul

President

Thai-Japanese Association

通史「タイ国日本人会」

戦前期タイ国の日本人会および日本人社会：いくつかの謎の解明

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授 村嶋 英治

タイ国日本人会史（1953～2013年）

大阪外国語大学名誉教授 赤木 攻

タイ国日本人会 歴代会長の紹介



戦前期タイ国の日本人会および日本人社会： いくつかの謎の解明

早稲田大学大学院アジア太平洋研究科教授

村嶋 英治

はじめに

本稿は、明治期から第二次世界大戦期までのタイ国における日本人社会およびその団体活動について、従来知られていない事柄や曖昧にしか判っていない、いくつかの事象を新しい資料を用いてできるだけ解明しようと試みるものである。

この時期の日本人会の活動については、タイ国(泰国)日本人会創立50周年の節目に、泰国日本人会『創立五十周年記念号』(東京、1963年、136頁)が刊行され、その後、70周年、80周年、90周年に、『クルンテープ』の特別号が発行されている。

また、タイの日本人社会については、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(講談社、1987年)がある。同書の第二部は明治期以降の在タイ日本人を比較的詳しく扱っているが、細部に不思議なほど不正確な記述が目立つ。一方、テーマは限定されてはいるが、香川孝三『政尾藤吉伝：法整備支援国際協力の先駆者』(信山社、2002年)や松本逸也『シャムの日本人写真師』(めこん、1992年)は本格的な調査の成果であり、解釈には賛成できない部分もあるが読み応えがある。

戦前期の日本人会の歴史は、もし現在の日本人会が戦前期の文書を所蔵している

ならば、それに依拠して比較的容易に書くことができるはずである。ところが、日本人会には、この種の文書は何ら残されていない。また、1930年代前後の日本人会は1～2年に一回の割で、合計10数号の会報を発刊しているが、公共施設や個人の所蔵として、保存されていることを筆者が確認できたものは、7号(1936年7月15日発行、ガリ版刷)、8号(1937年5月1日発行、神戸で印刷)、9号「アンコール特輯号」(1938年3月1日発行、神戸で印刷)、10号(1939年9月30日発行、神戸で印刷)、11号(1941年3月20日発行、神戸で印刷)の5冊に過ぎない。



泰国日本人会会報第11号
(1941年3月20日発行)

加えて、在タイ公使が本省大臣に宛てた

日本人会創立に関する公文の報告書も存在していない。それ故、1913年9月の日本人会創立の様相も判らないし、1910-30年代の日本人会会長の氏名さえも数人分は不明か、間違っただけである。

第二次大戦における日本の敗北直後の1945年9月、当時の自由タイ政府は戦勝者である連合国に代わって全ての在タイ民間日本人の財産を接收し、また全民間日本人をノンタブリー県のバーン・ブアトーン (Bang Bua Thong) 収容所に強制収容した。1946年2月時点で、3400人ほどの日本人が同収容所に収容されており、この内800人前後がタイ残留を希望していたが、英軍の厳しい審査により許可された日本人(台湾人・朝鮮人を含まない)は146人であった。彼らは1946年9月25日に強制収容所から解放されたが、制限の多い生活を送らざるを得なかった(村嶋英治「日タイ関係 1945-1952年—在タイ日本人及び在タイ日本資産の戦後処理を中心に」、『アジア太平洋討究』創刊号、2000年)。このため、明治以来培われたタイの日本人社会は根こそぎ失われた。

戦後、日本人会は1953年10月8日付けで、タイの国家文化法第14条に基づき協会設立の登録を申請し、1954年2月23日付で許可を得て、正式に再発足した。終戦直後の在タイ全民間日本人3603名の強制収容(1945年9月半ば)、その大半の日本人の日本への強制送還(46年6月16日)、更に戦後

再建までの8年間のブランクなどによって、日本人会や在タイ日本人家庭に保存されていたであろう、日本人会関係の資料や情報は消失したのである。それ故、戦前の在タイ日本人会や日本人団体の歴史資料の多くは、現在の日本人会以外から求めざるを得ない実情にある。

戦前の日本人会・在タイ日本人社会および日タイ関係に関する、筆者の収集作業は、いまだ途上にあるが、本稿では、上述した先行著作とは、できるだけ重複を避け、別の資料の紹介に努めたい。なお、筆者の資料収集が完了していないことに加え、本稿は紙数の制限もあるので、全ての期間をカバーして通史的に記述することは不可能である。本稿では、一般には知られていないこと、あるいは知られていても事実とは一致しないので訂正の方がよいと思われることを中心に取り上げる。クルンテープ誌2010年7月号より今日まで筆者が「バンコクの日本人」のタイトルで連載している原稿も、同時にご参照頂ければありがたい。

なお、本稿では敬称は全て省略し、敬語表現は使っていないことをご寛恕願いたい。引用文中の[]内の記述は、筆者による修正、追加もしくは説明である。

日本人の来タイの始まり

明治になって最初に来タイした日本人は、大鳥圭介、川路寛堂、河野通猷らの一行であると思われる。彼らは、1875(明治8)年2

月－3月にバンコクに滞在した。日本、清国、暹羅の三ヶ国を兼任するシェッフアー・オー
ストリア弁理公使が、1874年12月16日に
明治天皇に信任状を捧呈した後、チュラー
ロンコーン王に信任状を捧呈するためにバ
ンコクに向かうに際して、日本政府の依頼に
より弁理公使一行の船に大鳥らが便乗した
ものであった。大鳥らは香港からオースト
リアの軍艦フレードリヒ大公号に乗ってバン
コクに入った。大鳥らの訪タイ報告書は、
『暹羅紀行』(工部省、1875年8月刊、暹羅
紀行と暹羅紀略(上・下)から成る)として名
高い。

日本の民間人で最初の来タイ者は、外務
省の旅券下付表で見ると、1884年に
別々に来タイした、本間伊喜蔵(34歳、新潟
県平民)、和田松五郎(31歳、富山県平民)、
大軀楽之助(55歳、神奈川県平民)の3名で
ある。本間と和田は、アーネスト・サトウ駐
タイ英公使に雇われたものである。大軀も被
雇用と記されているが、誰に雇われたのか
は明記されていない。

これと同じ頃、当時醜業婦と呼ばれた日
本人女性たちもバンコクで営業を開始した
ようである。彼女らの存在は、1930年近く
まで確認できるが、バンコクの市場規模が
小さかったためか、あるいは別に大きな
供給源があったためか、多い時でも20－30
人前後に過ぎなかったようである。

タイ外務大臣テーワウォン親王一行が
来日して、1887年9月26日に『修好通商に

関する日本国暹羅国間の宣言』が東京で調
印された。続いて翌年初め、この宣言の
批准書交換(1888年1月23日)のために、
パーサコラウォン大使一行が来日した。

パーサコラウォン一行の任務は、批准
書交換だけではなく、日本の教育、司法、
軍事制度の調査も兼ねていた。

1888年2月末の帰国に際し、パーサ
コラウォンは、6名の日本人を同行した。
東京鎮台給仕の山本安太郎(1872年6月生)、
名古屋の山本銀介の2少年、真宗大谷派
(東本願寺派)僧侶の生田(織田)得能、
真宗仏光寺派僧侶の善連法彦(よしつら・
ほうげん)および、日本で入手した2頭
の馬の世話係である宮内省の馬丁など
である。

パーサコラウォン大使が2少年を伴
って帰国した理由は、次のように報道
されている。「暹羅国大使：同大使が
此度雇入れ帰国の節連れ帰へらるる
福島県人山本安太郎氏(十五年七
ヶ月)は目下大使の各地巡覧にも
同車して随行し居る由なるが同大
使が我国の子供を雇ひ入れたる訳
柄と云ふを聞くに帰国の上座右に
召し遣ひて自からいろはより漸次
日本語を習はるる為めにして又山
本氏へは大使自から英語を教へら
ると云ふ又其雇入れ年限は五ヶ年
にして月々六弗を給与せらるる約
なりと」(東京日日新聞1888年2
月5日号)。

生田得能と善連法彦は仏教研究の
目的で同行した。生田は帰国後、
タイ仏教に関する日本人の最良の
著作と云うことができる『暹

羅佛教事情、附生田得能自伝』(真宗法話会、東京、1891年、全103頁)を書いている。

1890年には、三重県出身の建築技師佐々木寿太郎(ひさたろう)が来タイし、イタリア人の建築会社スワラート会社(Suvarato & Co.)に就職した。佐々木の詳しい経歴は不明であるが、彼はタイで正業についた最初の日本人であると思われる。1892年7月に来タイした岩本千綱(高知県土族、1858—1920)や1894年6月に来タイした阿川太良(山口県土族、1865—1900)らは彼の世話になった。佐々木は邦人中の人望家であったようである。彼は、1910年5月23日にバンコクで死亡した。

佐々木来タイの翌年、1891年末には20歳の製図士、田山九一(香川県高松出身土族、1870—1941)が来タイし同社に就職した。田山は、その後タイ政府の内務省(後通信省)の技師として長らく在タイし、1924年に退職後帰国した。

1890年末には、名古屋市の桜井鉄次郎(40歳)がバンコクに商用に行く目的で旅券の交付を受け、1891年末には東京の二村圓助、後藤彦太郎、宮崎国松がバンコクに建築業調査に行くために旅券を取得している。

1892年5月には、野邊地久記(東京府土族、1860—1899)がタイ政府の鉄道建設事業のために雇聘され来タイした。彼は1882年に工部大学校土木工学科を卒業した鉄道工学の専門家で、来タイ前は九州鉄

道技師長、帰国後1894年から早世するまで東京大学の土木工学の教授を務めた。

1892年8月にパーサコラウォン文部大臣は、3名の日本人版画家を3年契約で雇用了。すなわち、嶋崎千六郎(天民、1856年3月生)、大山兼吉(翠松、1864年5月20日生)、彫工伊藤金之助(1867年8月29日生)である。嶋崎天民は、合田清がフランスから木口木版の技術を持ち帰る前に、独自に見様見真似で木口木版に成功し、1885年に精巧な木版を『絵入朝野新聞』に掲載した人物である。

上記3名に1894年3月には、印刷工樋口二郎(1868年生)が加わった。翌95年、伊藤と樋口はそれぞれ肺結核、赤痢で死亡した。1910年頃まで、バンコクの衛生事情は極めて悪く、来タイ後、数ヶ月も経ないうちに、コレラ、腸チフス、赤痢などの伝染病で命を落とす日本人は少なくなかった。

1888年12月に陸軍中尉で陸軍を去った岩本千綱が、タイの土を初めて踏んだのは、92年7月である。岩本は、在タイ半年にして早くも93年1月には、同地を発ち、2月17日に神戸に帰着した。彼の目的は、佐々木寿太郎らと共に、タイで開店する予定の秋津商会のための商品買い付けであった。同時に、岩本は、新聞記事や講演会で、タイ事情を紹介し、またタイのスラサックモンتری農商務大臣の支援を得ていると称して、日本人のシャムへの農業移民を唱道した。また、自著『暹羅探検実記』(興文社、東京、

1893年10月16日発行)を刊行した。岩本の広報活動もあって、この頃から、タイでの殖民あるいは諸事業に関心を有する日本人が増加した。

1893年8月に岩本はタイに戻ったが、恰度同じ時に、石橋禹三郎(長崎県平戸出身、1869—1898)が来タイ。両者は、意気投合して移民事業に奔走する。

岩本・石橋の勧めにより、1893年12月から翌1月には、津田静一の実弟、熊谷直亮(熊本県士族、1863—1920)が移民地調査のために来タイ。彼らは、文部省雇いの日本人画工4名らと共に、文部大臣パーサコラウオン邸の一角を住居としていた。

1894年3月—4月には、斉藤幹シンガポール領事も移民地調査に来タイ。斉藤幹の来タイには、稲垣満次郎(1897年3月初代駐タイ公使、長崎県平戸出身士族、1861—1908)もシンガポールから同行した。同年5—8月には、日本吉佐移民会社から派遣されて鈴木錠蔵(茨城県士族、1869—1947)が、同じく移民の可能性調査に来タイ。同時期に山崎喜八郎(長崎県諫早出身、1867—1912)が商況調査に来タイした。山崎も石橋もアメリカに長期滞在した経験を有していた。

バンコクで日暹協会の結成

山崎喜八郎は、来タイした1894年5月頃のバンコクの日本人社会の様子を次のように書いている。

「予が始めて当国[シヤム]に渡来せし当時に於ける盤谷府在留日本人の数を挙ぐれば男七八名、女未詳(凡十数名)之に予が香港より同航せし四名の男子を加ふるに過ぎざりしなり其後予が滞在中前後相踵[ついで]で渡航せしもの六名ありき。惣じて当時日本人の住宅として一家を営む者は女子三戸何れも淫を鬻[ひさ]ぐ醜業婦なりとす、男子は別に一戸を構[かま]ゆる者なし則ち或は文部大臣[パーサコラウオン]官宅内に寓するあり又は他に下宿する等其他種々なりし、而して予は友人岩本千綱、石橋禹三郎の二氏と共に現農商務大臣[スラサックモントリー]の旧邸内或の一屋を借受けて之に住し名けて暁鐘庵と称し日夕東洋の大勢を論じ興亜の経綸を説きて長剣空しく匣中に鳴りしの感なくむばあざざりき。当時在留日本人の職業を大別すれば暹羅国政府雇美術教師(彫刻、絵画)に大山翠松、嶋崎天民、伊藤義正[金之助]の三氏通弁として山本安太郎、山本新介[銀介]の二氏建築師に佐々木寿太郎、田山九一の二氏、総て是等の人々が新渡来者に向つて種々の便宜を与へたること実に少々にあらざる可し其他有志家あり医師あり語学研究者あり又は単に視察の爲め渡来せし者等種々なりとす」(山崎喜八郎『凶南策実歴譚』、鐘美堂支店、東京、1899年、15—16頁)。

1894年に入ると、岩本等はスラサックモントリーの旧邸バーン・サーラーデーに移り住み、この館を暁鐘庵と称した。来タイし

た邦人の多くも、暁鐘庵に住まった。日清戦争勃発に伴い、バンコクの日本人は1894年7月26日に暁鐘庵で、戦争勝利を祈願する大会を開催。「同夜会合せし有志者は石橋禹三郎(長崎)、松野恭三郎(同上)山本安太郎(東京)佐々木寿太郎(東京)島崎千六郎(東京)田山九一(香川)大山兼吉(東京)樋口二郎(愛知)山崎喜八郎(長崎)鈴木錠蔵(茨城)松田惣一(東京)の11名にて此他疾病事故等にて欠席せし者六七名」(朝日新聞1894年8月24日号)であった。上述2引用から見て、1894年半ば過ぎの在タイ日本人は、醜業婦を除けば17-18名というところであった。

さらに同年8月26日には暁鐘庵で、6-7名の日本人が会合し「日暹両国間の親和公益を謀り併せて在留日本人の保護団結を主とする目的」で日暹協会の発会式を挙行了した(前掲、山崎喜八郎『図南策実歴譚』)。

日暹協会は、在タイ邦人による最初の団体であり、今日のタイ国日本人会の源流であると言うことができよう。当時岩本は、移民募集のため日本に帰国していたので、日暹協会創立の中心者は石橋禹三郎であったと思われる。1894年末に岩本が連れてきた第1次移民団32名との契約では、来タイ後当初1ヶ月間は、日暹協会が移民の生活上の面倒を見ることになっている。

1895年3月頃から滞日中の岩本と、1896年初に帰国した石橋は、東京でも1896年9月4日に日暹協会の準備会を発足

させた。

バンコクの日暹協会と東京の日暹協会の関係は、「日暹協会」と題した九州日日新聞(1896年7月22日号)の記事に次のように述べられている。

「従来暹羅国に縁故ある岩本千綱、宮崎寅蔵[滔天]、益田三郎、山本安太郎の諸氏及び目下我国に来遊中の暹羅人ウオム氏等は今回東京に日暹協会(社交的団体)を設立し遙に盤谷の日暹協会(同地居留本邦人の社交団体)と気脈を通じ大に両国間の通商其他に便宜を与ふる趣きにて現に其順序方法及び規約等に関し調査中の由其組織方法の成立するを俟ち広く朝野名望家の賛同を乞ふ筈にて暹羅に於ては同協会にして成立する暁きは皇族一名並に二三大臣其他朝野の名士数名は直に入会するの内約整ひ居れりと云ふ」。

更に、東京の日暹協会準備会の様子は次のように報じられた。

「日暹協会の集会 一昨四日午後二時より日暹協会並に有志諸氏愛宕下青松寺に集会し岩本千綱氏は暹羅国事情並に協会設立の趣旨を述べ石橋禹三郎氏は同国僻陬の景況を話し終て主唱發起人総代岩本氏より発会式を挙る迄の世話人を左の十三氏に囑托せられたりと云ふ 高橋與市 河合萬五郎 穴戸集太 武井忠五郎 安田勲 村田峰次郎 大野保四郎 小林樟雄 原治三郎 菊池謙讓 鈴木巖 井土経重 富樫吉二郎」(国民新聞1896年9月6日号)。

96年10月には岩本はバンコクに発ち、東京の日暹協会は、結局準備会止まりで終わったようである。

明治28(1895)年の在タイ日本人

さて、話をバンコクに戻す。明治28(1895)年1月4日に、ワチルナヒット皇太子が早世したが、その直後、チュラーロンコーン王はイギリス留学中のワチラーウット親王(後の6世王)を皇太子に立てた。1895年1月28日付けで、在タイ日本人12名は連名で立皇太子のお祝い文をテーワウオン外相に提出した。12名とは、建築技術者の佐々木寿太郎と田山九一、タイ文部省に雇用中でバーサコラウオン文部大臣邸を住所とする画工4名(嶋崎千六郎、大山兼吉、伊藤金之助、樋口二郎)、それにスラサックモントリー邸(バーン・サーラーデー)を住所とする大谷津直麿、石橋禹三郎、松野恭三郎、辻秀五郎、三谷足平、武藤(ぶとう)美一である(タイ国立公文書館Ko To.9.5/1)。

松野恭三郎は、1875年半ばに平戸の士族松野太郎の三男として生れ、1894年3月8日に東京府から、暹羅語研究に渡航する目的で旅券の下付を受けて来タイした。

辻は1871年末に長崎県で生れ、1894年末か95年初に来タイしたばかりであった。1904年ごろまでタイで商業に従事したのち、蘭領東印度に転じたようである。武藤美一は1877年に佐賀県で生まれ、辻同様来タイしたばかりであった。横浜で働いたこと

があり、少々日本語にも通じ日本人を妻とするデ・ソーザ(マカオ生のポルトガル人、英国籍)が1895年1月に来タイして、同年8月に怪しげな出資金を集めて「日本暹羅銀行」を立ち上げ、半年も保たずにつぶれたが、武藤は、この銀行の事務員であった。

三谷足平(1860-1924)は、弘前藩の御用刀研師の家系に生まれた。父の三谷仏句は、津軽の著名な俳人である。三谷は父親の俳友である藩医(近習医)北岡太淳のもとで医学修業を開始した(『大浦山誌』、海蔵寺住職花田正道発行、弘前、1944年、24-25頁)。三谷は、21才2ヶ月時の1881年6月に医師の開業免許を取得、陸軍の三等軍医に採用され、仙台の第二師団に属した。その後非職(休職)となり、1887年4月には東京に上京した。そのまま多分東京で医業に従事していたと思われる。日清戦争の勃発により、召集準備のために休停職及び予備将校について調査が実施されたが、1894年8月に予備陸軍三等軍医三谷足平は無届けのまま行方不明になっていることが判明した。善意に解すると長期間休職中であったので何らかの手続きをする必要があることを認識していなかったのかも知れない。彼は召集に応じなかったため、最初の罪に問われることになった。即ち、「明治二十八[1895]年十月廣島地方裁判所に於て充員召集不応の件に抛り軽禁錮二ヶ月の欠席裁判」の判決を受けた。もし、日清戦争が勃発しなければ、罪に問われることもな

かったであろうが。

この間の事情について、宮崎滔天(寅蔵)は「暹羅殖民始末」で次のように書いている。「氏[三谷]は青森の人、曾て身軍籍にあり。私に脱して清国上海に入り、醜業婦を妻として医業を営む。日清の衝突起らんとするに際して、政府は一片の召喚状を発して彼れが帰朝を促す。氏逃れて香港に到る。茲に亦同様の事に逢ひ、一身を隠すに処なく、終に日本の領事公使館なき暹羅に入りたる也。・・・当時氏[三谷]の名声は在留日本人中に一分の信用もなく」と。宮崎は、広島に移民会社である海外渡航株式会社に雇われ、その代理人として、1895年10月に第2次移民20名を伴ってきた人物である。三谷は鉄道建設工事請負人と工夫供給契約をして、宮崎の監督下にある移民8名を、鉄道工事に勧誘して連れ出した。そのうえ、彼らの月給の半額を手にとすると保護監督の義務を放棄してバンコクに帰り去ったので、請負業者は三谷との契約を解除し、直接工夫と契約を締結したという。但し、宮崎の三谷糾弾は、自分が責任者として連れてきた移民が、三谷に奪われるという対立関係にあるので、割り引いて理解する必要があるかも知れない。

その三谷も日露戦争後には、自らの病院経営も軌道に乗り始め、日本人社会の名士に転じた。彼は、1913年9月もしくは14年3月に組織された日本人会の初代会長である。

2度に亘る日本人移民事業の失敗

タイへの集団移民は1894年末と1895年10月の2回で、第1次移民は1894年10月前後に岩本千綱が山口県大島郡(周防大島)や那珂郡で募集した32名の農業移民、第2次移民は、広島に移民会社である海外渡航会社が、岩本千綱らの暹羅殖民会社の依頼により熊本県荒尾とその周辺で募集した20名である。

当時の日本に簇生した移民会社は海外の移民受入先を準備した上で、移民希望者が多いと思われる県に目をつけ、その地方の新聞紙等を通じて移民を募集した。移民会社が進出して募集することによって、従来移民者が殆ど存在しなかった県でも、移民が急増した。たとえば、1890年代半ばの移民の出身県は主に、広島、山口、福岡、熊本であったが、その後移民会社が和歌山県や沖縄県で活発な募集を開始し両県の移民者数が急増している。また、移民会社が選んだ受入先がある国への日本人移民数は、当然急増した。例えば、フィリピンやペルー、ブラジルのように。移民会社による移民募集は、一回の募集規模が数百人と大きく、特定地域で行われ、また受入地も特定の国に集中した。

タイでは上記2次に渡る集団移民の失敗のため、それ以後移民会社が関与した集団移民は行われることはなかった。従って集団移民により在タイ邦人が急増することはなく、また、タイに渡航した邦人の出身地

は一ヶ所に集中することなく、全国各地に分散することとなった。

第1次移民の募集は、移民保護規則に違反したものであったが、岩本は当局の渡航阻止を潜り抜けて神戸を出港した。第1次移民団到着後、岩本、石橋らは更に大量の移民募集を企図し、その受け皿として暹羅殖民会社を設立した。

第1次移民団と同時期に写真師磯長海洲(鹿児島県士族、1860—1925)が来タイして開業した。磯長は1880年9月に駒場農学校普通農学科に私費で入学したが、留年となり1年余で退学した。その後、1890年に中国に渡り、日清戦争が始まったのち帰国し、内縁の妻とともにタイに渡って来たのである。彼は1912年頃まで在タイして、この間、バンコクの日本人社会の中心人物の一人であった。

第1次移民団は農業目的であったので7組もの夫婦がおり、年齢も高かった。彼らは、タイでは稲の三期作も可能なので農業で十分な所得が得られるとか、タイの農商務大臣スラサックモンリーから支援を得られるとかいう、岩本の甘言を信じて来タイしたのであるが、実際は灌漑水がなくて耕作もできない乾期の大地に金銭的な支援者もないうまく放り出された。その結果、比較的高い日銭が入る仕事を求め、フランス人がパリで出資者を募って開いたワタツタナー金鉱山会社がプラチンブリー県内外の3ヶ所で経営する鉱山の一つ、ブカヌン金鉱山(現

在コーラート県ワンナムキオ郡タンボン・ワンミー、ター・ワンサイ村)や、丁度建設中のコーラート線鉄道の工夫に転じた。ブカヌン金鉱山は、そこから徒歩2日の範囲内には人家はない、森林の大海中の孤島であり、この金鉱山に行った15名中の10名は95年9月に暹羅殖民会社の石橋らが助けに行った時には、マラリアで既に死亡しており、生き残っていたのは一人の日本人妻と幼子のみであった。その前にバンコクまで帰り着いた4名のうち2名はコレラで死亡した。希望に満ちて来タイした第1次移民団は、1年も経ずに12名が死亡するという悲惨な結末を迎えた。

1895年10月に宮崎滔天が連れてきた第2次移民が、鉄道工夫に勧誘されたことは前述した。最終的に鉄道工夫に就業した人数は15名に達した。しかし、1896年4月初までには、全員がマラリアに罹ってバンコクに戻り、このうち6名が死亡した。まもなく、4—5人の半病人を除けば残りはシンガポールに脱出した(宮崎滔天『三十三年の夢』、国光書房、1902年、97—102頁)。

一方、広島県知事が、1897年12月22日付で外務省通商局長に提出した報告によれば、明治28[1895]年に海外渡航株式会社(本社広島市)が扱った暹羅行きの移民数は男18名、女2名である。(合計20名は第2次移民数と合致する。)翌96年[どの時点かは不明]における、20名の暹羅移民の状況は、男女各1名が帰国、6名が死亡、男7名、

女1名が依然契約中であり、4名は契約を解除した。外地で生きている12名中、5名は既にタイから別の国に転じている(外務省記録3.8.2-85「移民取扱人に依る移民並依らざる移民の員数 各府県知事並に在外領事より報告一件」)。

以上の記録から見て、第1次移民のうち12名がブカヌン金鉱山工夫として働いて死亡、第2次移民のうち6名が鉄道工夫として働いて死亡したことが判る。即ち、第1次、第2次移民の合計死亡者数は18人になる。

ゲンコイの慰霊碑の真実

1928年に23歳の若さで来タイし日高洋行を創立した日高秋雄(としお、1905-1979)のむすめである百合江は、日高秋雄が中心になって日本人会が1966年にサラブリー県のゲンコイ寺に慰霊碑を建設した経緯を、次のように記している。

「それはずいぶん昔のお話しになります。昭和十九年(マ)頃にニューロード近くに面田利兵衛[正しくは面田利平]さんというせんたく屋(マ)さんをしていた人が父を呼び『自分が今まで思っていた事だがとうとう実現出来ずこの事を日高君にたのむ』とこのゲンコイ[ゲンコイ]の山口県人の工夫の方のことを話したそうです。それは山口県人の日本人第一回の移民としてバンコックにて、現在のルンピニー公園の土地でと聞いておりますが、米作をやりましたが失敗し、その当時のドイツ技術師の紹介で

バンコック・コーラート鉄道の建設の工夫として参加しマラリヤと風土病に倒れ皆んな亡くなったこと、その人達のお墓がないということに非常に気にかけていたと面田さんのお話しでありました。父はその当時戦争中でありなかなか表面化させる機会もなく苦慮をして居りましたが、面田さんとはかならずお墓を作って上げましょうと約束したそうです。面田さんはその後すぐに亡くなりました。それから終戦キャンプ生活を余儀なくされ日本へ送還になり、再びバンコックに帰泰し、その当時のバンコックはなかなか大変な様子でした。・・・世の中も少しは落付いた昭和四十年頃に父はゲンコイの工夫のことを思い出し、約束をはたさなくてはと思ひ色々と尋ね人をしました。ゲンコイでなくなった方々のお墓を作ると言っても名前もわからずではと、昭和四十年に日本へ帰国した時、山口・広島・岡山各県の地方新聞・ラジオ・テレビ等へ事情を話し、色々の方々の協力をいただきました。但し父の滞在中は名のり出る人がなくあきらめてバンコックに帰りましたが、しばらくして山口県から自分の曾祖父がバンコックのゲンコイで亡くなったと言い、名前は鍛本作造という事がわかり父は非常によろこび、早速過去帳に現在の様[山口県人鍛本作造以下十七名ゲンコイ地区にて工夫として労務中風土病に倒る]に書き替えました。それで風土病やマラリヤで死亡された方々の霊を慰さめるため昭和四十一年十月ゲンコイ市ゲンコイ寺

の住職から許しを得て釈迦像を建立し碑文を彫刻しました。日本人会では五年毎にゲンコイ寺で慰霊祭を行うことにしています。日本人第一回移民の碑文は次の通りである。

日本人第一回移民ノ碑

日本人第一回シャム移民山口県人鍛本作造氏外十七名ノ霊此地ゲンコイニ眠ル

之等ノ人々ハ一八九四年(明治二十七年)岩本千綱氏引率ノ下ニ日本人最初ノ移民団ニ加ワツテシャムニ渡リ農務卿スリサク侯ノ後援ヲ得バンコック市ニテ米作ニ従事シタガ事志ト相容レズ時恰モバンコックーコーラート間鉄道敷設に当リタイ国鉄道省ドイツ人技師ノ斡旋ニヨリ之ニ従事シタ稀有ノ難工事ニ加エ未開瘴癘遂ニマラリヤニ冒サレ十八名ガ異郷ニ永眠 之等移民ノ七十年祭ニ本国ヨリ仏像一体ヲ勸請シ碑ヲ建立シテ霊ヲ慰メ以テ其ノ冥福ヲ祈ル
一九六六年三月二十一日 泰国日本人会

この様に父が面田さんとの約束を果し得たことは、日本人会の方々的一方ならぬ御協力があったからだと思います(日高百合江「タイ国日本人納骨堂五十周年に寄せて」、高野山真言宗タイ国開教留学僧の会(会長藤井真水)編『泰国日本人納骨堂建立五十周年記念誌』京都、1987年、41-43頁)。読みづらい文章であるが、意味は把握できる。

日高秋雄は、1938年度と39年度8月まで日本人会の理事長(会長に次ぐポスト)を、また39年度の8月から残余期間、会長を務

め、戦後も日本人会の役員として貢献した。同氏のビジネスについては、『遙かなるメナムの流れ、日高洋行八十年史』(2008年刊)に詳しい。

1971年から79年まで日本人会会長の役にあつた西野順治郎(1917—2001)は、『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月刊)56—58頁で歴代日本人会会長を紹介している。この紹介は、『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』(1993年12月30日刊)13—16頁に直近の10年間分が追加された点を除けば、修正されることなくそのまま再掲されている。残念ながら、本稿で追々指摘するように、戦前部分の会長名、在任時期については完璧からはほど遠い。とにかく、西野は上述会長紹介で、三谷足平初代会長に関して、「三谷足平(医師)大正三年～四年度、明治二十七年にシャムに渡り、陸軍軍医部長(マ)も勤め、山口県移民団がケンコイ[ゲンコイ]にて倒れた際に治療に馳せつけた等功績大」と書いている。筆者は西野氏の生前にインタビューしたことがある縁で、氏の没後、バンコクの旧宅を訪ねて残された資料を拝見させてもらったことがある。その中に上述の歴代日本人会会長紹介の草稿も見つかった。その草稿には三谷足平について、「明治27年ゲンコイ地区にてコーラツト バンコック間の鉄道建設中の山口県第一回日本移民団18名のマラリヤ発病を聞いて直に水牛の背に乗って治療に馳せ

つけたるも時既に遅く日本婦人1名子供赤子各1名を救助したるのみにて移民団18名死亡せらる(面田利平氏より承る)」と書かれている。西野が初来タイしたのは、自伝(西野順治郎『タイの大地と共に』、日経事業出版社、1996年、298頁)によれば1937年7月24日であり、面田は同年9月6日に死去しているの、面田から直接聞いたのではなく又聞きだと思われる。

面田利平(1870—1937)は、第1次移民32名中の生き残りの一人で、亡くなるまでバンコクで理髪業を営んだ。面田は、ブカヌン金鉱山で働いて死亡した12名(第1次移民)と鉄道コーラート線建設で死亡した6名(第2次移民)、合計18名について墓もない無念さを日高秋雄等に訴えたものと思われるが、日高も西野も死亡した18名は総て鉄道工夫であったと勘違いしてしまったようである。ブカヌンを探したくとも、ブカヌンの地は、1920年代半ば以降は地図からも消えてどこにあるのかさえも判らなくなっていたのであるから、やむを得ないことかも知れない。上に引用した第一回移民の碑に書かれている、ゲンコイ地区で死亡した山口県人鍛本作造とは、正しくはブカヌン金鉱山で死亡した鍛本信蔵(45歳)のはずである。また、碑にいう第一回移民とは、第1次、第2次移民の両方を含んだものだと解されねば、数が合わない。

フランス領事の日本人保護

1895年半ば第1次日本人移民が、岩本千綱・石橋禹三郎らの暹羅殖民会社との関係を断ち、ブカヌン鉱山を経営するフランスの会社と直接雇用契約をすることにした際、石橋は移民たちがフランスの保護下におかれることをフランス公使に要請した。これを奇貨としてフランスは日本外務省に働きかけ、1895年9月14日よりフランス領事が、在タイ日本人とその利益の保護を担当することとなった。

朝日新聞1895年10月11日号は、この経緯を次のように報じている。

「暹羅在留日本人は本国政府の処置に就き非常に不満を抱き居るもの如し 従来暹羅に在留する日本人は暹羅国法に従ひ之に満足し居りしが追々在留日本人増加し其利害の關係する所重大に至れるを以て領事の管轄を受くるを便宜と考へ居る折柄和蘭総領事の之が委任を受けんと欲する趣を聞き在留日本人は必要の権限を同総領事に与へられんことを本国政府に請願せり 然るに仏人パヴィー氏は仏国の新名誉と勢力を得る好機なりと考へ暹羅鉱山[ブカヌン金鉱山]に於て仏人の配下に属し仏国公使館に於て其約束に調印したる若干の日本人は仏国の保護を受くる者として登録したり 仏国外務省は此通知を得て日本駐劄公使に其運動を為さしめたる結果暹羅在留日本人は九月十四日を以て仏国の保護に置かれたりとの通知を受たり 之を

聞くや在留日本人は実に狂するが如くに激昂し、・・・暹羅在留日本人の仏国人に対する感情斯くの如くなれば今回仏国の保護の下に置かれたる日本人は会議を開き信任ある適当の本邦人を派遣せらるべきことを日本政府に請願すること及び在留日本人の仏国保護の下に置かれたることを悲み且つ驚嘆する旨の決議案を議決したりといふ。

フランスは日清戦争後三国干渉で遼東半島の返還を強要し、日本世論の大反発を喰らったばかりであり、加えてタイにも強圧を加えて領土を奪取しつつあり、タイ人の対仏感情も極めて悪かった。

日本外務省の決定は、移民等で増大し始めた在タイ日本人を保護することを重視したためだと思われるが、この決定はタイに日本領事館の設置を求める、在留邦人の声を高めた。

滞日中の岩本千綱の衆議院議員への働きかけもあって、1896年2月29日には衆議院で「我帝国領事館を暹羅国に設置する建議案(山下千代雄君外四名提出)が賛成多数で議決された(『帝国議会 衆議院議事速記録10(第9回議会 上 明治28年)』(東京大学出版会、1979年、416-419頁)。この後、シャムに公使館開設の予算が措置された。

在タイ公使館の開設、政尾藤吉の就任

1897年3月31日に駐シャム弁理公使に任じられた稲垣満次郎は、5月28日にバン

コク着任、オリエンタル・ホテルの一室を仮公使館として開庁した。1898年2月25日、稲垣とテーワウォン外相は16条からなる『日本暹羅修好通商航海条約』および3項からなる『議定書』に調印した

稲垣公使の斡旋により政尾藤吉(1870—1921)がタイ政府に雇用された。彼はイェール大学の法学博士である。当時、タイ国は行政新制度を急造中で、新制度運営の担い手が極端に不足していた。そのため、多分野に渡って多数かつ多国籍の外国人官吏を雇用した。これが、1897年に政尾藤吉や、20世紀に入ってから日本人養蚕技師らが雇用された背景である。しかし、日本人の雇用は、英仏独、デンマーク、アメリカなどと比せば、せいぜい脇役程度であった。

タイ政府に雇用された中堅外国人官吏は、職務上、タイ語能力が不可欠であり、タイ語を習得して長期に働く人が多かった。政尾もタイ語を習得した。政尾は、1902年4月にはバンコク控訴裁判所判事に任じられた。1903年には東大からも法学博士号を授与された。政尾は順調に出世し、1907年初の月給は、司法省の外国人官吏中、ポンドで月給支給を契約した外国人官吏中の第三位で、月額83ポンド余であった。

ラッタナコーシン暦129年(1910/11年)のタイ司法省裁判所職員録によれば、政尾の地位は24名の法律顧問(すべて外国人)中、フランス人のパドゥーに次いで二番目に高く、大審院判事(計7名、外国人は政尾藤

吉とパドゥーの2名のみ)も兼ねている。但し、パドゥーは法律起草委員も兼任しているが、政尾は兼ねていない。政尾の経歴を見ると、彼の仕事は、立法に重点があったのではなく、どちらかと言えば法曹実務家であった。

1911年3月11日には、政尾は6世王からプラヤー・マヒトンマヌーパコーン・ゴーンクンという官爵位を与えられた。父の5世王(チュラーロンコーン王)は外国人官吏にも在タイ華僑商人にも簡単には官爵位を出さなかったが、6世王に代替わりすると乱発気味となり、政尾もその恩恵を受けた一人である。政尾は次の公文のように1913年8月に官職を辞し8月28日にバンコクを離れた。

「公信第58号 大正2年9月2日 在暹
特命全権公使吉田作弥

外務大臣男爵牧野伸顕殿

法学博士政尾藤吉辞職帰朝の件

政尾博士は満十六ヶ年暹羅滞在の処去八月備法律顧問の職を辞し同月二十八日帰朝の途に相就候同人は昨年(マ)上級ピヤ[プラヤー]の称号(勅任待遇)を賜はり出発前には皇帝陛下[6世王]より王冠大綬章を授与せられ又年々巨額の恩給下賜の御沙汰ありたる外皇太后陛下よりは妻子に御物を下賜せられ候次第暹国政府の待遇至て優渥にして当人に於ても満足の至りに存居候 右及報告候敬具」(外務省記録3.8.4/16-1 「外国官庁に於て本邦人雇入関係雑件 暹国の部」)。

帰国後、政友会代議士に当選した政尾は、

1919年8月には衆議院議員の訪問団の団長としてバンコクを訪問、タイ公使に任じられ1921年3月5日には6世王に信任状を捧呈したが、8月11日に急逝した。在任僅か5ヶ月であった。

前述した西野順治郎の歴代日本人会会長紹介では、政尾は大正5-6[1916-7]年に、三谷初代日本人会会長のあとを襲って第2代会長に就任している。後述するように、政尾は日本人会の前身である日本人倶楽部の会長であった。もし、日本人会創立日は1913年9月1日であることが事実なら、政尾が日本人会の創立会に参加することなく、その僅か3日前にバンコクを離れたのは腑に落ちない。それに、政尾が第2代日本人会会長に就任したという大正5-6年時には、政尾は日本に居り、来タイする機会もなかったが、これで会長就任が本当に可能であったのだろうか。1918年度の日本人会会長は加藤尚三(三井物産)、1919年度の会長は土井節、20年度の会長は水野泰四郎(台湾銀行出張所)、22年度の会長は平佐(ひらさ)幹(台湾銀行出張所)であるが、三谷初代会長以後、1917年度以前までの会長、ひいては日本人会の活動については、今後一層資料の発掘が必要だと思われる。

1890年後半の日本商店

朝日新聞1895年12月8日および12日号に掲載された「暹羅事情」は、在留日本人の職業及び人口を類別した下表を掲載している。

職業	男	女	計
土木家	1	0	1
医師	1	1	2
商家	5	0	5
写真師	1	1	2
書生、壮士、探検者	10	0	10
職工	1	0	1
労働	27	3	30
醜業	3	24	27
計	49	29	78

更に同記事は、日本人商業の現況として、「在留日本人の商業は微々として振はず殆ど有れども無きが如きものなり今試に在留商估の種類を挙げれば左の如し」として、日羅商会(大山兼吉の兄大山周蔵ら、既に半休店)、石橋商会(石橋禹三郎、1895年8月開店10月下旬閉店)、桜木商店(山崎喜八郎、大成の可能性あり)、大山商会(大山周蔵、1895年10月開店)、辻商店(短期間で閉店。辻秀五郎の経営と思われる)、磯永写真店(磯長海洲)、洗濯屋(松野恭三郎)、斬髪屋(面田利平)を挙げ、「此他特別商業[醜業]を営む者四戸ありて二店は女主二店は男主なり」と付け加えている。

この後、1895年末阿川太良が再来タイして暹南商会を開いたが、阿川は1900年7月30日に、シンガポールで客死した。また、1896年後半には長崎市の池崎新吉(1855

年生)が来タイし、池崎商店を開いた。池崎家は一家を挙げてバンコクに移り住み、20年近く鼈甲などを販売した。

バンコク日本商品陳列所開設

1899年3月14日、「日暹商会雇船畿内丸(登簿噸数1299)日暹間直航船として石炭二千余噸を」長崎にて搭載しタイのコ・シーチャンに到着した。帰路は、香港にコメを運ぶため、4月16日にタイを出発した。畿内丸は、日本からタイに船を仕立てて貨物を売り込んだ、最初の直航船である。国府寺新作バンコク領事は、4月24日付で、次の報告を本省に送った。

「其碇泊日数一ヶ月に余り本邦解纜より帰着まで二ヶ月半の日子を要す可しと斯る長時日を費やし不勲損失を蒙りしは初回の事とて経験に乏しく諸般の手筈齟齬せしに由る可けれど亦主として本邦出発前予め当国の事情を精査せず且必要なる準備をも為さず到着后遽かに事を辨ぜんとして歸因す

右の外近來日暹間航路開始の計画を時々耳にするところなるが航路開始は両国通商上の関係を密接にし将来の貿易發達上大に賀す可きことなれども是れ一大難事業にして慎重精密の考慮を要す若し両国間貿易の現状及将来見込、一般貨物集散の状況、他の汽船会社との関係等を攻究せず漫然空漠たる考を以て之れが開始をなす如きことあらば必然意外の失敗を招き日暹貿

易の進勢に一頓挫を来し反つて之れが発達を阻碍するなきを保し難し現今本邦より当国に輸入せらるる重要品は燐寸雜貨等にして一ヶ年の輸入額五六十万弗に過ぎず然かも一度香港新嘉坡に到り同地の商人より更に再輸出せらるるものにして従来商業の關係直接の取引行はれず(四五の本邦雜貨商は直接商品を取寄せ居れども微々たるものなり)故に勢ひ往航の載貨を他に求めざる可らず石炭は航路開始計畫者の第一に着目するものなるが如し若し石炭にして相当の値段にて月々一定の需要あらば航路開始の一困難は除去せられたりと云ふを得べけれど盤谷に於て多数を占むる精米所、鋸木場は粃殻、鋸屑を燃焼し材料を他に仰ぐ必要なく燃料を他より購求する必要あるものは電気鉄道、電灯、鉄道、鉄工所等の数カ所に過ぎず此等も汽鐘の構造を粃殻、鋸屑、木片等の燃焼に適應せしめ之れを用ひ居れば本邦炭と前述の燃料と其価大差なきに非れば売行く望なし而して其消費高は一ヶ月合計六七百噸前後なれば一時に多量の石炭を輸入すれば忽ち捌口に困難を生ず現に当地に滞積せられ売口に窮し居るもの昨春三井物産会社香港支店の輸送に係るもの二千噸マクウオルト商会持三千噸他にも多少あれば合計五六千噸の石炭あり更に今回畿内丸にて輸入せし二千噸を加ふれば八千噸に近く殆んど一ヶ年の需要に応ずることを得へん尤も値段を非常に低廉にせば粃殻、鋸屑等を

用ゆるよりも火力の点に於ても取扱の便利なる点に於ても数等優れ居るに由り需要ある可きは確信するところなれども本邦に於て炭価暴落の際は知らず平時に於て態々一艘の汽船を仕立て収益ある可きや疑はし殊に今回畿内丸の例に依ればコー・シー・チアン碇泊所より盤谷迄の運搬費一噸に付き殆んど参弗を要し元価の半以上に当れりと聞くコー・シー・チアン盤谷間は僅かに五十哩に過ぎず而して斯る高運賃を要するとは誰れも遽かに信じ難きことならん然れども諸事不便にして且労働賃金割合に騰き当国の事は単に距離の遠近を以て断ずること能はざるなり」(外務省記録3.6.3-48「船舶雇傭關係雜件 第一卷」)。

直行船を企てた日暹商会とは、九州の炭坑経営者として成功し、当時衆議院議員でもあった山本貴三郎(1846-1899)が、同郷の山崎喜八郎からシャム貿易の利を吹き込まれて、山崎を出し抜いて始めた会社であった。日暹商会は盤谷支店を設け、1899年4月末ごろ高垣尚志(福岡県士族、1853年生)を責任者として派遣してきた。

1899年8月、日本の農商務省は、日本商品の販路拡張のため同年10月にバンコクにも商品見本陳列所を開設し、その事務を日暹商会の山本貴三郎に委嘱することを決めた。実際にバンコクで事務を行うのは代理人の高垣尚志であるが、この決定がバンコクに伝わると、バンコクの日本商人は恐慌を来した。日暹商会が日本政府の商品見本

陳列所を利用して、有利に商売を展開しライバルの日本商店が割を喰う可能性が高いからである。

同年10月17日、在盤谷府日本雑貨及び輸出入商総代と称して、池崎新吉(池崎商会主)、山口友吉(1872年山形県生、1898年2月来タイ商業)、阿川太良(関南商会主)、野崎続太郎(1867年広島県福山生、1896年10月来タイ野崎洋行主)、湯澤良助(1876年長野県生、1897年末来タイ、タイ語学習後99年公使館雇)の5名は連名で、請願書を国府寺代理公使に提出した。その文書に曰く、「商品陳列所は日本商人全体の利用す可きものにして一二の個人の私用に供す可き機関にあらず然るに日暹商会は本国政府より其見本品陳列を托され開設の許可を得しと称し切に運動するもの如し若し日暹商会をして政府の命を享け陳列所設立の意志ありとせば先づ不肖某等と相談ある可きは至当の順序なり然り而して未だ一言の之に及ぶなし是れ不肖某等在盤谷商人を無視して公共の機関を私利に供するものなり 或は新聞紙の伝ふる如く牛莊に於て個人に托せる陳列所ありと雖も他に日本雑貨店を有せざる牛莊と仮令微力ながらも数年基礎を据へたる数戸の雑貨店を有する当府とは大に其趣を異にす」(外務省記録3.3.6-14「本邦商品販路拡張の爲め在外帝国領事館内に商品見本陳列所設置一件」)、と。

そうこうしている間に、99年12月22日に

山本貴三郎は急死した。農商務省は、バンコクの商品見本陳列所を山本貴三郎の相続者、山本太郎(協亜商会主)に引き継がせ、その代理人高垣尚志によって、当初予定より1年遅れて1900年10月に開設された。しかし、次第に参観者も減少し1903年10月に閉鎖された。

1907年6月になって、田邊熊三郎バンコク領事は、日タイ間の貿易が発達せず、在留日本商人に一人の成功者も出ていない状況を改善するため、農商務省に商品見本陳列所再設の意見具申を行った。この具申には在タイ日本商人の熱心な支持があることを付け加えることも忘れなかった。意見具申書は、在留日本商店の現況の項の中で、「従来当地に於て輸出入業に従事したる本邦商店は其数甚だ少きに非ざるも多くは失敗に了りて未だ成功したるものなく又た現に營業せる者も三井物産会社を除ては亦た甚だ萎靡不振の中に在り」と述べている。しかし、再設予算は認められなかった。

20世紀初頭のバンコクの日本人

アメリカに10年間滞在した経験を有する、現愛知県豊橋市出身の中村直吉(1865-1932)は、無銭旅行で五大州旅行を計画し1901年9月29日に長崎を発って朝鮮(釜山、ソウル)、中国(天津、北京、上海、香港)を経て1902年1月1日にシンガポール着、暹羅に向い1月末にバンコク着。暹羅から再び1902年2月頃シンガポールに

戻り、ここでインドに行くという岩本千綱に遭遇している。

中村はタイで稲垣公使の世話になり、公使館の芝間書記生にバンコクを案内してもらった。中村は、中村直吉・押川春浪編『亜細亞大陸横行』(五大洲探検記、第1巻、博文館、1908年刊)に1902年1月末に訪タイした当時のバンコクの日本人、在留商人について、多分稲垣や芝間などから聞いた話をソースとして次のように書いている。

「当時在暹の日本人は百人足らずで、職業の種類は公使館員、領事官員、鋸職(かざりしょく)、写真師、画家、医師、理髮師、コーヒー店等で、余り大きい声では言はれないが日本の女郎屋も二軒あつた。此の女郎屋に有名なやりて婆が居るそうだ。彼女は日本を出てから最(も)う卅年にもなるそうで、最初はおさだまりの甘い舌の上へ乗せられて日本を脱出(ぬけい)で上海へ着くと直ぐ売飛ばされ、其後流れ流れて盤谷府へ来たのであるが、人は呼んで上海婆といつて居るそうである」(同書285頁)、「[日本の]農商務省の商品陳列所は協和商会[協亜商会]の一隅に設けられてある。陳列の方法は総て米国式で大に意を用いてある処は嬉しかつたが、番人先生[高垣尚志?]の横柄なものには驚くの外はない。あれでは折角陳列所を設けても何にもならぬ。総て士族の商法では駄目だ。今に於て全然前掛(まへかけ)主義に改めないと恐く噬臍(ぜいせい)の悔があるだろう」(286頁)、「暹羅政

府には御備官吏の必要があるが、西洋人は給料ばかり高くて比較的実績が上らぬ。是に於てどうしても日本の人材が必用だ。恰度国情が日本の維新前に似た処があるが、国王の頭脳は比較的文明的に出来上つて居るから、日本人の活動すべき余地はいくらもあるのだ。然るに在留本邦人は悠々閑々として酒ばかり呑んで居る。酔へば愚にもつかない大言壮語をするか、公使の陰口でもきくのが関の山で実に痛嘆に堪へない。盤谷府の在留商人の中には豪傑連が多くて困る。甚だしきに至つては客が脱帽しないと云つて怒鳴り散らすのさへある。国威の発揚も時と処とに依る。此辺は大に省みて貰いたいものだ。盤谷の人口四十万と見て其過半は支那人である。従つて支那商人の商業的勢力は侮るべからざるものがある。就中日本雑貨は日本商店より支那商店の方が一割方廉価だ。夫(それ)でも日本商店は品物がいいから高価(たか)いのだと思はれて居るだけがつけめだが、注意しないと飛んだ処で豚尾漢[弁髪]の清国人の意]の爲めに背負投を喰うだろう!暹羅は智識と生活の程度が低いから、日本人は極めて仕事が仕易いのだ。処が暹羅へ来た日本人は実力の伴はない癖に大言壮語する。且つ事業の経営に無理をするから半年も経つと倒れてしまう。吾輩が思ふには、海外で事業を押し始めんとする人は第一に其国の国語に熟達して貰いたい。でないと店員に馬鹿にされた上誤魔化される。又金のない癖に外

観を飾つて無闇と紳士を銜う。其上短気で執着力が零ときてるから、どうも失敗する人が多いやうである」(287-288頁)。

中村が描くバンコクの日本商人の通弊は、稲垣公使の持論である。従つて在留商人と稲垣公使の折り合いは良くなかった。しかし、1890年代にバンコクに日本商人が出現して以来、彼らがこのような通弊を有していたことも、また事実であろう。この種の通弊は、日露戦争前後における三井物産の進出や、新世代の日本商人の来タイで大きく改まった。

三井物産のバンコク進出

何人もの日本人会会長を輩出し、日本人会活動を支えることになる三井物産がバンコクに最初の出張員を置いたのは1906(明治39)年のことである。この経緯について、1935年初から三井物産盤谷出張所長を務め、その後出張所の支店への昇格により初代支店長を1938年初まで務めた平野郡司(東京府士族、1890年生)は次のように述べている。

「貿易方面に於て近年迄邦人はあまり発展していなかつた。明治三十七年日露戦争が始まる頃暹羅に武器を売込んだことがある。これが契機となつて明治三十九年に三井物産の出張所[正しくは出張員]が盤谷に創設されたが、これが暹羅に対する貿易の先駆と云つても良い。勿論その以前から小資本の店はあつたけれどもこれは問題にな

らぬ。檀野禮助[長崎県士族、1875年生]氏が当時三井物産出張所[正しくは出張員首席]の創立者で、武器の売込に引続き暹羅大蔵省の銅貨までも日本に注文を寄越して居たが現在は盤谷で鑄造する様になつた。・・・当時、海軍も川崎造船所へ駆逐艦及び水雷艇を注文建造したが、現在もメナム河に浮んで居る。当時日本と暹羅との関係は日本から仕向ける物として武器、軍需品、暹羅からは暹羅米が目星しいものであつた」(平野郡司『新興暹羅の政治経済事情』南洋経済研究所、1939年、10頁)。

三井物産の在盤谷職員が、三井物産職員録に初出するのは、1906年8月24日現在の職員録であり、新嘉坡支店からの暹羅出張として、檀野禮助、坂部檜三郎の2名の名がある。この2名は、1907年5月15日現在の職員録では、新嘉坡支店に属さない、盤谷出張員として記載されており、檀野が首席である。2名の出張員体制は、1909年まで続き、同年12月1日現在の職員録では、坂部檜三郎1名のみ減少した。1910年8月19日現在の職員録では、坂部は新嘉坡支店に属する盤谷出張員に変更されている。坂部は1911年においても、同職にある。彼がいつ離任したかは不明であるが、1913年8月1日現在の職員録では、新嘉坡支店に属する盤谷出張員は小牧太次郎[1877年鹿児島生]に変わっており、小牧の名は1915年7月15日現在の職員録まで見いだすことができる。1914年11月1日現在の職

員録では、盤谷出張員は2名に増加しており、小牧が首席である。

出張員が1名のみ減らされた頃から、盤谷での三井物産の商売は低調になったようである。1913年7月に開かれた第二回支店長会議では、盤谷出張員を廃止することも検討されている。この会議の議事録は次のように記している。「盤谷出張員前半季の取扱高は十六万銖にて前々季に比すれば多少の増加を見たり、併し同出張員の最大重要商品たるチーク材の取扱は非常なる減少にして、神戸支店の尽力に依り前半季は漸く少量の取扱を為せしに過ぎず、其他御用商売も失敗の姿にして只幾分発展しつつあるは羽二重、モスリン、綿製品なれども、何分売掛金多く、一ヶ月乃至三ヶ月に亘ること少からず、将来或は同出張員は閉鎖する方得策に非ずやと考慮を費しつつあり、只従来暹羅汽船会社の焚料引合もありたる為め店舗を置くことの必要ありたれども今後は廃止するか、或は今一段御用商売に喰入るの必要ありと考ふ」(三井物産株式会社庶務課『第二回支店長諮問会議事録(四)』127頁)。

1915年7月の第三回支店長会議でも、盤谷出張員を廃止するかどうか議論された。同会では、新嘉坡支店管轄の出張員のうち「盤谷は成績面白からず既に廃止の運命に立至らんとせしも昨年末時局を利用し新規商売をなし得たるを以て一、二期の経過を見て存廃を決すべく今廃止するは其時機に

あらず」(三井物産株式会社文書課『第三回(大正四年)支店長会議事録(其五)』223頁)という意見が出された。

盤谷における三井物産の商売は、第一次世界大戦前は低調であったが、第一次大戦で持ち直した。1917年4月30日現在の出張員は3名、加藤尚三が首席。翌1918年には出張員数は6名に増大した。この人員規模は、1927年1月21日に新嘉坡支店盤谷出張員が、盤谷出張所と改称されるまで続いた。

タイは第一次世界大戦に参戦し、欧州遠征軍を送ったが、遠征軍に三井物産の加藤尚三は三井物産の名で1000バーツ、東京の泰平組合が1000バーツを寄付した(タイ国立公文書館 Ko.To.65.16/18中の1918年1月31日付西公使からテーフウォン外相宛て文書)。

1919年から1923年までの首席は、山本雅一。続く盤谷のトップは、植木房太郎で、彼は1924年から1927年1月21日までは盤谷出張員首席、同日出張所への昇格により1931年までは出張所長の任にあった。植木は日本人会会長として盤谷日本尋常小学校の設立に尽力した。

1926年6月の第九回支店長会議に出席した植木盤谷出張員は、業務の拡大を次のように述べている。「盤谷出張員業務の状況は過去数期に亘り漸次取扱を増加し、大正15年上期[1925年10月-1926年3月]の取扱高675万余円にして、其内容は米、麻袋、

爪哇糖等外国売買450万円、綿糸布、軍需品、米、チーク、雑貨等日本との商売220万円なり。而して最近各商品とも著しく発展し之を数期前の取扱高に比すれば平均倍額以上に増加せる次第なり。尚ほ大正15年上期の当員取扱高を同半期の暹羅全体の貿易額に比すれば4%弱に当る割合なり。」と述べ、続いて主要商品である米、チーク材、官庁相手の武器について詳述している。武器については、盤谷出張員が泰平組合の代理店として暹羅政府に兵器の売り込みをしており、1924年2月には、歩兵銃並に付属品5万挺(350万円)の契約に成功した。商品は25年から28年の間に分割納入の予定である。政府の緊縮財政により官庁相手の商売(御用商売)は打撃を受けていること、また、兵器の売り込みには、デンマーク、英、米からの競争が激しくなったことが報告されている(三井物産株式会社文書課『第九回(大正十五年)支店長会議議事録(第七日)』433-436頁)。

1931年7月に開かれた、三井物産支店長会議において、機械部の成果として、「註文の成立せしものとして顕著なるは暹羅国有鉄道用の橋梁約九百噸あり、之は物産会社として十数年来手掛けたる事なりしも、今回始めて成功せしなり、来月末の船にて積出す予定なるが、先方に荷が着き、品物が良いと云ふ事になれば、更に一千噸の追註文有る筈なり」(『第十回(昭和六年)支店長会議議事録(第四日)』129頁)、と報告された。

1932年から35年初までの出張所長は、大塚俊雄。出張所は1935年9月13日に盤谷支店に昇格した(三井物産株式会社『第52回事業報告書』(昭和10年度下期)119頁)。1935年2月28日から出張所長の任にあった平野郡司が初代支店長に就任し、1938年1月27日に本店参事として転出するまで支店長の任にあった。平野のあとは、高月喜右衛門(1938年1月—39年5月)、高橋泰三(1939年5月—41年4月)、新関八洲太郎(1941年4月—42年9月)の順である。

前出の西野順治郎作成の歴代日本人会長名によると、三井物産のバンコクの長で、日本人会会長を務めた者は、加藤尚三(在任1918—9年)、植木房太郎(同1926—29)、高月喜右衛門(同1939年の2ヶ月)であるが、植木房太郎は1924年から在タイしており、かつ、1926年2月22日の盤谷日本尋常小学校設置について議した日本人会総会を、暹羅国日本人会長植木房太郎として召集しているので、1925年度も日本人会会長であったはずである。

因みに、1926年2月の日本人会総会時の会員名簿によれば、日本人会会員は普通会员57名、地方会員2名である。これは世帯主が会員になっているので59世帯が会員という意味である(外務省記録3.10.2/10-4「在外本邦学校関係雑件、盤谷小学校」)。

日本人会会長名は、今のところ1921、23、24年度は不詳であり、1917年度以前についても、前述のように不在者の政尾藤吉

の会長就任も疑わしいので、上記以外にも三井物産から会長を出している可能性もある。例えば、小牧太次郎は1926年2月時点の会員名簿で日本人会名誉会員であるから、在タイ時の1913-15年に相当の貢献があったものと考えられる。

1932-33年時の日本人会会長であった大谷清一(鳥取県米子出身、1883年生)は、昭和30年代に三木栄からの日本人会会長在職者名の問合せに対し、「御訊の日本人会長在任の事で御座いますが[私が]就任した年月をハッキリ知れ(マ)ません。昭和九年(マ)の天長節には在任し、同年八月帰朝するまで勤めました。一ヶ年か一ヶ年半位の期間でしたかと存じます。・・・私しの前は河井為海(三谷医院経営死亡)植木房太郎氏(三井物産)水野泰四郎氏(台銀)平佐輔(マ)(台銀)三井の小牧、山本政市両氏、小川蔵太(三谷医院)?」三木栄『山田長正の真の事蹟及三木栄一代記』(私家本、1963年、32-33頁)と答えて、小牧の名を挙げている。

ところで、西野は新関八洲太郎を第21代会長(1943-44)としているが、在職したという時期には、新関は既に転出しており会長を務めることは不可能である。

西野の『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月刊)の記事の誤りに気づいた大谷長三(元大谷洋行主、1901年生)は、1985年8月27日付けで西野に手紙を出し、「私[大谷]は15[1940]

年4月から 15, 16, 17, 18年度と4期連続して理事長を勤めました。15年度は谷[清訓会長]氏と私、16年度は江尻[賢美会長]氏と私、17年度も同一、18年度は森[広三郎会長、1893-1973、1960年東洋レーヨン社長]氏と私のコンビで会の運営に当りました。新関氏と森氏は17年の後半に三井の支店長を交代しておられます。尚 19年度から終戦迄 森[広三郎]・保田英一(三井船舶)のコンビに変わりました。日高秋雄君が亡くなって現在そちらに居られる方で戦前戦中日本人会の役員をされたのはどなたもいらっしゃらないので、敢て右の事指摘させていただきました」と述べている。当時の日本人会の組織では、理事長は会長に次ぐポストである。大谷の指摘にも拘わらず、『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』(1993年12月刊)で訂正されることはなかった。

たたき上げの日本商人たち

日露戦争が終わる前後から、三井物産のような大企業の後ろ盾は全くないが、大志と若さにあふれた青年たちが、日本各地からバンコクに進出した。そのなかには商売の基礎を築くことに成功した者もいる。また、日本人医師のバンコクでの開業も増加した。彼らは、第2次大戦期に至るまでの日本社会の中核となった。以下、顕著な数名を挙げて見よう。

1904年5月に現在の滋賀県彦根市八坂から17歳の江畑弥吉(1887年生)が商業

見習の目的で来タイ。彼は1906年に、バンコクのバーンモー地区に江畑洋行を開いた。また農業にも手を伸ばし、1910年までにはランシットで大規模な農業経営を開始し、さらにターチン河口でも農業を行い、農業で成功した最初の日本人となった。彼は豊富なタイ農業の蘊蓄を、日本人会の最初の本格的な出版物、在暹日本人会(代表者平佐幹)編『暹羅之事情』(1922年11月13日発行、東亜印刷株式会社出版部、東京、全646頁)の農業部分の記述に提供している。

なお、平佐(ひらさ)幹は、台湾銀行出張所長であり、1922年度の日本人会会長であった。大著『暹羅之事情』も台湾銀行の金銭的人的な支援により刊行されたものと思われる。なお、台湾銀行は、1919年3月5日に盤谷出張所を開設し、1929年9月2日に閉鎖した(名倉喜作編『台湾銀行四十年誌』1939年)。

台湾銀行初代出張所長は水野泰四郎で、彼は1920年度の日本人会会長である。もし、西野の歴代会長の記録が正しければ、西野が不明とした第5代会長に当たる。

1920年度の日本人会の陣容は次の通りである。

「バンコック日本人会(会員数128名内女29名)会長：水野泰四郎、理事：山口萬吉、木下亨、土井節、横山和十郎、神谷信男、山本雅一、大場忠、磯部美知、土井孫次郎、大槻二雄、大谷静一、書記：柳田亮民」、水野泰四郎の肩書は台湾銀行出張所支配人

(伊藤友治郎『南洋年鑑 1921』、合資会社日南公司南洋調査部、東京、1920年11月発行、67頁)。

ついでに言えば、同じく西野が不明としている第4代会長は、「盤谷日本人会長土井節」(小松茂治編集『椰子の葉陰：林傳君遺文集』、1925年、209頁)の筈であり、彼は1919年度の会長である。そうだとすると、前述した三井物産の加藤尚三は1919年度には日本人会会長ではありえない。

有為の青年たちの話に戻せば、1905年9月に現在の東京都日野市からは、26歳の山口軍蔵(1879年生)が日羅商行暹羅支店詰として来タイしその後山口商店を開いて独立、更に1909年4月には弟の山口萬吉(1886年生)も来タイして兄弟で切り盛りした。

同じく1905年10月には現在の愛知県弥福市から、15歳の伊藤太郎助(1890-1946)が、遊技場手伝[後述の吹矢のことか?]の目的で来タイ。彼は、伊藤洋行を創立し、綿布、雑貨輸入商として大成した。1925年に6世王在位15周年記念ルンビニー博覧会準備のために、ヨマラート内務大臣が召集した外国商人中、日本人は伊藤のみであった。

1907年5月には、現神奈川県平塚市南金目出身の18歳の宮川岩二(1888—1957)が、語学研究農業視察目的で来タイ。彼はタイ語を十分に身につけたのち、大山商會に勤務し、1913年には既に大山商會主となっている。1926年に日本人会が盤谷

日本尋常小学校を設立する際、宮川は会長事務代理として貢献した。

1913年前半、宮川は大山商会主(Nai Hang K.Oyama)として日本企業20社の79種の商標(医薬品、大学目薬、マッチ、ミツワ石鹸、歯磨き、安住伊三郎の商品など)の代理登録申請、および自分の所有する7種の商標の登録申請をしている。この時の申請書の職業欄は、「諸商品の販売および印刷所」とあり、大山商会は印刷所を営んでいることが判る(タイ国立公文書館 Ko To.67.8/20)。

江畑、山口、宮川らは、商店の拡大とともに、従業員には自分の親族や出身地の地縁者を呼寄せた。

1913年前半に日本企業の商標を代理登録申請したのは、宮川岩二、山口軍蔵、三井物産、金澤正次の四人である。山口は仁丹、ライオン歯磨など医薬品、大衆薬を中心に8社の日本企業の25件の商標登録を代理申請している。

金澤正次(1858年生)は、比較的年配であったが、1906年10月に妻及長男禎三(1888年生)を伴って来タイした商人である。

タイにおける日本人の商店は依然少なかったが、日本商品の進出は凄まじく、1910年頃になると、バンコクで発行されていた日刊紙は、タイ語・中国語・英語を問わず、日本商品の広告で溢れている。

1900年頃から10余年間のタイで、最も成功した日本商人である渡邊知頼(1865年

福岡生、士族)の名を逸することはできない。

渡邊知頼の成功振りは、次の3記事からも窺うことができる。

「暹羅及蘭領諸島は如何：数百年前より日本の交通頻繁で、然かも一向日本人の勢力揚らないのは暹羅である。明治維新後も我が有志の暹羅に眼を投じた者は一、二ではない。すでに今より一七、八年も前[1891年]に、名古屋の野々垣某氏は盤谷府を開いた。然かも忽ち倒れて、一起一仆[仆はたおれるの意]、短きは五、六ヶ月、長きは一、二年、暫らくして閉店するのは、暹羅の日本人商店である。・・・目下盤谷府に散在して居る日本商店は、山口商店、河野商店、日進商行、江畑商店、大山商店等であるが、独り大山商店は雑貨の外に洋服裁縫等を営んでいる。三井物産出張所を除けば大したのはない。そして今日迄起つたのは随分多く、日暹商会、桜木商店、凶南商店、都築商店、協亜商会、中野商店、日暹貿易商会、渡邊商店等随分多いのである。◎暹羅唯一の成功者：唯だ爰に三十八年十二月、驟然[にわか]として暹羅に入り込んだ渡邊知頼といふ活動写真師がそれである。伊太利人又は仏蘭西人は、渡邊の成績を見て、同じく活動写真を初めたが、群がり来る欧人競争者を蹴散らし蹴飛ばし、暹羅に地盤を築いたのは称揚に値する」(「北はシベリヤより南は南洋に亘る日本商人」、『太平洋』第9巻1号、1909年12月26日号、101頁)。

「暹羅に於ける有望事業：暹羅在住の邦人約百五六十名、外交官と暹羅政府顧問政尾博士を除きては、孰れも金党の勇士にして前途の成功を期待するものに御座候。三井は本年(マ)四月支店を開業したるも、勿論試験時代に属し、他は未だ言ふに足らず。・・・三年間当国に於ける邦人在留者は僅々五六十名、四五の雜貨店を開けるものの外は、吹矢営業と赤幕ホテル営業を見たるのみに候へしが、日本郵船の盤谷航路を[1906年5月に]開きしより以来、邦人の来航者頗る増加し、每航一二の同胞を見ざるなき有様に御座候。而して一昨年来活動写真の成功は目覚ましきばかりにて、邦人渡辺某[渡辺知頼]始めて之れを携ひ来り毎月収入約一万銖中六七千銖は純利となり、既に一年以上を經過して益々観客の増加を見るは不思議なる程にて候。暹羅の皇族貴族を始め一般庶民に至るまで日を定めて観覧し、各々其度数の多きを誇りとするを宛かも芝居の常席連の如くにて、近頃貴族事業家中会社組織を以て此業を計画するものあり、今や活動写真は盤谷に於ける一事業たらんとする形勢に候(後略)」、(明治四十[1907]年十一月二十六日付、在盤谷三田村八郎氏通信)、「海外通信：暹羅に於ける有望事業」、『横浜商業会議所月報』第135号、1908年1月25日号、28-30頁)。

上記の引用で、江畑、山口、大山等の商店の評価が低いのは、これらの商店が基礎を固める以前の時期であったからであろう。

更に1911年央の状況について、川上瀧弥は「活動写真は見世物中成功したるもの一つにて、日本人中之にて成功したるは渡邊某なり。其建築は中々立派にて皇族席の設けさへあり。拝受の御紋章まで掲げあり。活動にて此御紋章あるは日本人の電戲館一つの由。各国の電戲館は競争して見物を招く広告甚だ盛なり」(川上瀧弥『椰子の葉陰』六盟館、東京、1915年、42頁)と述べている。

その名を馳せた渡邊知頼ではあるが、経歴は従来不明のままであった。今回、筆者が見つけたところによると次の通りである。

「渡邊知頼君、君は南洋事業家なり、福岡県の人渡邊彦助氏の長男にして、慶應元年十月四日を以て福岡県久留米市京町に生る、明治十六年東京商船学校に入り、二十一年卒業し、翌年聘せられて秋田県中学[秋田県尋常中学]に教鞭を執り、尋で群馬県中学[群馬県尋常中学、前橋高校前身]に転ず、居ること数年にして辞し、三十年一月暹羅に航し盤谷に於て貿易業を開始し、兼ねて活動写真器械及びフィルム販売を営む、三十九年[1906年]より南洋ヂヨホールに於て護謨樹栽培に従事し二百有余の労働者を使役し両業共に盛況を極めて今日に至れり(牛込区薬王寺町五〇電話番号二五八一)」(古林亀治郎『現代人名辞典』、中央通信社、1912年、ワ16頁)。

渡邊知頼の映画館は、単に映画を上演しただけではなく、日本から何回も旅芸人の

一座や手品師を呼んで興行も行っている。しかし、面識があった三木栄によると、1910年代後半には相場に手を出して財産の多くを失った。渡邊は1926年2月時点で日本人会の8名の名誉会員の一人であるが、それ以降の消息は判らない。

日本人倶楽部、日本人青年会の結成

既に1894年8月26日にバンコクで日暹協会が発足したことを紹介した。日暹協会は、岩本、石橋らの主要メンバーのタイ離れとともに消滅したと考えられる。しかし、日本人の数が増加すれば、相互扶助と親睦、あるいは日タイ交流のために公式もしくは非公式の団体が生まれるのは当然であろう。

1897年7月時点では、磯長海洲と佐々木寿太郎を役員(Secretaries of the Japanese Club)とする日本人倶楽部が存在しており、スラサックモンتری前農商務大臣は、岩本千綱に預けた刀剣を取り返すために、磯長と佐々木に助力を求めた(外務省記録4.1.3-144「岩本千綱盤谷船渠会社工夫供給の契約不履行並に暹羅国農商務大臣の装飾委託刀剣入質に付同大臣より取戻方請求一件」)。

1897年の年末年始の在留邦人の会合を、読売新聞1898年2月4日号は「暹羅近信」のタイトルで次のように報じている。「在暹社友より達せし近信の中重(おも)なるもの二三を左に録す

忘年会 旧臘末桜井[桜木]商会楼上に

於て在暹日本人の忘年会を開き頗る盛会なりき尤も当時は公使館員は何か差支へありて一人の出席者を見ず単に居留民一般の忘年会なりき

官民会 居留民の忘年会を催ほしてより稲垣公使主人となり篠崎[篠野乙次郎]書記官藤田領事政尾[政尾藤吉]暹羅国外務省顧問官を始とし時田重田の両公使館員及び居留民地桜井[桜木]商会の山崎氏日暹商会の義野氏等を招待して除夜の宴を開かれたり之を公使館内に於ける官民会の嚆矢となす

新年会 二日山崎喜八郎氏宅に於て在留日本人の新年宴会を催ほし先づ磯長氏発起人総代として開会の趣旨を述べ次で稲垣公使の演説ありたり当日は公使始め公使館員悉く及び政尾顧問官等出席して未曾有の盛会なりき」

日暹商会の義野とは、1897年11月16日に旅券下付を受けて来タイしたばかりの兵庫県平民、義野主慎(神戸市出身、1862年生)のことと思われる。

1956年に黄檗宗の大本山萬福寺52代住持に就任した溪道元(別名 溪慊堂、1877-1966)は黄檗宗布教師等の肩書で1905年から1912年まで足掛け8年、ワット・サケートを居として在タイしたことがある。

1935年(昭和10年)7月16日に日本人会が落成式を行った、ワット・リアップの日本人納骨堂の初代堂守に1936年に就任した藤井真水(1932年9月に高野山よりタイに

来てワット・アノンカラムに居していた真言宗の僧侶)は、溪道元管長を訪問した際の会話を次のように記している。

「タイ国に留学された、吾が宗以外の仏教徒としては明治三十八年頃、京都生れの溪道元師がいる(黄檗宗)、師は帰国後、黄檗宗の管長になられた方である。筆者が訪問したときには、九十余歳(マ)で、記念に色紙一枚を頂いた。さらに師は、バンコクの日本人会の書記もしていたことがあった由で話が色々とはずんだものであった」(藤井真水「日本人納骨堂建立の概要」、前掲『泰国日本人納骨堂建立 五十周年記念誌』10頁)。

溪道元自身も回顧録(溪道元(黄檗宗管長)『南亜旅行記』私家版、1962年)で、1905年からバンコクのワット・サケートに住み同寺の親日住職に可愛がられてタイ各地の旅に同行させて貰ったこと、磯長海洲から写真術を習得したこと、1912年10月にはバンコクを離れてインドに向かい、同じく黄檗僧でチベット探検家の河口慧海を尋ね、仏跡を巡礼したことなどを記している

ここで問題は、溪道元は1913年9月に日本人会が創立される1年も前に、タイを離れているのに、バンコクで日本人会の書記をしていたと語っていることである。

彼が一時帰国した際に『太陽』編集部写真術の腕前自慢も兼ねて届けたと思われる、自ら撮影した写真が「溪道元君寄贈」として同誌口絵に掲載されているが、その

内の一枚は「暹羅国在留日本人青年会発会式」というキャプションが付されている(『太陽』第13巻8号、1907年6月1日号)。掲載号から見て、暹羅国在留日本人青年会は1907年前半には発足したことは間違いない。溪が日本人会と言っているものは、この青年会を指すのであろうか、1897年に磯長、佐々木らが役員を務めていた日本人倶楽部のことであろうか。あるいは青年会は日本人倶楽部の下に属していたのであろうか。



1907年前後の暹羅国在留日本人青年会発会式
(『太陽』1907年6月号)

この点については、三木栄(群馬県士族、1884—1966)の明確な証言がある。三木は1910年3月に東京美術学校漆工科を卒業した後、同年9月には漆工業改良顧問及同業視察の目的で旅券の下付を受け、翌11年2月15日にタイに到着した。日本人会発足の2年以上前のことである。三木は、『泰国日本人会創立五十周年記念号』(1963年9月発行)に載せた「五十年前の回顧」と題する文章の中で、来タイ当時の話として「当時日本人会の前身、日本人倶楽部は

ブッシュレンの今の小谷亀太郎さんの住宅と思われる所にあった。管理者兼書記は現今宇治黄檗宗大本山万福寺の管長溪道元老師で会長は政尾藤吉博士法律顧問であった」と述べている。

1913年9月以前に日本人倶楽部が存在していたという証拠はこれだけではない。

1911年7月に暹羅を訪問した川上瀧弥(1871—1915、阿寒湖のマリモの発見などでも知られる植物学者)台湾総督府民政部殖産局附属博物館長は、概旭乗(おおむね・きよくじょう、1873—1937)を通訳に雇って各地を旅行した。

川上は1911年央の暹羅の日本人について次のように書いている。

「暹羅国在留の日本人は五十一戸にて男は百三十二人女六十七人計百九十九人ある由なるが、主に盤谷府に住居するものにして、外国人は小舟にて廿四時間に達し得る地域以外には住居することを得ざる定めなり。盤谷府には四十六戸百九十一人(ママ)男百二十六人女六十四人、此内台湾人は九戸男十四人含まれ居れり。右の内職業別は官吏二戸七人、政府雇四戸九人、雑貨店六戸三十四人、農業二戸四人なるが、女は遊技場に九人洋酒屋二十人、之は何々ホテルの名を掲げて酒の外に媚を売るものにて、外に洋妾十一人なりとか・・・日本人倶楽部あり、雑誌新聞を備へ、玉台碁盤等遊戯の設備もあり、階上の二室には寢室を備へ会員の宿泊に便せり」(川上瀧弥『椰子の葉

陰』六盟館、東京、1915年、41—42頁)。

川上は滞在中何度も吉田作弥公使の私宴に招かれており、上記の情報源の信頼度は高いと思われる。このように1911年央には、バンコクには間違いなく、政尾藤吉を会長とし、溪道元を書記とする日本人倶楽部が存在していたのである。

また、1912年前後には、日本人墓地の設立のための積立が始まった。日本人会設立後は墓地建設部がおかれたが、最終的には墓地ではなく納骨堂が建設された。日本人会は昭和10(1935)年7月16日に日本人納骨堂落成式及び開眼式を挙行了。日本人納骨堂に関して、三木栄は次のようにうたっている。

「日本人納骨堂、記念橋、相向ひなるワツトリエーツ 此境内に納骨堂あり、永年の懸案なりし、納骨堂 昭和十年七月に成る、炎熱の国に朽ちても墓もなく 魂魄空に迷ひしなるべし、明治より昭和にかけて同胞の 貴き魂二百を数ふ、大正の元年[1912年]始めて発起して 二十五土丹[サタン]集めしがもと、此金が積り積つて八千[パーツ]に 増へしが為に成りしものなり、零細の金も積ればかくなると 良き教訓を知らしめにけり、汗みどろ椰子の木蔭に果つるとも 魂今は宿る場所あり、彼岸には吾が同胞が集りて 供養を致す習ひなりけり」(三木栄『暹羅名勝歌案内記』(1938年、神戸、3—4頁)。

上述の日本人の親睦娯楽施設であった

日本人倶楽部と日本人墓地建設積立金の会は、日本人会設立後、会の主要活動として引き継がれた。

タイに帰化した二人の日本人、

概旭乗と三木栄

概旭乗は現在の佐賀県みやき町出身で浄土宗の僧侶として、仏教研究のため1898年2月から1905年まで在タイした。1906年2月に再び来タイし、タイ人と結婚しランシットで水田経営を行ったが、2年で失敗した。その後は、タイ語力を生かして日本人の事業経営を手伝った。タイは帰化法を1911年5月18日付けで公布したが、概旭乗は真っ先に帰化申請を出し、同年11月28日付けで許可された。彼はタイの帰化法により帰化した最初の外国人である。戦前にタイに帰化した日本人は、彼の外に、三木栄がいるのみである。

三木は長年、タイの官庁で技術者・教師として勤務したが、昇進は遅く1929年末になってやっとローン・アムマート・トーの文官位を与えられたに過ぎない。これは軍隊の階級で言えば中尉相当である。彼はタイ国への帰化を1935年12月に申請したが、なかなか認められず、タイ籍を得たのは1939年5月末であった。しかも、自由タイ政権側の強制によるものか本人の意思によるものかは不明だが、日本敗戦直後の45年9月15日にはタイ籍を捨て日本籍に戻っている。

本稿はじめの部分で紹介した戦前の日

本人会『会報』掲載の会誌によれば、日本人会は、57名が参加した1937年4月17日(土)の定期総会で会則を改正し、会員は総会で評議員(20名、1年任期)を選出し、評議員が互選により会長、理事長(新設ポスト)、理事(5名)を選ぶという間接選挙方式を導入した。この改正後、評議員会は、会長、理事長、理事が欠けた場合、年度の途中でも残任期間を任期として正式の新会長、新理事長等を選ぶことができるようになった。そのため、1年の任期を全うしないどころか数ヶ月足らずの会長が何人も現れた。

三木がタイ国籍を得る前の1938年4月4日(月)に78名が参加して日本人会総会が開催され、20名の評議員が選出された。翌5日の評議員会で会長選挙が行われ、難波勝二(正金銀行)と三木栄が同数を得て、決選投票の結果、難波が会長に決まった。理事長選挙は、決選投票で最高票を得た新田義實(三菱商事初代盤谷出張所長)前理事長が辞退したので、次点の日高秋雄が理事長に決まった。このように役員選挙の結果が割れ、一回の選挙では決まらなかったのは、評議員会の構成が、大手企業の新参社員と古くからの在タイ者からなり、その勢力が拮抗していたことによると考えられる。しかし、38年5月2日には、本店の指示を理由に難波会長が辞任し、評議員会は三木栄を会長に選出した。三木は39年3月末までの残任期間を全うした。

39年4月5日(水)には90名の会員が出席して総会が開催され、評議員が選出された。同日開催された評議員会は、新会長に、高月喜右衛門(三井物産)、理事長に日高秋雄を選出した。しかし、6月26日の評議員会で高月会長は転勤のため辞任し、選挙の結果竹田真昌(大阪商船)が会長に選ばれた。ところが、8月26日の評議員会で竹田会長も転勤のため辞任したので、日高秋雄が会長に選出され、後任の理事長には松尾忠彦が当選した。このように39年度(昭和14年度)は3名の会長、2名の理事長が存在することになった。

40年4月6日(土)に、86名が参加して総会が開かれ、評議員を選出。4月11日の評議員会で、谷清訓(三菱商事)を会長、大谷長三を理事長に選出した。これ以後終戦までの会長、理事長の氏名は、前述した大谷長三の西野宛書簡の通である。

少々、脇道にそれたが、1938年度の11ヶ月間、日本人会会長を務めた三木栄はタイの官庁では出世できなかったが、非凡な知識欲の持ち主であった。とりわけ、タイの美術工芸、江戸時代の日タイ交流史特に山田長政の史実、タイ語、バンコク案内等を中心に1942年までに32冊の図書を出版している(三木栄著『山田長政之事蹟』バンコク、江畑洋行、1943年1月20日発行の第3版に付された「自著泰国に関する出版図書目録(三木栄)」による)。しかも、彼の最初の出版物、三木栄著『盤谷一巡』(発行所 暹羅

国日本人会倶楽部、印刷所 大山商会石版部、1921年8月3日発行)は、筆者の知る限り日本人会による最初の出版物である。更には同書はタイにおける最初の日本語出版物である可能性も高い。同書21頁で、三木は日本人会の場所を次のように書いている。

「サツパトム原野、ワット・ベンチャマ寺院を見終われば、最早、之にて名勝は、一巡したる訳なれば、馬車を駆つて、盤谷郊外の道路を馳駆するも又一興あるべし。到る処の道路皆両側に常緑の樹木を植へたれば、恰かも隧道の如く、涼風面をそぞりて三伏の炎暑を忘れ心機一転して爽快を覚ゆべし。野原中には、大学校(未だ予科のみ)競馬場、赤十字病院、皇族・貴族の邸宅、外人の住居などあり。此郊外通過に約十五分時を費すべし。是より競馬場を左に大学を右に見つつ、スラONG道路に出ずれば左側に牆上高く日の丸の翻り、門上に菊花御紋章を戴ける日本公使館・領事館の前に出ず。数丁[一丁は109メートル]にして日本人会倶楽部也」。



日本人会の初期出版物、
三木栄著『盤谷一巡』(1921年)

日本人倶楽部の日本人会への改編

1913年以前のバンコクに日本人倶楽部が存在していたことは間違いない。次の問題は、日本人倶楽部が、いつ、如何なる理由で日本人会に改編されたかである。いつについては、2説がある。如何なる理由かは、資料がないので推測するしかない。

『クルンテープ、タイ国日本人会七〇周年記念特別号』(1984年3月30日発行)46頁掲載の保科忠治(当時日本人会理事)「日本人会小史」は、「日本人会は、大正三年三月十八日、現在のチャロエン、クルン劇場の裏にあるバンモー・サナム・ナムチューに所在した二階建長家の一軒を事務所とし、初代会長・三谷足平氏を選び、創立された。・・・(曾我祐知・池田柳太郎氏・談)」と述べている。70周年記念号が3月に発行されていることからして、1984年当時は、日本人会は創立日を1914年3月18日としていたものと

思われる。

ところが、1993年12月30日発行の『クルンテープ、タイ国日本人会八〇周年記念特別号』6頁では、丸子博之日本人会会長が「泰国日本人会は八〇年前大正二年一九一三年九月に設立されました」と述べている。しかし、同80周年号64頁の小谷亀太郎「日本人会創立八〇周年に当たり」では、「初期創立当時の事は古い人の話や古い記念誌に依るものである事了承願いたい。大正三年(一九一四年)三月十八日、今のキャプテンブッシュ・レーンで産声をあげその当時の会員は一五〇～二〇〇人位だったそうである。会長は三谷足平氏であった。別説にチャルンクルン劇場の近くにあったと言われるが定かではない」と書かれている。同一号の中に、日本人会1913年9月創立説と1914年3月18日創立説が並存しているのである。

更に、『クルンテープ、タイ国日本人会九〇周年記念特別号』(2003年12月31日発行)6頁の「タイ国日本人会創立九十周年に当たって」と題した、小野雅司会長の一文は、「大正二(一九一三)年九月一日、初代会長の三谷足平医師はじめ会員約百五十名によって、チャルンクルン劇場の近くにタイ国日本人会が創立されてから」で始まっている。日本人会の創立年月日は、1913年9月1日に固まったように見える。

既に述べて来たように、タイの日本人は1894年8月には日暹協会、1897年7月には

日本人倶楽部を持ち、1913年9月以前にも日本人青年会、日本人倶楽部および日本人墓地建設積立金の会が存在し、これらが改編されて日本人会が生まれたのであるから、日本人会の起源は、1913年9月1日(月)なのか、あるいは1914年3月18日(水)なのかという議論は、あまり重要とは言えないかも知れない。むしろ問われるべきことは、どうして日本人倶楽部を日本人会に改編する必要があったのかであろう。しかし、まず、ここでは一応両説の根拠になっていると思われる資料を紹介しておきたい。

小出武夫編『在南洋邦人団体便覧』(南洋協会、昭和12[1937]年6月25日発行)は凡例で、「本書は在南同胞活動の一斑を知らんが為め、昨昭和十一年八月末南洋各地日本人会に対し、該地邦人諸団体の陣容其他に関する概括的の通報を求めし処、各地日本人会は欣然応諾続々之を通知し来りしを以て、汎く内外同胞の参考に資するため、之をよく整理按配して一冊のパンフレットを作成した次第である」と述べ、暹羅国日本人会が1937年2月27日に提供した資料を同書114頁に以下のように掲載している。

暹羅国日本人会 昭和12年2月27日現在
所在地 No.2278 Soi Sab, Suriwongse Road, Bangkok, Siam

目的及事業 会員相互の親睦と邦人福祉の擁護増進を図り邦人子弟の教育を行ひ且日暹の親善と同胞の発展を期す

会員数 一百四十五名

創立年月日 大正三年三月十八日

役員名 会長 鈴木宇治(暹羅燐寸工場長) 副会長 日高秋雄(日高洋行主)

理事 新田義實(三菱商事出張所長)、大谷長三(大谷洋行主)、武居芳郎(細田貿易株式会社支店長)、磯部鉦蔵(三井物産支店社員)、三木栄(暹羅国政府官吏)、井内忠三(東洋綿花出張員)、新野芳四郎(歯科医)、太田齊一(医師)、岡崎竹次郎(三井物産社員)

これから、1937年2月時点の日本人会はその創立日を、大正3[1914]年3月18日とする資料を南洋協会に提出したことが判る。

一方、1913年9月1日説の最古の根拠と思われるのは、外務省記録K.3.7.0.11「在外本邦人諸団体調査関係一件」第三巻中に保存されている、1931年11月5日付の矢田部公使の下記公信143号である。

公第143号、昭和6年11月5日、在暹羅国特命全権公使矢田部保吉

外務大臣男爵幣原喜重郎殿

「在外本邦人諸団体調査方の件」

本件に関し本年10月5日付通三普通合第1165号貴信を以て御来示の趣敬承、依て別記の通り査報申進す。御査閲相成度し

追て、本件に関する調査事項中の第11項各種団体の事業活動等に対する在外公館としての考察及同第12項団体の指導啓発其他に関する事項は機密扱として別信にて報告のことに致したるに付為念申添ふ

調査事項

- 1, 名称 暹羅国日本人会 (The Siamese Japanese Association)
- 2, 所在地 事務所所在地は暹羅国盤谷市シーピヤ路646号 (No.646, Sri Phya Road., Bangkok city, Siam)
- 3, 目的 会員相互の親睦を図り福利を増進し同胞互助の機関たるを目的とす。
- 4, 組織 会員を以て組織す。会員は暹羅国に在留する日本人に限ることとし暹羅国駐節帝国公使を以て名誉会頭に推戴し会長、幹事及書記の役員及、職員を置く
- 5, 創立年月日 大正2年9月1日
- 6, 現任会長名及其の任期
会長 河井為海 任期一カ年(昭和7年3月31日満了)
- 7, 幹事(現任)名及其の任期
大谷清一、宮川岩二、江尻武司、有延憲一、三木繁[栄]、溝上政憲、塩田厚、田中廣四、金澤禎三、日高秋雄、以上10名
任期 一カ年(昭和7年3月31日満了)
- 8, 会員数 77名
- 9, 活動の範囲(事業)並に業績
本会の事業として 1、倶楽部 2、共済部、3、墓地建設部、 4、学務部の機関を設く
倶楽部には、(イ)図書の備付及閲覧に関する設備 (ロ)運動及娯楽の設備を為し
共済部にては会員相互の救恤弔慰の目的を達する為め
(1)会員又は其の家族の疾病災難に罹りたるものを慰問又は救恤し其の死亡したると

きは之を弔問し

(2)縁者なき会員死亡したるときは其の葬儀を為す

墓地建設部にては将来盤谷に於て日本人共同墓地建設の準備を為し

学務部にては盤谷日本尋常小学校を経営す。

本会の業績としては即ち大正2年9月本会設立以来現在に至る迄の間、共済部に於て会員及其の家族並に縁者なき会員の疾病災難に罹りたるものを救恤したること65人(此の支出高1217銖[パーツ]60士丹[サタン])、又死亡者の弔慰67回(此の支出高1125銖80士丹)に及べり。又大正12年の母国大震災に際し同年10月4日之が慰問の為め本会基金の内より暹貨1716銖75士丹を支出送金したり。其他暹羅国皇帝の慶弔に際し在留邦人の敬意を表することに常に努め居れり。

本会経営に係る小学校は大正15年6月開設以来卒業生を出すこと男子3名にして現在生徒30名を有す。開設年度より本年度に至る迄に於ける其総支出額は2万4292銖75士丹なり。

10, 維持方法(所有財産並に基金の有無を含む)

会員より毎月応分の会費(最低額2銖以上)を徴する外有志者の寄付金等を以て本会を維持す

(a)所有財産

日本人倶楽部に備付する撞球台2台、付属品4つ玉5組の外什器として椅子70脚、大皿60枚、小皿110枚を有するのみにして日本人会の家屋、土地は借用のものに属す。

(b)基金額総計暹貨8196銖6士丹也(昭和6年10月末現在)其利息収入は毎年小学校経常費に充当す。基本金の内訳左の如し、

1, 基本金 5717銖56士丹

2, 学務部基金 2478銖50士丹

以上

その後、昭和9(1934)年1月25日付で宮崎申郎在盤谷領事が大臣に提出した「在外本邦人諸団体調査の件」では、日本人会の所在地は、暹羅国盤谷市サノン[タノン]、ソイサップ、スリウォン路第2278号と変わっているが、創立年月日は 大正2年9月1日のままである。その他には、次のような内容である。即ち、

組織 会員を以て組織す。会員は暹羅国に在留する日本人(台湾人、朝鮮人を含む)とし暹羅国駐劄帝国公使を以て名誉会頭に推戴し会長、理事及書記の役員及職員を置く
会長名及其の任期 大谷清一 任期一年(昭和9年3月31日満了)

理事名及其の任期、宮川岩二、鈴木宇治、藤井又一、有延憲一、磯部鉦蔵、新野芳四郎、日高秋雄 以上7名 任期一年(昭和9年3月31日満了)

会員数 97名

日本人会創立を1913年9月1日と明記し

た1931年の矢田部公使の報告も34年の宮崎領事の報告も、当時の日本人会からの聴取によるものと思われる。現に1931年度の日本人会会長河井為海は、1935年6月に「在留民の唯一の公共団体として日本人会が大正二年[1913年]から出来て居りました」と講演の中で語っている(河井為海「暹羅事情」、台湾総督官房調査課『南洋事情講演集』1935年所収、71頁)。即ち、日本人会は1930年代前半は、創立日を1913年9月1日と公使館に答え、1937年2月には1914年3月18日と南洋協会の問合せに答えているのである。上記矢田部・宮崎報告の創立日1913年9月1日が、石井米雄・吉川利治『日・タイ交流六〇〇年史』(1987年)で紹介されたため、日本人会は同書の記述を信頼して、創立日を1913年9月1日に改めたのかもしれない。

しかし、両説ともに、出所はもともと1930年代の日本人会である。しかも、古い方が常に正しいとは限らない。日本人会の職員は、当初1913年9月1日と理解していたが、創立に参加した人に聴取して確かめたところ、1914年3月18日の方が正しいことが判り、のちになって修正した可能性もあり得るからである。1930年代は創立から20年程度しか経っておらず、まだ記憶力のよい創立参加者が多数生存していたはずである。例えば、1914年3月18日創立日説を採る、上述の保科忠治「日本人会小史」のソースの一人は、曾我祐知(1893—1984)である。曾

我は、宮川岩二と同郷で宮川が経営する大山商会で働くために満18歳9ヶ月の1912年7月に来タイしている。それ故、日本人会創立にも参加した筈であり、彼の証言には具体性があるように思われる。

この議論に決着をつけるには、創立時の公使館報告、新聞報道あるいはタイ政府への届出記録などを探すしかない。しかし、筆者がこれまで探した限りでは上記のどの資料も存在していないのである。何とも不思議な話ではある。

明治28[1895]年以来明治大正を通して、日本の在外公館は管轄地域内で日本人団体が結成された場合は本省に報告した。それをファイルしたものが、外務省記録3.8.2-213「在外各地日本人会関係雑件」として東京の外交史料館に保存されている。このファイル中にはアメリカや中国の各地で作られた多数の日本人会の報告とともに、1915年9月12日の新嘉坡日本人会設立、1920年の香港やヤンゴンの日本人会設立についての報告も含まれている。ところが、タイにおける日本人会の成立や活動についての報告は一切見当たらない。タイにおける日本人会は公使館と没交渉のまま生まれたのであろうか。

筆者は、日刊紙バンコク・タイムズや検索可能な日本語の日刊紙に日本人会についての報道はないものかと1913-14年時のものを調べたが、何一つ見つからなかった。

一層、不可解なのは、日本人会の設立許

可に伴う登録の公示がタイ官報上に見つからないことである。タイ政府は1914年5月29日に協会(サマーコム)法を施行し、同法により営利活動以外の活動をする目的を有する、既存もしくは将来設立される全ての団体は、規約を作成して登録するために、内務省に提出し、その許可を得る義務が課された。タイ語でサマーソン(倶楽部)と称していた団体もこの対象であった。規約には、①協会名、②設立目的、③協会本部所在地、④会員の加入退会に関する規程、⑤協会の執行役員に関する規程(会長制であるとか理事会制であるとか)の定めを要した。また、規約改正および執行役員の交替の場合は15日以内に届けることを要した。この法に違反した場合は、執行役員のみならず会員にまで重い罰金が課された。

協会法施行後、様々な既存もしくは新設の団体が登録申請を行い、許可された場合はタイ官報で公示された。しかし、日本人会については、この登録の公示が見当たらないのである。よくあることだが、官報発行者がミスで落としてしまった可能性もある。筆者は丁寧に探したつもりだが、見落とすか、あるいは調べた官報には、掲載された部分の頁が偶々欠落していたことも無いわけではないが。

登録申請とは別に、協会法は役職者の交替も届出を要求しているので、一年ごとに役職者が替わることが多い日本人会の届出は相当数に上ったであろう。協会法に基づく

届出のオリジナルは警察局に最近まで保管されていたというが、現在は大部分が廃棄されており見るができないようだ。

ともあれ、協会法施行時に既に存在していた日本人倶楽部が、同法の規定に従い規約を作成し、許可申請を行ったことは間違いないはずである。日本人倶楽部は、協会法の施行を契機として同法の要求する規約内容の作成を迫られ、総会を開催して日本人会に衣替えしたという推測が可能である。これが、日本人倶楽部が日本人会に改編された理由として最も蓋然性の高いものと考えられる。もし、そうであれば、日本人会の創立日は、協会法施行日に近い1914年3月18日の方が分がありそうである。

最後に、本稿で紹介したものも含めて、判る範囲で戦前の日本人会の会員数を記しておきたい。1920年(128人)、1926年2月(普通会员57、地方会員2)、1931年11月(77名)、34年1月(97名)、36年3月(正会員125、地方会員11)、37年2月(145名)、40年10月(正会員255、地方会員38、特別会員8)。このうち、36年3月の出所は日本人会『会報』第7号、40年10月は、同『会報』11号である。これらの数字および創立時の在タイ日本人数から見て、創立時の会員が150～200人というのは少し大き過ぎる感がある。

以上、本稿は現在の手持ち資料の範囲で、戦前の日本人会の謎の部分に迫ってみた。はじめで述べたように、戦前の日本人会に関する資料は圧倒的に不足している。もし、

資料をお持ちの方があれば日本人会事務局もしくは筆者(メール:murashim@waseda.jp)までご一報頂ければ、真に有り難い。

参考資料

第1表 大正14年(1925年)中在暹羅日本人員数(出身県別)並に日本への送金額

県名	男(人)	女(人)	合計	送金の有無
熊本	3	13	16	送金1人(其他銀行為替によるもの1500円)
広島	8	6	14	なし
愛知	5	4	9	なし
静岡	6	3	9	なし
佐賀	5	3	8	
東京	4	4	8	
神奈川	6	0	6	
京都	4	1	5	三井銀行為替によるもの600円、 其他銀行為替によるもの2352円、合計2952円
山形	4	0	4	送金(其他の銀行為替によるもの)400円
山口	4	0	4	
滋賀	2	1	3	
鹿児島	1	1	2	
島根	1	1	2	
千葉	2	0	2	
長崎	1	1	2	送金(外国郵便為替)300円
三重	1	1	2	
富山	1	0	1	
兵庫	1	0	1	
計	59	39	98	

(出所:外務省記録3-8-2-317「在外邦人送金調査表」より筆者作成)

第2表 タイ人口センサス(1937年5月23日実施)

県別国籍別男女別人口集計で日本国籍者が居住する県と人数

県名	男女合計	男	女
バンコク	408	270	138
チョンブリー	8	6	2
ナコンパトム	2	2	0
チェンマイ	15	10	5
プレー	5	2	3
ナコンラーチャシマー	8	8	0
ウボン	3	2	1
スラートターニー	4	1	3
ナコンシータマラート	10	4	6
ブーケット	8	5	3
ソンクラ	7	3	4
ヤラー	4	2	2
バッテリー	3	2	1
ナラティワート	16	12	4
合計	501	329	172

(出所:仏暦2480年全国人口センサス報告書第二巻(タイ語)、47-74頁より筆者作成)

なお、同一センサスの国籍別全国人口表では日本国籍者は、514名(男339名、女175名)となっており、第2表の県別日本国籍者の合計と一致していない。

タイ国日本人会史(1953～2013年)

大阪外国語大学名誉教授

赤木 攻

はじめに

1913年(大正3年)に創立されたタイ国日本人会は、今年(2013年)100周年を迎えた。もちろん、世界の各地に存在する日本人会の中でも最古である。100歳のタイ国日本人会の歴史も、大きくとらえると戦前期と戦後期の2つの時期に区分できる[第2次世界大戦(アジア・太平洋戦争)により、タイでも日本人社会の活動が敗戦後の一時期中断したからである]。ここでは、戦後から今日に至るその歩みを概観することにする。具体的にいえば、戦後タイ国日本人会が再建された1953年から本年までの約60年間の営みを対象とし、100歳を迎えた今日、いかなる課題を抱えているかを考えてみたい[断り書きをするのは本意ではないが、なにぶんにも資料入手が困難で、十分に記述できていなことを最初に申し上げておきたい。なお、以下の記述においては、「泰国日本人会」および「タイ国日本人会」を「日本人会」と表記する]。

まず、記述の便宜のために、戦後から今日に至る日本人会の歴史をいくつかの時代に分けることにしたい。この時代区分には明確な基準はないが、日本人会の活動などを考慮しながら、私が勝手に区分したものである。

① 再発定期(1953～60年)

② 基盤形成期(1960～80年)

③ 完成期(1980～90年)

④ 最盛期(1990～2000年)

⑤ 変質期(2000～)

① 再発定期(1953～60年)

1952年(昭和27年)にサンフランシスコ講和条約が発効し、日本の主権が名実ともに回復するや日タイ外交関係も正式に復活し、両国の間でヒトやモノの往来が始まった。同年4月29日の天皇誕生日には、新しく設置されたばかりの日本大使館の庭に日の丸が掲揚され、君が代が木魂し、新しい時代の始まりが告げられた。

そうした雰囲気の中で、在留日本人の間で日本人会再発足の動きが出てきたのはごく自然であった。戦後も引き続き在留できる許可を得た126名といわれる日本人と戦後いち早く渡タイした日本人の内の有志130名が、1953年(昭和28年)4月に日本人会を立ち上げた[当初は、「日本人クラブ」と称した]。戦前から通算して第23代目になる会長には大賀洋(三井銀行、在任1953～55年)が就任した[経済人の団体である盤谷日本人商工会議所は1954年9月に発足している]。

子女教育 1956年には会員数は約300名に増加した。大使館の協力で日本映画鑑賞会などが持たれていたが、日本人会が真っ先に取り組んだ大事業は児童の教育であった。1956年1月22日に、サーラーデーンの大使館内に「在タイ日本国大使館附属日本語講習会」(児童28名、教職員4名)を発足させた[現在でも、この1月22日がバンコク日本人学校の創立記念日となっている]。第1期生は28名であったが、この講習会が後に(大使館付属)日本人小学校に成長していく。大使館内に発足させたのは、講習会(学校)の法的地位をタイの国内法に合致させる余裕がないための、苦肉の策であった。また、当初の大きな問題は経費であり、学校運営は日本人会に大変な出費を強いるものであった。財政規模の小さい団体にとっては重荷であったに違いないが、大賀会長と第24代会長の森島梓(三井銀行、在任1956年)および第25代会長斉藤得七(三菱商事、在任1956～57年)といった発足当初の幹部たちが、日本人会の初仕事として将来を見据えた大英断を下したのであった。日本人会の目的は会員相互の親睦をはかることが第一であったが、この時期の日本人会にとって子女教育の推進は最も優先すべき課題であった。

アユッタヤー日本人町跡 戦後、再発足したばかりの日本人会が取り組み始めたもうひとつの仕事は、連続性の確認であった。

つまりは、再発足した日本人会が、いや日本人社会が戦前からの継承体であることを自ら確認し、他に対してもそのことを示す必要を強く感じていたのであった。言い換えれば、タイにおいて皆が共有できる日本人のアイデンティティーを探していたと言ってもいいであろう。具体的には、アユッタヤー日本人町跡の修復とタイの地で亡くなった日本人の靈魂を慰める場所の修復と儀礼の再開であった。

アユッタヤーは、在留日本人にとって「故郷」のごとき存在である。その理由は、よく知られているように、17世紀当初から中頃のアユッタヤーにおける日本人の活躍と日本人町の存在であろう。ここで詳細に述べる余裕はないが、当時日本人が相当数居住し、主として交易に従事し、アユッタヤー王朝において一定の勢力を保持していたのは間違いない。その傍証として、1612年に生じた「日本人反乱(王宮占拠事件)」をあげることができる[エーカートッサロット王(在位1605～10年)崩御後、正室から生まれたスタット王子は副王の地位にあったが謀反のかどで処刑され、側室の生まれである異母弟がソントム王として即位した(在位1610～28年)。そのソントム王が、即位後クンナーンのオークヤー・クロムナイワイを謀反の容疑で処刑した。オークヤー・クロムナイワイの配下にあった「日本人」集団280名が激怒し、王宮を包囲する。彼らはソントム王を拘束し、処刑に関係した4名のクンナーンの身柄引き渡しを要求した。国王側がこの要求を呑むや、「日本人」集団は

この4名を引き取り処刑した]。外来の日本人集団が国の中枢である王宮を占拠し、しかも国王に要求を突きつけ4名の高官を処刑したのである。この事件は、当時のアユッタヤーにおける「日本人」の役割と影響力がかなりの大きさであったことを物語っている。著名な山田長政(1590?~1630年)がタイに渡航したのはこの事件の前後だと推されるが、17世紀初めにはアユッタヤーには相当規模の日本人町が存在していたのである。1620年代に大活躍したとされる山田長政についても詳細はわからないが、周知のように、日本では江戸時代からその武勇伝が「南国の英雄」として書き伝えられ、とりわけ戦前の大東亜共栄圏キャンペーンに利用され「長政神話」が出来上がってしまった。

アユッタヤーが在留日本人にとって「故郷」である事情は、上述の通りである。大戦直前にも日本海軍の練習艦隊がアユッタヤーから南下するチャオプラヤー川の東岸に位置する日本人町跡を訪れ社の寄贈を行なうなど、アユッタヤー日本人町跡は所有者である「日暹協会」[1935年11月にタイで設立された友好協会]のもとでそれなりに維持されていた。しかし、戦争中に荒れたこともあり、第26代会長近藤悌三(三井銀行、在任1958年)や第27代会長中出敬一(三井物産、在任1959年)下の日本人会の会議では、アユッタヤー日本人町跡の整備と記念碑建立の案が何度も話し合われた。ただ、こ

の連続性の確認の具体的作業は、次の世代に引き継がれた。

インフラ 日本人会の再発足期の大きな問題のひとつは、インフラであった。その代表が事務所や事務スタッフであった。とくに最初の1年間はそうした基本インフラも整備されないままであったようだ。仮事務所が三井銀行内に置かれたのは1年後の1954年4月で、その後も中央郵便局前の東京銀行駐在員事務所やチャルーンクルン路にあったJETROビル内に場所借りをしている。もっとも、事務担当はどうしても必要というわけで、南正一が1954年に事務局長として就任している[南は結局1979年まで、実に25年にわたって事務局を切り盛りした。初期の功労者と言えるかもしれない]。自前の事務所を持ったのは1961年で、サートンヌア路48番地に1軒家を構えたのであった。もちろん、賃貸である。しかし、この自前の事務所を構えた時点で、再発足のスタート時代は終了したと見ることができる。

② 基盤形成期(1960～80年)

1950年代を通じて再発足の形を整え始めた日本人会であったが、まだまだ足腰は弱かった。1953年の発足時に130名であった会員数は1960年には357名に増加したが、財政的にも苦しいままであった。それどころか、再発足期に着手はしたものの進展に時間を要していたものも多々あった。なかんずく、上述した連続性の確認または日本人のアイデンティティーに関する事業がまだ残されたままであった。加えて、1960年代末ころからの日系企業の急激なタイ国進出に伴い日本人会の会員は毎年増加し、日常の業務も拡大していった。しかも、日系企業増や日本商品の氾濫がもたらした1970年代はじめの反日運動は、日本人会にとって苦難の体験であった。そうした流れの中で、設立以来その法的地位に揺れていた日本人学校に正式の設置認可が下りたのは1974年であった。ともあれ、1960年から1980年の20年間に、日本人会は会員数の増加をもとに、海外における日本人の親睦団体としてその基本的形を作り上げたと言えよう。

日本人納骨堂 日本人会が戦後再発足した当初、理事会で問題にされたひとつは、「日本人納骨堂」であった。チャオプラヤー川に架かるラーマ1世橋の東岸入り口に近い通称リアップ寺(正式名、ラーチャブーラナ寺)の境内にたたずむ日本人納骨堂は、

1935年(昭和10年)の落慶[1934年説もあり]で、1936年に名古屋の日暹寺(現、日タイ寺)から鎌倉時代の仏像を本尊として迎え日本人会の宝として守られてきた。この納骨堂こそが、在タイ日本人の求心的存在であったのは間違いない。戦時中連合軍の爆撃に会い、本堂の屋根が吹き飛ぶこともあった。戦後、徐々に落ち着きを取り戻した日本人社会が納骨堂をはやく正常な形にもどしかつたのは当然のことであろう。戦後の日本人社会にあってリーダーの1人として、日本人会を支えた町医者 of 滝川虎若(1904～2003)が、次のような文章を残している。

終戦にて残留された邦人が約2百名近くおりましたが、これ等在留邦人も当初は生活に追われて落ち着きもなく肩をすぼめてお互いに寄り添っていたのであります。しかし唯1の残された日本人財産?が1つきり存在しているのに気がついたのであります。それは、ワットリヤーブ境内にある日本人納骨堂であったのであります。忘れ去られていた春秋2回のお彼岸の慰霊祭を復活して吾々の寄りどころとし、お寺に集まりお互いの健在を確かめ合ったのであります。

[滝川虎若「懇和会」『クルンテープ』タイ国日本人会70周年記念特別号、1984年、80頁]

明治11年以降のタイでの日本人物故者の過去帳が収められている納骨堂は、まさにタイの地に様々な形で足跡をしるした人々の集合場所であり、在留日本人が先立たれた「同胞」に手を合わせる唯一の場所であった。

納骨堂の整備と日本からの僧侶の呼び寄せは、日本人会の懸案事項であった。具体的にその件が理事会で取り上げられたのは、1959年ころであったが、ここに大きな障害が待ち構えていた。当時の日本人会会長がたまたまクリスチャンで、仏教僧(堂守り)を呼ぶのであればキリスト教牧師も呼ばねばならないと強固に反対したのである。結局、戦前からの在留邦人を中心に「納骨堂奉賛会」という任意団体を組織し、その会で世話をすることになった。その中心として活躍したのが、会長の小谷亀太郎(パシフィック・アンド・オリエント商会)および日高秋雄(日高洋行)、滝川虎若(滝川医院)、上松次雄(花屋ホテル)などであった[彼らこそが、戦争で途切れた日本人会の戦後への接続の役割を実質的に担った方々で、ここでは詳細を述べることはできないが、その献身的な努力を忘れてはならないであろう]。

この仏教僧呼び寄せの「事件」は、その後の日本人会の流れを考えても、きわめて重要な示唆を含んでいる。確かに、当時の日本人会会長は宗教的立場から仏教僧の呼び寄せに反対したのであろう。しかし、そこには東京の本社から派遣された駐在員とい

う立場が色濃く感じられる。私が言う連続性の確認ないしはアイデンティティーを考慮せず、しかも戦後も苦勞して生計を立ててきた多くの在留者の気持ちを汲み取る余裕がなかったのではなかろうか。1960年前後といえ、日本の大企業の本格的なタイ進出が開始され、いわゆる駐在員の姿がバンコクで目立ち始めた時期である。自営業を営みタイを永住の地と考えている人々としばらくの任地と考えている駐在員の間ですれ違いないしは矛盾の萌芽と捉えるのは間違いだらうか。

納骨堂建立時に初代の堂守りを務めた藤井真水[1934年に発足した納骨堂建設委員会の1人でもあり、戦後では納骨堂と高野山との関係を育てた]の肝煎りで選ばれた戦後最初の開教留学僧として長原敬峰がバンコクに到着したのは1961年3月であった。日本人納骨堂の管理運営が本来の所有者である日本人会(事業部)の手に委ねられたのは1968年であった。その結果、「納骨堂奉賛会」は発展的に解消され、納骨堂の世話に協力する親睦団体「仏教奉賛会」となった。さらには、1971年になり、同会はタイに永く在留する方々を中心とした「懇和会」に組織変えられ、日本人会事業部の下部組織として再出発し現在に至っている[なお、堂守りとして高野山から派遣された僧たちは、1977年10月に、藤井真水大僧正の古希を期して、同氏を会長とする高野山真言宗タイ国開教留学僧の会を結成した]。

ケンコーイ移民の碑 その日本人納骨堂に収められている過去帳の第1頁に「山口県人鍛本作造以下17名ゲンコイ地区にて工夫として労務中風土病に倒れる」との記載が見られる。この18名は、1893～94年(明治26～27年)に岩本千綱らが計画した移民により山口県からタイへ赴いた38名の中の一部である。本来現在のルムピニー公園付近で米作を主とする開拓事業を行う予定であったが挫折し、当時建設中であったコーラート線の鉄道建設労務者として働くことになった。場所は現在のサラブリー県のケンコーイであったが、当時はこの辺りは瘴癘の地で、労働に従事した者はマラリアなどに冒され死亡したのであった。

この日本人労務者死亡のことは言い伝えとしては残っていたが、死者の名前も明らかではなかった。日本でも山口県に出かけるなど、この件を徹底的に調べあげたのは日高秋雄であった。そのおかげで、死者の内の1名の方が鍛本作造さんであることが曾孫の申し出で判明し、過去帳も上述のように書き改められた。日本人会はケンコーイ寺に「移民の碑」を建立し1966年(昭和41年)に除幕式を行なった。さらには、1971年釈迦堂を増築しお寺の事情で釈迦堂の移動を求められ、今の場所に慰霊碑を建て現在に至っている。

カーンチャナブリー慰霊塔 日本人会が連続性を確認しなければならない場所がも

う1ヶ所あった。それは、大戦中の1942～43年にかけて突貫工事で建設されたタイとビルマを結ぶ軍用の泰緬鉄道建設の地カーンチャナブリーであった。この鉄道建設がいかに過酷な工事であったかはよく知られている。工事に従事させられた連合国捕虜、タイをはじめ近隣から狩り出された労務者、日本軍関係者などなどが酷使の上にマラリアやコレラに罹り数万人が死亡した。時の鉄道建設隊長高崎少将は、日本軍を除く「南方各国労務者及俘虜」の霊を慰めるためクウェー川鉄橋の川下約百メートルの地に慰霊塔を建立した(1944年2月)のであった。この塔付近は、戦後は放置されたまままで荒れ果てていた。塔の存在を知った小谷や日高は1957年ころから何とか改修しようと奔走した。外務省からの援助もあり整備が進むとともに、土地の所有者と交渉し戦後の未払いの借地代を支払った上、土地を日本人会で購入した(1961年ころ)。そして、日本人会として毎年慰霊祭を行なうことが決まり、1963年3月に最初の公式法要が執り行なわれた。

この慰霊塔は、本来日本人ではなく外国人犠牲者の慰霊のために建立されたものであるが、それを守るのも迷惑をかけた日本人の責務であると感じた日本人会の志は評価されるべきであろう。

続・アユッタヤー日本人町跡 先にアユッタヤー日本人町跡の整備事業が途中で

あったことを述べたが、1960年ころから日泰協会[1935年11月に発足した「日暹協会」が、戦後「日泰協会」として再発したが、1968年に「泰日協会」に再編成した]に本格的に働きかけ、修復工事と記念碑建立の事業が始まった。第28代会長大峽一男(丸紅、在任1961～67年)のもと日本人会創立50周年記念事業として全力を傾注して進められた。日系企業や会員から大きな芳志も寄せられた上、記念碑は高野山から寄贈された。1963年3月にアユッタヤー日本人町記念碑の除幕式が盛大に挙行され、在留邦人にアユッタヤーという「故郷」がより強く意識されたのであった。以後、アユッタヤー日本人町跡はタイを観光する日本人のほとんどが立ち寄る場所ともなった。

日本人小学校の正式認可 再発足した日本人会が真っ先に取り組んだのが子女教育で、在留児童の教育のため大使館内に日本語講習会(日本人小学校)を発足させた(1956年)ことは、既に述べた。日本人会は予算の半分以上を毎年教育部に割き、この小学校を育ててきたのであった。1960年ころに国から補助が出るようになったとはいえ、日本人会の負担は相当なものであった。1962年に大使館との間で話し合いが持たれ、学校を大使館(ワイヤレス路)の管理下に移し「在タイ日本国大使館附属日本人小学校」とすることになった[翌1963年には、名称が「在タイ日本国大使館附属日本人学校」

となった]。日本人会は毎年賛助金を拠出して支援するものの基本的には大使館が運営する体制になり、学校運営委員会が設置され日本人会からも教育部長や会計部長が委員として参加した。また、1959年には中学部の課程も開かれ、日本語講習会として発足後6年を経た1962年には、児童数は114名(小学部77名、中学部37名)に達していた。

大使館附属としての日本人学校の運営はその後順調であったが、1968年の大使館のニューペップリー路への移転が決まると、あらたな問題を抱え込むことになった。残された学校をどうするのかという将来的な不安が生じ、日本人会は苦慮した。問題の根本は、学校がタイの法律に基づいて認可された存在ではないことにあった。大使館内にある限り治外法権を理由にその存在は認められたが、大使館外になるとどうなるのかという心配であった。1965年ころから大使館を仲介役とし、日本政府とタイ政府に対して様々な働きかけが行なわれたが、明確な解答は出てこなかった。結局は、大使館転居後もワイヤレス路の建物はそのまま残し、敷地は日本政府が借用することにし、増加する児童数に応じて校舎やプールなどを整備することになった。整備費の調達は日本人会が請け負うことになり、学校建設委員会を発足させ日本内地をも含めた募金活動が積極的に行なわれた。その結果、1969年には新校舎の落成式を迎えることができた

のであった。ちなみに、その年の児童数は430名(小学部266名、中学部110名)にのぼり、児童数が急激な勢いで伸びていたの示している。裏を返せば、在留日本人数の増加を物語っている。名称も、1972年には「バンコク日本人学校」に改められた。

一応の解決策で当座はしのいだ感があったが、学校の法的地位という基本問題は置いてきぼりであった。規模が拡大するにつれ日本人学校の存在が目立つようになり、タイの法律に従った私立学校としての正式認可を受けるべきであるとの意見が強くなった。学校設立者はタイ人またはタイ法人でなければならないと法律で規定されていたため、泰日協会の名前(会長、プレイヤー・マハイサワン)で私立学校の正式認可を申請した。それは1972年8月のことで、バンコクの街では日本商品不買運動が始まりかけていたころであった。大使館や泰日協会の根回しがあったものの、認可の回答を得るには1974年1月の田中角栄首相訪タイ時のサンヤー・タムマサック首相との会談まで待たねばならなかった。同年7月正式に手続きが終了し、学校の正式名称は「泰日協会学校」(泰日協会学校理事会が運営管理)となった。タイ国私立学校法第20条第1項に則った正式の義務教育学校となったのである。特筆すべきことに、母国語(日本語)による教育を認める「特定学校」としても認可された。戦後大使館内に小さな講習会が発足してから約20年を要しゴー

ルに達したことになる。

1974年ころには幼稚部、小学部、中学部を合計すると生徒数は800名を越え、施設などの老朽化と不足の解消は次の大きな課題となった。学校運営委員会を中心に交通の条件などを踏まえた議論が交わされ、新しい土地を購入し新しい校舎を建設するという方針が確認されたのは1979年であった。第30代日本人会会長西野順治郎(在任、1971～1979年)は1979年に会長を辞すると同時に学校運営委員長に就任し、ことのほか学校の移転に熱心に取り組み委員会をリードした。1982年4月には現在の場所であるバンコクの郊外のスーンウィチャイ路に広いキャンパスと充実した設備を有する待望の新校舎が完成し、念願の大移転が完了した。

会報『クルンテープ』の創刊 大峽会長から第29代会長山本一(川崎汽船、在任1968～1970年)への交代があったころには、会員数は1500名に達し名実ともにタイにおける日本人の親睦団体として充実しつつあった。そんな中、基本的な会としてのツールのひとつを欠いているとの指摘がなされた。それは、会員相互の情報を交換できる機関誌がないことであった。発行を望む声を背景に、大峽会長の時代からその準備が始まり1968年1月に『クルンテープ』創刊号が刊行された。「創刊の辞」は大峽が書いている。表紙を飾ったのは戸塚晃彦(日本

人学校)が描いた天秤棒を担いだ女性の物売りと寺院をあしらった絵で、発行は「泰国日本人會」となっている。森川純行(日本郵船)が初代編集長を務めたが、日本語の活字印刷はむずかしく、「ガリ版と版下書きの手法を織り混ぜてペンの書き文字で」冊子を作成する作業が始まった。編集委員には女性が多く取材や校正に奮闘した。なかでも、日本で印刷関係の仕事に携わった経験のある山本みどり(1928~2004年)の献身的な努力が初期の刊行を支えた。同年8月に編集長は西野順治郎に引き継がれたが、西野はタイ当局の発行許可を得ていないことに気がつき、1969年に正式認可手続きを行なった。

創刊号刊行から今日(通算、547号を数える)まで、日本人会の機関誌ないしは会報として『クルンテープ』は大きな役割を果たしたといえよう。本年100周年を迎える日本人会であるが、この『クルンテープ』刊行のおかげで1968年以降の約50年の活動のおおよそはたどることができる。タイという国において日本人が残した足跡の一部にすぎないが、貴重な史料となることは間違いない。

基本的かたちの整備 この時期、つまり1960年から1980年の20年間に日本人会は大きく成長し、その組織や活動の基本が定まったといえよう。上述したように、過去(戦前)からの連続という大きな仕事を終え、戦後の新しい日タイ関係の中での役割を果

たす体制が整えられたといえよう。とりあえず、子女教育としての日本人学校の支援は別として、会の最大の目的である相互親睦のための具体的な活動を理解するために、ほぼ形が出来上がったと思われる1980年ころの日本人会の「かたち」を、当時の「タイ国日本人会規約」を参考に、概観してみたい。

まず、会員の種類であるが、普通会員、名誉会員、賛助会員、準会員と4種類が用意されている。賛助会員とは法人会員であるが、準会員とは婚姻などで日本国籍を離れた者または両親にいずれかが日本国籍を有した者となっている。おそらくは、このころから国際結婚が増加し始めたものと思われる。「タイ国在住の日本国籍を有する者」とする普通会員のカテゴリーでは包括できないケースが生じてきたため設けられたといえよう[実際、しばらく後になるが、1984年には国際結婚をした者を中心に「国際結婚友の会」が結成され、日本人会の姉妹的存在となっている]。ちなみに、当時の普通会員の会費は男子が月額100バーツ、女子が月額50バーツとされている。他に、入会金として男子300バーツ、女子100バーツを収めねばならなかった。

理事会は、選出理事15名と理事会により推薦される5名以内の推薦理事とから構成された。会長及び2名以内の副会長は理事会の互選とされている。理事の任期は1年で再任も認められている。また、事務局長の任免については、理事会の承認を得て会長が

行なうことになっている。後述することになると思われるが、この理事選挙が日本人会の大きなイベントであった時期があった。

実際の活動を担当する「部」には、次のものが用意された。総務部、会計部、事業部（日本人納骨堂、カーンチャナブリー慰霊塔、ケンコーイ移民の碑の慰霊祭及び管理）、文化部（俳句、短歌、以後、将棋、ブリッジ、コーラス、演劇などの同好会活動）、厚生部（懇話会、敬老の日や成人の日の祝賀会、使用人斡旋）、運動第一部（運動会、ゴルフ部）、運動第二部（その他のスポーツ、テニス、ボーリング、ピンポンの同好会）、教育部（泰日協会学校の支援）、クラブ部（クラブ食堂、図書室の運営管理）、婦人部（講演会、映画会、チャリティー活動など）、青少年部（スポーツや音楽などの多数の青少年サークル活動）、会報部（『クルンテープ』の編集と発行）、広報部（諸所轄の広報）である。これらの活動の内、既に1950年代に行われていたものがあるが、ほとんどは1960年代以降に始まっている。

おそらくは、タイに赴任し日本人会に入った者の最も多くの者が会のありがたさを実感したのは、使用人をめぐってであった。当時は、日本人は一軒家を借りて住む場合が普通であったが、広大な家が多く、中には庭が付いていたりした。そのため、お手伝い（女中）や庭師、さらには守衛を雇い入れる必要があった。なかでも、お手伝いは日常生活そのものに直結しており、トラブルは日

常茶飯事であった。その良し悪しでタイ生活の快適さが決まるといってもいいくらい重要な存在であった。日本人会がタイに長期滞在している主婦のボランティア活動として「使用人斡旋部」を発足させたのは、会員数が2500名を超えた1978年であった。退職金、無断欠勤、無断借用など頻繁に起きるトラブルを求職希望のお手伝いと事前に話し合い斡旋を仲立ちするこの活動は、会員にとってきわめてありがたい存在であった。大勢の会員がお世話になったのではなかろうか。

大峽、山本、西野時代 この基盤形成期（1960～1980年）は20年という期間であり、それなりに長い時間である。この時期、これまでも触れたように、日本人会は二つの課題を抱えていたといえよう。ひとつは、再発足期に取り組みが始まったものの完結しなかった「連続性の確認」の継続作業であった。具体的に言えば、「納骨堂」、「アユッタヤー」、「カーンチャナブリー」及び「ケンコーイ」の四大事業であった。戦争で途切れた流れを戦前につなぎ、タイにおける日本人のアイデンティティを確立せんとするこの作業は、ほぼこの時期に完結したのであった。もうひとつは、子女教育の充実と最大の目的である親睦と福祉の活動基盤の整備であった。泰日協会学校の発足とスーンウィチャイ路の新キャンパスの完成は、子女教育のひとつの高い到達であった。また、日本

人会の組織そのものも大きく整備され、様々な同好会やサークルでの活動も活発化した。運動会や演芸会の開催はそうした活動の代表であり、機関誌『クルンテープ』の刊行は会員の間をつなぐ糸の役割を果たした。

つまり、日本人会が当初から抱えていたふたつの課題は、この20年間にほぼ解決され日本人会の模範ともいえるまで発展したといえよう。こうした基盤形成の背景としてはいくつかの要因が考えられるが、やはり最大のものは会員数の増加であろう。1960年には357名の会員であったが、1980年には2662名に達し、20年間に7倍強になっている。会の基礎である会員数がある程度の規模を維持できなければ、会の運営そのものが危ぶまれるのが通常であるとすれば、この増加は基盤形成に大きな効果をもたらしたとみてよい。さらなる要因として、リーダーシップをあげたい。この時期会長を務めた大峽一男、山本一、西野順治郎のリーダーシップに注目したい。諸氏の詳細な履歴などのデータがないので、断定的なことは言えないが、少なくとも大峽と西野の両氏は戦前の在タイ経験があった。そのため三氏には日本人会のタイにおける位置づけに深い理解があり、さらに各自の真摯な思いが加わり、リーダーシップが発揮されたと思われる。また、山本は2年であるが、大峽は6年、西野は8年にわたって会長の任にあり、ある程度落ち着いて仕事ができたと

も大きい。そして、忘れてはならないのは、再発足期から基盤形成期にかけて、実質的に日本人会を支えた「永住日本人」の存在である。タイを永住の地と考えている彼らの献身的貢献には高い評価が与えられるべきであろう。個人名を記すのは好ましくないかもしれないが、特に日高秋雄、小谷亀太郎、滝川虎若らの諸氏には、タイとかかわりを持つことになった一人の後輩として敬意を表したい。

実は、この基盤形成期には試練の時期が存在した。それは、1970年代の始まりのころで、バンコクを中心に繰り広げられた反日運動(日本商品不買運動)であった。軍事独裁政権下の中で民主化運動を目指していた「タイ全国学生センター」は、1971年ころから一般に日本の経済進出と対日貿易赤字に対する警戒心と不満が高まっていたのに目を付け、日本商品不買運動から手を付けた。1972年11月には日本の首相に抗議文を送ったのを始め、各大学を中心に反日ポスターやビラを配布し、日本大使館や大丸百貨店にデモをかけた。日本人会でも、そうした空気を考慮し、運動会や演芸会の活動を自粛した。ちょうど日本人学校の設置申請をしていた時期でもあり、きわめて慎重な対応がとられた。日本人会による会員への指導も適切になされ、日本人会や日本人が直接攻撃的になることはなかった。反日運動の本来的目的が反政府運動にあったからではないかと言われているのも、そうした

事情を踏まえてのことであろう。1974年1月には田中首相が訪タイしたが、サンヤー・タムマサック首相との会談で日本人学校の法的地位についての合意があったのは述べたとおりである。学生運動を中心とした社会運度は結局1973年のタノーム軍事政権打倒運動とはなったが、本格的反日運動にはつながらなかった。

たしかに、大峽、山本、西野の会長時代を通して日本人会は組織としての基盤整備を順調に進めたが、問題がまったくなかったわけではない。理事会でも様々な問題が議論されたようである。たとえば、1970年に会館建設案が提示され議論が重ねられた。1965年に南サートーン路とスワンプルー路が交差する角地に借家して以来狭いのを我慢していただけに、できれば自前の整備された会館を持ちたいという希望があった。ただすぐに手が付けられることなく、1971年4月には会館建設は一旦断念されたが、代わりに会館建設資金を集めるための「クラブ設営基金」が設置された。1980年には会館建設用の土地確保が決定されたが、翌年白紙撤回されることもあった。また、会員の種類とその権利にも検討が加えられた。たとえば、1972年には準会員にも理事選挙権を付与した。また、1973年には、在タイ歴50年以上の会員は会費免除とする代わりに選挙権、被選挙権、議決権を付与していなかったが、会費免除のまま諸権利を認めている。1977年には理事選挙で立候

補制が提案されたが否決された[立候補制が採用されたのは、2003年である]。

③ 完成期(1980～90年)

おりしも1982年はバンコク王朝200周年に当たり、慶賀の年となった。日本人会もその輪に加わり様々な活動を行なった。バンコク日本人商工会議所と一緒に、クロントゥーイ地区にバレーボール・コート建設するなど、総額300万バーツの寄付を行なった。前にも述べたが同年の五月には新しい日本人学校の校舎が落成したこともあり、在タイ日本人はことのほか200周年を喜んだのであった。翌1983年には日本人会創立70周年式典がA U A 講堂で開催され、実に1000人が参加し祝宴が持たれた。このように祝賀の輪の中から始まる1980年代の日本人会は、会員数が増加する中で古い汚い狭い会館の抜本的解決という重い課題を背負っていた。

1980年には既に2500名に達していた会員数であったが、その後も徐々に増加し続け、1990年ころにはおおよそ5000名を越えた。会員数そのものはそれ以後も増加するのであるが、ここでは1980年代の10年間をひとつの時期として扱うことにしたい。その理由は、待望の日本人会館設置に向けての大変な努力がなされ、ついに自前(自己所有)の会館を持つことができたからである。ありふれた言い方をすれば、日本人会という組織(ソフト)は整備されたのだが、会

員が実際に活動する十分な場所(ハード)が確保されていなかった。ソフトよりもハードが遅れていたのである。そのハードの確保が可能になり、まさに日本人会が名実ともに完成したのがこの10年間であった。あえて「完成期」と呼ぶのはそうした意味を込めたいからである。

自前の会館確保 以下に、「完成」に奔走した一人である本多忠勝(三菱商事)が『クルンテープ タイ国日本人会80周年記念特別号』に寄稿した「泰国日本人会 会館取得まで」を参考にその道のりを述べたい。

自分たちの会館を持ちたいという願望は、上述したように、既に1970年ころから存在した。とりわけ、在タイ歴の長い会員を中心にその願望は強かった。しかし、最大の問題は資金であった。新しい土地を購入し会館を建設するにしても、どこかのビルの一部を借りるまたは購入するにしても、相当な規模の資金を要し、日本人会の財政規模ではとても無理であった。

しかし、そうしたこう着状態を動かす機会が、度重なる会館の家主からの家賃値上げ要求であった。第37代会長清峰太造(三井物産、在任1985年)下の1986年2月の理事会でも家賃値上げ要求をめぐる議論が交わされたが、とりえず値上げ要求を呑むが早急に移転先を探すことで会館移転検討委員会が設置された。4月からは会長が交代し藤永隆博(丸紅、在任1986年)と

なったが、本多が当該委員会委員長に就任し、本格的な作業が開始された。委員会では、会館の役割、機能、使用頻度、必要スペースなどについての検討を行い、その一方では負担できる資金(借料の上限)を基本に具体的な物件を探し始めた。場所の選定は、在留邦人の八割近くが居住しているスクムウィット地区がいいのか、それとも他の場所がいいのかが議論になった。ともかく適当な物件がないことには話が始まらないと、実際に現場視察が行なわれた。何ヶ所かのビルを見て廻ったが、スペース、駐車場、警備などの問題もあり、これはという物件はなかなか見つからなかった。

かろうじて候補に残ったのは、アソーク・タワーとサートンターニーの両ビルであった。ただ後者のビルは建築中で、図面で確認する以外になかった。最終的にはサートンターニーを選んだが、大きな決め手となったのは、借料が予想よりも大幅に低く、スペースや駐車場の条件も有利で、何よりも一階(アソーク・タワーは12階)で、レイアウト変更がまだできる点であった。

さらに幸運なことは、賃貸ではなく、購入できる可能性が出てきたことであった。タイでの賃貸契約では更新時に必ず値上げを伴っているのが普通で、買い取りができるのであればこの上なかった。銀行からの借り入れ、長期延べ払いなどを考慮しながら交渉した結果、購入方式の可能性が見えてきた。本多は藤永会長、清峰副会長の了承

のもと、1986年6月の理事会では賃貸方式に併せて、購入方式も検討するとの提案を行い、その方向が確認された。ただ、購入となると、会費の値上げにつながるとの心配から、反対の空気が強いのも事実であった。

ここでの藤永会長および清峰副会長の決断は、後の推移を考えれば評価されているだろう。本多は自らの努力は棚に上げて、両者の決断をたたえている。とりわけ、清峰の賛助会員に対する会費前納制を導入する資金確保案の提案は画期的であった。同年6月の理事会では、購入方式が正式に承認され、自己所有の会館確保という夢の実現に見通しが立ったのであった。契約内容は、総額約1700バーツ、50%を頭金として払い、残り50%が10年間の元利均等払いであった。

心配していた賛助会費の前納や募金がきわめて順調に進み、目標を超えた資金を確保することができ、諸経費を差し引いても残金が出るほどで移転は可能となった。折しも日タイ修好百周年にあたる1987年8月に日本人会会館(サートンターニービル、北サートン路)の開館式が挙行された。正式な所有権の移転は、タイの外国人不動産所有に関する法律の施行などを待たねばならなかったが、1993年7月の残金の一括支払いとともに完了した。なお、事務局長の南正一は1979年で辞任し、しばらくは山際武子および川満富子が代行していたが、1981年には荒井定修が就任した。荒井は

1991年まで勤務し、会館購入を裏で支えた。

もうひとつの「完成」 会費の値上げをしないで会館の購入できたことを、本多は「奇跡」と呼んでいる。たしかにそれは奇跡と呼べるほどのことであつたに違いない。しかし、私には、奇跡というより当時の会長をはじめとする幹部の尽力の賜物であると思えない。

面白いことに、歴代会長の変遷を眺めていると、ひとつの特徴に気がつく。1979年に第30代会長の西野が退任した後は第31代園山裕三(三井物産、在任1979年)が就任し、1991年に第43代会長三村洋三(トーメン、在任1991~1992年)が就任するまでほぼ毎年会長が交代している[例外といえば、藤永隆博は第38代と第41代と二期務めている]。そして、この間の会長は11名を数えるが、全員がいわゆる代表的日系企業のトップである。たとえば、清峰は三井物産であり、藤永は丸紅である。彼らの日本人会の重要性への理解と会社を背景にした指導力が会館の完成を可能にしたといえるのではなかろうか。本多は「良い意味での異色ともいっても良い会長が二代(清峰、藤永)続いたお陰で会館は無事に完成した」と述べているが、この1980年代の代表的日系企業トップのオンパレードは日本人会にとってきわめて有益な成果をもたらしたといえる[ところで、付言しておきたいことがある。この時期は三井物産、トヨタ自動車、丸紅などの日系企業トップがほぼ

一年交代で会長に就任している。この背景に、日本企業の海外でのプレゼンス強化志向があったことを指摘しておきたい。日本の本社サイドから海外における日本人会の役職(理事や会長など)につくように積極的な指示がなされた時代であった。現地企業の意向ではなかったが、日本人会の理事選挙の季節になると理事ポストの確保を目指した選挙運動が活発化した。大勢の従業員を抱える企業が当然有利であったが、小さい会社といえども他の会社に頼み込んで票集めをするのがふつうであった。選ばれなかった場合、日本の本社サイドからお叱りを受けるのを恐れ、選挙運動に熱心になったといってもいいだろう。ただ、選挙で不利になるのは、有権者を多数確保できない自営業者であった。だから、自ずと日系企業の現地トップが理事に当選する確率が高かったのである。

ただ、トップとはいえ、日本の本社の辞令で赴任したいいわゆる「駐在員(会社員)」である。つまりは、長くても数年間の任期を終えれば、日本に帰る存在である。私が『タイの永住日本人』で指摘したように、タイの日本社会の底には「駐在日本人」と「永住日本人」との間に微妙なすれ違いが存在した。主として自営業を営む「永住日本人」には、予定した帰国日はなかった。しかし、本来自前の会館所有を強く望んだのは「永住日本人」であった。タイ滞在期間がほぼ決まっている「駐在日本人」にとっては会館が借用で少々汚くても狭くてもよかった。今回の日本人会館の開館は、「永住日本人」の願望を「駐在日本人」が協力することで可能になっ

た。おそらく、その結果両者の間に存在したであろうわだかまりが解消し、日本人会の団結が「完成」したといえよう。それは、先に述べた「ソフト」と「ハード」が揃ったという意味での「完成」とは異なるもうひとつの「完成」であった。「永住日本人」と「駐在日本人」の思いがひとつになったのである。真っ先に会館購入寄付に応じた藤井昭男(新興産業界)からの「貧者の一灯として、タニヤで飲む回数を減らしても、またゴルフの腕が下がろうとも、この募金に応じたい、そして委員の方々のご苦勞を少しでもやわらげ、大成功裡に完了することを祈る」との激励に本多は臉が熱くなったと述べている。その藤井は、当初「駐在日本人」で来タイし、事情があり途中から「永住日本人」になった会員である。その経歴や激励のこぼれに、日本人会の「完成」の姿がよく表われているといえよう。「完成」の背景には藤井のような会員の増加があったに違いない。大げさに言えば、在タイ日本人全員の協力が「完成」したのであった。

④ 最盛期(1990~2000年)

最多瞬間会員数 1990年代のはじめに「完成」した日本人会は、それからの10年間に最盛期を迎える。その記録的な会員数の伸びが最盛期の最たる表われである。1990年に4,708名であった会員数は2000年にはなんと9,002名になり、ほぼ倍増している[参考までに、大使館への在留届出数では、

1万4,289名(1990年)、2万1,154名(2000年)である。毎年数百人規模で増加したのである。最多瞬間会員数は1997年11月に記録したが、その数は9,882名であった。その背景としては、タイ経済が1980年代後半から1996年までは未曾有の成長を見せ、そこに日系企業が大量に進出した点を指摘することができよう。実際、タイにおける日系企業の活動のひとつの指標であるバンコク日本人商工会議所会員数を調べてみると、793社(1990年)から1,165社(2000年)と著しい伸びを示している。

1997年の大幅なバーツの下落によりタイが通貨危機に陥った際には、日本人会の会員数も一時伸び悩んだがこともあったが、日本人会が順調な運営で推移したのは1990年代であった。裏返せば、「完成」した日本人会にとって緊急を要する課題がなくなったといっても良い。その証拠にとまではいなくても、2003年に発行された『クレンジング タイ国日本人会90周年記念特別号』は1990年代の日本人会の姿をよく表現していると思う。まず、その前の『70周年記念特別号』と『80周年記念特別号』が200頁に達するボリュームなのに対し、約3分の1の70頁程度に終わっている。しかも、目次を見る限り、日本人会そのものに直接関係した記事はほとんどなく、タイの国情、バンコク今昔、タイの変遷といった書き物で満たされている。もちろん、先の特別号にもそうした書き物も多いが、日本人会の活動に

関する紹介記事が相当取り上げられている。しかし、本号では泰日協会学校の状況報告ぐらいである。それは、編集氏の意図によるものではなく、1990年代の日本人会の推移がそうさせたのである。いかなる組織でも、最盛期というのはそうした性格を持つものである。

緊急連絡網整備 そんな中でも、日本人会が取り組んだ大きな仕事があった。邦人の間の緊急連絡網の整備である。その仕事を大きく前進させたのは、1991年のクーデターおよび翌1992年に生じた5月事件[スチンダー政権の退陣を求める大規模政治集会による混乱]であろう。まさに、社会的混乱が生じた場合最も大切なのは情報であり、情報不足は不安を必要以上に募らせるからである。日本人会は大使館や関係機関と協力し、きわめて完成度の高い緊急連絡網を作成した。地域別や企業・団体別の利用も容易なように編集されており、テレビやラジオによる報道に今ひとつ信用が置けない上に、タイ語放送ではどうしようもない邦人家庭では、この緊急連絡網を通しての情報が唯一の拠り所となった。

タイ社会との交流 もうひとつのこの次期の特徴は、日本人会の目がタイ社会の方向へ本格的に向き始めたことである。たしかに、婦人部を中心としたチャリティー活動は以前から行なわれており、身障者施設や

養護施設などの社会的弱者への寄贈や訪問は恒例となっていた。しかし、1990年代になるや、タイ社会との本格的な文化交流ないしは親善活動が企画され実施されるようになった。その好例が、「日タイ交流ラムウォン・盆踊り大会」で、タイの最もポピュラーな庶民の踊りであるラムウォン（輪踊り）と日本の盆踊りを、タイ人と日本人が一緒になって楽しむという催し物である。この大会の起源は、1987年2月にチュラーロンコーン大学の校庭で始まったのが最初であるが、2回目（1989年11月）はバンコク都青少年センター前庭に会場が移され、徐々に拡大していった。1990年12月には第3回大会が実施され、以後ほぼ恒例の行事となった。1993年の第4回目の大会で定例化が正式に決まり、2年に1度開催が企画され、バンコクの風物詩のひとつに数えられるようになった。テロや洪水で中止されたこともあるが、今年（2013年）で第22回目になる。今では、タイ国日本人会、タイ国スポーツ・観光省、タイ国政府観光庁の共同主催行事として定着した。日本人会が主催する行事としては最大規模の物になったといえよう。最近ではバンコクを中心に位置する国立競技場で繰り広げられるこの大会は、琉球国太鼓の実演や福引抽選会もあり、多くのタイ人が参加し1万人以上の参加者で盛り上がる。今では、バンコクだけではなくチェンマイをはじめ地方でも同じような大会が行われるようになったが、日本人会発の大交流

イベントであることを忘れてはなるまい。日本人会の役割が日タイ親善という日本人会規約第3条にいう目的のひとつにシフトし始めたのではないだろうか。

高齢化、事務局、アネックス この時期に変更された事項で述べておかねばならないのは、1993年に「会友会員」が会員種類に追加されたことである。「すでに会員で在タイ期間が通算50年を越える者あるいは75才以上の者で理事会の承認を得た者」を会友会員とし、会費免除という特典も与えられた。おそらくは、在留邦人の高齢化を反映した措置であろう。日本からシルバーステイで来タイする者も含めて高齢者問題は今後日本人会にとって新たな課題となる可能性を示唆していた。

また、1991年には10年間事務局長を勤めた新井定修が死去し事務局長不在となったが、しばらく代行していた事務局次長川満富子が翌1992年に正式な事務局長に就任し、2001年まで務めた。彼女は最盛期の事務局長であった[なお、その後の事務局長は、2001年から2002年まで田村優子、2003年から現在まで磯田博之である]。また、1997年2月にはシティリゾート・アネックス七階（スクムウィット路ソーイ39）に別館を開設した。それは、おそらくは会員数が最多に達した時期と一致していた。

⑤ 変質期(2000～)

会員数の減少傾向 最盛期を過ぎた組織は、当然のことながら、変質せざるを得ない。日本人会もその例外ではなかった。変質を迫られた最大の要因は、会員数の減少である。1997年ころに9,000名台に乗った会員数は2007年ころまでの10年間は、9400名あたりで増減を繰り返して伸び悩み始め、ついに2008年には8000名台に減じ、その後も減少の傾向が続いている[ちなみに、2012年の会員数は7,307人である]。問題は、在タイ邦人数そのものは増加しているにもかかわらず入会者数が減少している点である。彼らが入会しない基本的理由は明白で、会員効用が逡減してきたからである。会員としてのメリットが減少し、納める会費との均衡が崩れてきたのである。会費に見合うだけのメリットが日本人会になくなったといってもよい。見方を変えれば、従来日本人会から得ていたメリットが、他の所からフリーでしかも容易に入手できるようになったと言えよう。その好例は、情報であろう。インターネットやミニコミ誌をはじめ多様なツールが発達した今日では、生活上に必要な情報を簡単に入手することができる。もはや、日本人会に頼る必要はなくなってきた。もっと身近なところで言えば、レストランかもしれない。日本人会のレストランは安価で質の良い和食を提供し人気が高かったのは一昔前の話で、これだけ多くの和食レストランが街にあふれた現在、その存在価値は大き

く逡減したと言えよう。簡単に言えば、日本人会なしで生活できる環境ができあがったためである

邦人の多様化 加えて、在留邦人の質の変化も指摘しなければならないだろう。従来は、「永住日本人(定住者)」と「駐在員」の二つのカテゴリーからほぼ成り立っていた在留邦人であったが、ここ10年の間に様々なカテゴリーの邦人が増えてきた。たとえば、「駐在員」ではなく、「現地採用者」である。彼らは、日本で採用されるのではなくタイでの採用であり、一般には「ローカル・スタッフ」と呼ばれることが多い。日本での就職がむずかしい状況を反映してか、タイに求職にやってくる若者が増えた。また、日本に居ながらネットでタイでの求職情報を得て、就職する者もいる。ふらっとタイに遊びに来て、そのまま就職する若者も多い。また、非駐在員、非企業人、非自営業者といった直接経済活動に従事しない邦人の数が1990年代から増え続けている。国際結婚による婚入者や留学生も含まれるが、実際には何もしていない「浮遊者」も多い。「ローカル・スタッフ」や「浮遊者」に代表される邦人は、概して日本人会のような組織は目に入らない。彼らは基本的には組織にはなじまない者たちが多いからである。だが、彼らの加入はこれまでとは異質な会員の増加となっている。

2004年に実施された理事選挙は、そうした邦人の多様化を示す絶好の例となった。

最盛期以降の理事選挙は、実際には「永住日本人」と「駐在員」のグループから推薦を受ける形で理事選出がなされるのが普通になっていたが、この年にはそうしたグループに属さない人たちが大量に立候補したのである。もちろん、その年の選挙結果は慣行化していた推薦による選出とほぼ変わらなかったが、日本人会そのものの変容を要求する動きであったのは確かである。実際、その後の理事選挙では、推薦制のころと異なり大企業の現地法人トップである理事が減り、様々な会員が理事に就任するようになった。理事構成が変化したことにより、従来とは異なった意見が運営に反映するようになった。そのこともあり、各委員会の活動が活発化した。日本人会の同好会を中心とした活動も活性化した。なによりも、そうした動きは日本人会そのもののオープン性を高めた。

地理的分布の拡大 もう一つの特徴は、在留邦人の地理的分布の拡大である。つまり、バンコクないしはその近郊に集中していた邦人の住所が、地方に拡大していく傾向が強くなった。2009年4月の泰日協会学校シーラーチャー校の開校はその象徴と言えよう。近年の東部臨海工業地帯の発展は著しく、日系企業がチョンブリー県およびラヨン県に大進出し、そこに勤務する邦人とその家族が著しく増加している。その中心地であるシーラーチャーは「日本人町」と

呼ばれるほどで、多くの日本人向けマンションや日本食レストランが立ち並んでいる。また、以前から邦人が相当の程度住んでいたチェンマイやプーケットでも、近年その数がさらに増加してきている。チョンブリー・ラヨン地区、チェンマイ地区、プーケット地区には、それぞれ独自の日本人会が発足し活動している。当然のことながら、日本人会（バンコク）がこうした地方在住の邦人を取り込むことは物理的に無理がある。

財政赤字 会員数の減少は、痛いことに、財政に直接響いてくる。つまり、一般会計の支出が収入を上回り始め、2005年あたりから赤字に転落したのである。ついに2007年には会費を倍額の月額200バーツに踏み切ったが、実に1983年以来の24年ぶりの値上げであった[会費(月額)の変遷は、次のとおりである。1968年/20バーツ、1974年/30バーツ、1979年/50バーツ、1983年/100バーツ、2007年/200バーツ]。会費を値上げしても、会員数が増加しなければ赤字基調は続く。この財政赤字問題は、日本人会の今後を考える上で最重要課題として浮上してきている。

新しい会への模索 こうした日本人会の変質は、第48代会長石平厚一郎(博報堂、在任1999～2001年)あたりから幹部にも認識され始め、第49代会長小野雅司(キクヤ、在任2002～9年)に至って対応が課題であることが明確に認識されるようになった。

た。つまり、日本人会の新しいあり方の模索が開始されたと言ってよい。創立100周年は、そうした新しい会へ向けての転換点ととらえるべきであろう。

新しい会を模索、検討するには、100年の歩みを振り返り、かつ来る50年程度への展望が要請されるであろうが、自己点検も含めて少なくとも次のような点に慎重な検討が加えられるべきであろう。

真っ先に取り上げねばならないのは、日タイ関係の今後である。日本にとってアジア諸国の中では最も長い良好関係を維持してきた日タイ関係の今後を大きく展望してみなければなるまい。とりわけ、タイ国の今後の発展をどう捉え、日本はどう関わるのかを議論し、その上で日本人会の役割を検討してみる必要がある。場合によっては、外部の識者も加えたフォーラムなどを企画してみたいかがだろうか。また、関係者を集めて将来構想委員会を組織し、抜本的な改革構想を策定するののも一つの有効な方策である。

そこから導かれる日本人会の役割は、当然のことながら日本人会の目的でもある。現在の「規約」第3条に掲げられている目的は、「相互の親睦と福祉の増進」、「子女教育の向上」、「日タイ親善を図る」であるが、その大枠は置いておくにしても、重点項目やより具体的な目的を設けた方がいいのではなからうか。それは、とりもなおさず、新しい日本人会の性格を明確に示すことになる。

もっとも、これまで重要な役割を果たしてきたタイにおける日本人アイデンティティの継承や日本人学校の運営への支援は、当然継承されねばならない。アユッタヤー日本人町跡、日本人納骨堂、カーンチャナブリー慰霊塔、ケンコーイ移民の碑の管理運営は、今後とも日本人会の中核的役割であり目的である。日本人学校の運営は本来的には設置者である泰日協会の仕事であるが、日本人会はこれからも支援をしていかねばならない。

おそらく、もっとも議論を重ねなければならないのは、会員であろう。議論によっては、目的はもちろんのこと組織や施設、さらにはサービス内容とも相互に大きく関係してくるから重要である。会員への考え方としては、すべての在タイ邦人を対象とすべきかどうかが出発点となる。会員数が多い方がいいという考えからすれば、とにかく邦人全員を会員にするまで努力しなければならない。しかし、前述したように、今日では邦人の多様化が進み、しかも社会環境が大きく変化し、日本人会を必要としない邦人も増えてきている。彼らにも入会を勧めるべきなのだろうか。会員数至上主義(拡大主義)をとるなら、そうしなければならないだろう。しかし、会員数至上主義は捨て、入会希望者であればだれでも入会できる姿勢の方が望ましいのではないかと考える。会の活動に賛同する者を積極的に会員として迎える方針である。

当然のことながら、会費収入は伸びないかもしれない。そこで、財政規模にあった会の運営にするためには、会員サービスや施設の吟味がなされねばならない。つまり、会報誌『クレンジング』の送付をはじめとした10以上にのぼる現行の会員サービスの取捨選択も必要となってくるであろうし、食堂を含む現会館や子ども図書館などの施設の必要性も検討しなければなるまい。青少年サークルや同好会活動の拡大や質の向上は必要かもしれない。部員が膨大な数になり運営に様々な支障が出てきていると聞くゴルフ部などには大英断が要請される。不必要なものを削って、魅力的なサービスを加えていくべきであろう。

忘れてならないのが、タイ社会との交流である。それが日本人会の重要な役割であるのは間違いない。これまでも様々な交流が進められてきたが、これからはやはり的を絞った交流のあり方が好ましいのではないだろうか。

いずれにしても、100周年は絶好の機会である。日本人会の新たな役割と目的を検討し、それに沿った形にすべくすべてを点検する作業に取り掛かってほしい。その作業は、世界の各地に存在する日本人会の最年長者としての義務でもあろう。

おわりに

戦後のタイ国日本人会の歴史は、様々なことを教えてくれる。ひとつは、日本人の集団

性の強さである。これほどの集団性はタイ人にはない。現に、日本にもほぼ5万人のタイ人が居住していると推量されるが、日本国タイ人会は存在しない。集団性は、日本ないしは日本人の国際分野での諸々の営為においても大きな特徴を示している。タイ国日本人会が残した数々の営為は集団性がゆえに可能であったことが多い。もうひとつは、集団の規模ないしは組織に関することで、いかなる集団や組織にも適正規模がありその規模を超えると、集団や組織が弱体化することを示唆している。タイ国日本人会の場合は、会員効用逡減が最大の理由であろう。変化する環境に対応できなかったために会員メリットが減少したのである。100歳という年齢を考慮すれば、やはり新しく生まれ変わる以外にないだろう。日本人の持つ高い集団性は新しい会への脱皮を可能にしてくれるであろう。グローバル化が進む中での21世紀の日本人会のあり方をタイから発信してもらいたいものである。

表-1 タイ国日本人会会員数、日本人学校生徒数および商工会議所会員数の推移

	タイ国日本人会 会員数推移 (名)	日本人学校 生徒数推移 (名)	商工会議所 会員数推移 (社)
1953	130		
1954	191		32
1955	249		50
1956	315	28	59
1957	384		62
1958	375	75	65
1959	332		72
1960	357	80	69
1961	407	88	70
1962	488	110	74
1963	634	139	82
1964		154	112
1965		196	138
1966			154
1967		232	155
1968	1,347	301	170
1969	1,610	356	195
1970	1,928	430	217
1971	2,138	506	235
1972	2,274	565	243
1973	2,517	619	274
1974	2,543	716	287
1975	2,537	807	293
1976	2,511	867	296
1977	2,462	826	301
1978	2,549	835	314
1979	2,649	927	343
1980	2,662	953	349
1981	2,638	1,030	348
1982	2,683	937	356
1983	2,830	1,065	369
1984	2,744	1,048	378
1985	2,889	1,065	394
1986	2,930	1,056	424
1987	2,950	1,117	459
1988	3,283	1,130	524
1989	3,872	1,287	696
1990	4,708	1,297	793
1991	5,440	1,442	854
1992	6,292	1,541	912
1993	6,609	1,593	953
1994	7,035	1,531	988
1995	7,670	1,560	1,028
1996	8,489	1,685	1,082
1997	9,243	1,810	1,141
1998	9,488	2,010	1,178
1999	9,054	2,012	1,162
2000	9,002	1,763	1,165
2001	9,445	1,701	1,164
2002	9,191	1,759	1,156
2003	9,185	1,854	1,170
2004	9,383	1,958	1,207
2005	9,385	2,076	1,234
2006	9,409	2,158	1,252
2007	9,379	2,288	1,278
2008	8,761	2,401	1,292
2009	7,991	2,524	1,303
2010	7,180	2,454	1,317
2011	7,345	2,555	1,327
2012	7,307	2,707	1,371
2013	7,313	2,913	1,458

【主要参考文献】

- 赤木攻 「タイ全国学生センターを中心にみた学生運動の歴史」多賀秋五郎(編著)『現代アジア教育史研究』多賀出版、1983年、583-647頁。
- 赤木攻 『タイの永住日本人』めこん、1992年。
- 赤木攻 「天使の都に浮遊する日本人—日タイ関係と日本人社会の変容—」『アジア遊学』第57号、2003年、117 - 125頁。
- 黒田篤郎(編) 『クレンテープ タイ国日本人会90周年記念特別号』泰国日本人会、平成15年。
- 杉山泰夫(編) 『クレンテープ タイ国日本人会70周年記念特別号』泰国日本人会、昭和59年。
- 立石幾久治(編) 『クレンテープ タイ国日本人会80周年記念特別号』泰国日本人会、平成5年。
- 西野順治郎 『タイの大地と共に —星霜変わる半世紀』日本事業出版社、1996年。
- 山本みどり 『六度目の辰』自費出版、2000年。
- 吉田千之輔 「タイ国日本人会とバンコク日本人商工会議所」小林英夫、柴田善雅、吉田千之輔(編)『戦後アジアにおける日本人団体 —引揚げから企業進出まで—』ゆまに書房、2008年。

[付表]

- 表-1 タイ国日本人会会員数、日本人学校生徒数および商工会議所会員数の推移
- 表-2 タイ国日本人会歴代会長一覧
- 表-3 タイ国日本人会戦後事務局長一覧

表-2 タイ国日本人会歴代会長一覧

西暦	年号	代	日本人会会長	勤務先
1913	大正2	初代	三谷 足平	医師
1914	大正3		三谷 足平	
1915	大正4	2代	小牧 太次郎(?)	三井物産
1916	大正5			
1917	大正6			
1918	大正7	3代	加藤 尚三	三井物産
1919	大正8	4代	土井 節	
1920	大正9	5代	水野 泰四郎	台湾銀行
1921	大正10	6代	山本 雅一(?)	三井物産
1922	大正11	7代	平佐 幹	台湾銀行
1923	大正12	8代	不明	
1924	大正13			
1925	大正14	9代	植木 房太郎	三井物産
1926	大正15		植木 房太郎	三井物産
1927	昭和2		植木 房太郎	三井物産
1928	昭和3		植木 房太郎	三井物産
1929	昭和4	10代	河井 為海	医師
1930	昭和5		河井 為海	医師
1931	昭和6		河井 為海	医師
1932	昭和7	11代	大谷 清一	大山商会
1933	昭和8		大谷 清一	大山商会
1934	昭和9	12代	小川 蔵太	医師
1935	昭和10		小川 蔵太	医師
1936	昭和11	13代	鈴木 宇治	暹羅燐寸
1937	昭和12	14代	三原 新三	農業博士
1938	昭和13	15代	難波 勝二	正金銀行
		16代	三木 栄	泰国美術学校長
1939	昭和14	17代	高月 喜右衛門	三井物産
		18代	竹田 真昌	大阪商船
		19代	日高 秋雄	日高洋行
1940	昭和15	20代	谷 清訓	三菱商事
1941	昭和16	21代	江尻 賢美	医師
1942	昭和17		江尻 賢美	医師
1943	昭和18	22代	森 広三郎	三井物産
1944	昭和19		森 広三郎	三井物産
1945	昭和20		森 広三郎	三井物産
1946	昭和21		森 広三郎	三井物産
1947	昭和22			
1948	昭和23			
1949	昭和24			
1950	昭和25			
1951	昭和26			
1952	昭和27			
1953	昭和28	23代	大賀 洋	三井銀行
1954	昭和29		大賀 洋	三井銀行
1955	昭和30	24代	森島 梓	三井銀行
1956	昭和31	25代	齋藤 得七	三菱商事
1957	昭和32		齋藤 得七	三菱商事
1958	昭和33	26代	近藤 梯三	三井銀行
1959	昭和34	27代	中出 敬一	三井物産
1960	昭和35		中出 敬一	三井物産
1961	昭和36	28代	大峽 一男	丸紅
1962	昭和37		大峽 一男	丸紅
1963	昭和38		大峽 一男	丸紅
1964	昭和39		大峽 一男	丸紅
1965	昭和40		大峽 一男	丸紅
1966	昭和41		大峽 一男	丸紅
1967	昭和42		大峽 一男	丸紅
1968	昭和43	29代	山本 一	川崎汽船
1969	昭和44		山本 一	川崎汽船

西暦	年号	代	日本人会会長	勤務先
1970	昭和45	29代	山本 一	川崎汽船
1971	昭和46	30代	西野 順治郎	トーメン
1972	昭和47		西野 順治郎	トーメン
1973	昭和48		西野 順治郎	トーメン
1974	昭和49		西野 順治郎	トーメン
1975	昭和50		西野 順治郎	トーメン
1976	昭和51		西野 順治郎	トーメン
1977	昭和52		西野 順治郎	トーメン
1978	昭和53		西野 順治郎	トーメン
1978	昭和54		西野 順治郎	トーメン
1979	昭和54	31代	園山 裕三	三井物産
1980	昭和55	32代	三浦 清彦	トヨタ自動車
1981	昭和56	33代	和多田 寛	三井物産
1982	昭和57	34代	山本 庄太郎	大丸
1983	昭和58	35代	高瀬 長幸	丸紅
1984	昭和59	36代	佐藤 一朗	トヨタ自動車
1985	昭和60	37代	清峰 太造	三井物産
1986	昭和61	38代	藤永 隆博	丸紅
1987	昭和62	39代	古山 晃	三菱商事
1988	昭和63	40代	川本 一	伊藤忠
1989	平成1	41代	藤永 隆博	丸紅
1990	平成2	42代	笹川 博伸	東レナイロン
1991	平成3	43代	三村 洋三	トーメン
1992	平成4		三村 洋三	トーメン
1993	平成5	44代	丸子 博之	三井物産
1994	平成6	45代	佐藤 琢磨	トヨタ自動車
1995	平成7		佐藤 琢磨	トヨタ自動車
1996	平成8	46代	豊田 資則	伊藤忠
1997	平成9		豊田 資則	伊藤忠
1998	平成10	47代	吉田 龍彦	日本航空
1999	平成11		吉田 龍彦	日本航空
		48代	石平 厚一郎	博報堂
2000	平成12		石平 厚一郎	博報堂
2001	平成13		石平 厚一郎	博報堂
2002	平成14	49代	小野 雅司	キクヤ
2003	平成15		小野 雅司	キクヤ
2004	平成16		小野 雅司	キクヤ
2005	平成17		小野 雅司	キクヤ
2006	平成18		小野 雅司	キクヤ
2007	平成19		小野 雅司	キクヤ
2008	平成20		小野 雅司	キクヤ
2009	平成21		小野 雅司	キクヤ
2010	平成22	50代	大橋 寅治郎	ティレク&ギピンズ
2011	平成23		大橋 寅治郎	ティレク&ギピンズ
2012	平成24		大橋 寅治郎	ティレク&ギピンズ
2013	平成25		大橋 寅治郎	ティレク&ギピンズ

表-3 タイ国日本人会戦後事務局長一覧

在任期間	事務局長	備考
1954~1979	南 正一	
1979~1981	不在	山際 武子・川満 富子両名が代行
1981~1991	荒井 定修	
1991	不在	川満 富子事務局次長が代行
1992~2001	川満 富子	
2001~2002	田村 優子	
2003~現在	磯田 博之	

歴代会長



初代 三谷 足平(医師)
大正2～3年度

明治27年にシャムに渡り、
陸軍軍医部長も努め、山口
県移民団がケンコイにて
倒れた際に治療に馳せつ
けた等功績大。



2代 小牧 太次郎?
(三井物産)
大正4年度



3代 加藤 尚三
(三井物産)
大正7年度



4代 土井 節
大正8年度



5代 水野 泰四郎
(台湾銀行)
大正9年度



6代 山本 雅一?
(三井物産)
大正10年度



7代 平佐 幹
(台湾銀行支店長)
大正11年度



8代 不明



9代 植木 房太郎
(三井物産)
大正14～昭和3年度
日本人学校が昭和2年、生徒数十名で発足したが、その発足に当たり種々努力される。



10代 河井 為海(医師)
昭和4～6年度
日本医院院長として在留邦人の健康に配慮される。



11代 大谷 清一
(大山商会)
昭和7～8年度



12代 小河 蔵太
(医師)
昭和9～10年度
日本人納骨堂の本尊を名古屋の日蓮寺より迎えた。



13代 鈴木 宇治
(暹羅燐寸)
昭和11年度



14代 三原 新三
(農学博士)
昭和12年度
泰国農務省の役人として勤務、日泰関係の改善に努力。



15代 難波 勝二
(正金銀行)
昭和13年4月



16代 三木 栄
(泰国美術学校長)
昭和13年度
シャム国宮内庁技芸局に勤務、後に芸術学校長。泰国政府に27年間勤務され白象5等勲章、王冠4等勲章を受賞。



17代 高月喜右衛門
(三井物産)
昭和14年4～6月



18代 竹田 真昌
(大阪商船)
昭和14年6～8月



19代 日高 秋雄
(日高洋行)
昭和14～15年度
昭和6年より日本人会の役員をされ、長らく泰国柔道の発展の為活躍される。



20代 谷 清訓
(三菱商事)
昭和15年度



21代 江尻 賢美
(医師)
昭和16～17年度
第二次大戦勃発時に会長として邦人の生命保護に尽力。



22代 森 広三郎
(三井物産)
昭和18～21年度
終戦時の会長として、在留邦人のキャンプ移転及び日本への引揚げに際し、絶大なる努力をされる。



23代 大賀 洋
(三井銀行)
昭和28～29年度
戦後日本人会再発足時の初代会長。



24代 森島 梓
(三井銀行)
昭和30年度
戦争で中断していた日本人学校の再建に尽力される。



25代 斉藤得七
(三菱商事)
昭和31～32年度



26代 近藤 梯三
(三井銀行)
昭和33年度



27代 中出 敬一
(三井物産)
昭和34～35年度



28代 大峽 一男 (丸紅)

昭和36～42年度

会長歴任7年間にアユタヤ日本人町の跡、カンチャナブリ慰霊塔、日本人納骨堂の保全維持に尽くされ、又、日本人第1回シャム移民18名の霊を祭るケンコイ慰霊碑を建立。その間、日タイ親善に尽力された為、タイ国より王冠勲章を授与された。



29代 山本一

(川崎汽船)

昭和43～45年度

特に会員相互の親睦と福祉の増進に力を入れられ、ゴルフ部創立者でもある。



30代 西野 順治郎

(トーマン)

昭和46～54年

歴代会長の中でも最も長く会長を務め、日タイ親善に力を入れられ、その功績によりタイ国政府より勲三等王冠勲章を、日本国政府より勲三等瑞宝章を授与された。長年に亘り当会の会誌「クルンテープ」の発行責任者として、また、タイ日協会学校の理事長としてそれぞれの発展に尽力された。



31代 園山 裕三

(三井物産)

昭和54年度

当会にてインドシナ難民救済募金活動を行う。



32代 三浦 清彦

(トヨタ自動車)

昭和55年度

浩宮殿下、皇太子殿下ご夫妻タイ国ご訪問をお迎えた。



33代 和多田 寛

(三井物産)

昭和56年度

日本人会の体制作りにご尽力された。



34代 山本 庄太郎

(タイ大丸)

昭和57年度

ラタナコーシン200年記念行事開催に参加協力された。



35代 高瀬 長幸 (丸紅)

昭和58年度

日本人会創立70周年の年に当たり、数々の記念行事を開催。クルンテープ誌70周年記念号を発行した。



36代 佐藤 一郎
(トヨタ自動車)
昭和59年度

日本人会に改善合理化を設置し、内規の見直し、新規作成に尽力された。



37代 清峰 太造
(三井物産)
昭和60年度

会館取得を是非との会員の熱望に応え、会館を購入する事を決定し、取り纏めに多大な尽力をされた。



38代 藤永 隆博 (丸紅)
昭和61年度

会館購入の資金集めに賛助会員の会員勧誘、会費調整等資金調達に多大な尽力をされた。第1回盆踊り大会開催。



39代 古山 晃
(三菱商事)
昭和62年度

この年、日本人会は事務所をサートンタニービル1階一念願の自前の会館に移転した。日タイ修好100周年の年。



40代 川本 一 (伊藤忠)
昭和63年度
「魅力ある日本人会」づくりに取り組んだ。



41代 藤永 隆博 (丸紅)
平成1年度

日本人会の改善合理化に努めた。第2回盆踊り大会開催。



42代 笹川 博伸
(東ナイロントイ)
平成2年度

タイ日王室・皇室慶祝祭として九つの行事を日タイ合同で大盛況裡に開催した。ラムウォン・盆踊り大会開催。



43代 三村 洋三
(トーマン)
平成3~4年度

平成2年度には日本国天皇・皇后両陛下を、平成3年度には秋篠宮殿下・妃殿下のタイ国公式訪問をお迎えした。又、タイ国のシリキット王妃の還暦祝賀行事として、東京交響楽団の演奏会、喜多郎のコンサート挙行に尽力された。



44代 丸子博之
(三井物産)
平成5年度

日本人会創立80周年の年に当たり、数々の記念行事を開催、又、青少年センター10周年記念と共に合同行事を開催。第4回ラムウォン・盆踊り大会開催。クルンテープ80周年記念号を発行した。



45代 佐藤琢磨
(トヨタ自動車)
平成6～7年度



46代 豊田資則
(伊藤忠)
平成8～9年度



47代 吉田龍彦
(日本航空)
平成10～11年度



48代 石平厚一郎
(博報堂)
平成11～13年度



49代 小野雅司
(キクヤ)
平成14～21年度



50代 大橋寅治郎
(ティレク&ギビンズ)
平成22～25年度

タイ国日本人会の軌跡 1913 - 2013



年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1913 大2	9	1	「暹羅(シャムロ=タイ国の旧称)日本人会」創立 前身は日本人倶楽部(チャロンクルン通り、会員数約150人)	
1914	3	18	この日に日本人会が創立されたという記述もある。	バンコクに初めて水道使用される
1917 大6	5			皇太子(昭和天皇) 祝賀式典
1919	3	5		タイの国旗赤白藍の三色旗と制定
				台湾銀行がバンコク出張所を開設
			年末の在留日本人 307 名	
1920 大9	12	9		政尾藤吉がタイ駐在公使に任命され条約改正を手がける。翌年着任。
1921	8	3	日本人会員数 128 名 三木栄著「盤谷一巡」発行	
1924	3	10		「日タイ修好通商条約」改正
1925	9			台湾銀行金融難で閉鎖
1926 大15	2	25		ラーマ7世即位(プラチャーティポック)
	5	28	盤谷日本尋常小学校開校 文部省在外指定校となる	
	6	1	小林清平氏が初代校長(場所はシーパヤー通り)	
	9			大阪商船、バンコク～サイゴン間の定期航路開設
	12	25		日本の元号が昭和に
1927 昭2	12	5		ラーマ9世(現プーミポンアドゥンラヤデート国王)誕生
1928 昭3	1			三井船船、日本～バンコク間の定期航路開設
	5			タイ華僑が済南事件に抗議して日貨排斥運動を起こす
1929				世界恐慌始まる
1932 昭7	6	24		立憲革命(タイ)人民党クーデター
	7		日本人学校はソーイサブ通り	
	12		「暹羅協会」東京に設立	12/10 第1次マノー内閣(タイ初の内閣)
1933 昭8			バンコクに「暹羅実業協和会」設立	
	3	31		第1次マノー内閣総辞職
	4	1		第2次マノー内閣成立
	6	24		第2次パホム内閣成立
1934				第3次パホム内閣成立
1935 昭10	3	2		ラーマ7世退位
	3	3		ラーマ8世即位(マナング・マヒドン)
	8	10		第4次パホム内閣成立
	12		「日暹貿易協会」大阪に設立	横浜正金銀行(現東京銀行)、三菱商事
			日本人納骨堂建立	バンコクに進出(三井物産は1906年)
				九州帝国大学助教授・伊藤兆治がタンマサート大学で農業経済学を講義
1936 昭11	3	27	「神戸日暹協会」が設立	
	9	11		タイ初の国会解散
	12	21		第5次パホム内閣成立
1937 昭12	7			日中戦争始まる
	10			「暹友好通商航海条約」調印
1938 昭13	2			タイ華僑が日中戦争に抗議して日貨排斥運動を起こす
	7		在留日本人約 500 人	星田晋五、外務省文化事業部からタイに派遣
	12	26		第1次ピブン内閣成立

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事	
1939	6	24	泰国日本人会と改称	国名を「シャム」から「タイ」に変更	
1939 昭 14	9		船着場「Tha Chang」の四つ角ある2階建に、タイ日本文化研究所及びバンコク日本語学校を開設、日本タイ協会の事務所を置く	欧州で第2次世界大戦勃発	
	10			「日タイ航空協定」調印	
	12			日本留学タイ学生会	
1940 昭 15	6			「日タイ和親条約」を東京で調印	
	9	2	盤谷幼稚園の開所式		
	12			太平洋戦争開戦「日タイ攻守同盟」調印	
1941 昭 16	4	1	盤谷日本尋常小学校から盤谷日本国民学校に改名		
	5			東京条約締結	
	11	23	盤谷日本国民学校の木造新校舎の落成式		
	12	8		日本軍タイに進駐	
1942 昭 17	1	25		タイは英・米に宣戦布告	
	3	7		第2次ビブン内閣成立	
	5			タイ日本と特別円決済に関する協定終結	
	11			「泰緬鉄道」建設工事着工	
1943 昭 18	7			東条英機首相訪タイしビブーン首相と会見	
				タイ大洪水	
	11	5		「大東亜会議」東京で開催	
			日本軍によりカンチャナブリ慰霊塔建設	タイ代表ワンワイタヤコーン殿下	
1944 昭 19	8	1		第1次アパイウォン内閣成立	
	10			自由タイ地下活動者のタイ潜入始まる	
1945 昭 20	8	15		太平洋戦争終結。	
			日本人会解散	タイ政府対英米宣戦布告の無効を宣言	
		31			タウィーブンヤケート内閣成立
	9	14	在留日本人はノンタブリー県バーンブアトーン郡に収容		
		17			セーニー・プラモート内閣成立
					国名を再び「シャム」に改称
1946 昭 21				タイ政府、日タイ攻守同盟など一切の対日関係条約協定の破棄を宣告	
	1	31		第2次アパイウォン内閣成立	
	3	24		第1次ブリーディ内閣成立	
	5			憲法改正。国名再び「タイ」となる	
	6	9		ラーマ8世逝去	
		10		ラーマ9世即位	
	8	26		第1次ダムロン内閣成立	
	9	30	盤谷日本国民学校廃校		
1947 昭 22				日タイ貿易再開	
			雲野牛三氏引率のもと第1時引き上げ3,000人 百数十名残留		
	5	8		第2次ダムロン内閣成立	
	11			軍事クーデター	
		12		第3次アパイウォン内閣成立	
1948 昭 23	2	21		第4次アパイウォン内閣成立	
	4	15		第3次ビブン内閣成立	
1949				第4次ビブン内閣成立	
1951 昭 26	3			日本政府在外事務所バンコクに開設	
	9			サンフランシスコ平和条約調印	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事	
1951	11	29		クーデターで第5次臨時ピブン内閣成立	
1952 昭27	4			日タイ両国の国交回復(96世帯200人の在留邦人の滞在が許可された)	
		28		サンフランシスコ講和条約発行	
	11	15		日本政府在外事務所大使館に昇格 太田一郎大使赴任	
1953 昭28	4	10	日本人倶楽部(日本人会)を立ち上げ 委員長 大賀洋 会員数130名、在留日本人550名		
	5			日タイ新航空協定調印	
1954	4		日本人会仮事務所を三井銀行内に設置 事務局長 南正一	9/27 盤谷日本人商工会議所設立総会 開催(加盟30社)	
			日本人会会員数191名		
1955 昭30	4			日タイ文化協定調印	
	8	30		盤谷日本人商工会議所設立 会員数249名	
1956 昭31	1		在タイ日本国大使館付属日本語講習会 開設 児童28人 教職員4名	8月 三笠宮殿下来タイ	
	10	22		国王の得度式挙行される	
	11	5		国王還俗式 会員数315名	
1957 昭32	6			岸首相来タイ	
	9	17		サリット・タナラット軍事クーデター 会員数384名 ピブン・ソククラム首相、日本に亡命	
1958			会員数375名		
1959 昭34	2	10		サリット内閣成立	
	5		納骨堂奉賛会設立(代表世話人 小谷亀太郎氏)	特別円問題解決に関する54億円の 支払い完了 会員数332名	
1960 昭35	5		アユタヤ日本人町跡修復工事 記念碑建立事業開始		
			日本企業の進出急増、会員数357名	「第1次国家開発5カ年計画」 タイの開発時代の始まり	
1961 昭36	3		戦後最初の開校留学僧 長原敬峰氏招く	11月 池田首相来タイ、戦時中の特別円 問題解決	
			カンチャナブリー慰霊塔買取り、会員数407名		
1962 昭37			大使館付属小学校となる(児童27名)		
	4	1	日本人会倶楽部開所式		
		3	委員会		
		26	定期総会挙行 理事15名を選出		
		5	8 理事会		
		7		学校会計を日本人会から大使館へ移管	新特別円協定締結。日本はタイに 96億円を8年間に支払うことに。
		9	24 日本人納骨堂慰霊祭 会員数488名		
1963 昭38	1	1	大使館主宰新年祝賀会に会員各位参列		
	3	10	アユタヤ旧日本人町記念碑除幕式		
		21	日本人納骨堂春季慰霊祭		
		24	カンチャナブリー慰霊祭(第一回) 初の公式法要		
		30	会主催空軍とゴルフ懇親会		
		30	国際ソフトボール大会		
	4		日本人会総会		
5	1	在タイ日本国大使館付属日本人学校と改称			
		日本人会創立50周年(記念特集号を発行)、会員数634名	サリット首相病死に伴い、タノム首相誕生		

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1963 昭38	6	19	大使館新築祝い(日本人会とJCCで金屏風贈呈)	6月 タイ国王陛下・王妃陛下訪日
			海外移住百年記念叙勲で横田仁郎画伯に勲五等瑞宝章が授与された	
1964 昭39	12			大丸百貨店ラパソンに開店
				皇太子殿下、美智子妃殿下タイ国訪問
1965			日本人会南サトーン通りに移転	
1966	3		日高秋雄氏他日本人会有志がケンコイ移民碑建立	
1967 昭42	8	8		アセアン発足(5カ国)
	12	23	日本人会ボーリング大会	9月 佐藤首相来タイ
1968 昭43	1	19	日タイ協会創立総会	
		28	運動会(学校と合同、ウテンタワイ工業学校)	
	2		会報誌「クレンテープ」創刊	泰日協会(TJA)再建
		23	日本留学生協会主催「日タイ親善の夕」の催(アンボン・ガーデン)	
3			日本人学校・幼稚園舎完成(日本人クラブ構内)	アユタヤ日本人町遺跡の参道補修
		15日 幼稚園卒業式、17日 小・中学部卒業式		
	20		日本人納骨堂慰霊祭 納骨堂奉賛会は仏教奉賛会へ	
		24	カンチャナブリ慰霊祭	
4	2		日本人学校・幼稚園竣工式・入園式	
		8	定期総会(タイ大丸ニュージャパン)	
5			日本国大使館新庁舎落成(ペップリー)	5月 タノム首相訪日
6	19		日本人学校建設基金チャリティーショー	6月 新憲法公布
7			大使館新築祝い贈呈(ペップリー路)	
			横田仁朗画伯・勲五等瑞宝章授与	
8	11		韓国チームとの親善囲碁会	対日貿易不均衡に対する官僚発言目立つ
		24	日本人会・ボーリング大会(運動第2部)	
			大岐一男前会長、名誉会員に	
			日本人学校プール完成	9月 青年の船来タイ
11	3		野球大会開幕(ウテタワイ工業高校、～12/10)	11/17 ユニセフ・チャリティーゴルフ (ドムアンコース、タナット・コマン外総主催)
		24	魚釣り大会(バンセン)(運動第2部)	11/23 明治百年記念式典(武道館、総理府主催)
1969 昭44	1		アユタヤ日本人町遺跡の整備(泰日協会に主導権を渡す)	タイ国会総選挙
		26	学校と合同運動会	
2	9		日本人会創立55年、戦後再建15周年演芸会(レンピニホール)	2/22 アユタヤ日本人町遺跡改修募金 チャリティーボール (ナライホテル、泰日協会主催)
		3	日本人学校卒業式	
	10		ブリッジ同好会発足	
		18	日本人会創立55周年創立記念日 映画会	
	21		日本人納骨堂慰霊祭	
		23	カンチャナブリ慰霊祭	対日貿易不均衡に対するタイ政府警告
	28		日本人学校落成式(ワイヤレス路) 小学部266名 中学部110名	日本人学校建設への多大な支援により
		4	10	定期総会(アマリンホテル、会員1675名)
			日タイ協会佐藤喜一郎会長に横田画伯の絵画を寄贈	
		5	24	日本人会・ボーリング大会(運動第2部)
7	21		会報誌「クレンテープ」正式発行	7/16 アポロ11号月面着陸(アームストロング船長)
8	31		シエルとの親善ゴルフ大会(陸軍コース)	
9	13		陸海軍ゴルフコミッティーとの親善ゴルフ大会(ドムアンコース)	9/2 佐藤喜一郎氏経済使節団団長として来タイ
10				10/5～9 青年の船「さくら丸」訪タイ
11			野球大会(ウテタワイ工業高校) 11月2日より12月10日 11月18日よりアジア・サッカー大会開催	10/13～16 自衛隊練習艦隊泰公式訪問
	12	8	クラブ裏庭に会議室(JCC・JA)兼幼稚園遊戯室、竣工式	12/15 日本留学生協会 創立記念パーティー「日泰親善の夜」

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1970 昭45	1	10~18		第2回アジアラグビー大会(国立競技場)
	2	8	日本人会運動会、単独開催(ウテン・タワイ校庭)	1/25 学校単独運動会(生徒数430名に増加の為)
	3	6	幼稚園卒業式(55名)	2/24 常陸宮様ご夫妻(ネパール皇太子成婚式に参列) 歓送迎会
		8	小・中学校卒業式(中学部8名、小学部25名)	
		15	磯釣り大会(バンセン、運動第2部)	3/15 大阪万博開催(同年9月まで)
		18	日本人会創立56周年(戦後再開16周年)記念 映画会(クラブ庭)	
		21	日本人納骨堂慰霊祭	
		22	カンチャナプリ慰霊祭(バス3台)	
	4	9	定期総会(アマリン・ホテル)	
		29	新野芳四郎氏勲五等瑞宝章叙勲(春の叙勲)	6/21・22 日本民族舞踊公演(国立劇場)
	6	27・28	アユチャ日本人町遺跡保存基金チャリティーゴルフ(運動第1部)	8/27 アポロ11号映画会(大使館、約150名)
7	23	日本人会理事選挙規定の改正(不在投票が認められる)	8月 ニクソン声明	
9	27	文化部映画会(試験的にドゥシッタニー)	11月 JCCへ対日貿易赤字縮小への8項目提案	
10	24	ボウリング大会(運動第2部)(スクムピットボール)	12月19日 国際通貨調整	
11	3	敬老の日祝賀会(9月理事会で75歳以上の人に記念品贈呈決定)(11名)	12/9~20 バンコクで第6回アジア大会	
1971 昭46	1	15	第1回 成人の日祝賀会(満20歳になった若い会員)	1/10 日本人学校運動会(ティアム・ウドム)
		17	文化部映画会(大使館提供「黒部の太陽」寄付金6,230B)	1/11 カセサート大学生 反日クラブ結成呼びかけ
		22	日本人学校創立15周年記念式(教育部)	
		31	第1回プリテッシュクラブとの親善ゴルフ大会	
	2	7	運動会(運動第1部)参加者1,000余名	
	3	18	日本人会創立57周年記念 映画会	
		21	カンチャナプリ慰霊祭(由来書除幕式を行う)	
	4	8	定期総会(アマリン・ホテル)不在投票制の初の試み	
	5	6	定例理事会を原則として毎月第2火曜日に開催する事を決定	5/14~19 海外日系人大会に6名参加
	6			6/9 タイ国王即位25周年式典
		29	渡辺はま子独唱会・会員272名、5440Bアユチャ日本人町に寄付	6/11~12 皇太子殿下、美智子妃殿下訪タイ
	8	4	文化・婦人部共催 アジア親善 邦楽演奏会(ドゥシッタニー)	8/15 ニクソン声明(ドル・ショック)
9	14	仏教奉賛会→懇和会誕生(於アマリンホテル)		
	30	「青年の船」歓迎夕食会(日本人会・大使館共催)	9/28~10/2 総理府「青年の船」バンコク派遣	
10	23	ボーリング大会		
	27	小川蔵太氏(医博)元当会会長を名誉会員に推挙	10月中旬 三笠宮殿下、妃殿下空港での 歓送迎(イラン建国2500年祭)	
	30	演芸会(ナライホテル)		
11		野球大会(11月7日から12月12日)	11/17 クーデター タノム首相全権掌握	
12	28~30	バンコク選抜チーム、三菱選抜、カセサート大学 対抗ラグビー戦	12/13 後宮大使の韓国栄転で送別会	
1972 昭47	1	11	日本人会が日本人学校の所有者となる事を理事会で承認(タイの法令で)	
		15	第2回成人の日祝賀会	タイ学生の日本商品不買活動活発化
		20	婦人部新年会	11/25 外国企業活動規正法が布告
	2	6	運動会(ウテンタワイ工業高校)	貿易不均衡による反日感情高まる
	4	11	定期総会(アマリンホテル)	
	5	13	チャリティーバザー	5月5日沖縄日本に返還
	7	27	泰日協会が日本人学校の所有者となる	
	9	15	敬老の日祝賀会	10/2 国際交流基金発足
	10	7	ボーリング大会	11月 日本品不買週間
	11	26	野球大会開幕(~1/28)	12月 ワチラロンコン親王立太子の儀式
	1973 昭48	1		
2		4	運動会延期→後に中止	
3			山本一氏を名誉会員に推薦。すでに名誉会員となっている大峽一男氏、小川蔵太氏とともに名誉会員証、メダル贈呈決定	
4		20	定期総会(アマリンホテル、305名)	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
	4	20	定期総会(アマリンホテル、305名)	6月 学生の反政府デモ
	9		教育部下部組織として青少年サークル設立	
	10	27	青少年サークル第1回総会(大使館講堂)	10/14 学生決起'血の日曜日'武装警察隊、
			チェンマイ堂本基金設立(3万B)金利を慈善施設へ5年間寄付	軍隊出動。学生死者66名。
	11		60周年チャリティー事業の寄付を基にチャリティー基金設立決定	国王の仲裁
		16	第1回チャリティーゴルフ(バンブラ)	10/16 サンヤ内閣誕生
	12		アサヒ芸能のでっち上げ記事で、一部男性会員の名誉が毀損され抗議。記者より謝罪文を得る。	日本商品に対する学生抗議行動
			日本人会創立60周年(当時は1914年創立とされていた)	
1974 昭49	1	9~11	来タイの田中首相への要望アンケート	田中首相来タイ 抗議デモ
			カンチャナブリ慰霊塔周辺改修・ケンコイ第1回移民慰霊碑お堂新築	JETRO 前で爆弾爆発
		26	演芸会延期→中止	
	3		運動会、日本人会創立記念式典中止	
	4	16	定期総会(アマリンホテル) 青少年部新設。会員・準会員規定の改定。外国籍でも理事会承認の下、準会員になれることに。会費改定:B20→B30	
		27	田中総理杯争奪チャリティーゴルフ(サイアムカントリー)	6月 各地で農民運動起こる
	7	24	私立学校法令に基づく泰日協会学校として、日本人学校認可	7/5~8 緊急事態宣言(中国人街で暴動)
	11	2	チャリティーバザー	
	17	チャリティーゴルフ		
		同居していた商工会議所、アマリンホテル裏に移転		
		野球大会は適当な場所がなく中止		
1975 昭50	1			国会解散
	2		緊急連絡網完成、運動会中止	2/26 セーニー・プラモート内閣発足
	3	14		内閣総辞職、ククリット・プラモート内閣発足
				旧第5鉄道連隊(泰緬鉄道建設部隊) 37名、遺骨収集のため来タイ
	4	10	定時総会(アマリンホテル、344名)	4/30 サイゴン陥落 ベトナム戦争終結
	6		日本人会館改修、クラブ食堂、調理室改装新築	総選挙でセーニー内閣首班に
	11	1	チャリティーバザー	バンコク洪水
	3	瀧川理事、日高(秋)理事叙勲		
	16	チャリティーゴルフ		
1976 昭51	2	11	高野山近藤総長(大僧正)以下43名来タイ、納骨堂僧房落成式・慰霊法要	
			運動会は場所その他の理由で中止	
	4	8	定時総会(アマリンホテル) 理事欠員時の補充規定につき改定	南ベトナム消滅 南北統一
	6	3	日本人学校新グラウンド(200M x 85M)完成式	米軍、タイ基地より全面撤退
	8		広報部設立	
		4	失業中のタイ人青年による日本人会会長脅迫事件、犯人逮捕	
	9		第1回ソフトボール大会開催 5チーム(学校グラウンドが従来の野球大会には狭いためソフトボール大会に変更)	戒厳令
	10			クーデター、サガット氏全権掌握 タニン内閣発足、反共政策を強化
	11	6	チャリティーバザー(アマリンホテル)	
		27	チャリティーゴルフ	
	12	3	演芸会(ナライホテル)	
	5	青木副会長 タイ国王より叙勲		
1977 昭52	2	6	カンチャナブリ合同慰霊祭、C56型機関車保存除幕式	
			5年ぶりに運動会復活(学校グラウンド)	
	3		西野会長田中通産大臣より表彰。日高(秋)理事退任、名誉会員に	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1977 昭52	4	8	定時総会(アマリンホテル)	
	8	16	来タイした福田首相に要望書提出	福田首相訪タイ
		9		タニン首相訪日
	10	11	ソフトボール大会(11チーム)	
		15	チャリティー・バザー	
		20	高野山真言宗タイ国開教留学層の会設立(於:日本)	10/20 無血クーデター、クリアンサク内閣発足
	11	20	チャリティーゴルフ	
26・27		(福田首相)タイ首相杯争奪チャリティーゴルフ(泰日協会共催、サイアムC.C.)		
1978 昭53	1	4	新年祝賀会(大使館、商工会議所3者共催 オリエンタルホテル)	この年治安悪化し、盗難・強盗事件及び
		29	運動会	対応策に関する記録あり
	2	14	事務局運営ルールは商工会規定準用。但し、就業規則と退職金規定は独自改定	1/27～2/7 遺骨収集団来タイ
	3	4	演芸大会(シリー劇場)昼夜2回公演、入場者846名	3月 第2次遺骨収集団
		31	南事務局長定年退職	3月 パーツとドルのリンクを外す
	4	11	定時総会(アマリンホテル) 使用人幹旋部発足	
	6	28	園田外相歓迎パーティー(商工会共催)	
	7	22	懇和会の中に「福祉会(後の瀧川福祉基金)」が誕生	外国人企業規制法改正
		30	ソフトボール大会開幕	
	8	7	幼稚園移転	
	9			インドシナ難民の流入増加
	10	14	チャリティー・バザー	タイ27県下で大洪水
	11	19	秋季チャリティーゴルフ	
			洪水により3日間学校休校	
	1979 昭54	1	4	新年祝賀会(大使館、商工会議所3者共催 オリエンタルホテル)
2		4	運動会	1/16 クリアンサク首相訪日
		24	演芸大会(シリー劇場)	
3		1	新事務局長荒井氏就任	
4		27	定時総会(アマリンホテル) 個人会費値上げ 30->50	
9		2	日本人会と小谷理事、外務大臣より表彰 墓地保存への貢献	
10		13・20	チャリティー・バザー	
11		18	秋季チャリティーゴルフ	
12				日本政府難民調査団、難民キャンプを視察
1980 昭55	1	7	新年互礼会(大使館、商工会議所3者共催)オリエンタルホテル	
	2	3	運動会	
	2	12	日本人納骨堂にて大師像入仏式、高野山より僧20名	
	3			プレム内閣発足
	4	24	定時総会 クラブ用土地購入の決議	
	9	21	ソフトボール大会閉幕	
	11	16	年次チャリティーゴルフ	
1981 昭56	1	5	新年祝賀会(オリエンタルホテル)	鈴木首相来タイ
	2	1	運動会	皇太子御夫妻来タイ
				シリキット王妃訪日
	4	28	定時総会(アマリンホテル、出席308名)クラブ土地購入白紙還元	4月 ヤング・タークによるクーデター発生(3日間都内占拠)
	8	2	ソフトボール大会閉幕	
	9	5	鈴木総理杯ゴルフ(ナワタニGC、商工会共催)	
		19	チャリティー・バザー	
	11	15	秋季チャリティーゴルフ	プレム首相訪日
1982 昭57	1	31	運動会	
	4	28	定時総会(アマリンホテル)	ラタナコーシン200年祭

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1982 昭57	4			日本政府、タイに青少年センターを寄贈
	6		泰日協会学校、現在の地に移転。落成式	
	8	1	ソフトボール大会開幕	
	9	25	チャリティー・バザー	
	11	21	秋季チャリティーゴルフ	
1983 昭58	12		カンチャナブリ慰霊塔の土地問題発生 (日本人会保有地内に無断で小屋が建てられる)	
	2	6	泰日協会学校にて日本人会運動会開催	
	3	8	クラブ設営基金と墓地遺跡保存基金を統合しクラブ建設基金を設置	
		9	増水により道路が水没、泰日協会学校が臨時休校	
	4	27	総会開催(ニューインペリアルホテル) 個人会費改定 普通会员男子100バーツ/月 女子50バーツ/月 入会金 男子300バーツ 女子100バーツ	4月 第4次プレム内閣成立
	5		中曽根首相、日本人会にゴルフカップ寄贈	中曽根首相来タイ
	8	8	カンチャナブリ慰霊塔の土地問題で、再測量を実施	
			泰日協会学校に日本人会会議室を貸与	
	10	29	70周年記念バザー	10月 シリントーン王女訪日
	11	5	タイ国日本人会創立70周年記念式典・チャリティー文化祭(AUA)	11月 バンコク大洪水(40年振り)
	11	12~13	70周年記念ゴルフ大会 橋大使はじめ285名参加	
	12	7	泰日協会学校授業再開	
1984 昭59	1	29	70周年記念運動会	
	4		70周年記念誌発行	
		25	定期総会(インペリアルホテル) 国際結婚友の会結成	
	5	17	三木元首相ご一行来タイ、商工会議所と合同で夕食会を開催	
	7	12~	ソフトボール大会	
	9	29	チャリティーバザー	10月 学生、日本商品不買運動呼びかけ
1985 昭60	1	6	演芸会	
		14	運動第2部に女子バレーサークル発足	
			青少年部に演劇部発足	
		27	大運動会	
	3	9	青少年サークル10周年記念祭(ドウシットタニホテル)	3月 秋篠宮妃殿下来タイ
		12	日本人会会章を制定	
	4	18	総会	ピチャイ副首相日本市場開放を求める
	5	26	プリティッシュ・クラブとの第1回交流親善ゴルフ	8月 タイ産メイズ(とうもろこし)輸入合意
	7	28	ソフトボール大会開幕(~9/28)	8月 礼宮殿下来タイ
	9	22	ゲンコイ釈迦堂慰霊祭開催(5年ぶり)	9/9 クーデター(失敗) マヌーン大佐
		28	チャリティバザー	
11	3	文化祭開催(演芸大会改め)		
	17	日本人納骨堂建立50周年記念法要 藤井真水大僧正以下39名の僧籍来タイ		
	17	竹下蔵相杯争奪チャリティゴルフ大会		
1986 昭61	1	26	運動会開催	1/22 泰日協会学校創立30周年記念式典
	2		緊急連絡網の整備完了	
	4	28	総会開催(インペリアルホテル)	
			文化部に絵画同好会発足、青少年部に空手道サークル発足	5月 バンコク洪水
	7	27	ソフトボール大会開催(~9.28)	
	8	13	サートンタニビル 1階を日本人会新本館として買い取ることを決定	8月 礼宮殿下ご来タイ
	9	27	チャリティバザー開催	
	11	2	文化祭	レムチャバン深水港建設に円借款123億円
			納骨堂の改修工事完了	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1987 昭62	1	13	日本人会の規約改定(事務局の運営等)	
		25	大運動会	
	2	14	第1回日タイ親善盆踊り大会開催(チュラロンコーン大学グラウンド)	
		15	倉成外相杯争奪チャリティゴルフ大会	
		22	青少年部祭開催(ドゥシットタニホテル)	
		28	タイ日ユースキャンプ(～3/1、日タイ修好100周年記念事業)	3月 浩宮殿下来タイ
	4	28	定時総会(インペリアルホテル) 準会員の資格改定	
	6	15	サートンの新会館(723㎡)へ移転完了	
			第1回インタークラブ女子テニス・トーナメント(RBSC)日本人会3位入賞	
	7	26	ソフトボール大会開幕(～10.11)	
	8		連絡網完成、各地区委員に配布	8/13 チュラポン王女殿下訪日
		20	日本人会新会館(現在の本館)落成式	
	9			ワチラロンコン皇太子殿下訪日 (日タイ修好100周年)
				中曽根首相来タイ、チュラ大で講演
		26	チャリティバザー	日タイ修好100周年記念式典
	10	9		タイ文化センター開所
			21	高齢者支援財団「瀧川福祉財団」設立
	11	3	西野順治郎理事「勲3等瑞宝章」、小谷亀太郎理事「勲6等単光旭日章」叙勲	礼宮殿下来タイ
			「瀧川福祉基金」国の正式認可が下りる	タイ文化センター完成
		22	第31回 日本人学校運動会開催(会田校長)	
12	1	青少年「コーラス・器楽のコンサート」がチャンネル3で放映された	12/5 国王陛下還暦祝賀行事	
	10・11	青少年「サッカーサークル」13歳以下のリーグ戦でベスト6		
	20	中曽根総理杯争奪チャリティーゴルフ大会		
1988 昭63	1	2		チュラポーン王女殿下訪日
		7		常陸宮殿下夫妻来タイ、チェンマイ 大学名誉博士号の贈呈をお受けになる
		8		第1次チャチャイ政権成立
		12	「納骨堂基金」に修繕費用、年額3万パーツ積立てへ	
		17	青少年サッカーサークルはブラジルカップ・トーナメントに参加	
		24	日本人会運動会を開催(運動第一部)	
	2	21	青少年コーラス・演劇サークル、ラージャヴィティ・ホームの コーラス部を招き公演(タイ文化センター)	
	3	8	西野理事、20年間務めた理事を退任、名誉会員に	
	4	26	定時総会(インペリアル・ホテル) 古山会長 (会員数3,415人)	
	6	14	クルンテープ20周年号発行	
	7	24	ソフトボール大会開幕(参加18チーム、～10/2)	7/13～16 自衛隊の練習艦隊来タイ
	8	6	順天堂大学医学部による医療相談実子	
	9	24	チャリティーバザー(インペリアル・ホテル、収益41万パーツ)	
		25	ケンコイ寺釈迦堂慰霊祭(地元の要望で5年に1度から3年に1度開催へ)	
	10	4	社会・文化摩擦を回避するため「広報文化官民会議」開催 (外務省海外広報部、大使館、JCC,日本人会共催)	
			11	名誉会員 瀧川虎若氏と西野順治郎氏に感謝状贈呈
		25	藤井真水大僧正を団長とする高野山真言宗開教留学僧の会一行39名 来タイ、納骨堂及びカンチャナプリ慰霊塔で法要	11/21 大洪水(南タイ) (死者439人、行方不明者316人) 11/30 日本政府緊急援助(物資20万ドル相当)
			南タイの水害 チャリティー基金より10万パーツ寄付	
	11	6	文化祭、洪水で中止	
			ユースサッカー世界大会(16歳未満)出場の全日本チームの壮行パーティー	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1988 昭63	11	26	バンコク市と共催の日泰盆踊り大会、洪水で中止	
	12	15・16	日タイ合同第九公演(タイ文化センター)	
	12	18	竹下総理大臣杯チャリティーゴルフ(サイアム・カントリー)参加者152名	
	12	18	児童、社会見学(第1回)スパンブリー県訪問 参加児童・父兄50名	
1989 平1	1	5		新年名刺交換会(大使公邸)
		7		昭和天皇崩御、天皇陛下ご即位
	10	10	タイ日協会学校生徒増(1月時点1,215名)で、平成元年4月で幼稚部閉鎖へ	
		17	社会・文化摩擦回避のため第1回広報文化協議会(大使館、JCC,日本人会)開催	
	21	21	大峡一男名誉会員の叙勲祝賀会	
			日本留学生協会、日本庭園資金募金のためのボウリング大会開催	
	29	29	日本人会運動会 東西対抗戦方式で開催(参加者1,200名)	
		31	日本人会新会館の移転証明を取得	
	2	24		大喪の礼、ワチラロンコン皇太子殿下 チャチャイ首相、参列
		3	5	チャリティー文化祭開催(AUA) ラージャウィティ・ホームの子供を招待
	11		チャリティー公演で来タイの杉良太郎氏、納骨堂参拝。基金に10万円寄付	
	4	25	定時総会(インペリアル・ホテル、会員数4,069名)	4月 チュラポーン王女殿下訪日
		29	アセアン歴訪中の竹下首相、来タイ。歓迎会(オリエンタルホテル)で日本人会に世界大百科事典(35巻)とゴルフカップ寄贈	
	5	6	荒井定修事務局長 定年退職	5/20 ビルマ軍タイ領侵犯、タイ軍と衝突
		26	納骨堂新堂守、疋田千秀師の得度式	
		30	納骨堂堂守 渡辺師の還俗式	
			木内大使の送別会	
	6	4	ブリティッシュ・クラブとの親善大会	6/4 中国の天安門事件
		10	荒井定修前事務局長、囑託として勤務。川満、山際両職員を事務局長代理に	
	7	5	アユタヤ記念館起工式・プラマーン内務大臣、岡崎大使、古山会長等出席	
		23	ソフトボール大会開幕(参加16チーム、～9/10)	
	8	4	大峡、西野、瀧川の名誉会員3名と三役との懇談会	7～8月 礼宮殿下来タイ
		6	日本政府の墓地国庫補助金4カ月分509米ドルが日本人会に	
		8	順天堂大学の東南アジア巡回医師団による会員健康相談(第3会議室)	
		10	広報部、婦人部共催「曾野綾子氏に特別チャリティー講演会」開催(インペリアルホテル、参加483名、基金へ12,450パーツ)	
	9	25-27	日タイ合同のタイ舞踏公演(タイ文化センター)	
		12	学校増築募金委員会、児童増加に伴う泰日協会学校校舎増築費用8億円の内、5億円を民間から調達へ	
23		チャリティーバザーを開催(インペリアル・ホテル、収益金53万パーツ)	10/6 タイ・ラオス二国間協定	
11	30	囑託勤務の荒井元事務局長、退職	10月 ガラヤニ王女殿下訪日	
	11	南タイ台風禍見舞い、総理府の災害対策本部へ10万パーツ寄付		
12	25	第2回日タイ合同盆踊り大会(青少年センター、約6,000名)		
	6	歌手小野田実氏率いる小野田社中22名と全日本民謡指導者連盟の方々が出演、タイ鴻池がやぐら建設寄贈 参加約6,000名		
	17	竹下総理大臣杯争奪チャリティーゴルフ大会(サイアムカントリークラブ、参加162名、寄付3万パーツ)		
1990 平2	1	16	帰国する会員からの寄付金の受け皿として「会館・クラブ基金」設置	1/6 学校始業式生徒数1,371名
		28	日本人会運動会 参加者1,350名	1/7 チャムロン氏バンコク都知事再選
	2		ラグビー同好会発足(メンバー24名)	
		10	タイ日協会学校の増設工事に着工(建設費1億5千万パーツ)	
		17	日本人会議室で初のガレージセール(収益3,070パーツ)	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事 ¹⁾
1990 平2	3	4	チャリティー文化祭(AUA) ラージャウィティ・ホームの子供たち120名を招待しジョイント・コースを行う。ティエンチャイ副首相も出席	
		4	25	定時総会(インペリアル・ホテル、会員数4,708名)
	5	30	小谷理事辞任(昭和28年戦後日本人会再発足より30数年理事を務める)	
		9	小谷亀太郎元事業部長 名誉会員に	
	6	9	'89年度のタイ日王室・皇室慶祝行事の実行委員に広報文化協議会	
			日本人会代表の石平文化部長、三村会報部長に兼任願う	
	6	3	プリティッシュ・クラブとの親善ゴルフ大会(レールウェイ)	6/1 チャワリット副首相訪日
		12	日本航空から名画のビデオ(全50巻)の寄贈を受ける 川満事務局長代行、事務局代表就任	6/19~30 シリントーン王女殿下訪日 (花博及び礼宮殿下御成婚)
	7	29	ソフトボール大会開幕(参加21チーム、~10/14)	
	8	5	日本人会と青少年部演劇部が合同公演(アリアンス・フランス)	8/2 イラク、クウェート侵攻(湾岸戦争の発端)
		15	順天堂大学の東南アジア巡回医師団による会員健康相談(第3会議室)	
		20	アユタヤ合同委員会を残務整理の上解散	
		22	アユタヤ歴史資料館と日本人町のアネックス引渡式	
	9	24	日本人会の名誉会員3名との懇談会を開催	
		10	カンチャナブリー慰霊塔の周囲の塀、門、あづまの屋根等の修理完了	
		11	会館クラブ、厚生、納骨堂、チャリティーの各基金、運営委員会の規約見直し	
			タイ日王室・皇室慶祝行事への寄付金、目標突破151万バーツ	
			ビデオ鑑賞会、テレビ画面が小さく参加者が減少、10月、11月は休む	
		20	笹川会長、本多副会長、小野事業部長カンチャナブリーに出向き 慰霊塔裏地を不法占拠している宝石商と話し、今後は双方了解の下進める事を確認	
		22	チャリティーバザー(インペリアル・ホテル、収益金585,320B)	
	10	23	ケンコイ釈迦堂慰霊祭に大日方領事、サラブリー県会議員参列 ケンコイ寺のバリ語教室増築工事お所にチャリティー基金より2万バーツ寄付	
		16	タイ日王室・皇室慶祝祭グランド・オープニング(シリントーン王女殿下)	10/14 反政府デモで逮捕者
		16	タイ日王室・皇室写真展(カルチャーセンター、参加は6,162名、~12/5)	10/21 王母陛下の90歳の誕生日
		16	幻のタイ人形劇を開催(A.U.A.、参加380名)	
		26・27	邦楽コンサートを開催(カルチャーセンター、参加者3,100名)	
		31	ニューヨーク・シンフォニック・アンサンブル 日本楽器展(慶祝行事、参加者2,000名) タイ日映画祭(慶祝行事、参加者3,100名)	
11	4	第14回チャリティー文化祭(A.U.A.) 参加約1000名、ラージャウィティ・ホームに1万バーツ寄付		
	12	今上天皇即位に際し日本人会より記念品としてロイヤル・バージュを奉呈	11/12 日本国今上天皇 即位の礼 ワチラロンコン皇太子殿下、チャチャイ首相列席	
	13	タイの法律改正に基づいた新しい職員退職金規定を承認	スチンダー陸軍司令官	
	24	第3回ラムウォン盆踊り・花火大会(タイ日青少年センター、約15,000人参加) パヌバンユコン殿下、チャムロン知事、岡崎大使参列	政府庁舎周辺での集会禁止、4日後に解除 タイ宮廷舞楽、開催(カルチャーセンター)	
	30	会計担当の山際武子氏(28年勤務)退職		
12	11	学校の運動場が校舎の拡張工事で使えないため今年度の運動会中止		
	16	海部総理大臣杯争奪チャリティーゴルフ (サイアムカントリー、参加者164名、基金に3万バーツ)	12/14 第2次チャチャイ政権成立	
1991 平3	1	第1回日本留学生協会との親善ゴルフ		
		7	学校始業式生徒数1,490名	1/10 大使公邸新年祝賀会
	15	成人の日(該当者1名)	1/17 湾岸戦争始まる	
	2	4	湾岸戦争の影響で 文部省奨励により1週間の休校処置	2/3 クーデター(6年半振り)
	3	23	笹川会長、コー教育大臣、岡崎大使ご夫妻と共にシーナカリン王母陛下拝謁。慶祝祭の収益金150万バーツをメー・ファー・ルアン財団に献上	3/7 第1次アナン首相暫定政権成立

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事)	
1991 平3	3	23・24	教育部「日タイ青少年キャンプ」開催(両国の青少年少女88名とボランティア約60名が参加、シラチャーのワチラウッド・ボーイスカウトキャンプ場)		
			4	22	定時総会を開催 笹川会長(会員数5,440名)
	5	1	増築された空調設備付きの講堂で入学式(生徒数1,541名)	5/7 新国際空港建設計画承認	
		14	川満事務局長代行を正式の事務局長に昇進させた		
	7	6	厚生基金運営委員会、生活困窮者への補助金 2,000パーツから2,500パーツに増額		
		7	「瀧川福祉ホーム」完成、落成式		
		15	タイ日協会学校校舎増築の落成式(7月末の生徒数:1,551名)		
	8	4	ソフトボール大会開幕(～10/13)		
		8	日本人納骨堂初代堂守、藤井真水大僧正逝去		
		11	順天堂大学巡回医師団(小児科、皮膚科など)による健康相談		
		12	王妃陛下還暦祝賀記念「森英恵ファッションショー」(ヒルトンホテル)		
		9	2	ラジャウィティ孤児院への8年間に亘るコーラス指導に対し、 内務省から、音楽担当の先生に感謝状授与	
	9	13	日本航空から「JAL ビデオライブラリー」の第2回目(30タイトル・42巻) の寄贈を受ける。10月より毎週木曜日に鑑賞会実施		
		13	総務の内部規定(ボーナス支給規定と職員福祉厚生規定)承認		
		18	藤井真水大僧正の本葬に小谷名誉会長参列		
		20	中学部生徒、第6回女子バレーボール・アジア選手権を観戦応援		
		27	大使主催「天皇皇后両陛下タイ国公式ご訪問歓迎レセプション」に 三村会長はじめ現役員、元理事ら出席(ヒルトンホテル)	日本人学校児童、天皇皇后両陛下の お出迎え(9/26)とお見送り(9/30)	
		29	チャリティーバザー(インペリアル・ホテル、収益金約76万パーツ)		
		10	24・25		読売新聞主催、将棋のタイトル戦 「竜王戦」をバンコクで開催
	11	3	第14回チャリティー文化祭(A.U.A.、来場者約1,200名) ラーチャウィティ・ホームの生徒招待		
		7	長原敬峰師を団長とする高野山元留学僧の会一行58名が来タイ。 納骨堂で邦人物故者並びに故藤井大僧正の慰霊祭	11～12月 反憲法運動拡がる	
		12	会員増加により運動会中止		
		12	カンチャナブリー慰霊塔の改修工事終了		
	12	15	海部総理大臣杯争奪チャリティーゴルフ (サイアムカントリー、参加183名、基金に3万パーツ)	12/9 アナン首相訪日 1991年 憲法公布	
	1992 平4	1	14	食堂運営、佐藤五郎氏より、アリー・マネジャーに業務委託。 クラブ部の下一食堂委員会で運営(独立採算制)。 桜井隆雄氏に食堂専門委員(調理の指導・監督)を依頼	1/1 VAT 7%実施
		2			高円宮殿下ご来タイ
4			タイ芸術局主催、大使館、国際交流基金で開催される シリントーン王女36歳誕生祝賀行事「虹の舞い」の後援	4/21 ステンダー政権成立(軍出身)	
		28	定時総会(インペリアルホテル、会員数6,292名)		
5		10	ワットリャップの前住職の追悼法養(2万B を寄進)		
		12	西野氏、泰日協会副会長及び泰日協会学校理事長を退任、後任に三村会長が就任	5/17 非常事態宣言「5月流血事件」発生 国王仲裁	
6		23	第1回「邦人安全対策連絡協議会」(大使館、JCC,日本人会)	6/10 第2次アナン政権成立	
7		4	納骨堂堂守疋田千秀師の後任として来タイされた加門知龍師の得度式		
		11	ソフトボール大会開幕(参加35チーム、～10/11)		
		25	長原会長を団長とする高野山真言宗タイ国開教留学僧ら一行 ワットリャップの前住職の追悼法要		
8	29・30	王妃陛下還暦祝賀行事「東京交響楽団コンサート」(カルチャーセンター)			

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事)	
1992 平4	9			9/15 総選挙で民主党が勝利	
		26	チャリティーバザー(インペリアル・ホテル、収益金103万パーツ)	9/28 チュアン内閣発足	
	11	1	第15回チャリティー文化祭(A.U.A.、来場者約1,000名) ラージャウィティ・ホームの生徒63名賛助出演		
		23	藤井大使主催、秋篠宮殿下ご夫妻のタイ国公式訪問のレセプション	11/20~24 秋篠宮殿下ご夫妻公式訪問	
	12	19	シリキット王妃陛下還暦祝賀記念行事「喜多郎」公演(ラマ9世公園)		
20		渡部通産大臣杯チャリティーゴルフ (サイアムカントリー、参加180名、基金に3万パーツ)	12/22 タイ・カンボジア国境閉鎖		
1993 平5	1	5	新年祝賀会	1/30 王貞治チャリティー講演会 (世界少年野球推進財団理事)	
		16	宮沢総理大臣来タイレセプション		
	2	21	ケンコイ釈迦堂 慰霊祭(40名参加)		
	3	20	日本人納骨堂「春の慰霊祭」		
		21	カンチャナブリー慰霊塔 慰霊祭		
	4	26	定時総会(インペリアルホテル)	4月 シリキット王妃陛下下訪日	
		29	日高前青少年部長、長年の理事歴任され名誉会員に推薦	5/6 森山文部大臣、日本人学校訪問	
	6	8	80周年記念行事特別委員会設置	6月 皇太子浩宮殿下・雅子様ご成婚	
		8	会報誌クルンテープで日本人会80周年記念号の発行準備開始		
	7	12	80周年記念行事 ソフトボール大会開幕(38チーム参加、~10/17)		
		27	日本留学生 v s 日本人会 テニス親善大会		
		29	日本人会会館購入について、残額を支払い名義変更完了 (1986年に1,700万パーツで契約、半額支払い済みだった)	日本政府タイ米輸入 13.3万トン	
	8	1	プリティッシュクラブとの親善ゴルフ大会(ロイヤルゴルフ、参加75名)		
	9	23	納骨堂秋季慰霊祭		
		25	80周年記念行事 第22回婦人部チャリティー・バザー		
	10	3	日本留学生会との親善ゴルフ(ロイヤルC.C.)		
		24	80周年記念式典 チャリティー文化祭(A.U.A.)		
		27	高野山開教局が多宝塔を寄贈 元留学僧の資延師が来タイし納骨堂で贈呈式		
		29・30	80周年記念行事 ボウリング大会		
	11	10	第1回海外安全対策会議 バンコクで開催(大使館)	11月 ガラヤニ王女殿下下訪日	
		27	80周年最大イベント、ラムウォン盆踊大会(青少年センター10周年記念)	(タイ日王室・皇室慶賀行事)タイ米輸入5万トン+8万トン	
	12	25	ソンマイ元タイ日協会会長の告別式		
		19	80周年記念行事 チャリティーゴルフ大会(基金に11,000パーツ)		
	1994 平6	1	15	成人の日祝賀会(モンティエンホテル、3名出席)	恩田新大使歓迎会、3/9開催へ
		3	19	日本人納骨堂「春の慰霊祭」	
			20	カンチャナブリー慰霊塔 慰霊祭	4/8 タイ・ラオス友好橋開通
		4	16	定時総会	4月 BOIの外資投資促進権付与が拡大
5		9	洪水のため日本人学校が休校		
7		10	ソフトボール大会開幕(参加38チーム、~10/9)		
		25	河野外務大臣よりゴルフカップの寄贈を受ける		
		30	荒巻裕氏講演会		
9		11	日本留学生協会と日本人会との 親善ゴルフ大会	9/2~7 チュアン首相日本訪問	
		13	西野順次郎氏講演会		
		15	敬老の日祝賀会	9/22 アセアン関税引き上げ時期 繰り上げで合意。2003年まで。	
		18	第20回日本人会テニス親善大会		
		23	秋季彼岸法要(日本人納骨堂)		
24		24	第23回婦人部チャリティー・バザー(クイーンズパーク)		
		24	藤田元元巨人軍監督講演会(ドゥシット・タニ)		
10		8	日本人納骨堂60周年記念 仏像入魂式	10/26 盤谷日本人商工会議所40周年記念式典	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事)
1994 平6	11	6	チャリティー文化祭 (Bangkok Play House) 「六華仙」(神津善行)の公演	11/28 タイ・ラオス・カンボジア・ベトナム メコン川流域開発協定調印
		12	10	日本人納骨堂60周年記念法要 高野山真言宗タイ国開教留学僧会(長原敬峰会長)
		18	チャリティーゴルフ大会 河野外務大臣杯(ロイヤルG.C)	
1995 平7	1	15	成人の日祝賀会(大橋厚生部長)	1/17 阪神淡路大震災
		24	婦人部新年会(ドウシット・タニ・ホテル)	
		25-26	テニストーナメント(サワディー・テニスコート)	
	3	19	カンチャナブリー慰霊法要	
		21	日本人納骨堂春の慰霊法要	
		24-25	ワットリヤップ前住職本葬にタイ国開教留学僧会参集	
	4	24	1995年度日本人会総会(インペリアル・ホテル)	5/24 バンハーン内閣
	6	4	ブリティッシュ・クラブとの親善ゴルフ大会	
		4	日本人納骨堂にて谷宥俊師得度式	
		18	バドミントン大会(スタテップ・コート)	
		22	広報部 バンコク生活情報セミナー	6/24 国王在位50周年記念「虹の舞」公演
	7	1-2	テニストーナメント(サワディー・テニスコート)	7/1 最低賃金引き上げ、バンコク周辺は8145/日へ
		9	ソフトボール大会開幕(～10/8)	7/17 王母陛下ご逝去
		22	海上自衛隊幹部一行日本人納骨堂参拝	
	8			8/27 日本留学生協会、日本語弁論大会
	9	15	敬老の日祝賀会	国王在位50周年記念「和泉流狂言」公演
		16	バンコク子供図書館(ラケットクラブ3階)オープニングセレモニー	
		17	ケンコイ釈迦堂慰霊祭	
		24	親善テニス大会(KSコート)	
	10	20	チャリティー基金より総理府洪水対策本部に50万パーツ寄付	タイ大洪水
		29	第19回チャリティー文化祭(A.U.A.)	10/24 世紀の皆既日食 衛星中継
11	12	泰日協会学校 創立40周年記念大運動会	11/17 バンハーン首相訪日	
	25	タイ国王陛下即位50周年記念 日タイ交流ラムウォン盆踊大会 (阿波踊り八千代連、順天連山和太鼓共演)		
	12	20 泰日協会学校創立40周年式典 25 国王即位50周年記念ラムウォン盆踊り大会(来場約3万人)		
1996 平8	3	3	別館引き渡しを完了	
	4	25	定時総会(クイーンズパーク、出席283名)	
	5	6	大峡一男名誉会員、日本帰国中に急逝	5/2～9タイ国王陛下即位50周年記念 海上自衛隊練習艦隊、タイ親善訪問
	6	18	別館(スクンビットSoi 39)開所式	6/9 プミポン国王在位50周年式典
	7	6	ブリティッシュクラブとの親善ゴルフ大会(ロイヤルゴルフ)	
		6	堂守谷氏の後任佐々木公純師の得度式	
		14	ソフトボール大会開幕(参加33チーム、～10/17)	
	8	22	恩田大使歓送会	
	9	9	日本人学校の体育館が完成し青少年部でも利用可能に	9/12 最低賃金引き上げ、バンコク周辺は8156/日へ
		21	日本人納骨堂秋季慰霊祭	
		28	第25回チャリティーバザー	
	10	3	第1回チャリティー基金運営委員会を開催	
		4	小野理事1996年度通産大臣経済協力貢献賞受賞	
		4	スクンビット別館候補地物件見学	
		8	太田新大使歓迎会(ヒルトンホテル)	
		11	3	チャリティー文化祭(バンコクシアター、参加約1,500名)
	12	5	橋本総理大臣杯争奪チャリティーゴルフ大会	11/29 チャワリット内閣成立

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事		
1997 平9	2	1	航海訓練船「大成丸」船上パーティー スクンビットに別館を開設			
	3	16	カンチャナブリー慰霊祭			
			20	日本人納骨堂「春の慰霊祭」		
	4	24	定時総会(クイーンズパーク)			
			25	スクムビット別館が内務省により正式許可		
	5	20	プリティッシュクラブとの親善ゴルフ大会	5/1 日本人学校生徒数2009名		
	6	18	太田大使を迎えて、別館開所式	6/17 シリントーン王女日本人学校公式訪問		
	7	6	新堂守佐々木師得度式(ワットリヤップ)	7月 アジア通貨危機		
		13	ソフトボール大会開幕(航空電波局グラウンド)	7/29 シリキット王妃東海大学名誉博士号授与祝賀ガラディナー(タイ日協会主催)		
	9	23	日本人納骨堂慰霊祭	8/11 IMFや日本など、タイ向け160億ドル融資合意		
			27	婦人部 チャリティーバザー	8/16 VAT10%に	
	10	23	元日本留学生会との親善ゴルフ大会(タナシティー)	10/8 チャワリット首相訪日		
	11	2	チャリティー文化祭(バンコク・プレイハウス)			
			21	ケンコイ釈迦堂除霊式、22日撤去	10/7 チュアン内閣成立	
			29	納骨堂法要、高野山開教留学僧会58名参加 会員数ピークの9882名		
	12	5	斉藤参院議員杯争奪チャリティーゴルフ大会(参加153名)			
			17	原辰徳氏対談と音楽の夕べ(エラワンホテル)		
			20	ラグビー同好会、第1回香港、シンガポール、タイ三カ国親善試合(チュラロンコーン大学サッカースタジアム、24,500人観客)		
	1998 平10	1	5	日本国大使館主催 新年名刺交換会 中止		
				16	成人の日祝賀会(該当者5名のうち2名出席)	2月 金融機関の国有化相次ぐ
				23	婦人会、太田大使夫人をお迎えて新年会(エラワン、約700名参加)	
3		3	海上自衛隊外洋練習航海部隊艦上レセプション			
			22	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭		
			25	日本人納骨堂慰霊祭		
			26	連絡網整備委員会、インターネット、Eメールの活用検討開始		
4		3	日本人学校増築工事落成式、JCCと連盟で絵画2点寄贈			
			27	定時総会(クイーンズパーク)		
5		18	チョンブリ・ラヨーン地区連絡会設立	6月 円借 前倒し実施		
7		12	ソフトボール大会開幕(参加34チーム、～10/11)	8/18 外国人持株規制を緩和		
9		4	東南アジア域内日本人会事務局長シンガポール会議 同国のほかタイクアラルンプール、ジャカルタが出席。ジョホールバルはオブザーバー			
			15	敬老の日祝賀会及び敬老の集い		
			23	日本人納骨堂「秋季慰霊祭」		
			26	第27回チャリティーバザー(ヒルトンホテル、参加2,200名)		
10		3	元留学生会との親善ゴルフ 冠水で順延			
11		1	チャリティー文化祭	11/2 青年の船、25周年船上パーティー		
			7	順延となっていた元留学生会との親善ゴルフ大会開催	シリワンワリーマヒドン王女ご臨席	
12		10	三塚元大蔵大臣杯争奪チャリティーゴルフ大会	12/6 バンコク・アジア大会		
			24	ワットケンコイに移転が完了した「ケンコイ移民の碑」除幕式		
1999 平11	2	19	タイを知る会、10周年記念パーティー(日本人会本館)			
	3	14	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭	3/30 経済刺激策閣議決定		
			22	日本人納骨堂慰霊祭	530億バツ補正予算及び、4月1日よりVAT再び7%へ	
	4	27	定時総会(デルタグラウンド/パシフィック、出席176名)			
			29	石平副会長、叙勲「勲五等双光旭日章」		
	7	11	ソフトボール大会開幕	秋篠宮殿下来タイ		
		31	プリティッシュクラブとの親善ゴルフ(ロイヤルC.C.)			
	9	15	敬老の日祝賀会・敬老の集い			

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
1999 平11	9	23	日本人納骨堂「秋季慰霊祭」	
		27	太田大使送別レセプション	10/24 チュアン首相訪日
	10	31	元日本留学生会親善ゴルフ(タナシティー)	
	11	8	高野山の久利団長以下13名来タイ、日本人納骨堂法要	
		14	第23回文化祭	12/5 BTS開業
2000 平12	1	10	成人の日祝賀会(該当者4名、内3名出席)	1/13 小淵総理来タイ。翌日国王陛下拝謁 総理夫人、日本人学校訪問
		3	3	広報・文化部共催チャリティーコンサート(別館)
	3	15	日本人納骨堂のあるワット・リヤップ住職逝去	
		19	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭	
		20	日本人納骨堂春季慰霊法要	
		4	2	ケンコイの慰霊祭(厚生部懇和会)
	4	25	日本人会定時総会(グランドパシフィック、会員数9,002名)	
		5	19・20	石平会長ほか日本人会有志高野山総本山表敬訪問
	6	16	絵画同好会展覧会(伊勢丹)	
		18	新堂守中原隆賢師得度式(増福院 鷲本本賢師)、翌日佐々木弘浄師還俗	
		23	ワットリヤップ高野山育英基金伝達式	6/22 皇太后良子様のお悔やみの記帳
		25	プリティッシュクラブとの親善ゴルフ(バンプーC.C.)	竹下元首相のお悔やみの記帳
		29	陶楽同好会―陶芸の会 新活動場所開所式	
	7	9	ソフトボール大会開幕(参加35チーム、～10/8)	7/9 チュアン首相沖繩サミット出席
		9	ラグビー同好会創立25周年記念(タイ第2部で活躍)	
		13	名誉会員小谷亀太郎氏逝去	7/23 バンコク知事選でサマック当選
		18	第1回歌謡同好会のコーラス	7/27 上院議員200名やっど決定
	8	23	春風亭柳鳳師匠チャリティー落語公演(第3会議室、来場昼夜計150名)	
		29・30	東南アジア域内事務局長会議(シンガポール)	
	9	12	ボランティアが続けて来た英検、受験者が多く、継続性の点から日本人会が窓口に	
15		敬老の日祝賀会と「敬老の集い」(該当者5名、参加70名)		
23		チャリティーバザー(ロイヤル・メルディアン、参加約3,000名、収益125万バーツ)		
23		日本人納骨堂 秋期慰霊法要		
10		本館の改修工事着工(2か月、129万バーツ)		
	28	第11回タイ国元日本留学生会との親善ゴルフ大会		
11	5	チャリティー文化祭(A.U.A、1,500)	11月 IMF融資の返済開始	
	26	高野山真言宗和田管長猊下、訪タイ団120名の日本人納骨堂で特別法要	11/21 南部で大雨洪水死者66人超える	
12	5	小淵前総理大臣杯チャリティーゴルフ(収益11,000バーツ)		
	7	南タイの洪水と東北タイの救援活動に各10万バーツ支援		
	7	歌謡同好会が文化部同好会加入		
	22	納骨堂に戦前からある無縁仏、供養後タイ僧と中原師と共にバクナム沖に散骨		
	24	第8回ラムウォン盆踊り大会(青少年センター)		
2001 平13	1	9	新大使館主催年祝賀会	1/25 裏千家バンコク支部20周年記念
		31	カンチャナブリー子供学園寮落成式(チャリティー基金より40万バーツ)	15代家元千宗室宗匠、シリントーン王女に献茶
	3	14	西野順治郎名誉会員逝去(83歳)	2/18 タクシン内閣発足
		18	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭(サイヨークの滝迄汽車)	
		20	日本人納骨堂春の彼岸法要	
	4	2	ケンコイ寺慰霊祭	
		19	国連環境計画親善大使として来タイした加藤登紀子氏と日本人会会員約70名との交流会(大使公邸)	
	5	26	定時総会(会員数9,406名) 理事選挙制度「推薦立候補制」へ。地方会費100バーツへ	
		9	川満富子事務局長定年 理事会で退職の挨拶	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事	
2001 平13	6	3	プリティッシュクラブ親善ゴルフ大会(ロイヤル・ゴルフ)	6/16 村落基金プロジェクトスタート	
		8	百科事典を全国の学校に配布する国王プロジェクトに10万パーツ寄贈 シリントーン王女より感謝の言葉と記念バッジを頂戴	6/25 コスム・ウェスカセム女史(日本人学校の維持発展に貢献) 勲四等瑞宝章叙勲	
		22	ワットリヤップ高野山育英基金伝達式		
	7	8	ソフトボール大会開幕(参加35チーム、～10/7)		
		28	日本人納骨堂の改修工事終了	7/29 OJSATチャチャイ会長就任	
	8	4		秋篠宮殿下ご夫妻来タイ シーナカリンウィロート大学とチュラロン コーン大学より名誉博士号を授与	
		24	ナコンシータマラートの山田長政慰霊碑除幕式		
	9	15	敬老の日祝賀会	9月 シリントーン王女、学習院大学より 名誉学位授与×名誉学位授与	
		22	第30回チャリティーバザー(バムルンラート、収益122万パーツ)		
		23	日本人納骨堂秋季法要		
	10	9	アメリカ同時多発テロを受けてラムウオン盆踊り大会、文化祭も中止決定	10月 チュラポーン王女訪日	
		29			
	11	17		タイ国元留学生協会 50周年記念式典	
		18~21		タクシン首相訪日	
	12	4	JCC、日本人会共催、赤尾大使夫妻送別会(リージェント)		
		5	赤尾大使杯チャリティーゴルフ(プレジデント、6万パーツ寄贈)		
	2002 平14	1	14	成人の日(該当者3名も欠席、後日記念品を贈る)	1/11 小泉総理タイ公式訪問
			17	日本人会青少年サークル新年会(レンプラント)	1/12 橋本元総理、川口環境大臣来タイ
		2	24	OJSAT親善ゴルフ大会(ナチュラルパーク、参加66名)	
17			カンチャナブリ慰霊祭	3/28 経団連ミッションASEAN域内歴訪 3/29 タクシン首相と会談	
4		21	日本人納骨堂春季法要(時野谷大使ご夫妻)		
		2	ケンコーイ寺慰霊祭(厚生部・懇和会主催)		
		21	ラタナコーシン王朝220周年記念事業に空手道サークル、混声合唱団出演		
		24	時野谷大使ご夫妻歓迎会(ヒルトン・ホテル)	4/11アジア・フォーラムにタクシン出席	
		25	定時総会(グランド・パシフィック、会員数9,191名)		
5		11	石平前会長(文化部長25年、会長3年)名誉会員に		
		25	文化部歌謡コーラス同好会 第3回歌謡コンサート		
6		11	石平前会長名誉会員に表彰状と記念品を贈呈		
		13~19	第22回絵画同好会作品展(エラワンそごう)		
		22	ワットリヤップ高野山育英基金伝達式(チャリティーより寄付)		
		23	プリティッシュ・クラブとの親善ゴルフ大会(スパーブルック)		
7		30	プロ将棋棋士小林健二9段による指導対局		
		7	第26回ソフトボール大会開幕(日本人学校、～10/13)		
8		30	域内事務局長会議(クアラルンプール)		
9	3	大宅映子氏講演会(婦人部主催・文化部協賛240名)			
	8	日本人会のクラブレストラン、「The Japan」としてリニューアル			
	14	「敬老の日祝賀会」瀧川福祉基金との共催(石平氏)			
	23	日本人納骨堂秋季法要(中原師)			
	28	チャリティーバザー(バムルンラート病院)			
10	9	タクシン首相のランチョン・トーク(エラワン)	10/2-3 創立80周年記念、洗足学園音楽 大学のオーケストラ演奏会(文化センター)		
	12	タイ伝統人形劇特別講演(ジョー・ルイス劇場、タイを知る会の日本語解説付)			
			10/20 青少年センター開所式(カンチャナブリ)		
11	3	第25回文化祭(AUAオーデトリウム)	11/24 第37師団の生存者が戦没将兵 愛馬慰霊碑に参拝(ナコン・ナヨック)		
	16	愛媛県伊予松前町(白石勝也町長)の皆さんと日本人会、OJSAT、タイ政府観光庁と交流			
12	5	時野谷大使杯日本人会チャリティーゴルフ(プレジデント、参加者140名)			

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
2003 平15	1	30	田村事務局長退職、後任に磯田次長	
	2	11	会館維持積立金、会館・クラブ基金に統合。納骨堂基金とカンチャナブリー基金を納骨堂・カンチャナブリー基金に。ケンコイ寺慰霊祭を事業部主催に	
		21	大使公邸でチョンプリ・ラヨン日本人会、コラート日本人会代表と交流会	
		23	第13回OJSAT親善ゴルフ大会(プレジデントCC)	
		23	日本人納骨堂春季法要	
	3	9	バンコク混声合唱団第1回公演(サイアム・コラカン)	
		15	塚原事務局次長自己都合退職、ギターアンサンブル休部	
		21	日本人納骨堂春の彼岸法要(ワット・リヤップの育英基金に3万バーツ寄付)	
		23	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭(ナムトゥク・サイヨーク迄汽車の旅)	
	4	2	ケンコイ寺日本人移民の碑慰霊祭	
		18	ワットリヤップ前住職の命日の法要	
		25	定時総会(デュシットタニ・ホテル) 理事選挙で立候補制採用	
		26	瀧川虎若名誉会員大往生された(享年99歳)	
	5	20・21	高野山真言宗総本山金剛峯寺に会長ほか9名、納経と表敬訪問 本山より納骨堂基金に10万円の寄付を受ける	5/30 交流年事業「幻想のカルメン」 6/6 タクシン首相、訪日
	6	22	ブリティッシュゴルフ親善ゴルフ大会	6/6 バンコク病院の創業者ボンサク・ウィタヤコーン先生勲3等瑞宝章受章、祝賀会開催
	7	13	第27回日本人会ソフトボール大会開幕(日本人学校、～10/19)	7/26 ソーソートー30周年記念 第6回泰日カルチャーフェスティバル
				7/31 IMF緊急融資の返済完了
	8	12		シリキット王妃殿下72歳慶祝
		15		チェンマイ・ムーンサーン寺の慰霊碑、 終戦日の正午の慰霊祭(邦人約20名)
	9	13	敬老の日祝賀会/敬老の集い(日本人会本館、該当者11名)	9/15 元日本留学生の会創立記念日式典
23		ブリティッシュゴルフ親善ゴルフ大会、途中降雨ドロー		
23		日本人納骨堂秋季法要(高田公使)		
27		アジア域内日本人会事務局長会議(タイ国日本人会)		
28		ブリティッシュゴルフ親善ゴルフ大会再試合:ロイヤル		
10	14	「バイリンガルの子供の為に日本語教室」文化部同好会		
	17			
	25	第32回チャリティーバザー(バムルンラート病院、収益金123万バーツ)		
11	2	日本人会創立90周年記念式典、第26回文化祭(AUAオーデトリウム) 食堂「The Japan」元従業員が日本人会の助力の下、独立運営開始 第43回チャリティーゴルフ大会(プレジデントC.C.、参加163名)	11/26 最低賃金1月からB170/日へ	
	13	第7回日タイ交流ラムウォン盆踊り大会(国立競技場)	12/3 タクシン首相麻薬撲滅キャンペーン (2月～)勝利宣言	
	14	高野山真言宗元留学僧の会第9回訪タイ団54名、日本人納骨堂で法要		
2004 平16	1	17	OJSATとの親善ゴルフ大会	1/28 鳥インフル対策アジア閣僚会議
	2	20	カンチャナブリー慰霊塔慰霊祭	
		22	日本人納骨堂春季法要、タイを知る会50周年記念パーティー	
	3	20	クルンテープ誌90周年記念特別号が完成	
	4	22	ブリティッシュクラブとの親善ゴルフ大会	4/16 バンコク地下鉄運行開始
	6	27	ソフトボール大会開幕(日本人学校)	
	9	11	文化祭(日本人学校西体育館)	
		23	日本人会チャリティーゴルフ大会	
		25	日本人納骨堂秋季法要	
	10	31	チャリティーバザー@インベリアルクイーンズパーク	10/23 新潟県中越地震
	11	18	中越地震被災者支援口座の開設	
	12	6	日本人会チャリティーゴルフ大会	12/26 スマトラ沖大地震

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事
2005 平17	1	27	タイ赤十字社の義援金贈呈式でシリントーン王女に70万パーツをお渡しした	
	2	8	インド洋津波支援義援金として30万パーツをプーケット日本人会へ	2月 総選挙でタイ愛国党圧勝。 第2次タクシン内閣成立
		25	タイ赤十字社のモムラチャウォン・チャヤコーン・セサウェートに義援金785,562パーツを手渡した	
		28	新潟県中越地震義援金266,350パーツを日本赤十字社新潟支部に送金	
		3	13	
	3	19	日本人納骨堂春季法要	
		4	2	ケンコイ寺日本人移民の碑法要
	4	28	日本人会2005年度定期総会	
		5	10	子供図書館が広報部からクラブ部へ、すくすく会・小児検診も同部から厚生部へ
	6	26	プリティッシュクラブとの親善ゴルフ大会	
	7	10	日本人会ソフトボール大会開幕(日本人学校、～10.16)	
	8	7	津波により延期されていたOJSATゴルフ大会を開催(キアタニC.C.)	国連環境計画親善大使加藤登紀子、津波被災者支援チャリティーコンサート開催
	9	17	敬老の日祝賀会(The Japan)	
		24	チャリティーバザー(インペリアルクイーンズパークホテル)	
		25	日本人納骨堂秋季法要	
	11	8	日本人会の優待店での会員証提示で割引特典が受けられるサービス採用	
		13	第28回文化祭(AUA)	
27		日本人納骨堂建立70周年記念法要		
28		カンチャナブリ慰霊祭@カンチャナブリ慰霊塔及び外人墓地		
12	5	第45回チャリティーゴルフ大会(プレジデントC.C.)		
	10	第8回ラムウォン盆踊り大会@青少年センター	"メガプロジェクト"構想発表	
2006 平18	1	9	成人の日祝賀会	
	2	14	優待店登録始まる。第1号は東急百貨店	日本人学校創立50周年祝賀式典
		26	OJSATとの親善ゴルフ大会	反タクシン運動活発化
	3	19	カンチャナブリ慰霊塔法要	
		21	日本人納骨堂春季法要	
	4	2	ケンコイ寺日本人移民の碑慰霊祭	タクシン一時退陣表明
		28	日本人会2006年度定期総会(インペリアルクイーンズパークホテル)	5月 憲法裁判所による総選挙無効宣言
	6	25	プリティッシュクラブ親善ゴルフ大会@ロイヤルゴルフCC	国王在位60周年記念行事 天皇后両陛下来タイ
	7	9	ソフトボール大会開幕(～10/1)	9/19 ソンティ陸軍大将の反タクシン無血クーデターによりスラコット内閣成立
	9	16	敬老の日祝賀会(The JAPAN)	
		23	チャリティーバザー(インペリアルクイーンズパークホテル)	OJSAT創立50周年
		26	日本人納骨堂秋季法要	スワナブーム空港開設
11	12	文化祭(AUA)		
12	3	チャリティーゴルフ(カスカータC.C.)	戒厳令解除	
2007 平19	1	9	成人の日	1/11 新年懇親会(大使公邸)
	2	27	OJSATとの親善ゴルフ大会	
	3	21	日本人納骨堂春季法要	秋篠宮来タイ
		25	カンチャナブリ慰霊祭	ドンムアン空港再開
	4	2	ケンコイ寺日本人移民の碑法要	スラコット首相訪日
		27	日本人会2007年度定期総会	5月 タイ愛国党解党判決
	6	27	プリティッシュクラブ親善ゴルフ大会(LEGACY C.C.)	タクシン口座凍結、 検察庁タクシン起訴(不正土地入手)
		7	ソフトボール大会(～10月)	8月 新憲法施行
	9	15	敬老の日祝賀会(The JAPAN)	
		20	日本人納骨堂秋季法要	9月26日 日タイ修好120周年記念日
		22	チャリティーバザー(インペリアルクイーンズパークホテル)	
	11		文化祭	
12		チャリティーゴルフ	ドンムアン空港国際線利用再開	

年	月	日	日本人会関係	日タイ関係・主な出来事	
2008 平20	1		携帯電話のSMSを利用した会員向け緊急連絡サービスを開始	1/2 ガラヤニー王女殿下ご逝去	
	2	2	新企画「餅つき大会」をスタート（日本人会別館裏庭）	1/29 ケーデター後の初選挙、サマック内閣成立	
	4	26	総会（インペリアルクイーンズパーク） 理事定数（22名→会長推薦でプラス最大2名）、副会長定数（2→3名）	4月 如水館/バンコク開校（タイ初の日本人高校）	
	5	13	会員サービス向上のため組織を再編し、会員・会館改善委員会を設置	6/24 第1回海外法人安全対策会議（大使館）	
	7	13	ソフトボール大会開幕（～10/5）	8月 PADデモ活動活発化	
	9		別館の土日開放をスタート		
		2	バンコク非常事態宣言に際し、SMSメール発信	バンコクに非常事態宣言、日本人学校緊急下校	
		27	チャリティバザー		
	11	7	小野雅司会長 旭日中綬章を叙勲	11/23 アジアカップバレーボール（初のバンコク開催）	
		9	文化祭（AUA）	11/26 PADによるスワンナプーム空港占拠	
		30	チャリティゴルフ、空港占拠のため中止	12月 アピシット内閣成立	
2009 平21	4		泰日協会学校シラチャ校開校	年初より新型インフルエンザ流行	
		27	総会	4/11 UDDデモ隊がASEAN会議会場に乱入	
	5	12	新型インフルエンザセミナー	タイで初めて新型インフルエンザの感染確認	
	7	12	ソフトボール大会開幕（～10/11）		
	8	11	理事会で、日本人会100周年記念事業の検討を開始		
	9		会員数減少対策で「会員増強委員会」設置、新パンフレットも作成		
		19	チャリティバザー		
	11	8	文化祭		
	12	12	日タイ交流ラムウォン盆踊り大会		
	2010 平22	3	12	バンコク都内各地で大規模デモ広がる	
		4	27	総会（懇親会を同時実施） 大橋寅治郎新会長就任	4/10 UDDデモ取材中の邦人記者、銃弾に当たり死亡
		4～5月		政情不安により、青少年サークルの活動自粛	5/19 大混乱の末UDDデモ終結
5		11	敬老の日祝賀会、及び懇和会行事を厚生部から事業部に移行	軍、警察突入により死者92名	
6		8	文化部同好会に、編み物・手芸の会新設		
7			三役を中心に「日本人会強化プロジェクト」		
		11	ソフトボール大会開幕（～10/10）		
		13	文化部同好会に、クレンテープかるた会新設		
9		25	チャリティーバザー	10月 タイ南部で大洪水	
11		8	タイ南部洪水被害支援としてタイ赤十字社に10万パーツ寄付		
		14	文化祭		
12		14	日本人会強化プロジェクト中間報告「集う機会、場の提供、充実」の具体案検討		
2011 平23	1			プレアピヒア寺院の領有をめぐるタイとカンボジアが武力衝突	
	3	8		秋篠宮殿下来タイ、カセサート大学名誉学位授与	
		18	東日本大震災への義援金として日本人会より50万パーツ寄付。この他、日本人会に3千万パーツ以上の義援金が寄せられる（日本赤十字社へ送付）	3/11 東日本大震災	
	4	27	総会 日本人会ホームページをリニューアル		
	6	15・19	日本人納骨堂堂守 馬場師還俗式、神田師得度式	6月～9月 タイ北部に大雨、チャオプラヤ川の水量増加	
	7	3	ソフトボール大会開幕（～10/9）		
		29	「ありがとうタイ、がんばろう日本」キャンペーンスタート	8月 インラック内閣成立 初の女性首相	
	9	21	洪水被害支援義援金として20万パーツをタイ赤十字社に寄付	10/4 アユタヤ県サハラタナナコン工業団地の堤防が決壊。以降、7つの工業団地が次々に大洪水被害	
		24	チャリティバザー		
	11～12月		文化祭、チャリティゴルフ、ラムウォン盆踊り大会、すべて洪水のため中止	日本人学校休校（10/13～11/18）	

戦後の歴代理事

1953 (会員数: 130名)		1954 (会員数: 191名)		1955 (会員数: 249名)		1956 (会員数: 315名)		1957 (会員数: 384名)	
特命全権大使	太田一郎	特命全権大使	太田一郎	特命全権大使	太田一郎	特命全権大使	(5/9) 渋沢信一	特命全権大使	渋沢信一
委員長	大賀 洋 三井銀行	委員長	大賀 洋 三井銀行	委員長	森島 梓 三井銀行	委員長	斉藤得七 三菱商事	委員長	斉藤得七 三菱商事
委員	川口又男	庶務部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	副委員長	駒井長一郎 第一物産	副委員長	梅本雅次郎 伊藤忠商事	副委員長	駒井長一郎 第一物産
委員	小谷亀太郎 Pacific & Orient	会計部長	篠原久司	庶務部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	庶務部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	庶務部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient
委員	和田 格 Wada Clinic	事業部長	日高秋雄 日高洋行	会計部長	鈴木信一郎 又一	会計部長	満島啓二 日綿	会計部長	満島啓二 日綿
委員	小野政治 小野商会	委員	岡崎熊雄	事業部長	斉藤得七 三菱商事	事業部長	森田信一 東レ	事業部長	堀 深 江商
委員	野村金次郎	委員	和田 格 Wada Clinic	委員	塩沢定雄 東綿	教育部長	宇敷信吾 東京銀行	教育部長	宇敷信吾 東京銀行
委員	高瀬直智	委員	瀧川虎若 Takigawa Clinic	委員	日高秋雄 日高洋行	厚生部長	鈴木信一郎 又一	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic
委員	大峽一男 丸紅飯田	委員	大木久弥	委員	岡崎熊雄	委員	岡崎熊雄	委員	斉藤重雄 富士車輜
委員	寺尾市松	委員	野村金次郎	委員	田辺淳一 三井船舶	委員	日高秋雄 日高洋行	委員	高橋 弘
委員	小野彰平 Kikuya Siam	委員	鈴木信一郎 又一	委員	和田 格 Wada Clinic	委員	堀 深 江商	委員	小川悌二郎
委員	荒木勇治	委員	井上政利 三和洋行	委員	山田親志	委員	増本 晃	委員	古沢博雄
委員	白浜庄一	委員	小山善一	委員	瀧川虎若 Takigawa Clinic	委員	荒木勇治	委員	日高秋雄 日高洋行
委員	田辺淳一 三井船舶	委員	荒木勇治	委員	栗田俊平	委員	高橋 弘	委員	梅本雅次郎 伊藤忠商事
		委員	田辺淳一 三井船舶	委員	小山善一	委員	斉藤重雄 富士車輜	委員	森島 梓 三井銀行
		委員	塩沢定雄 東綿	委員	小林三千夫 丸紅	委員	瀧川虎若 Takigawa Clinic		
				委員	野村金次郎				
								会計監査	鈴木信一郎 又一

1958 (会員数: 375名)		1959 (会員数: 332名)		1960 (会員数: 357名)		1961 (会員数: 407名)		1962 (会員数: 488名)	
特命全権大使	渋沢信一	特命全権大使	(4/7) 大江晃	特命全権大使	大江晃	特命全権大使	大江晃	特命全権大使	大江晃
委員長	近藤悌三 三井銀行	委員長	中出敬一 三井物産	委員長	中出敬一 三井物産	委員長	大峽一男 丸紅飯田	会長	大峽一男 丸紅飯田
副委員長	駒井長一郎 第一物産	副委員長	宇敷正章 東綿	副委員長	岡庭 雅 三井銀行	副委員長	大島真一 日本航空	副委員長	青木梅吉 伊藤忠商事
庶務部長	堀 深 江商	庶務部長	岸野実夫 丸紅飯田		日向正春 東綿	庶務部長	田口治三 金商又一	庶務部長	大西一忠
会計部長	満島啓二 日綿	会計部長	大峽一男 丸紅飯田	会計部長	山森佐二郎 金商又一	会計部長	山森佐二郎 金商又一	会計部長	石橋昌直 三菱商事
事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	大西喜也 日綿	事業部長	大西喜也 日綿
教育部長	宇敷信吾 東京銀行	教育部長	堀 深 江商	教育部長	田口治三 東綿	教育部長	日向正春 東綿	教育部長	日向正春 東綿
厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	文化部長	大島真一 日本航空	文化部長	青木梅吉 伊藤忠商事	文化部長	島本 豊 日本航空
委員	亀田重雄	委員	斉藤得七 三菱商事	運動部長	植村誠実	運動部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	運動部長	中出敬一 三井物産
委員	斉藤得七 三菱商事	委員	近藤悌三 三井銀行	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	婦人部長	青木梅吉 伊藤忠商事
委員	日高秋雄 日高洋行	委員	斉藤重雄 富士車輜	委員	岸野実夫 伊藤忠	委員	岡庭 雅 三井銀行	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic
委員	岸野実夫 伊藤忠	委員	大島真一 日本航空	委員	大峽一男 丸紅飯田	委員	中出敬一 三井物産	委員	岡庭 雅 三井銀行
委員	斉藤重雄 富士車輜	委員	田口治三 東綿	委員	堀 深 江商	委員	斉藤重雄 富士車輜	委員	長井 正
委員	宇敷正章 東綿	委員	植村誠実	委員	三浦章武 三菱商事	委員	三浦章武 三菱商事	委員	小谷亀太郎 Pacific & Orient
委員	大峽一男 丸紅飯田	委員	日高秋雄 日高洋行	委員	斉藤重雄 富士車輜	委員	堀 深 江商	委員	田島義也 東綿
								委員	山森佐二郎 金商又一
会計監査	鈴木信一郎 又一	会計監査	山森佐二郎 金商又一	会計監査	服部悌二郎	会計監査	服部悌二郎	会計監査	服部悌二郎

1963 (会員数: 634名)		1964~1966		1967 (会員数: 249名)		1968		1969	
特命全権大使	(1/22)島津久大	特命全権大使	(10/23)粕谷孝夫	特命全権大使	(6/21)関守三郎	特命全権大使	後宮虎郎	特命全権大使	後宮虎郎
会長	大峽一男 丸紅飯田	会長	大峽一男 丸紅飯田	会長	大峽一男 丸紅飯田	会長	山本 一 川崎汽船	会長	山本 一 川崎汽船
副委員長	大西喜也 日橋	副委員長		副会長	山本 一 川崎汽船	副会長 兼教育部長	山下市部 タイ旭硝子	副会長 兼教育部長	山下市部 タイ旭硝子
庶務部長	中戸川実 江藤	庶務部長				副会長	細田 正 日本航空	副会長	細田 正 日本航空
会計部長	古賀優雄 東京銀行	会計部長		庶務部長		庶務部長	天野文雄 兼松江商	庶務部長	栗間典治
事業部長	大西喜也 日橋	事業部長		会計部長	宮下健二 東京銀行	会計部長	宮下健二 東京銀行	会計部長	宮下健二 東京銀行
教育部長	山森佐二郎 金商工一	教育部長		事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	宮崎与枝三 東洋綿花
文化部長	島本 豊 日本航空	文化部長		教育部長		教育部長	山下市部 タイ旭硝子	文化部長 兼厚生部長	斉藤善雄 三井銀行
運動部長	郡 健一 三井物産	運動部長		文化部長		文化厚生部長	栗間典治 G.S.スクール	婦人部長	扇原秀治部 タイ視
婦人部長	青木梅吉 伊藤忠商事	婦人部長		運動部長		運動部長	宮崎与枝三 東洋綿花	厚生部長	日高秋雄 日高洋行
厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長		婦人部長	三辺正雄 三井銀行	婦人部長	扇原秀治部 タイ視	クラブ部長	石井 琢 大正海上火災
理事	小谷亀太郎 Pacific & Orient	理事		厚生部長		クラブ部長	岡田睦郎 伊藤忠商事	会報部長 兼泰日協会常任理事	西野順治部 東洋綿花
理事	水野敏三 トヨタ自動車	理事		クラブ部長		会報部長	森川純行	運動第一部長	岡田睦郎 伊藤忠商事
理事	岩井藤次郎 東洋綿花	理事		会報部長		理事	伊藤輝元 青山タイ	運動第二部長	井川俊夫 丸紅飯田
理事	五月女年郎 三菱物産	理事		理事		理事	日高秋雄 日高洋行	理事	阿部良夫 三井物産
理事	太田茂俊 三井銀行	理事		理事		理事	西野順治部 東洋綿花	理事	林 哲夫 三菱物産
理事	前川保男 日輪美業	理事		理事				理事	小谷亀太郎 Pacific & Orient
会計監査	青山恒之	会計監査				監事	青木甲子郎	理事	瀧川虎若 Takigawa Clinic
								理事	伊藤輝元 青山タイ
								監事	佐藤 将 東京銀行

1970		1971		1972		1973		1974	
特命全権大使	後宮虎郎	特命全権大使	後宮虎郎	特命全権大使	(2/25)藤崎万理	特命全権大使	藤崎万理	特命全権大使	藤崎万理
会長	山本 一 川崎汽船	会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン
副会長	山下市部 タイ旭硝子	副会長	山本 一 川崎汽船	副会長	山本 一 川崎汽船	副会長 兼総務部長	青木孝雄 トヨタ自動車	副会長 兼総務部長	青木孝雄 トヨタ自動車
副会長	細田 正 日本航空	副会長 兼会計部長	浅沼敏男 三井銀行	副会長 兼会計部長	浅沼敏男 三井銀行	副会長 兼厚生部長	古城胤利 日本航空	副会長 兼厚生部長	古城胤利 日本航空
庶務部長	石井 琢 大正海上火災	庶務部長	樋口重雄	総務部長	青木孝雄 トヨタ自動車	会計部長	和田清彦 東京銀行	会計部長	大橋和義 三井銀行
会計部長	山崎九甲 東京銀行	会計部長	重松景二 三井OSK Lines	事業部長	松田嘉久 松田商会	事業部長	松田嘉久 松田商会	事業部長	松田嘉久 松田商会
事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	青木孝雄 トヨタ自動車	文化部長	堀江 毅 タイ東レ	文化部長	堀江 毅 タイ東レ	文化部長	和田誠司 伊藤忠商事
教育部長	岡田睦郎 伊藤忠商事	教育部長	宮川和夫 タイ東レ	教育部長	戸川 正 大正海上	教育部長	戸川 正 大正海上	運動第一部長	前田一夫 タイ矢崎
文化部長	重松景二 三井OSK Lines	文化部長	井川俊夫 丸紅飯田	運動第一部長	水谷一雄 ミスキッチン	運動第一部長	水谷一雄 ミスキッチン	運動第二部長	水谷一雄 ミスキッチン
婦人部長	日高秋雄 日高洋行	婦人部長	浅岡敏夫 旭ガラス	運動第二部長	日高秋雄 日高洋行	運動第二部長	日高秋雄 日高洋行	クラブ部長	日高富士夫 Fuji Development
厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長	葛目博亨	クラブ部長	日高富士夫 タイ明電舎	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic
会報部長 兼泰日協会常任理事	西野順治部 東洋綿花	クラブ部長	岡田睦郎 伊藤忠商事	クラブ部長	日高富士夫 タイ明電舎	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	会報部長	松尾泰之 Japan Trade Center
運動第一部長	斉藤善雄 三井銀行	会報部長	重松景二 商船三井	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	会報部長	重松景二 商船三井	理事	佐藤庄次郎 三井物産
運動第二部長	宮川和夫 タイ東レ	運動第一部長	水谷一雄 ミスキッチン	会報部長	重松景二 商船三井	理事	佐藤庄次郎 三井物産	理事	日高秋雄 日高洋行
理事	阿部良夫 三井物産	運動第二部長	日高秋雄 日高洋行	理事	佐藤庄次郎 三井物産	理事	大坪庄二郎 三菱物産	理事	本田博通 タイ大丸
理事	井川俊夫 丸紅飯田	理事	阿部良夫 三井物産	理事	井川俊夫 丸紅	理事	和田誠司 伊藤忠商事	理事	鈴木静夫 毎日ニュース
理事	伊藤輝元 青山タイ	理事	山崎九甲 東京銀行	理事	浅岡敏夫 旭ガラス	理事	竹内 博 Japan Language Class	理事	内田保次 兼松江商
理事	水谷一雄 ミスキッチン	理事	日高富士夫 富士物産	理事	大坪庄二郎 三菱物産			理事	高木譲二 タイ旭硝子
理事	佐藤 将 東京銀行	理事	大山八三郎 大山商会	理事	古城胤利				
理事	樋口重雄	監事	妹尾和美 三井銀行	理事	和田誠司	監事	松根新生 東京銀行	監事	吉満 保 三井銀行
監事	妹尾和美 三井銀行			理事	竹内 博 日本人学校教頭	監事	栗原 亨 輸出入銀行	監事	松根新生 東京銀行
監事	与田俊郎			監事	妹尾和美 三井銀行				
				監事	松根新生 東京銀行				

1975		1976		1977		1978		1979	
特命全権大使	藤崎万理	特命全権大使	(2/10) 人見宏	特命全権大使	人見宏	特命全権大使	人見宏	特命全権大使	人見宏
会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン	会長	西野順治部 トーマン	会長	園山裕三 Mitsui & Co.
副会長 兼総務部長	青木孝雄 トヨタ自動車	副会長 兼総務部長	青木孝雄 トヨタ自動車	副会長	浅田英治 Teijin Polyester	副会長 兼総務部長	浅田英治 Teijin Polyester	副会長 兼総務部長	西野順治部 Toyonenka
副会長 兼厚生部長	古城胤利 日本航空	副会長 兼厚生部長	海原三雄 東京旅行	副会長 兼総務部長	山本建一郎	副会長	園山裕三 Mitsui & Co.	文化部長	浅田英治 Teijin Polyester
会計部長	海原三雄 東京旅行	会計部長	松田嘉久 松田商会	会計部長	前田和一郎 三井銀行	副会長	吉野 晋 Thai Toray Textiles	事業部長	吉野 晋 Thai Toray Textiles
事業部長	松田嘉久 松田商会	事業部長	菱田 久 大正海上	事業部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	文化部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	厚生部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient
文化部長	和田誠司 伊藤忠商事	文化部長	立花順次 丸紅	文化部長	立花純次	事業部長	本多忠勝 Mitsubishi Co.	会計部長	本多忠勝 Mitsubishi Co.
教育部長	菱田 久 大正海上	教育部長	田中文雄 三井OSK Lines	厚生部長	本多忠勝 Mitsubishi Co.	厚生部長	宮本正弘 The Bank of Tokyo	青少年部長	小泉 宏 Mitsui Bank
運動第一部長	武沢 勲 Thai Filament Textile	運動第一部長	小川博世 タイ実業	運動第1部長	宮本正弘 The Bank of Tokyo	会計部長	小泉 宏 Mitsui Bank	会報部長	日高富士夫 Fuji Development
運動第二部長	水谷一雄 ミスキケン	運動第二部長	北谷一夫 日興タイランド	運動第2部長	天野 宏 Japan Air Lines	青少年部長	秦 佛之 Thai Daimaru	運動第1部長	秦 佛之 Thai Daimaru
クラブ部長	日高富士夫 Fuji Development	クラブ部長	日高富士夫 Fuji Development	クラブ部長	天野 宏 Japan Air Lines	会報部長	武田和夫 Taisho Marine	運動第2部長	武田和夫 Taisho Marine
婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	運動第1部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	婦人部長	松田嘉久 Matsuda & Co.
会報部長	松尾森之 Japan Trade Center	会報部長	秦 佛之 タイ実業	会報部長	秦 佛之 Thai Daimaru	運動第2部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	クラブ部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic
青少年部長	前田一夫 タイ実業	青少年部長	前田和一郎 三井銀行	青少年部長	日高富士夫 Fuji Development	婦人部長	天野 宏 Japan Air Lines	広報部長	高瀬長幸 Marubeni Corporation
理事	日高秋雄 日高銀行	理事	日高秋雄 日高銀行	広報部長	古閑俊彦 Japan Trade Center	クラブ部長	古閑俊彦 Japan Trade Center	教育部長	原田和幸 Japan Trade Center
理事	三矢国夫 三菱商事	理事	三矢国夫 三菱商事	教育部長	田中文雄 Mitsui OSK Line	広報部長	森田安宏 Sumitomo Shoji	理事	森田安宏 Sumitomo Shoji
理事	鈴木静夫 毎日ニュース	理事	辻 真 三井物産	理事	辻 真	教育部長	竹下輝雄 C. Itoh	理事	小野和夫 The Bank of Tokyo
理事	内田保次 兼松江商	理事	泉 木義 タイ実業	理事	吉野 晋 Thai Toray Textiles	理事	井沢 格 Mitsui OSK Line	理事	林 郁也 Mitsubishi (Thailand)
理事	高木謙二 タイ旭硝子	理事	古閑俊彦 Japan Trade Center	理事	三浦清彦 Toyota Motor	理事	林 郁也 Mitsubishi (Thailand)	理事	三浦清彦 Toyota Motor
理事	小川博世 タイ実業	理事	浅田英治 帯人ボリスホテル	理事	森田安宏 Sumitomo Shoji	理事	三浦清彦 Toyota Motor	理事	島田滋敏 Japan Air Lines
理事	田中文雄 三井OSK Lines	理事	水谷一雄 ミスキケン	理事	石平厚一郎 Thai Hakuodo	理事	高瀬長幸 Marubeni Corp.	理事	崎山 洋 Sri Muang Insurance
監事	吉満 保 三井銀行	監事	玉垣正照 輸出入銀行	監事	新名政英	監事	小泉一郎 Export Import Bank	監事	小泉一郎 Export Import Bank

1980		1981		1982		1983		1984	
特命全権大使	(1/29) 小木曾本雄	特命全権大使	小木曾本雄	特命全権大使	小木曾本雄	特命全権大使	小木曾本雄	特命全権大使	橘 正忠
会長	三浦清彦 Toyota Motor	会長	三浦清彦 Toyota Motor	会長	山本庄太郎 Thai Daimaru	会長	高瀬長幸 Marubeni Corp.	会長	佐藤一朗 Toyota Motor
副会長	西野順治部 Toyonenka	副会長	西野順治部 Toyonenka	副会長 兼婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	副会長 兼婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	総務部長	笹川博伸 Toray Nylon Thai
副会長	吉田尚史 Mitsui Bank	副会長 兼会計部長	吉田尚史 Mitsui Bank	副会長 兼会計部長	吉満 保 Mitsui Bank	副会長	山本石根 The Bank of Tokyo	副会長 兼教育部長	矢 忠彬 日本郵船
総務部長	高瀬長幸 Marubeni Corporation	総務部長	高瀬長幸 Marubeni Corporation	総務部長	高瀬長幸 Marubeni Corporation	総務部長	笹川博伸 Toray Nylon Thai	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo
文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient
事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic
厚生部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	厚生部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	厚生部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	厚生部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	会計部長	松田道明 The Bank of Tokyo
会計部長	小野和夫 The Bank of Tokyo	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	会計部長	林 雄太郎 The Mitsui Bank	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company
青少年部長 兼教育部長	日高富士夫 Fuji Development	会報部長	山本庄太郎 Thai Daimaru	会報部長	山本石根 The Bank of Tokyo	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	会報部長	西村保孝 Japan Trade Center
会報部長	秦 佛之 Thai Daimaru	運動第1部長	和多田 寛 Mitsui & Co.	運動第1部長	和多田 寛 Mitsui & Co.	会報部長	日高富士夫 P.A. Company	運動第1部長	小林利雄 Tokio Marine
運動第1部長	小田寿男 Taisho Marine	運動第2部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	運動第2部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	運動第1部長	小林利雄 Tokio Marine	運動第2部長	吉田武史 Thai Daimaru
運動第2部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	クラブ部長	日高邦夫 Hitachi Sales	運動第2部長	松田嘉久 Matsuda & Co.	婦人部長	和多田 寛 Mitsui & Co.
婦人部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	クラブ部長	吉野修三 Mitsui OSK Line	広報部長	黒川哲嗣 Thai Kinoshita	クラブ部長	日高邦夫 Hitachi sales	クラブ部長	本多忠勝 Mitsubishi (Thailand)
クラブ部長	吉野修三 Mitsui OSK Line	広報部長	粟屋 忠 Japan Trade Center	教育部長	杉山泰夫 Mitsui OSK Line	広報部長	黒川哲嗣 Thai Kinoshita	広報部長	中山剛吉 Japan Airlines
広報部長	原田和幸 Japan Trade Center	教育部長	島田滋敏 Japan Air Lines	理事	西野順治部 Toyonenka	教育部長	黒川哲嗣 Thai Kinoshita	理事	西野順治部 Toyonenka
理事	園山裕三 Mitsui & Co.	理事	小野和夫 The Bank of Tokyo	理事	和多田 寛 Mitsui & Co.	理事	西野順治部 Toyonenka	理事	杉山泰夫 Mitsui OSK Line
理事	林 郁也 Mitsubishi (Thailand)	理事	奥住道次 Mitsubishi (Thailand)	理事	佐藤一朗 Toyota Motor	理事	和多田 寛 Mitsui & Co.	理事	林 雄太郎 Mitsui Bank
理事	竹多柳一 Teijin Polyester	理事	佐藤陽太郎 Teijin Polyester	理事	奥住道次 Mitsubishi (Thailand)	理事	佐藤一朗 Toyota Motor	理事	増田 茂 Toyota Motor
理事	吉野 晋 Thai Toray Textiles	理事	篠田 巖 Lucy Textiles	理事	笹川博伸 Toray Nylon Thai	理事	奥住道次 Mitsubishi (Thailand)	理事	日高邦夫 Hitachi sales
理事	島田滋敏 Japan Air Lines	理事	日高邦夫 Hitachi sales	理事	保科忠治 Avem motor	理事	粟屋 忠 Japan Trade Center	理事	山本みどり Bangkok Shuho
監事	土橋一雄 O.E.C.F.	監事	土橋一雄 O.E.C.F.	監事	増田尚紀 Export Import Bank	監事	上村 浩 Export Import Bank	監事	上村 浩 Export Import Bank
監事	増田尚紀 Export Import Bank	監事	増田尚紀 Export Import Bank	監事	影山俊郎 O.E.C.F.	監事	影山俊郎 O.E.C.F.	監事	影山俊郎 O.E.C.F.

1985		1986		1987		1988		1989	
特命全権大使	橋 正忠	特命全権大使	(2/7) 木内昭胤	特命全権大使	木内昭胤	特命全権大使	(11/16)木内昭胤	特命全権大使	岡崎久彦
会長	清峰太造 Mitsui & Co.	会長	藤永隆博 Marubeni Corp.	会長	古山 晃 Mitsubishi (Thailand)	会長	川本 一 C.Itoh	会長	藤永隆博 Marubeni Corp.
副会長	佐藤一朗 Toyota Motor	副会長	清峰太造 Mitsui & Co.	副会長	清峰太造 Mitsui & Co.	副会長 兼総務部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	副会長 兼総務部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand
副会長	藤永隆博 Marubeni Corp.	副会長 兼運動第1部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	副会長	藤永隆博 Marubeni Corp.	副会長	古閑啓一 Thai Ajinomoto	副会長 兼改善合理化委員長	笹川博伸 Toray Nylon Thai
総務部長	林 雄太郎 The Mitsui Bank	総務部長	田中博保 C.Itoh	総務部長	川本 一 C.Itoh	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo
文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient
事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	事業部長	小谷亀太郎 Pacific & Orient	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko
厚生部長	瀧川虎若 Takigawa Clinic	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	会計部長	金子正人 The Mitsui Bank	会計部長	吉岡龍太郎 The Bank of Tokyo
会計部長	松田道明 The Bank of Tokyo	会計部長	半谷高士 The Mitsui Bank	会計部長	花岡公人 The Bank of Tokyo	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company
青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	会報部長 アユタヤ記念事業	会報部長 NYK Lines	会報部長	石川直義 NYK Lines
会報部長	西村保孝 Japan Trade Center	会報部長	諸富忠男 JETRO Bangkok	会報部長	諸富忠男 JETRO Bangkok	運動第1部長	小川 光 Thai Konoke	運動第1部長 アユタヤ記念事業	小川 光 Thai Konoke
運動第1部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	運動第2部長	山本健治 Kanematsu Goshō	運動第1部長 兼会館移転検討委員長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	運動第2部長	丸 征司 Taisho Marine	運動第2部長	丸 征司 Taisho Marine
運動第2部長	園田茂起 Thai Ajinomoto	婦人部長	吉田武史 Thai Dainaru	運動第2部長	丸 征司 Taisho Marine	婦人部長	吉田 登 Tokyo Marine	婦人部長	吉田 登 Tokyo Marine
婦人部長	吉田武史 Thai Dainaru	クラブ部長	服部一清 Thai Toray Textiles	婦人部長	小谷寛三 Thai Asahi Glass	クラブ部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	クラブ部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.
クラブ部長	山本みどり Bangkok Shuho	広報部長	影木荘一郎 Japan Airlines	クラブ部長	半谷高士 Mitsui Bank	広報部長	市川 靖 Japan Airlines	広報部長	市川 靖 Japan Airlines
広報部長	中山剛吉 Japan Airlines	教育部長	石川直義 NYK Lines	教育部長	影木荘一郎 Japan Airlines	教育部長	吉岡龍太郎 The Bank of Tokyo	教育部長	金子正人 Mitsui Bank
教育部長	小林利雄 Tokyo Marine	理事 アユタヤ記念事業担当	西野順治郎 Toyomenka	教育部長 兼改善合理化委員長	石川直義 NYK Lines	改善合理化委員長	藤永隆博 Marubeni Corp.	理事	三村洋三 Toyomenka
理事	西野順治郎 Toyomenka	理事	佐藤一朗 Toyota Motor	理事 アユタヤ記念事業担当	西野順治郎 Toyomenka	理事	三村洋三 Mitsui & Co.	理事	清峰太造 Mitsui & Co.
理事	田中博保 C.Itoh	理事	園田うめ Nuallanant Sonoda Jems	理事	富谷泰生 Thai Daimaru	理事	清峰太造 Mitsui & Co.	理事	川本 一 C.Itoh
理事	園田うめ Nuallanant Sonoda Jems	理事	増田 茂 Mitsubishi (Thailand)	理事	古閑啓一 Thai Ajinomoto	理事	古山 晃 Mitsubishi (Thailand)	理事	古山 晃 Mitsubishi (Thailand)
理事	増田 茂 Mitsubishi (Thailand)	理事	山本みどり Bangkok Shuho	理事	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	理事	山本健治 Kanematsu Goshō	理事	古閑啓一 Thai Ajinomoto
監事	上村 浩 Export Import Bank	監事	赤松 中 Export Import Bank	監事	赤松 中 Export Import Bank	監事	赤松 中 Export Import Bank	監事	安芸洋一 O.E.C.F.
監事	影山俊郎 O.E.C.F.	監事	下村恭民 O.E.C.F.	監事	下村恭民 O.E.C.F.	監事	安芸洋一 O.E.C.F.	監事	上戸洋司 Export Import Bank

1990		1991		1992		1993		1994	
特命全権大使	岡崎久彦	特命全権大使	岡崎久彦	特命全権大使	(6/29)藤井宏明	特命全権大使	藤井宏明	特命全権大使	恩田 宗
会長	笹川博伸 Toray Nylon Thai	会長	三村洋三 Toyomenka	会長 兼カンパニープロパティ委員長	三村洋三 Toyomenka	会長	丸子博之 Mitsui & Co.	会長 兼カンパニープロパティ検討委員長	佐藤琢磨 Toyota Motor
副会長 兼総務部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	副会長 兼運営協議委員長	笹川博伸 Toray Nylon Thai	副会長 兼広報部長	水谷和正 Japan Airlines	副会長 兼安全対策委員長	福本昌弘 C.Itoh	副会長 兼安全対策委員長	福本昌弘 C.Itoh
副会長 兼会計部長	金子正人 The Mitsui Bank	副会長 兼厚生部長	川瀬量平 Thai Asahi Glass	副会長 兼運営協議委員長	福本昌弘 C.Itoh	副会長 兼広報部長	水谷和正 Japan Airlines	副会長 兼広報部長	水谷和正 Japan Airlines
文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	総務部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	総務部長	本多忠勝 Mitsubishi Thailand	総務部長	牧田繁雄 Thai Toray Textiles	総務部長	福生和彦 NYK (Thailand) Co.
事業部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuodo
厚生部長	上田耕一 Yuasa Battery	事業部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野彰司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.
青少年部長	日高富士夫 P.A. Company	会計部長	大井卓雄 The Bank of Tokyo	厚生部長	上田耕一 Yuasa Battery	厚生部長	大橋一郎 Thai Ajinomoto	厚生部長	大橋一郎 Thai Ajinomoto
会報部長	三村洋三 Toyomenka	青少年部長	日高富士夫 P.F. Export	会計部長	金子正人 The Mitsui Bank	会計部長	小山光俊 The Bank of Tokyo	会計部長	小山光俊 The Sakura Bank
運動第1部長 アユタヤ記念事業	小川 光 Thai Konoke	会報部長	上田耕一 Yuasa Battery	青少年部長	日高富士夫 P.F. Export	青少年部長	森田 鏡 Thai Asahi Glass	青少年部長	森田 鏡 Thai Asahi Glass
運動第2部長	黒木秀範 Taisho Marine	運動第1部長	高田政明 Yuasa Battery	会報部長	水谷四郎 JETRO Bangkok	会報部長	水谷四郎 JETRO Bangkok	会報部長	立石幾久治 JETRO Bangkok
婦人部長	高田政明 Mitsui OSK Line	運動第2部長	杉本匡章 Kawasaki Thailand	運動第1部長	中井 寿 Siew National	運動第1部長	中井 寿 Siew National	運動第1部長	中井 寿 Siew National
クラブ部長	川瀬量平 Thai Asahi Glass	婦人部長	黒木秀範 Taisho Marine	運動第2部長	杉本匡章 Kawasaki Thailand	運動第2部長	杉本匡章 Kawasaki Thailand	運動第2部長	杉本匡章 K Line (Thailand)
広報部長	市川 靖 Japan Airlines	クラブ部長	小川 光 Thai Konoke	婦人部長	舟山俊三 Thai Toray Textiles	婦人部長	小川 光 Toyomenka	婦人部長	三村洋三 Toyomenka
教育部長	吉岡龍太郎 The Bank of Tokyo	広報部長	水谷和正 Japan Airlines	クラブ部長	小川 光 Thai Konoke	クラブ部長	小川 光 Thai Konoke	クラブ部長	小川 光 Thai Konoke
改善合理化委員長	藤永隆博 Marubeni Corp.	教育部長	金子正人 The Mitsui Bank	教育部長	大井卓雄 The Bank of Tokyo	教育部長	小山光俊 The Sakura Bank	教育部長	大井卓雄 The Bank of Tokyo
理事	添田嘉春 NYK Lines	理事	高田政明 Mitsui OSK Line	理事	古閑啓一 Thai Ajinomoto	運営協議委員長	佐藤琢磨 Toyota Motor	運営協議委員長	牧田繁雄 Thai Toray Textiles
理事	杉本匡章 Kawasaki Thailand	理事	松木弘志 Mitsui & Co.	理事	丸子博之 Mitsui & Co.	会館購入担当理事	本多忠勝 Shin Shows Trading	理事	本多忠勝 Shin Shows Trading
理事	福本昌弘 C.Itoh	理事	福本昌弘 C.Itoh	理事	佐藤琢磨 Toyota Motor	理事	福生和彦 NYK (Thailand) Co.	理事	丸子博之 Mitsubishi (Thailand)
理事	宮田勝巳 Mitsubishi (Thailand)	理事	宮田勝巳 Mitsubishi (Thailand)	理事	宮田勝巳 Mitsubishi (Thailand)	理事	宮田勝巳 Mitsubishi (Thailand)	理事	宮田勝巳 Mitsubishi (Thailand)
理事	古閑啓一 Thai Ajinomoto	理事	石井利一 Marubeni Corp.	理事	石井利一 Marubeni Corp.	理事	石井昌司 Export Import Bank	理事	石井昌司 Export Import Bank
監事	安芸洋一 O.E.C.F.	監事	安芸洋一 O.E.C.F.	監事	石井昌司 Export Import Bank	監事	石井昌司 Export Import Bank	監事	石井昌司 Export Import Bank
監事	上戸洋司 Export Import Bank	監事	石井昌司 Export Import Bank	監事	古角光一 O.E.C.F.	監事	古角光一 O.E.C.F.	監事	古角光一 O.E.C.F.

1995		1996		1997		1998		1999	
特命全権大使	恩田 宗	特命全権大使	恩田 宗	特命全権大使	恩田 宗	特命全権大使	太田 博	特命全権大使	太田 博
会長	佐藤琢磨 Toyota Motor	会長	豊田資則 Itochu Corporation	会長	豊田資則 Itochu Corporation	会長	吉田能彦 Japan Airlines	会長	石平厚一郎 The Hakuho
副会長 兼広報部長	水谷和正 Japan Airlines	副会長 兼広報部長	水谷和正 Japan Airlines	副会長	高部昭雄 Thai Ashai Glass	副会長 兼文化部長	石平厚一郎 The Hakuho	副会長 兼運営協議委員長	村松吉明 Toyota Motor
総務部長	福生和彦 NYK (Thailand)	副会長	高部昭雄 Thai Ashai Glass	副会長	吉田能彦 Japan Airlines	総務部長	深海八郎 NYK (Thailand)	副会長	曾野明彦 Sumitomo Corp.
文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuho	総務部長 兼安全対策委員長	深海八郎 NYK (Thailand)	総務部長	深海八郎 NYK (Thailand)	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	総務部長	深海八郎 NYK (Thailand)
事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuho	文化部長	石平厚一郎 Thai Hakuho	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.
厚生部長	大橋一郎 Thai Ajinomoto	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会計部長	吉松 均 The Sakura Bank	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko
会計部長	本村博志 The Bank of Tokyo	厚生部長	大橋一郎 Thai Ajinomoto	厚生部長	鈴木 武 Thai Ajinomoto	会報部長	桑田 始 JETRO Bangkok	会計部長	佐藤雅春 B. Tokyo-Mitsubishi
青少年部長	森田 鏡 Thai Ashai Glass	会計部長	北山靖介 The Sakura Bank	会計部長	本村博志 The Bank of Tokyo	運動第1部長	鈴木重秋 National Thai	青少年部長	田村好正 Siew National
会報部長	立石幾久治 JETRO Bangkok	青少年部長	椿 輝夫 Marubeni Thailand	青少年部長	椿 輝夫 Marubeni Thailand	運動第2部長	藪 宏一 K Line (Thailand)	会報部長	桑田 始 JETRO Bangkok
運動第1部長	鈴木重秋 National Thai	会報部長	名尾良泰 JETRO Bangkok	会報部長	名尾良泰 JETRO Bangkok	婦人部長	曾野明彦 Sumitomo Corp.	運動第1部長	乾 信一 Thai Ashai Glass
運動第2部長	杉本匡平 K Line (Thailand)	運動第1部長	鈴木重秋 National Thai	運動第1部長	鈴木重秋 National Thai	クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	運動第2部長	安高真人 Japan Airlines
婦人部長	三村洋三 Toyomenka	運動第2部長	木殿 健 K Line (Thailand)	運動第2部長	藪 宏一 K Line (Thailand)	広報部長	豊田資則 Itochu Corporation	指宿 順 Thai Nishimatsu	指宿 順 Thai Nishimatsu
クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	婦人部長	三村洋三 Toyomenka	婦人部長	三村洋三 Toyomenka	教育部長	本村博志 The Bank of Tokyo	広報部長	豊田資則 Itochu Corporation
教育部長	小山光俊 The Sakura Bank	クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	運営協議委員長	村松吉明 Toyota Motor	教育部長	吉松 均 The Sakura Bank
運営協議委員長	松田日吉 Toray Fibers (Thailand)	教育部長	本村博志 The Bank of Tokyo	教育部長	吉松 均 The Sakura Bank	連絡網整備委員長	西川昶弘 Toray Group	連絡網整備委員長	西川昶弘 Toray Group
理事	本多忠勝 Shin Showa Trading	運営協議委員長	松田日吉 Toray Fibers	運営協議委員長	岡部 繁 Luckyet(Thailand)	理事	家永公弘 Mitsui & Co.	ラムウォン益誦大会 実行委員長	梶谷健三 Japan Airlines
理事	丸子博之 Mitsui & Co.	理事	本多忠勝 Shin Showa Trading	連絡網整備委員長	荒 勝彦 Nippon Steel Corp.	理事	有川武俊 Mitsubishi (Thailand)	理事	家永公弘 Mitsui & Co.
理事	浜田真二 Mitsubishi (Thailand)	理事	家永公弘 Mitsui & Co.	理事	家永公弘 Mitsui & Co.	理事	椿 輝夫 Marubeni Thailand	理事	有川武俊 Mitsubishi (Thailand)
理事	石井利一 Mitsubishi (Thailand)	理事	浜田真一 Mitsubishi (Thailand)	理事	浜田真二 Mitsubishi (Thailand)	理事	鈴木 武 Thai Ajinomoto	理事	椿 輝夫 Marubeni Thailand
理事	豊田資則 Itochu Corporation	理事	佐藤琢磨 Toyota Motor	理事	村松吉明 Toyota Motor	理事	橋爪薫光 Tomen (Thailand)	理事	橋爪薫光 Tomen (Thailand)
				理事	本多忠勝 Shin Showa Trading	理事	長尾俊郎 THASCO Chemical	理事	和氣良文 Shin Showa Trading
				理事	三村洋三 Toyomenka				
監事	石井昌司 Export Import Bank	監事	河野善彦 O.E.C.F.	監事	河野善彦 O.E.C.F.	監事	黄金井健一 Export Import Bank	監事	佐々木克己 Export Import Bank
監事	古角光一 O.E.C.F.	監事	黄金井健一 Export Import Bank	監事	黄金井健一 Export Import Bank	監事	森本裕二 O.E.C.F.	監事	森本裕二 O.E.C.F.

2000		2001		2002		2003		2004	
特命全権大使	赤尾信敬	特命全権大使	赤尾信敬	特命全権大使	時野谷敦	特命全権大使	時野谷敦	特命全権大使	時野谷敦
会長	石平厚一郎 Thai Hakuho	会長	石平厚一郎 Thai Hakuho	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.
副会長 兼運営協議委員長	高部昭雄 Thai Ashai Glass	副会長	高部昭雄 Thai Ashai Glass	副会長	高部昭雄 Thai Ashai Glass	副会長	小泉修平 Siew National	副会長	政岡 勲 DENSO (Thailand)
副会長 兼運営協議委員長	村松吉明 Toyota Motor	副会長	須藤裕雄 Mitsui & Co.	副会長	北村 博 Itochu (Thailand)	副会長	須藤裕雄 Mitsui & Co.	副会長	中上川秀一 Sri Muang Insurance
総務部長	石田 徹 NYK (Thailand)	総務部長	石田 徹 NYK (Thailand)	総務部長	石田 徹 NYK (Thailand)	総務部長	伊藤 誠 Marubeni Thailand	総務部長	中田 徹 Marubeni Thailand
文化部長	森 光 Marubeni Thailand	文化部長	森 光 Marubeni Thailand	文化部長	森 光 Marubeni Thailand	文化部長	石塚哲士 Itochu (Thailand)	文化部長	甲斐 章 Sumitomo Corp.
事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	政岡 勲 DENSO (Thailand)	事業部長	政岡 勲 DENSO (Thailand)	事業部長	塩谷 勝 S.Ochikid Co.
厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	厚生部長	日高龍雄 Hidaka Yoko	会計部長	荒牧 功 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	荒牧 功 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	荒牧 功 Sumitomo Mitsui B.
会計部長	佐藤雅春 B. Tokyo-Mitsubishi	会計部長	佐藤雅春 B. Tokyo-Mitsubishi	青少年部長	原多正信 School for You	青少年部長	原多正信 School for You	青少年部長	原多正信 School for You
青少年部長	田村好正 Siew National	青少年部長	小泉修平 Siew National	会報部長	大辻義弘 JETRO Bangkok	会報部長	黒田篤也 JALUX Asia	会報部長	三宅敏一 Sampo Japan
会報部長	大辻義弘 JETRO Bangkok	会報部長	大辻義弘 JETRO Bangkok	運動第1部長	吉田勝也 JALUX Asia	運動第1部長	吉田勝也 JALUX Asia	運動第1部長	吉田勝也 JALUX Asia
運動第2部長	安高真人 K Line (Thailand)	運動第2部長	安高真人 K Line (Thailand)	運動第2部長	安高真人 K Line (Thailand)	運動第2部長	安高真人 K Line (Thailand)	運動第2部長	林 啓 Itochu (Thailand)
婦人部長	曾野明彦 Sumitomo Corp.	婦人部長	椿村 穂 Sumitomo Corp.	婦人部長	レノカームカンパニー Renka & Co.	婦人部長	レノカームカンパニー Renka & Co.	婦人部長	レノカームカンパニー Renka & Co.
クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	クラブ部長	指宿 順 Thai Nishimatsu	クラブ部長	中村怜次 Thai Takenaka	クラブ部長	中村怜次 Thai Takenaka	クラブ部長	山田時男 Takisha
広報部長	橋爪薫光 Tomen (Thailand)	広報部長	橋爪薫光 Tomen (Thailand)	広報部長	山崎和彦 Sumitomo Corp.	広報部長	山崎和彦 Sumitomo Corp.	広報部長	江頭浩司 Hakuhodo Bangkok
教育部長	吉松 均 The Sakura Bank	教育部長	吉村善裕 Sumitomo Mitsui B.	教育部長	小泉修平 Siew National	運営協議委員長	野呂 剛 Mitsubishi (Thailand)	教育部長	向井 洋 B. Tokyo-Mitsubishi
連絡網整備委員長	西川昶弘 Toray Group	運営協議委員長	佐々木良一 Toyota Motor	運営協議委員長	佐々木良一 Toyota Motor	連絡網整備委員長	小川川洋三 NYK Logistics	運営協議委員長	米田俊二 Mitsubishi (Thailand)
ラムウォン益誦大会 実行委員長	梶谷健三 Japan Airlines	連絡網整備委員長	門脇 稔 Thai Toray Fibers	ラムウォン益誦大会 実行委員長	関 仁 Japan Airlines	ラムウォン益誦大会 実行委員長	関 仁 Japan Airlines	連絡網整備委員長	横山純一 NYK Logistics
ラムウォン益誦大会 実行副委員長	和氣良文 Shin Showa Trading	ラムウォン益誦大会 実行委員長	関 仁 Japan Airlines	理事	須藤裕雄 Mitsui & Co.	チャリティー基金 運営委員長	塩谷 勝 S.Ochikid Co.	ラムウォン益誦大会 実行委員長	若崎精一 Japan Airlines
	有川武俊 Mitsubishi (Thailand)		和氣良文 Shin Showa Trading		野呂 剛 Mitsubishi (Thailand)		佐々木良一 Toyota Motor		伊藤周一 Panasonic (Thailand)
理事	須藤裕雄 Mitsui & Co.	理事	有川武俊 Mitsubishi (Thailand)	理事	伊藤 誠 Marubeni Thailand	理事	向井 洋 B. Tokyo-Mitsubishi	チャリティー・バザー 運営委員長	井澤 猛 Mitsui & Co.
理事	豊田資則 Itochu Corporation	理事	北村 博 Itochu (Thailand)	理事	向井 洋 B. Tokyo-Mitsubishi	監事	藤沼敏雄 Japan Bank of Int.	チャリティー基金 運営委員長	中津川昌樹 Toyota Motor
	太田元司 Sri Muang Insurance		太田元司 Sri Muang Insurance		中上川秀一 Sri Muang Insurance		中上川秀一 Sri Muang Insurance		松澤 巧 Thai Ajinomoto
監事	藤沼敏雄 Japan Bank of Int.	監事	藤沼敏雄 Japan Bank of Int.	監事	藤沼敏雄 Japan Bank of Int.			監事	宮尾泰助 JIBC
									金子 浩 Mitsui Corporate B.

2005		2006		2007		2008		2009	
特命全権大使	時野谷敬	特命全権大使	小林秀明	特命全権大使	小林秀明	特命全権大使	小町恭士	特命全権大使	小町恭士
会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.
副会長	玉垣洋一 Sri Muang Insurance	副会長	政岡 勲 DENSO (Thailand)	副会長	政岡 勲 DENSO (Thailand)	副会長	山本明夫 Mitsui & Co.	副会長	溝之上純一 Mitsui & Co.
副会長	政岡 勲 DENSO (Thailand)	副会長	米谷俊二 Mitsubishi (Thailand)	副会長	米谷俊二 Mitsubishi (Thailand)	副会長	古田勝也 JVK Holdings	副会長	古田勝也 JVK Holdings
総務部長	内藤 琢 Manubeni Thailand	総務部長	江頭浩司 Thai Hakuholdo	総務部長	江頭浩司 Thai Hakuholdo	副会長・広報部長 会長・会館改善委員長	江頭浩司 Thai Hakuholdo	副会長・広報部長 会長・会館改善委員長	江頭浩司 Thai Hakuholdo
文化部長	甲斐 章 Sumitomo Corp.	文化部長	石塚一夫 NYK Logistics	文化部長	石塚一夫 NYK Logistics	総務部長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	総務部長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)
事業部長	塩谷 勝 S.Orchid Co.	厚生部長	原多正信 Naughty Kids Party	厚生部長	原多正信 Naughty Kids Party	文化部長	曾我貴也 NYK Logistic s.	文化部長	曾我貴也 NYK Logistic s.
会計部長	荒牧 功 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	中嵩知義 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	中嵩知義 Sumitomo Mitsui B.	事業部長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins	事業部長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins
青少年部長	原多正信 School for You	青少年部長	福地史郎 Irochu (Thailand)	青少年部長	福地史郎 Irochu (Thailand)	厚生部長	原多正信 Naughty Kids Party	厚生部長	原多正信 Naughty Kids Party
会報部長	辻本知伸 Thai Cold Rolled Steel	会報部長	辻本知伸 Thai Cold Rolled Steel	会報部長	辻本知伸 Thai Cold Rolled Steel	会計部長	佐藤誠治 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	山川 広 B. Tokyo-MitsubishiUFJ
運動第1部長	古田勝也 JVK Holdings	運動第1部長	渡辺一博 Sri Muang Insurance	運動第1部長	渡辺一博 Sri Muang Insurance	青少年部長	福地史郎 Irochu (Thailand)	青少年部長	福本隆次 Irochu (Thailand)
運動第2部長	福地史郎 Irochu (Thailand)	運動第2部長	古田勝也 JVK Holdings	運動第2部長	古田勝也 JVK Holdings	会報部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	会報部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.
婦人部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	婦人部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	婦人部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	運動第1部長	渡辺一博 Sri Muang Insurance	運動第1部長	渡辺一博 Sri Muang Insurance
クラブ部長	山田時男 Takisha	クラブ部長	山田時男 Takisha	クラブ部長	山田時男 Takisha	運動第2部長	辻本知伸 Thai Cold Rolled Steel	運動第2部長	辻本知伸 Thai Cold Rolled Steel
広報部長	江頭浩司 Hakuholdo Bangkok	広報部長	森本康宏 Marubeni Thailand	広報部長	森本康宏 Marubeni Thailand	クラブ部長	遠藤雅之 The Takenaka	クラブ部長	遠藤雅之 The Takenaka
教育部長	二村英之 B. Tokyo-Mitsubishi	教育部長	山川 広 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	教育部長	山川 広 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	教育部長	山川 広 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	教育部長	佐藤誠治 Sumitomo Mitsui B.
運営協議委員長	米田俊二 Mitsubishi (Thailand)	運営協議委員長	松澤 巧 Ajinomoto Co.	運営協議委員長	松澤 巧 Ajinomoto Co.	運営協議委員長	山辺福次郎 Mitsubishi (Thailand)	運営協議委員長	實方 洋 Marubeni Thailand
連絡調整委員長	石塚一夫 NYK Logistics	連絡調整委員長	岩崎精一 Japan Airlines	連絡調整委員長	岩崎精一 Japan Airlines	連絡調整委員長 安全対策委員長	實方 洋 Marubeni Thailand	連絡調整委員長 安全対策委員長	山辺福次郎 Mitsubishi (Thailand)
ラムウォン益殖大会 実行委員長	岩崎精一 Japan Airlines	ラムウォン益殖大会 実行委員長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	ラムウォン益殖大会 実行委員長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	ラムウォン益殖大会 実行委員長	大脇正人 Japan Airlines	ラムウォン益殖大会 実行委員長	大脇正人 Japan Airlines
ラムウォン益殖大会 実行副委員長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	ラムウォン益殖大会 実行副委員長	細間政明 Sumitomo Corp.	ラムウォン益殖大会 実行副委員長	細間政明 Sumitomo Corp.	ラムウォン益殖大会 実行副委員長	黒田泰男 Sumitomo Corp.	ラムウォン益殖大会 実行副委員長	黒田泰男 Sumitomo Corp.
チャリティーバザー 運営委員長	西坂誠司 Toyota Motor	チャリティーバザー 運営委員長	宇野博人 The Kumagai Sugar	チャリティーバザー 運営委員長	宇野博人 The Kumagai Sugar	チャリティー基金 運営委員長	園田光宏 Toyota Motor	チャリティー基金 運営委員長	宮川尚人 Toyota Motor
チャリティー基金 運営委員長	佐々木康夫 Toyota Motor	チャリティー基金 運営委員長	佐々木康夫 Toyota Motor	チャリティー基金 運営委員長	佐々木康夫 Toyota Motor	食堂運営委員長	藤本豊治 Asian Precision Co.	食堂運営委員長	藤本豊治 Asian Precision Co.
食堂運営委員長	松澤 巧 Ajinomoto Co.	食堂運営委員長	塩谷 勝 S.Orchid Co.	食堂運営委員長	塩谷 勝 S.Orchid Co.	理事	甲谷真人 Ajinomoto Co.	理事	甲谷真人 Ajinomoto Co.
監事	宮尾泰助 J&IC	監事	戸島仁嗣 J&IC	監事	戸島仁嗣 J&IC	監事	金子 浩 Mizuho Corporate B.	監事	安住泰典 Mizuho Corporate B.
監事	金子 浩 Mizuho Corporate B.	監事	金子 浩 Mizuho Corporate B.	監事	金子 浩 Mizuho Corporate B.	監事	戸島仁嗣 J&IC	監事	大参裕平 J&IC

2010		2011		2012		2013	
特命全権大使	小町恭士	特命全権大使	小町恭士	特命全権大使	小林誠二	特命全権大使	佐藤 重和
会長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins	会長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins	会長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins	会長	大橋貴治部 Tilken & Gibbins Co., Ltd.
副会長	棚田京一 Toyota Motor	副会長	古澤 実 Mitsubishi (Thailand)	副会長	伊佐範明 Mitsubishi (Thailand)	副会長	古田 勝也 JVK Holdings Co., Ltd.
副会長	古田勝也 JVK Holdings	副会長	古田勝也 JVK Holdings	副会長	古田勝也 JVK Holdings	副会長	水嶋 英勝 Marubeni (Thailand) Co., Ltd.
副会長	江頭浩司 Thai Hakuholdo	副会長	江頭浩司 Thai Hakuholdo	副会長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	副会長	伊藤 周一 Panasonic (Thailand) Co., Ltd.
総務部長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	総務部長	伊藤周一 Panasonic (Thailand)	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	総務副部長	川端 太 Hakuholdo Bangkok Co., Ltd.
文化部長	佐藤 実 NYK Logistics	文化部長	佐藤 実 NYK Logistics	厚生部長	前田恒明 Sumitomo Corp.	総務副部長 兼厚生部長	平松 宗則 NTT Communications (Thailand) Co., Ltd.
事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	事業部長	小野雅司 Kikuya Siam Corp.	会計部長	八亀 博 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	三石 基 The Bank of Tokyo-Mitsubishi UFJ, Ltd.
厚生部長	稲富哲夫 Thai Cold Rolled Steel	厚生部長	稲富哲夫 Thai Cold Rolled Steel	青少年部長	安原正人 Irochu (Thailand)	理事	小野 雅司 Kikuya Siam Corporation, Ltd.
会計部長	西崎龍司 Sumitomo Mitsui B.	会計部長	桑原昌宏 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	会報部長	稲富哲夫 Thai Cold Rolled Steel	文化部長	石井 敬太 Irochu (Thailand) Ltd.
青少年部長	福本隆次 Irochu (Thailand)	青少年部長	安原正人 Irochu (Thailand)	運動第1部長	近内保利 Tokyo Marine Sri Muang	婦人部長	中野 哲也 Ajinomoto Co., Inc. Asian Regional Headquarters
会報部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	会報部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	運動第2部長	向山和秀 Toyota Motor	広報部長	宮治 豊 NYK Line (Thailand) Co., Ltd.
運動第1部長	渡辺一博 Sri Muang Insurance	運動第1部長	近内保利 Tokyo Marine Sri Muang	婦人部長	柴田繁教 Toshiba Asia Pacific	教育部	レナカー・ムカガント Renuka & Company Co., Ltd.
運動第2部長	原多正信 Naughty Kids Party	運動第2部長	柴田繁教 Toshiba Asia Pacific	クラブ部長	高橋正剛 The Kajima Co.	運動第1部長	近内 保利 Tokyo Marine Insurance (Thailand) Public Co., Ltd.
クラブ部長	遠藤雅之 The Takenaka	クラブ部長	遠藤雅之 The Takenaka	広報部長	佐藤 実 NYK Logistics	運動第2部長	神島 清司 Toyota Motor Asia Pacific Engineering & Manufacturing Co., Ltd.
教育部長	桑原昌宏 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	教育部長	西崎龍司 Sumitomo Mitsui B.	教育部長	レナカー・ムカガント Renuka & Co.	クラブ部長	浜田 潤司 The Kajima Co., Ltd.
ラムウォン益殖大会 実行委員長	北野俊勝 Japan Airlines	ラムウォン益殖大会 実行委員長	北野俊勝 Japan Airlines	ラムウォン益殖大会 実行委員長	北野俊勝 Japan Airlines	会報部長	稲富 哲夫 Sahavijai Steel Industries P.C.L.
チャリティーバザー 実行委員長	山辺福次郎 Mitsubishi (Thailand)	チャリティーバザー 実行委員長	采野 進 Mitsui & Co.	チャリティーバザー 実行委員長	采野 進 Mitsui & Co.	青少年部長	黄 偉健 Mitsui & Co.(Thailand) Ltd.
チャリティー基金 運営委員長	黒田泰男 Sumitomo Corp.	チャリティー基金 運営委員長	前田恒明 Sumitomo Corp.	チャリティー基金 運営委員長	二石 基 B. Tokyo-MitsubishiUFJ	厚生部長	前田 恒明 Sumitomo Corporation (Thailand) Ltd.
総務副部長	甲谷真人 Ajinomoto Co.	総務副部長	甲谷真人 Ajinomoto Co.	総務副部長	甲谷真人 Ajinomoto Co.	ラムウォン益殖大会 実行副委員長	北野 俊勝 Japan Airlines Co., Ltd.
食堂運営委員長	石井良一 R.M.S. Ltd.	食堂運営委員長	石井良一 R.M.S. Ltd.	総務副部長	川端 太 Hakuholdo Bangkok	チャリティーバザー 実行委員長	古澤 実 Mitsubishi Co.(Thailand) Ltd.
理事	溝之上純一 Mitsui B.	理事	小林久訓 Toyota Motor	食堂運営委員長	石井良一 R.M.S. Ltd.	チャリティー基金 運営委員長	八亀 博 Mitsubishi Co.(Thailand) Ltd.
理事	伊佐範明 Marubeni Thailand	理事	伊佐範明 Marubeni Thailand	理事	古澤 実 Mitsubishi (Thailand)	理事	石井 良一 Ryo Multi Service Ltd Partnership
監事	安住泰典 Mizuho Corporate B.	監事	花岡 宏 J&IC	監事	花岡 宏 J&IC	監事	花岡 宏 Japan Bank for International Cooperation
監事	大参裕平 J&IC	監事	武内秀行 Mizuho Corporate B.	監事	武内秀行 Mizuho Corporate B.	監事	武内 秀行 Mizuho Corporate Bank Ltd.

歴代会長、会員から 100周年に寄せて



会長在任当時の思い出

第31代会長／元三井物産
園山 裕三

タイ国日本人会創立100周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

私が1977年にバンコクに赴任した時、我々を取り巻く環境は政治的にも経済的にも大変厳しい時代でありました。政治的には、75年サイゴン陥落に端を発し、78年にベトナムによるカンボジア侵攻、更にプノンペン陥落という緊迫した情勢の中で、社会主義体制をとるラオス、ビルマ(今のミャンマー)と国境を接するタイ国に、もし万一、ベトナムが侵攻、赤化するような事態が起きれば隣接するアセアン諸国も将棋倒しのよう一気に共産化するという所謂“ドミノ理論”がカントリーリスクの観点から真剣に議論された時代であり、日本の新聞社特派員が17～18人、バンコクに駐在していました。

この緊迫した事態は、日系企業、日本人社会にとっても大きな問題でしたが、結果的には全く取り越し苦労に終わったのは幸いです。

このような事態を通して学んだことは、タイ国における王室の存在であり国民の王室に対する敬愛、至誠のまごころが、タイでのゲリラ活動、共産化を阻んだ最大の理由であると強い印象を受けました。

ところで、日本人会100周年と聞くと、私が当時勤務していた泰国三井物産も2006

年に100周年を祝ったことを思い出します。日本人会で旧知の方々と宴会場でお目にかかり旧交を温めました。三十数年のブランクはすぐに埋まりました。

諸先輩が一世紀に亘り日本人会に関わり合い、発展のために尽力したり、又、お世話になってきただろうことに思いをいたす時、日本人会との連綿とした絆に感慨深いものがありました。

日本人会設立の目的の一つは“在留邦人の子女教育の向上”にあります。

私の在勤中の1979年頃から日本人学校の生徒数の増加と校舎の老朽化のため新校舎建設の問題が持ち上がりました。いろいろ紆余曲折がありましたが、自前の校舎建設のため約2万平方メートルの土地を取得することができ、一方、総工費が17億円が必要なことも分かりました。日本政府から5億円補助金下付が決定。残り12億円は在タイ日本企業及び個人の寄付によって賄うことになり、これの具体化のため、JCC会頭を募金委員長とする建設資金募金委員会が設置されました。

私は80年4月、JCC会頭を仰せ付かり、日本人会会長に続きJCC募金委員長の立場で日本人学校建設という使命の一端を担うことができたのも良い思い出であります。その

後、関係者の皆様の努力により82年6月、盛大な落成式を迎えられたと帰国後に聞き、心から嬉しく思いました。

バンコク在留邦人は現在、ニューヨーク、ロンドンに次ぐ5番目の規模に拡大し、日本人会会員は1万人を超したとか。

日本企業の海外シフトは今後ますます加速するだろうし、バンコク日本人会の地域社会に対する貢献度も尚一層大きくなるものと思います。

会員皆様のご発展と日本人会の更なる繁栄を祈念いたします。

会長在任当時の思い出

第36代会長／元タイトヨタ社長

佐藤 一郎

タイ国日本人会創立100周年、誠におめでとうございます。タイを第2の故郷と自認する私は心よりお慶び申し上げますと共に、創立より今日までの100年間、日本人会の運営と発展にご尽力された歴代の会長、理事、事務局の皆様及びご協力ご支援下さった会員の皆様、そして関係する諸機関の方々々に心より敬意と感謝を表したいと思います。

一、100周年に際し日本人会の関係冊子を見る。

(1)いま、私の手許に創立50周年記念誌、70周年記念誌、80周年記念誌の三冊と私が第36代会長を務めさせて頂いた時の就任のご挨拶(クルンテープ1984年6月号)、会長総会報告(同1985年5月号)、チャリティーTVドラマ「山田長政」のタイ語脚本を蔵書より取り出し、久しぶりに読み耽りました。50周年、70周年に私はバンコクに赴任中でしたが読み進むにつれ、つい先日の様に想い起こし82歳の現在より30歳、50歳の頃にタイムスリップしております。

記念誌3冊には日本人会の歴史、バンコクの今昔、それぞれの時代の出来事、お寺めぐり、歳時記など、大変参考になる寄稿が上手に編集されており、改めて勉強になり

ました。

(2)日本人会の会員数を見ると

1913年9月 泰国日本人会創立 200名

1953年4月 戦後再発足 130名

1963年9月 50周年 630名

1983年11月 70周年 2880名

1993年12月 80周年 7105名

2012年末現在 7800名

1985年のプラザ合意による円高対策として、1987年頃より1990年代前半にかけて集中豪雨的と言われた日本企業による直接投資の急増が日本人会会員の急増にも良く表れています。

二、会長在任の1年間

(1)私が会長に就任した1984年度は予定された大きな行事もなく、就任ご挨拶では会長として取り組んでいきたい次の項目を挙げました。

①会費をお納め頂いている皆様に、どうすれば「入会して良かった」と思って頂けるか、またどうすれば未入会の日本人の方々にとりでも多く入会して頂けるか。

②総会でご要望のあった日本人会の運営と業務処理の改善合理化

③日本人会事務局、食堂に4S(整理・整頓・清掃・清潔)運動の展開

④日本人会の目的のひとつである「日タイ親善」の促進

(2) 此れ等の目標の実現には1年という会長在任期間中に全て達成することは難しく、課題を明示して取り組み実行継続していく事に意義があると考えましたので今日の理事会においても「運営協議委員会」として不撓の改善に取り組んで頂いております。

(3) 日本人会の理事に始めて女性理事として山本みどりさん(バンコク週報)に就任して頂き、1985年度には更に園田うめさん(園田宝石店)が就任され2名の女性理事より女性の視点で建設的なご提案ご意見を頂けるようになりました。

(4) 日本人会の会章について会員の皆様より多数ご応募頂き、小委員会・理事会で検討審議の結果、現在の会章に決定いたしました。今風ではありませんが、日本人会100年の歴史を感じさせてくれるデザインと思っております。

三、会長在任前後の思い出

1982年 ラッタナコーシン200年祭始まる
日本政府より青少年センターを寄贈

1983年 日本人会創立70周年記念行事
中曽根首相・安倍外相ご来タイ
バンコク40年ぶりの大洪水
チャリティーTVドラマ「山田長政」放映

(1) 私の1代前の高瀬長幸第35代会長は、ラッタナコーシン200年祭、日本人会創立



70周年記念行事、中曽根首相・安倍外相ご来タイご一行の歓迎会、40年ぶりのバンコク大洪水災害支援などに日本人会会長として大変なご尽力ご苦勞をされました。

私は記念誌編集のお手伝い、記念誌に「タイ・マネジメント」寄稿とチャリティーTVドラマ「山田長政」に協力出演した程度です。

また、小谷亀太郎理事の日本人納骨堂、アユタヤ日本人町跡、カンチャナブリー慰霊塔などの保守・改善及び日本人会館移転計画にかける熱意、本多忠勝理事の日本人会館移転実務や後述のチャリティーTVドラマ「山田長政」制作に際し日本・タイ双方の関係者との折衝実務に奔走されたことなどが、私の記憶に鮮明に残っており深く敬意を表したいと想います。

(2)チャリティーTVドラマ「山田長政」出演の想い出

このドラマはプーミポン国王の御母君のお誕生日を記念し、御母君が主宰される奉仕医師団の基金を募るチャリティーTVドラマとして企画されました。

企画／チャートチャーイ元首相、首相夫人クンジンブルワン

脚本・演出／ソムポップ先生(著名な劇作家)

出演／山田長政＝アディサイ(後の商業大臣)、恋人お雪＝チャイティップさん

その他、ビアシン副社長、陸軍少将、警察少将、上院議員、官吏、チュラ大教授、病院長などチャートチャーイ支援者グループ約50名の素人俳優、日本人は本多忠勝理事と私、及び日本人駐在員の奥様4名のみ

協賛／日本大使館、日本人会、日本人商工会議所、日本側の諸費用を負担

稽古・ロケ／チャートチャーイ邸、ムアングボーラーン、日本料理店大黒

衣装・かつら・小道具／松竹衣装(株)

時代考証・メーキャップ・着付けなどに日本人専門家を招請

ストーリー／山田長政の日本からタイに渡るシーンに始まり、アユタヤー王朝のソンタム国王に忠誠を尽くし親衛隊長に出世していく様子やタイ人との交流、お雪との恋などナコンシータマラートへ行くまでを描いた2時間ドラマ

寄付金受付／放映中にタイ全国より寄付の申出がTV局(7チャンネル)に用意された電話に入り、タイ人女性約20名が応答、名前・住所・寄付金額を記録しドラマのインターバルの間に出演者が交代で寄付者19名づつ読み上げる。

寄付金総額／323万バーツ(3230万円)国王の御母君が催された慰労会にチャートチャーイ元首相以下全員がお招きを受け、その席で奉仕医師団基金として寄付金を献上した。

このドラマは企画・脚本・演出・出演者全てタイ側による制作であり日本側よりその内容に一切口を出さない画期的なドラマで、タイのマスコミや視聴者に大好評をほくし日タイ友好親善に寄与したと思っています。

日本人会の本多理事と私が出演したひとコマは、学問所の同窓友人4名が料理屋に集まって、山田長政の文武両道の高い知識と能力を生かすため足軽奉公をやめてアユタヤーへの海外雄飛を勧めるシーンでした。出演はひとコマでしたが、チャートチャーイ邸やムアングボーラーンでの出演者達との交流・雑談に楽しい時間を持つことが出来、また勤務する会社のタイ人従業員にも好感を以て迎えられました。

四、現在日本人会会員7800名、日本人商工会議所1300社、実際には此の5倍以上の日本人、日系企業がタイ国タイ社会に大変お

世話になっています。1970年代前半、日本商品の氾濫と対日貿易の赤字拡大が批判の対象となりタイ全国学生センター主導による反日デモや日本商品不買運動が起こりましたが、それを切っ掛けに日系企業は「良き企業市民」「現地社会への貢献」という理念を以て反省し、今日では技術移転・経営の現地化と共にタイの工業・経済の発展、輸出促進、雇用増大などの面で大きく貢献していることは事実です。

そして1997年のアジア通貨危機直後の日系企業の対応や2011年の大洪水後の対応は、従業員を解雇せずタイ人従業員と一緒に事業の回復や施設の復旧に当たり、不退職の理念で立ち向かった日系企業に対しタイの政府・学者・マスコミ・社会・従業員から高く評価され、現地日本とタイの関係は他の何処の国と比べても最も友好的な状態にあると言えます。

日本人会100周年に当たり、タイ在住の日本人・日系企業はそれに甘えることなく、奢らず慢心せず、日本の尺度で測ることなく、タイの国民性・価値観・社会労働慣行などを良く勉強し理解尊重し更により良い関係に向けて一層の努力が肝要と思っております。

タイ国日本人会百周年に寄せて

第37代会長／元三井物産

清峰 太造

タイ国日本人会百周年、誠におめでとうございませう。

私は最初の海外勤務がタイ国で、今から50年前の1962～66年の4年間、2度目が1984～90年の6年間、合計10年におよび、タイは私にとって忘れられない第二のふるさとです。

50年前といえば、タイの人口は3千万人、ドンムアン空港からバンコク市内までは、今のような高速道路はなく、のどかな田園風景が連なっていました。

バンコク市内でもサトーン、ラマ四世、ワイヤレス通りなど主要道路は殆ど、堀割り運河に沿って張り巡らされ、土手には火焰樹などの並木が繋がる、長閑な風情に満ちあふれていました。

人々は経験な仏教徒で、微笑みの国と謂われるに相応しい、私たち日本人にとっても大変親しみ易い国でした。

2度目に訪れた時、タイは経済的に困窮し、IMFの管理下に置かれていました。我々商社もタイの輸出促進に努力するよう、タイ政府から要請を受けていました。ところが1985年9月、ニューヨークでのG5によるプラザ合意を受けて、円の急激な切り上げが進行しました。

これにより1986年以降、日本からタイへ

の企業進出が怒濤の勢いで始まり、これが現在に至っております。

タイの経済は大きく回復し、その後の発展には目を見張るものがあります。

2度目の勤務の間に、タイ国日本人会会長と商工会議所会頭を務めましたが、日本人会の活動で印象に残るのは新会館の取得でした。

問題は多額の所要資金の調達方法にありましたが、前述の通り'86年以降の日本企業進出が続いていました。

企業の社員、つまり個人会員は、転勤により回転しますが、企業つまり法人会員は、長期に在タイ活動を継続するのが前提となっている。従って長期滞在が前提の企業の賛助会費を一定期間前払いして頂くこととし、結果として皆さんのご賛同を得ることが出来、立派な新会館に移転することが出来ました。

会議所の時には、アユタヤの日本人町の記念施設の建設があり、これの資金集めに苦労しました。

その後転勤で帰国しましたが、後日出張で訪タイした時に、アユタヤに足を伸ばして感激しました。

日本人会の新しい百年に向けて、今後も日タイ両国の友好関係が益々発展して行くことを心から願うものです。

タイ国日本人会の思い出

第38・41代会長／元丸紅（株）

藤永 隆博

私は、社命により三度に亘りバンコックに駐在しました。

第一回目は1966年～1972年

第二回目は1974年～1980年

第三回目は1984年～1991年

合計足掛け20年、タイとのご縁が繋がった訳ですが、日本人会とも最初の駐在時から、その都度会員として種々お世話になりました。

特に三度目の駐在時は、理事、会長（1986年度及び1989年度）を拝命し微力乍らも会の改善合理化を目指し努力を傾注しました。

1980年代の後半は、丁度タイ経済が急成長を遂げアセアンのリーダー格として世界から注目を浴びている時期でした。色々な制度改革も次々と実施され、外国人若しくは外国法人が土地・家屋の所有が認められる方向性が示されました。

当時日本人会は、南サートンの一角に古い軒家を借り受け日本人会館として使用しておりました。古い家屋で雨漏りや隙間風が通常という中で、家賃は年々高騰を余儀なくされておりました。

私の前任の日本人会会長清峰氏（三井物産）の時代に会館移転検討委員会の設置が決定され賃借ベース（家賃は予算月10



日本人会館買い取り検討理事会の一コマ
藤永隆博会長（正面）と本多忠勝副会長（右）

万バーツ程度）で新しいビルのスペース探しが始まり、プロンチット通り、スクムビット周辺、ニューペップリー通り、プラカノン橋まで新ビル巡りが続きましたが、適当な物件には出逢えず、結局当時工事中のサートン・タニー・ビルに狙いを定め家賃の交渉に入る事になりました。賃借ベースでは今後年々値上がりが予想される事もあり、前述の如く近い将来、外国法人の土地所有（部分所有も含む）が認められる可能性大ということもあり、この際無理しても思い切って購入の方向に舵を切り換えては、と理事会で検討を重ね、当時副会長兼会館移転検討委員長で三菱商事の本多忠勝氏に交渉を委ねる事になりました。

同氏はハード・ネゴを繰り返した結果、

ビルの一階約700平方メートルのスペースを1700万バーツで買い取る事、支払い条件は頭金、半額の850万バーツ即時払い、残金は金利を含めて月額10万バーツ約10年の延べ払い、残金払い込み完了時に所有権移転登記を行う(但し10年後に外国人又は外国法人の土地所有が認められているものと想定して)だったと思います。

法律的な事柄については、本多氏を通じて優秀な弁護士にお願いし、契約書もタイ語と英語で作成して頂き多少リスク(所有権移転がうまく行くか?)を感じ乍ら思い切ってサインをした覚えがあります。

頭金の調達については当時日本人会で積み立てて来た「会館建設基金」が約200万バーツでとても間に合わず、銀行借り入れも検討されましたが、理事、会長が一年交替という組織では制約もあり有力理事の発案で各企業にお願いし賛助会費(法人会費)5年分先払い、会員有志からの寄付で賄うことにしました。会館購入検討の段階で少なくとも二年間は会費の値上げは罷り成らぬとの理事意見もあり先行き多難との思いを強く抱きました。

当時日本人会の会長、理事の任期は一年で次々交替するため、この契約のフォロー・アップは日本人会事務局長が中心となって執り行う必要があり、これも理事会で決議し、契約書の保管、延払いの実施、延払い完了時の法的手続きなど間違いなく取り扱って頂くよう定年で退職された新井局長

に代り永年日本人会事務局に勤務し、初の女性事務局長として就任された川満富子氏に託した記憶があります。

その後1993年の日本人会創立80周年記念号のクムンテープで「泰国日本人会会館取得まで」という本多忠勝氏の寄稿文を拝読し会館の所有権移転の手続きも無事完了したことを知り、心底胸を撫で下ろすと同時に日本人会事務局、本多氏その他関係各位のご努力に改めて敬意を表した次第です。

財政面でも会員、賛助会員の急増もあり暫くは会費の値上げもせずに運営が続けられた由、これも同慶の至りです。

因みに、私が最初に帰任した頃のタイ・バーツは、US\$1=B20 B1=¥18.00、二度目、三度目と回を重ねる毎にB1=¥10.00 B1=¥5.00と円高が進み最近の紙上で見る限り B1=¥2.55と様変わり、また米の輸出が価格高で低下したとか、世の移り変わりが如何になってもタイ国日本人会は安定的に発展を続けられますよう記念して筆を置きます。

「日タイ友好親善」

第43代会長／元東洋棉花

三村 洋三

日本人会創立100周年お目出度う御座居ます。此の長い歴史の中で、1991年4月より1993年3月迄、2期2年間に亘り、会長を務めさせて頂きました。今、ここに振り返ってみますと、1991年は天皇皇后両陛下のタイ国公式訪問をお迎えし、1992年度はシリキット王妃陛下の御還曆にあたり、日本人コミュニティをあげて慶祝の行事を行った事等で誠に内容の濃い2年間でありました。

当時日本では、バブル経済の崩壊に伴う不況が益々深刻の度を強め、高度成長期も夢の又夢となって長い低迷の時代が続き、早急には不況から脱出する底力・活力に欠ける感の深い暗い時代でありました。

然し乍ら、全世界が不況で喘ぐ中で、唯一活力を保持し、高い成長が期待された地域がタイをはじめとする東南アジア諸国でありました。其の結果、カントリーリスクを避け、繁栄を求めて、かねてより交流の深いタイ国に対する日本からの投資が活発化し、企業進出も1,000社を超える盛況を呈し、在留邦人も3万人を超えるに至りました。

其の様な時代に会長として体験致しました、印象深かった上記の2つの慶事につき若干述べさせて頂きます。

1991年9月26日に天皇皇后両陛下が御即位後の最初の海外御訪問において、最

初の御訪問国としてタイ国にご到着になりました。空港及び御宿舎となったチトラダ宮殿の入口沿道では、日本人学校の全生徒1,000名をはじめ、多数の在留邦人がお出迎え、或はお見送り申し上げ、両陛下には大変およろこびの御様子でした。又両陛下にはお忙しいスケジュールの中、日本人コミュニティとの懇談の場を設けられ、親しくお言葉をかけて頂きました。尚、小生は日本人会会長として、日本人コミュニティを代表して歓迎の言葉を述べさせて頂き、懇談の場にて親しくお言葉を賜りました。両陛下には更にスコタイ、チェンマイとタイの古い都に文化を訪ねられ、多くのタイ国民との交流を持たれて、その気取らないほのぼのとしたお人柄により、すべての人々を魅了し尽くされました。一方、タイ王室も国王陛下は勿論、王室御一家をあげて歓待され、その御様子がタイ国全土に報道され、日本とタイの両国の絆が如何に深く強いものであるかを強く印象づけられ、両陛下の御訪問が大成功を収め、日本とタイ両国の将来の発展を益々促進させる大きな力となりました。

1992年度は、シリキット王妃殿下が還曆をお迎えになり、タイ国民あげてお祝いムードとなりました。吾々日本人コミュニティも在留邦人一般及び進出企業が力を

合わせ、お祝いの行事に参加致しました。

此の慶祝行事は2部に分けて実行致しました。第1部は1992年8月に「東京交響楽団」による演奏会を開催致しました。此の公演にはワチュラロンコン皇太子殿下及び御一家が御臨場になり、見事な演奏に大変御満足になり、出演者一同に御会釈を賜りました。

続いて1992年12月にラマ九世公園にて、タイ国では最初の野外コンサート「喜多郎」公演を開催致しました。何しろ此の様な大きな規模の野外公演は初の試みであって、タイの人々に受け入れられるか大いに心配致しましたが、予想を遥かに上回る3万人を超えるタイの若い人達が集い、目を輝かせて喜多郎さんの音楽を楽しんでくれました。尚、此のコンサートは同時にTVにてタイ全土に全曲報道され、更に後日チトラダ宮殿に参上し、王妃陛下にコンサートの模様を御説明申し上げると共に、Video Tapeを収益金を添えて献上致しました。

此の二つの催しを通じて、多数のタイの方達に日本の音楽・文化を紹介する事が出来て日タイ友好親善の促進に非常にプラスになった事は誠に喜ばしく、日本人会として大いに誇るべき行事であったと思っております。

タイ国日本人会が今後更に末永く発展される事を祈り上げます。

慶祝100周年

第44代会長／元三井物産
丸子 博之

1993年春日本人会会長に選出された。

当時在タイ日本人は5万人、タイ日本人会会員数は7,000名を超える大世帯、日本人小中学校生徒数は1,500、邦人社会としては世界最大と云われていた。

20年前になるが、バンコック赴任二年目にして会長就任要請を受け、多くの諸先輩、長年タイに在住、適任の方々を差し置いて会長を引き受ける事に大きな戸惑いがあったことを今思い起している。

私の背中を押したのは、前任三村洋三会長の誠意に溢れた説得と、縁あって知遇を得てきたDavid Rockefeller氏であった。

2007年11月、都内のホテルで同氏の自叙伝「ロックフェラー回想録」日本版出版記念パーティーが開かれ各界から150人程が招待された。司会役の緒方貞子氏がN. Y. から来日したR氏について一言、「国際社会でDavid程FairにしてSincere, Public Mind豊かな人はいない」。

日本人会会長となった年が創立80周年。曾野綾子女史をお招きしての「日本の品性」と題する記念講演会に始まり、泰日協会との共催記念コンサート、チャリティー文化祭、バザー等数多くの記念行事が開催された。小川理事、各事業担当理事の方々、川満事務局長、事務局各位の献身的な努力は

特筆したい。最大のeventは「ラムウオン・盆踊り大会」。コンタイ・コンイーブン17,000人参加。「小倉の祇園太鼓」の勇壮なリズム、阿波踊り「八千代連社中」の優美な動きが日タイ両国の人々を魅了し、華やかな花火を背に夢の様な世界が広がった。

翌年から二年間、盤谷日本人商工会議所会頭を務めた。当時のJCC会員は1,200社を超え海外日本人商工会議所として世界最大、日本はタイにおける最大の事業開発、投資国、活動は充実していた。巡り合わせか、商工会議所創立40周年。チュアン首相、城山三郎氏にお願いした記念講演、経済閣僚/FTIとのTV討論会、Laos振興使節団派遣(泰日協会・JCC)、育英基金設立等多彩な行事、活動が繰り広げられた。

会長・会頭職にあった3年間、日本皇室、首相・閣僚の来訪、経団連Mission等の応接、タイ王室・政府・経済団体との公式会合、Seminar, Symposiumのspeaker、日泰合弁新工場開所式等々連日の様に公式行事。日泰政府・民間関係者の支援のもとに泰日協会・日本人会・FTI(タイ工業連盟)・JCC、四団体が見事に調和し、あらゆる分野で連携が強まったものと思う。SIIT(タマサート大工科大学)Board of Trustee理事, 日本人小中学校の理事として学校運営にも関わ

た。更には二年間外国人商工会議所会頭
会議議長を務め、外国代表として首相経済
財政諮問委員に就任、月一回閣議に参加、
政策提言を行った。傘下に130社を抱える
現法の主管者の立場でしばしば難題、試練
に直面、公務は多忙を極めたが無事任務を
全う出来た。時代の要請と、タイで目覚めた
ささやかな使命感が己を奮い立たせたの
であろう。日本人会100年の歴史、日タイの
400年に亘る友好関係があればこそである
が、実に多くの日タイの友人、日本人会・
JCCの幹部の方々の協力を得た。そして上
述 R 氏が生涯貫いた精神、すなわち
「Noblesse Oblige」が大きな支えとなったの
だ。

1996年に帰国後、J T B F (日タイビジ
ネスフォーラム)を核として、タイ時代の先
輩、盟友諸氏との交友が一段と深まった。岡
崎・藤井・恩田・太田・赤尾大使、日本人会
清水氏、清峰・佐藤・豊田元日本人会会長、
日本人会・JCC/OB, 荒川・有川・石井・石橋・
指宿・大井・奥村・上東野・北山・吉川・小
山・篠崎・竹岡・水谷・本村・森田・吉田・渡
辺諸氏を初め多くの方々との心温まる交
遊、タイ語のタロックが飛び交い、日泰の歌
で盛り上がる会もあり、人生晩年タイのご縁
で楽しいお付き合いが続いているのは嬉し
い限りだ。タイの友人、中でも当時のChuan
首相、Dr. Supachai副首相、Tarrin蔵相、
Arsa Sarasin、Niramol二代の泰日協会会
長、Chattri盤銀会長、Disnadda殿下、Dr.

Chirayu/ Crown Property会長、Dr.
Chokchai/FTI会長、Sivavong工業省次官、
Staporn/BOI長官の厚い友情は終生忘れら
れない。これらの方々は人間としての信義・
礼儀・礼節の重みを身をもって示してくれ
た。日泰両国関係の深化、タイの発展、日
本・ASEAN広域経済圏の連携強化、泰国日
本人会の隆盛を祈るばかりである。

王様の誕生日

第46代会長／元伊藤忠バンコク支店長

豊田 資則

昨日12月5日プミポン国王の誕生日を祝う会に久方ぶりで出席した。王様は昨日で85歳を迎えられたという。舞台には即位をして間もない頃の国王の肖像画が置かれていた。私がいいた頃のバンコクでもよく見かけた絵である。

何しろ会社に入ってからずっとケミカル畑を歩いて来た私は合成樹脂などと違い発展途上国との付き合いは殆どなかった。バンコクには本社の部長の頃一度足を踏み入れたことがあるだけだった。それが何の因果かバンコク支店長の辞令を受けた。

支店長となるとタイの歴史とか文化とかそれなりの知識は必要だろうと、内示が出た後タイに関する本をいくつか買って来た。その中でタイ王室と日本の皇室は明治の頃からの長い付き合いがあり、大変に親密だと云う。

殊に王様に対するタイ国民の崇敬の念は大変なものがあり、此の王様のお陰でタイ国は色々あったが平穏を保っていることもわかった。

有名な「王様と私」のミュージカルもタイがモデルだと。尤も後でわかったことだがこの映画はタイ国では上映禁止になっているという。

先輩達はタイでは足を組んでつま先を人に向けるのは大変に失礼なことだとか、バンコクの世界は良くも悪くも情報が網の目の様に行き交っているので行動にはくれぐれも気をつけるように等々。結構大変なところだなー、と思いながら1995年5月に着任した。

それから半年程経ち、68歳の王様の誕生日を終えて暫くした頃、当時の日本人会長の佐藤さんから突然電話が掛って来た。次期の日本人会長を引き受けてくれという電話だった。即座にお断りした、理事会には出てはいたものの、日本人会って何をどうするのかもよく分からない。とてもとても!!とお断りした。そのとき佐藤さんが私の歳を聞いた。幾分若く見えたのかもしれない。53歳ですと答えたら、それならば十分だと云う。何が十分かわからなかったが、とにかく勘弁して頂いた積りであった。

翌年2月頃、バンコクでは気候のよい時である、ゴルフをやるには最高のシーズン、バンコクの生活にもだいぶ慣れて来た頃、又佐藤さんから電話を頂いた。

「例の件ですけど…」とお断りした筈の日本人会長を引き受ける、の電話で有った。もうすぐ次年度が始まるが、貴兄に任せるから、お願いと言われた。否も応もない。

佐藤さんの作戦勝ちで有った。

そんなことで日本人会の会長を引き受けることになった。

日本人会長になって一番意識したのは子供達と母親であった。

毎年4月には日本人学校の入学式、卒業式がある。御存知のように日本人学校は世界でも珍しい小学校と中学校が同じ敷地内にある。やろうと思えば小中一環教育も不可能ではない。

それは良しとしても、こちらは大いに困るのである。3月の小学校の卒業式から旬日を得ず今度は中学の入学式がある。僅か2週間程前に卒業のお祝いを言ったと思ったら今度は入学のお祝いを言わねばならない。大いに困ってしまった。仕様がなから卒業式には卒業おめでとう、皆さんは人生の多くの峠を一つ越えた、これからもっともっと険しい峠が云々、とやって入学式には山登りにたとえて続きをやった。

今となっては喋った本人が何を喋ったか覚えてない程度だから、聞いている方は僅か2週間前の話と続きものだと思った子供が何人居たことか、はなはだ疑問である。

もっと困ったのは小学校の入学式、日本に居る子供より若干ませてる感じはあっても所詮は子供、難しい話などしても仕方がない。

「おはようございます」、といっても数人の子供がおはようございますと返すだけ、今度は、「人からおはようと言われたら元氣におはようございますと返すのだよ」、それで

はもう一回やってみましょう。今度は全員大きな声で「おはよう」が返って来た。

そこからが問題、「冬になったら木は葉っぱを落とすよね、でも春になったら黒い幹から枝から又緑の葉っぱが出てきて、きれいな花も付けるよね、これなんでだかわかる？」子供からは「水をやるから」とか、「肥料をやるから」などといっぱしの答えが返ってくる。こちらは適当に相槌を打って置いて、「それでは風が吹くと涼しくて気持ちがいいよね、でもこの風は何処へ行くんだらうね」、今度は子供達が一生懸命考えている。後ろの親達も何処へ行くんだらう、てな顔をしている。ちょっと得意になって、「こういう事はこれから小学校に入るとみんな学校で教えてくれるんだよ」、と。話のついでに出来る子も出来ない子も云々とやったらしい。

翌日会社に行くと、「支店長、昨日はえらい事を云ったらしいですね」、と部下が言う。

自分でもいい話だと思っていたので、花の話だと思ったら、日本人会長が小学校の入学式で「出来る子も出来ない子も…」と差別発言をした、と父兄の間で大騒ぎになってますよ、と。

プミポン国王の誕生会に出て、そんなことを思い出しながら、国王は出来る限り長生きをして下さい、と思った一日で有った。

処で後になって佐藤さんにどうしてあの時私だったのですか？と聞いたら、「何、簡単なことだよ。着任したばかりの君は最低バンコクに2年はいるだろうと思ったからさ」ですと。 —了—

タイ国日本人会100周年 おめでとうございます

第47代会長／元日本航空
吉田 龍彦

タイ国日本人会、会員の皆様、創立100周年にあたり心よりお慶びを申し上げます。

わたくしはご縁があって1998年から1999年にかけての短い期間でありましたが、この歴史あるタイ国日本人会の会長を務めさせていただきました。

タイ国日本人会が創立された100年前といえば1913年、大正2年、まだ第1次世界大戦の前。そんな昔に海外で日本人社会を日本人会というかたちにまとめあげた人々がいたことが驚きです。おそらく世界でも最も古い歴史を持つ日本人会であり、創立にかかわった方々のご苦勞が偲ばれます。

当時欧米など先進国にも日本人社会があったと思われませんが、最初にタイ国で日本人会が組織されたのには何か特別なわけでもあったのでしょうか。愚考ですが、まだ発展途上の国にあっては健康や医療、生活等もふくめ日本人をとりまく環境が厳しく、よりよく生きるための一つの知恵として組織としての相互扶助が必要とされたからではないでしょうか。

いうまでもなく日本人会の原点は同胞の相互扶助と親睦にあらうかと思えます。

在タイ当時ご縁があってまだ草創の時期

にあったブーケットの方々から日本人会設立のご相談にあずかることがありましたが、日本からの大企業の進出もなく財政面もふくめ創立にはいろいろな苦勞と困難がありました。

また仕事上、インドシナ半島の国々、ネパール、バングラディシュ等の日本人会の行事の後援をやっておりました関係で各国の日本人会の活動を見聞きすることがありましたが、これらの国々では日本人社会もこじんまりとして、会員の皆さんがおおむね顔見知りでありまさに日本人会の活動の原点ともいべき姿がありました。

タイ国日本人会も厳しい環境のなかで草創期をのりこえた先人のご苦勞があって今日の隆盛があるものと思います。

戦後日本企業の進出や日本人観光客の増加などにより在タイ日本人の規模や構成は大きく変化し続けましたがこの変化に適切に対応された先輩の皆様の知恵が今日の日本人会の素晴らしい活動をつくりあげたものと思います。

わたくしが日本人会に関わった1990年代にはすでにタイの日本人社会は世界有数の規模にあり在留邦人の数は推定で5万人、

日本人会の会員数も1万人に迫るところにあったと記憶しています。

この規模はすでに小さな自治体に匹敵します。財政規模も大きなものです。理事会、事務局の活動においてもある種の政治判断や経営判断を必要とされることもあるでしょう。

小規模であれば、顔をあわせての会員相互の意思の疎通が可能ですが、タイのように大規模な組織になれば会員の総意がどこにあるか把握することが運営を預かっている方々のご苦勞されているところでしょう。

アジア諸国の情勢を観れば今後もタイの日本人社会はますます拡大し成熟していくでしょう。また国内の少子高齢化がすすむにつれ、タイの日本人社会の構成も今後10年20年の間に大きく変わっていくことが予想されます。

将来、タイの日本人社会がどのように変貌を遂げようとも、日本人会の創立と発展に苦勞された草創期の先人の精神、相互扶助と親睦を忘れず、できるだけ多くの会員がさまざまな行事や、同好会活動や、チャリティー活動など何らかの形で日本人会の活動に直接的積極的にかかわっていくことができれば、引き続き意義深い活動が進められるものと思います。

日本人会創立100年のお祝いと、かつて

お世話になった会員の一人として次の100年に向けてのタイ国日本人会のますますの成長発展をお祈りし応援のエールを送ります。

第1回日・タイ交流盆踊り大会開催

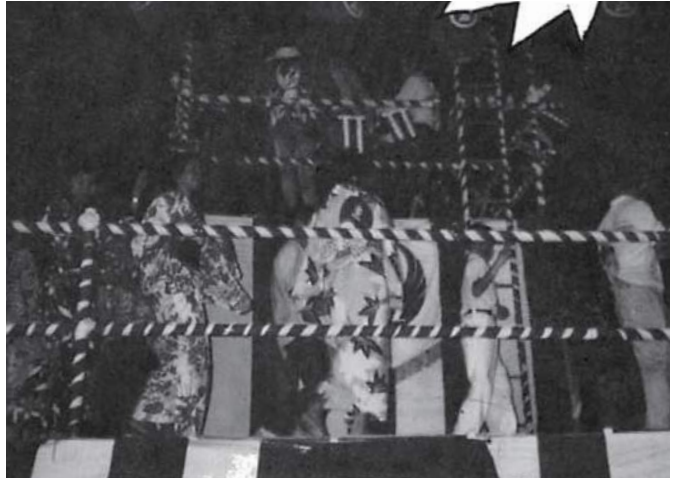
第48代会長／元タイ博報堂
石平 厚一郎

当日本人会設立の重要趣旨の一つは、日・タイ交流、友好を推進することにあります。常日頃より各種の企画が実施されてきておりましたが、もっと多くの方々に参加いただける大規模な企画がないものかと話し合われておりました。

種々の案が出されましたが、当地のラムウォンと日本の盆踊りとを組合せた「盆踊り大会」にしてはどうかというアイデアが最終候補に

残りました。タイ人の踊り好きは、皆様ご存知のところ。必ずや相当のタイの方の参加を見込めるであろうし、在タイ日本人の方々もお子様連れで参加いただけるだろうと考えた訳です。

早速実行委員会を発足させ、私が委員長に就任しました。1986年11月6日の発足会を皮切りに、以降10回以上の打合せ、準備をする中で、大会運営そのものの形がだんだんとはっきりしてきました。



日本人会館買い取り検討理事会の一コマ
藤永隆博会長(正面)と本多忠勝副会長(右)

日時については議論がありましたが、2月14日土曜日、午後6時から約3時間半程度とし、場所はチュラロンコン大学のご協力、プレイ・グラウンドをお借りすることができました。

多くのタイの方にとっては日本の盆踊りは当然初めてでしたので、まずは日本人会婦人部、PTAの方々の協力を得て、盆踊りの練習会の輪を日本人からタイ人へと広げて行きました。日本人学校の運動会でも踊っていただき、練習の成果を披露することができました。

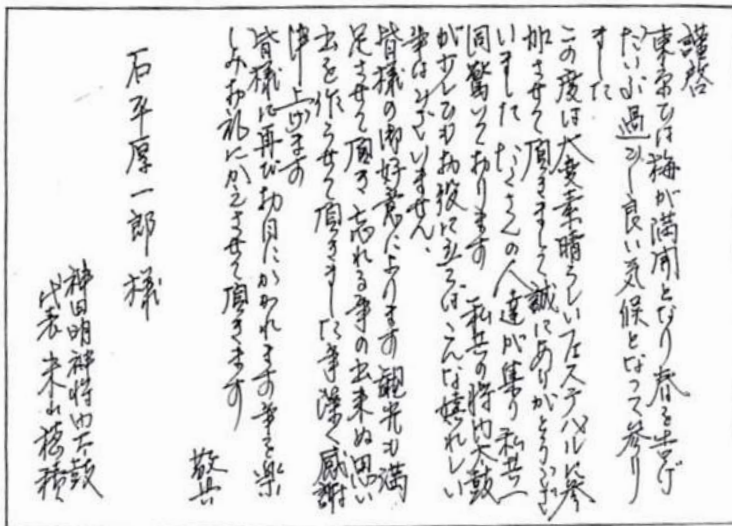
檣の建設、音響、照明、日本食、タイ食の出店、子供用の金魚すくい、ヨーヨー等の準備、セキュリティーの手配、VIPの方々の接遇、ウチワを1枚1枚手渡す大変な役目の受

付けなど、大変な数の企業及びボランティアの方々のご協力を得ました。また当日のアトラクションとして神田明神の将門太鼓チームに友情出演をして頂き、結果として5千人を超える方々にご参加いただきました。準備段階では2千人の参加者があれば成功と予測していた私共にとっては、全く嬉しい悲鳴でした。特にタイの方々に多数ご参加いただき、本来目的とした日タイ交流の実が図れたと考えております。

その象徴として、タイ側からチャムロン・

バンコク市長ご夫妻が、日本側からは木内大使ご夫妻のご参加いただいたことは、大変名誉なことと思っております。

100周年を迎えた今年、ほぼ2年に1度開催してまいりました「ラムウオン盆踊り」は、第1回開催から28年、11回を数え、日本人会の恒例行事として定着させることができました。これも、終始粉骨砕身中心となって働いていただいた日本人会事務局の方々、資金的、労力的ご協力をいただきました多数の方々に深く感謝申し上げます。



神田明神将門太鼓から寄せられた礼状

日タイ皇室と王室の御交流について

日本国特命全權大使

佐藤 重和

泰国日本人会が、創設100周年という記念すべき年を迎えるに際し、心からお祝い申し上げます。

日タイ両国の友好関係は、15世紀に遡る長い歴史を有するとともに、今日、政治・経済・文化その他の幅広い分野に渡る重層的なものとなっています。こうした中、我が国皇室とタイ王室の関係は、緊密な両国関係の象徴として、受け止められています。

この大きな節目にあたり、皇室と王室の関係が、何故、両国関係の象徴という他では見られないユニークな地位を占めているかにつき、触れてみたいと思います。

まず、日タイ両国は、各々皇室と王室を擁する長い歴史を有する独立国ですが、就中、欧米列強によるアジアへの進出が高まっていた19世紀半ば、明治天皇及びチュラロンコーン大王(ラマ5世)の下で同時期に国の近代化を推進したという共通点を有しています。両国間には、近代における時代の大きな節目を、皇室及び王室を中心とした国造りの中で体験したという、謂わば、歴史の共有ともいうべき土台が存在すると言えるでしょう。

こうした背景の中、これまで数十年に渡って我が国皇室とタイ王室の間では、親密な御交流が積み重ねられてきました。とりわ

け、天皇皇后両陛下とプミポン国王陛下及びシリキット王妃陛下との間での御交流は、今日の我が国皇室とタイ王室の親密な御交流の基礎を築くものとして忘れることが出来ません。

今から遡ること50年前の1963年、プミポン国王陛下は、シリキット王妃陛下とともに、国賓として日本を御訪問され、昭和天皇皇后両陛下の歓迎を受けましたが、当時、皇太子であった天皇陛下も、妃殿下とともに、その接遇にあたられました。その後、翌1964年、天皇陛下は、昭和天皇の御名代として、皇后陛下とともにタイを答礼のために御訪問されました。

この御訪問に際して、天皇皇后両陛下は、国王王妃両陛下の御同行により、チェンマイを御訪問されるとともに、チェンマイの離宮に三晩御滞在されました。その間、国王陛下の御運転で山道を移動され、途中からは徒歩でモン族の部落を御訪問されています。また、バンコクとチェンマイの間の飛行機の中では、国王陛下が、愛用のクラリネットでベニー・グッドマンの曲を演奏されるといった心温まる御交流が行われました。天皇皇后両陛下及び国王王妃両陛下の全員が30代であった当時の御訪問は、天皇皇后両陛下にとって、非常に思い出深いもので

あった旨述べられています。

なお、魚類学者であられる天皇陛下は、上述のタイ御訪問から帰国された後、タイにおけるタンパク源となる食糧事情の改善のために、栄養が豊富で飼育が容易な、ナイル・ティラピアという淡水魚50匹をプミポン国王陛下に贈呈されました。後に、国王陛下により、「プラーニン」というタイ語名を授けられたこの魚は、今日、タイ全土で幅広く養殖が普及するとともに、かつて天皇陛下がタイに寄贈されたとの由来も含めて広く知られる淡水食用魚となっています。

その後、天皇皇后両陛下は、1991年の御即位後初の外国訪問において、タイを御訪問されたのに続き、2006年に開催されたプミポン国王陛下の御即位60周年記念行事への御出席のため、再びタイを御訪問され、国王王妃両陛下を始めとするタイ王室の方々と親しく交流されました。1991年の天皇皇后両陛下のタイ訪問に際しては、同年9月26日に国王王妃両陛下主催の晩餐会が開催されましたが、この日は奇しくも、1887年に日タイ両国が「修好通商二関スル日本国暹羅国間の宣言(日タイ修好宣言)」に署名して、両国の間に正式に外交関係がスタートした日と同じ日となったことは、何かの縁かもしれません。また、天皇陛下が御即位後に、同一の国を二度に渡って御訪問された例は数少ないのですが、タイがこうした国の1つであることは、我が国皇室とタイ王室との親密な関係の反映とも言

えるでしょう。

プミポン国王陛下は、隣国ラオスへの訪問を除き1970年代以降、外国訪問を行われていないため、1963年以後の日本御訪問はありません。他方、シリキット王妃陛下は、1963年の国賓としての御訪問以降も、これまで複数回に渡って日本を御訪問されており、比較的最近では、1993年及び1996年に御訪問され、その際には、天皇皇后両陛下と旧交を温められています。

日タイ両国の皇室と王室の関係については、天皇皇后両陛下及び国王王妃両陛下がその基盤を築かれてきましたが、皇室と王室の関係が、両国関係の「象徴」とまで言われるのは、その他の皇族や王族の方々も交えて、皇室と王室の間で広範な御交流が行われてきたことを理由に挙げるができるでしょう。

平成24年6月、皇太子殿下がタイを御訪問され、古都アユタヤをご視察されるとともに、グランドパレスにて国王王妃両陛下を始めとするタイ王室から温かい歓迎を受けたことは、私たち在外邦人の多くにとっても未だ記憶に新しいと思います。また、同年11月には、秋篠宮殿下が、タマサート大学からの名誉学位授与のためにタイを御訪問されました。秋篠宮殿下におかれては、これまでナマズを始めとする魚類や家禽類のご研究のため、タイを幾度となく御訪問されており、タイの複数の大学から名誉学位を受けられています。こうした訪問の際にタイ

王室との御交流が行われています。この他にも、これまで、タイ国王陛下の御即位50周年慶祝行事として当地で開催された歌舞伎の公演に際し、常陸宮同妃両殿下がタイを御訪問され、ワチラロンコーン皇太子殿下とともにオープニングの公演に御臨席されたのを始め、我が国皇室から多くのタイへの訪問が行われてきています。

また、タイの王室からも、これまで様々な機会に日本への訪問が行われてきました。1987年に東京で開催された日タイ修好100周年記念行事に際しては、ワチラロンコーン皇太子殿下が、当時皇太子殿下であった天皇陛下とともに御出席されています。また、昭和天皇の大喪の礼及び天皇陛下の即位の礼に際しても、ワチラロンコーン皇太子殿下が、日本を御訪問されました。シリントーン王女殿下も、これまで皇太后陛下の葬儀や秋篠宮殿下の御結婚式といった我が国皇室の重要な節目の行事に御出席されています。また、国際会議への御出席の際に訪日された折にも、我が国皇室と御旧交を温められてきました。科学者として、かつて東京大学で御研究された経歴を有され、同大学の総長評議会の委員も務めておられるチュラポーン王女殿下は、日本の大学での御研究や学術会議への御出席のために多数訪日されており、また、こうした機会に天皇皇后両陛下を始めとする皇室との交流を深められています。

この様に、日タイ両国の皇室と王室の間

には、緊密かつ双方向の御交流の歴史が存在し、今日の良い日タイ関係の象徴に例えられていることは、日タイ両国にとってかけがえのない財産であると言えるでしょう。こうした両国の良好な関係が今後も一層進展していくよう、在留邦人社会の中心的組織として、泰国日本人会が引き続き重要な役割を果たされることを心より祈念致します。(了)

流動化するタイ政治

(2005年末・反タクシン運動の激化から、2008年9月・サムック政権の崩壊まで)

元在タイ日本国大使館特命全權大使

小林 秀明

タイは政治バブル?

私は、2005年11月に大使としてタイ王国に着任した。それに先立って東京の外務本省でタイの様々な分野について、ブリーフィングを受けた。タイの内政についてのブリーフィングで、当時のタクシン首相は、議会で圧倒的多数を握っており、現政権の安定性に不安はないとの説明を受けた。しかし私の頭には、何となくもやもやしたものが残った。それで、外務省での最後の会議で、私は「タクシン政権は強力で安定しているということだが、強力過ぎて、1997年のタイの経済バブル崩壊ならぬ「政治バブル崩壊」が起こる可能性がないとは言えないのではないか。」と発言した。確たる根拠があって言ったわけではないのだが、結果的にその予感的中した。

反タクシン運動の拡大

私がバンコックでの生活を始めたのと同様に、タクシン首相批判運動が始まった。以前のタクシン氏の盟友であるソンティ・リムトーンクン氏がタクシン氏の腐敗体質等を批判する激越な演説をルンピニ公園などで行い、数千名の聴衆が集まるようになっていた。

こうした中で、2006年初め、タクシン

氏は、家族の名義で所有していた持ち株会社「シンコープ」社の株を売却して730億バーツにも上る資金を得た。この際、タクシン氏が殆ど税金を払わなかった(これは合法)だけでなく、慈善活動等への寄付もなかったことから、バンコックを中心に、「タクシン嫌い」の感情が高まった。この結果、反タクシンデモに参加する人々の数も急速に膨れ上がった。

このような時期に、なぜタクシン氏が一般市民の感情を逆なでにするような行為に出たのかは推測する他ないが、多分、その理由は、経済的なものであったろう。シンコープ社の中心的事業である、タイでの携帯電話事業を取り巻く環境を見て、「これが潮時」と判断し、株の売却を決めたのであろう。そして、それが引き起こすかも知れない大衆の反感については、過小評価したのではなかろうか。

このような姿勢は、当時のタクシン氏の自信過剰がもたらしたものと言える。タクシン氏は2005年2月の総選挙で全480議席のうち374議席を獲得し、盤石の政治基盤を築いた。与党・政府部内に刃向う者はなくなった。タクシン氏が2006年6月に主要閣僚と共に日本大使公邸の夕食会に来てくれた時の様子を見ても、主要閣僚で

ですら「借りてきた猫」のおとなしく、タクシン氏の独演を「拝聴」していると言った様子だった。

抜き打ち選挙

こうした反タクシン感情の高まりに対抗する手段として、タクシン氏が打ち出したのが、抜き打ち国会解散、総選挙であった。これは、タクシン氏の立場からすれば、もっともな行動である。即ち、当時反タクシン活動が盛んになっていると言っても、これは殆どバンコックに限られた現象であって、地方に行けば、タクシン氏に対する民衆の支持は揺らいでいない、ということを示すことを目指したものであろう。

更に民主党をはじめとする野党側は、1年前に総選挙を戦ったばかりなので、再度選挙に臨む用意が出来ていなかった。このこともあって、野党側は、この総選挙をボイコットする戦術に出た。この結果、2006年4月2日に投票が行われた選挙では、大部分の選挙区で与党側の候補者が当選した。しかし約30の選挙区では、候補者が1名で、その得票率が有権者の20%を超えなかったため、選挙法の規定により、当選者なしということになり、再選挙が行われることになった。

タクシン氏の休職宣言

そういう状況下でも、タクシン氏は総選挙での勝利を宣言し、4月4日、組閣のために

国王陛下に拝謁した。その場でどのようなやり取りがあったのかは明らかでないが、拝謁後タクシン氏は、記者会見で自分は次の国会での首相選挙で首相選出を求めない旨、涙ながらに発表し、併せて、当面首相の職務を休職すると述べた。タクシン氏は、その後日本、米国等を訪問して過ごしていたが、5月の中旬には首相の職務に復帰した。

国王陛下御即位60周年記念行事

タクシン氏が職務に復帰したのは、6月初旬にプーミポン国王陛下の御即位60周年祝賀行事が控えていたからである。この行事は、タクシン氏の発案によるものと言われる。この祝賀行事には、日本から天皇皇后両陛下がタイを公式訪問されて参加された他、世界の30近い国々の「君主」(名称は、国王、大公、サルタン等様々)やその代理者が招待されて参加した。この祝賀行事は、成功裏に行われたが、タクシン氏がタイ国王及び約30ヶ国の君主を前に演説したことを、「臣下としての分際」をわきまえない行為と批判する声もあった。

「パラミー」批判

国王陛下御即位60周年行事をやり遂げたタクシン氏は、以前の自信を取り戻したかのようにであった。6月末頃から、「高齢のパラミー(カリスマを持った人の意)が首相になるようとしている」などと、プレム枢密院議長を批判すると受け取られるような発言を繰り返

返すようになった。

8月末になると、バンコックのタクシン氏の私邸の付近で、大量の爆薬を積んだ自動車が摘発されるなど、バンコックで「キナ臭い」雰囲気を感じられるようになった。

クーデターの発生

2006年9月19日の夜には、日本政府の無償援助で建設された「タイ文化センター」でポルトガル大使館主催の「ファド」（日本の演歌に似たポルトガルの伝統歌謡）のコンサートが行われ、私ども夫婦も出席した。その後、同センターの一部で遅いディナーが催され、私どもも他国の大使夫妻と共に夕食を楽しんでいた。夜も10時を過ぎた頃、出席した大使の一人の携帯電話が鳴り、その大使夫妻がそそくさと部屋を後にした。間もなく私の携帯電話も鳴った。大使館の政務班からの電話で、クーデターが起こったようだとの連絡であった。私どもも静かに部屋を出て車に乗り、大使館に向かった。

車の中で、私は、クーデターが起きたということが信じられない気持ちであった。クーデターが全く予想外だったということではない。逆に、その頃バンコックはクーデターの噂であふれていた。しかしそのことは逆にクーデターの可能性が低いことを示しているように私には思えた。何故なら、タクシン首相ほどの有能な人物なら、そのような噂があれば、とっくにこれを防ぐための有効

な手を打っているに違いないと思ったからだ。しかし、現実にはクーデターは起きてしまった。何かタクシン氏の計算外のことが起こったのだろうか。

クーデターは、ソンティ陸軍司令官を始めとする実行者側の「パーフェクトゲーム」であった。首都の内外で、全く抵抗らしい抵抗はなかった。首相府と政府系放送局は、簡単にクーデター勢力の支配下に入った。通常、クーデターの際には占拠される国際空港（当時は依然としてドンムアン空港）は、手つかずのままであった。クーデター敢行の夜に、クーデター指導者は国王陛下への拝謁を許された。これはタイではクーデターの成功を意味する。翌日、バンコックの町では、多数の市民がクーデターで出動した兵士を歓迎し、一緒に記念写真を撮る者も多かった。

完全な成功の理由

クーデターが完全な成功を収めた主要な理由は、タイの国軍の団結が乱れなかったこと、そしてタクシン氏がタイに不在だったことであろう。タクシン氏は滞在中のニューヨークでクーデター発生を知ったが、何ら有効な手を打てなかった。タクシン氏がこのような不安定な時期に国を離れていたのはなぜかと首をかじげざるを得ないが、その理由の1つとして、タクシン氏が信頼するミャンマー人の古い師の予言を挙げる人もいる。

クーデター後の迷走

クーデター勢力は、クーデター自体を完璧に成功させたが、その後の動きはスムーズとは言えなかった。クーデター勢力は、最初から1年以内の民主政治復帰を約束しつつ、自分達自身で政権を担うことはしないと宣言した。早速臨時政府の首班選びにとりかかったが、クーデター勢力にとり都合の良い人物を探すのに苦労したようである。結局、ソンティ陸軍司令官の先輩に当たるスラユット枢密顧問官(元陸軍司令官)がしぶしぶ首相を引き受けた。私の見るところでは、スラユット氏自身はクーデターに反対であったが、後輩が起こした混乱を收拾しなければ、という責任感から首相を引き受けたものと思われる。

臨時首相の座に着いたスラユット氏の政治姿勢は、可能な限り既存の法律と制度に従って、事態を正常化することであった。クーデター後にありがちな超法規的手段による敵対勢力の排除や資産の没収は、全く行われなかった。この結果、クーデターの理由とされたタクシン氏とその家族の「旧悪」の摘発は、遅々として進まなかった。こうした状況に対して、さすがのソンティ陸軍司令官も苛立っているとの情報も流れたが、スラユット氏は後輩が何を言うかとばかり取り合わない様子だった。

新憲法の公布と総選挙

暫定政権の主要課題は、新憲法の公布と

総選挙の実施であった。新憲法については、クーデター指導者が旧憲法の一部改訂ではなく全面的書き換えをすることにしたので、多大の時間と労力が必要となったが、何とか2007年7月には原案ができ、8月に国民投票で承認されて公布された。

議会選挙については、新憲法に基づく選挙法が9月末に成立し、10月下旬に下院の選挙戦が始まった。総選挙の投票は、12月23日に平穩裡に実施された。事前の予想では民主党優勢との見方が強かったが、実際の結果は、タクシン氏支持派の「国民の力党」が233議席を獲得して第一党となり、民主党は165議席で第二位に甘んじた。「国民の力党」は、単独では過半数に満たなかったが、国民党を初めとする中間政党が全て国民の力党の傘下に入ったため、「国民の力党」を主体とする合計315議席を擁する連立与党連合が形成された。

こうして、クーデター勢力によって擁立されたスラユット政権の下で実施された総選挙は、クーデター勢力が駆逐しようとしたタクシン派による政権を生み出す結果になった。

サマック政権の発足と反政府運動の激

2008年1月に入り、サマック元バンコック都知事が新政府の首相に就任した。サマック氏は政治経験豊かな政治家であったが、当時は既に影響力を失いつつあると見られていた。

そのような人物が首相に就任したのは、当時外国生活を余儀なくされていたタクシン氏の意向によるものとの見方が一般的であった。サマック内閣の主要閣僚も、タクシン氏の義理の弟であるソムチャイ副首相などタクシン氏に近い人々が殆どであった。

サマック政権発足後間もない2008年5月に、反タクシン派の中心的な勢力である市民民主化同盟(PAD)が激しい街頭デモ等の反政府運動を開始した。6月に入り、PADのデモ隊は、首相府の周辺の道路を占拠し、8月には、首相府そのものを占拠するに至った。

サマック内閣の退陣

サマック首相がPADの過激な反政府運動への対応に苦慮する中、9月9日にタイの憲法裁判所は、サマック首相が首相就任後もテレビの料理番組にレギュラー出演していたのは、首相の民間企業の職務との兼職を禁止する憲法の規定に反するとの判断を下し、この結果サマック氏は首相の地位を失った。同日、ソムチャイ副首相が首相に就任することになった。

偶々私はその翌日にタイを離任することとなっていたところ、ソムチャイ新首相は、首相就任当日の多忙な日程にも拘わらず、予定通り9日の夜に私のために送別晩餐会を催してくれた。

タイ政治のその後

サマック政権の崩壊・ソムチャイ新政権

の発足と私のタイ王国離任がほぼ重なったことは、タイ政治を3年近くにわたって見つめてきた私にとって、感慨深いものであった。私は、ソムチャイ氏の率いる新政府の下でタイが安定の方向に向かうことを祈ったが、残念ながらその後のタイ政治は、一層不安定性を増すことになった。同年11月末には、PADが率いるデモ隊がスワナプーム国際空港を約1週間にわたって占拠し、空港機能が麻痺するという事態が発生した。またソムチャイ首相も12月に憲法裁判所の判決により首相の地位を失うことになった。

2009年以降、タイの政治は更に大きな波乱を見ることになり、遂に2010年4月から5月にかけてバンコックで100人近く犠牲者が出る大騒乱が発生するに至った。今から思い起こすと、私がタイに勤務した2005年末から2008年9月という時期は、タイ政治の大波乱に至る序章とすら形容できるであろう。

私がタイ王国に着任して以来のタイ政治は、表面的にはタクシン氏支持派とタクシン氏反対派の抗争の歴史であったように見える。しかし見逃してならないのは、この個人を巡る抗争が、タイの国王を中心とする伝統的政治体制に対する各当事者の姿勢と複雑・微妙に絡み合っているということである。この抗争の行く末がどうなるかは、2012年末の現時点でも予測することは困難だが、その結果がタイの伝統的政治体制そのものの将来を大きく左右することは間違いないと思われる。

2011年中部タイ大洪水

—邦人社会はどう戦い、どうタイ社会を支援したか、
そして日タイ関係の将来は?—

前在タイ日本国大使館特命全權大使
小島 誠二

はじめに

前駐タイ大使として、日本人会設立百周年記念冊子に2011年の大洪水について書くように依頼をいただいた。2011年の中部タイを襲った大洪水は、800人以上の死者と約440万人の被災者をもたらした大災害であった。世界銀行の調査(2012年1月公表)によれば、被害額及び損失額は、合計で約1兆4,300億バーツ(約3.65兆円)に上った。その結果、同年の実質GDP成長率は、0.1%となった。なお、タイ国家経済社会開発庁(NESDB)は2011年8月時点では同年の実質GDP成長率を3.5~4.0%程度と予測していた。

この大洪水からの被害はタイ社会のみならず、日系企業や邦人社会にも及ぶものであった。今回寄稿の依頼をいただいたのは、2011年の大洪水が日本人会の100年の歴史の中でも、特筆すべき事件であったと多くの邦人の皆様が受け止めておられることを示すものであろう。邦人社会がどう大洪水と戦い、どうタイ社会を支援したかを記録に残すことは、当時洪水との戦いの前線にあった者の一人としての責務と考えた。

タイでは洪水は早魃よりましか?

タイは、これまでたびたび洪水に見舞われてきた。バンコクに被害をもたらした洪水は、1942年のものがよく知られている。このときは、バンコク全域が冠水し、数ヶ月に亘って水が引かなかった地域もあったようである。近年では1978年、1983年及び1995年にも洪水がバンコクを襲っている。また、2010年には南部で、2012年にもスコータイ、アユタヤ等で洪水が発生している。

ルークトウンの名曲「ナム・トゥアム(洪水)」では、雨が降らないことより、洪水の方がましだと決めつけ、洪水の見舞いにも来てくれない恋人の不実への嘆きが歌われている。歌の舞台はタイ南部のプラチュアブキリカン県ではあるが、タイでは、洪水に対してこういう受け止め方があるのかもしれない。また、工業化以前のタイでは、高床式住宅と小舟で洪水に対処できたのであろう。確かに、1942年の大洪水については、若い女性が王宮周辺で船遊びをしていると思わせるような映像が残されている。工業化が進んだ後も、水は灌漑や発電のために利用する対象であっても、洪水を防ぐため管理する対象とはあまり考えられてこなかったとも言われる。

南下する巨大な水の塊との戦い

タイの洪水は、よく盆の上の水にたとえられる。今回も、水の進行は、1日数キロ、最終段階では1日、1キロにさえ達しない程度であった。また、一旦水が浸入するとなかなか引かず、被害を大きくする傾向もある。政府の対策は、このようにゆっくりと進行する水の塊を運河、水路、河川等を使って海に流すことであった。特に、今回バンコク都の近隣県が浸水した後、洪水との戦いは、さらに南下する水の塊を東西に振り分け、バンコク都に侵入させないことに移った。

今回、これだけ規模が大きくなり、大きな被害をもたらした理由としては、この年には例年に比し1.4倍の雨量があったこと、上流ダムからの放水が遅れたこと、遊水地が減少したこと、運河、堤防、水門等の維持管理が不十分であったこと、都市化・工業化が進展したこと、森林被覆率が低下したこと、温暖化の進行により、局地的な豪雨がより頻繁に見られるようになったこと、洪水対策のための体制・調整が十分でなかったこと等が指摘されている。

ゆっくり進行する水は危険か？

2011年の大洪水がバンコク都及び近隣県を襲う可能性が高くなったことを受け、10月7日、日本大使館では緊急対策本部を立ち上げ、その後休日を含め、毎日、洪水の現状を分析し、それ以降の動きを予測し、

在留邦人保護のあり方、日系企業支援の方策、さらには被災地のニーズに応じた援助内容を検討した。そのため、公開情報の分析及び洪水の専門家との意見交換に加え、大使館員が毎日バンコク都及び近隣の同一地点に赴き、溢水の有無・状況を確認することにした。結局、緊急対策本部は11月21日まで、38回の会合をもつことになった。

緊急対策本部での検討結果、バンコク都が発出する危険情報等を踏まえ、メールによる大使館のお知らせの送付、外務省からのスポット情報と渡航情報の発出、海外邦人安全対策連絡協議会の開催、邦人の状況確認、避難支援等を行った。また、今回は大使館ツイッターとウェブ・アルバムも活用した。筆者の妻がとり続けたセンセーブ運河の写真も掲載された。

筆者自身も、4WDでドンムアン空港近くまで出かけ、洪水の進行状況を観察した。冠水したアジア工科大学院(AIT)では、ボートに乗って約1時間に亘り構内の被害状況を視察した。いくつかの工業団地については、洪水前、排水作業中そして排水後に訪問した。また、バンコク大学やエンポリウム(デパート)で行われた炊き出しに在留邦人の皆様と一緒に参加し、タイ人の善意とまとまりを感じた。

結局、今回の洪水は、バンコク都の中心

部を襲うことはなかったが、10月初めから11月中旬までは確信を持って、バンコク都中心部は安全であると言える状況ではなかった。我々大使館員の状況判断も、日々揺れていたように思われる。したがって、洪水が襲ってくることを前提に対策を立てる必要があったが、我々を悩ませた問題は、洪水の危険をどう評価するかであった。

今回の洪水は、津波や鉄砲水と異なり、直ちに生命に危険を及ぼすものではなく、冠水した地域で普段とあまり変わらない生活を送っているタイの方もおられた。他方、水道水の汚染、断水、感電、停電、さらには感染症蔓延のおそれは排除できず、在留邦人にとっては、生活に困難を来すおそれがあった。結局、在留邦人の皆様には、バンコク中心部で溢水のおそれが高まった極めて短期間のみ(10月26日から11月16日まで)、国外を含め安全な場所の確保・移動の検討をお願いすることとなった。このような状況に至る前の段階においては、洪水発生時に起こりうる感染症への注意喚起を行うとともに、バンコクの水道水の状況について、大使館のウェブサイト情報を掲載し、在留邦人の不安の軽減に努めた。また、感染症の予防と上水道の維持管理のため、日本から専門家を受け入れ、資機材の提供を行った。なお、日本人専門家の努力によって、大洪水に際して大規模な感染症の発生を予防し、被災地住民への医療サービスの中断

を最小限に抑えるために必要な体制がバンコクでは構築されていることが改めて確認された。

日系企業の被災はタイ政府・国民にどう映ったか?

今回の洪水に対して、日本で急速に関心が高まったのは、10月に入り、アユタヤ県及びパトゥムタニ県にある7か所の工業団地が次々と水没していったことによる。10月4日にアユタヤ県にあるサハラタナナコンの工業団地が浸水した後、次々と工業団地が浸水していく状況を目の当たりにすることの無念さは、筆舌に尽くしがたいものがあった。日系自動車メーカーの完成車が水の中に取り残された光景は、その後毎日のようにタイ及び日本の新聞の紙面に掲載されることになる。結局、7か所の工業団地で800社以上が被災し、そのうち約450社が日系であった。

工業団地の被災に大きく焦点を当てる日本での報道のあり方に対して、特に日本の報道関係者の中からタイの被災民にもっと目を向けるべきではないかという声が上がった。日本政府としても、迅速な復旧と被災者支援のため、後述の通り、様々な緊急援助を行った。また、日本の地方自治体、在留邦人の間にも、支援の輪が広がった。ただ、日系企業の被災に対しては、タイ国内に強い同情があり、また、日本企業はタイから

投資を引き上げるのではないかという強い懸念が生じたのも事実であった。筆者も、インラック首相や関係副首相・大臣等との意見交換を通じて、このことを強く感じた。幸い、これは杞憂に終わることとなる。

日本政府としては、工業団地の被害の最小限化、生産活動の早期再開に向けた支援、特に中小企業に対する救済措置、抜本的な洪水対策等を申し入れた。他方、浸水で操業できなくなっている日系企業のタイ人労働者を半年間日本に受け入れることにし、約5000件の査証を発給した。

大いに評価された日本からの支援

緊急援助では、日本の存在は圧倒的であり、タイ政府も受入れに前向きで、インラック首相及びユンユット副首相兼内相(当時)を始め、閣僚の皆様にも供与式典等に出席する労をとっていただいた。タイのマスコミも積極的にこれを報道してくれた。日本は、ポンプ、船外機、仮設トイレ等の緊急援助物資の供与、治水専門家を含む10名の専門家の派遣、N G Oを通じた緊急支援物資の提供、新型レーダーを用いた観測データの提供といった幅広い支援を行った。10億円を上限とする緊急無償資金協力も実施している。ユネスコと共同でアユタヤ遺跡保存のための協力も行った。

特筆されるのは、国際緊急援助隊の歴史

上、初めて10台の排水ポンプ車と専門家とからなる国際緊急援助隊が派遣されたことである。ポンプ車隊は、約1ヶ月にわたり、工業団地、住宅地、AIT等で排水活動を行い、その高い性能と機動性がタイ国民に強い印象を残した。

JICAは1999年にチャオプラヤー川流域洪水対策マスタープランを作成しており、JICAに対するタイ政府の信頼は絶大であり、引き続きこのマスタープランの見直しを行っている。JICAの関与は、タイで生産活動を行っている日系企業の洪水対策への信頼を得ることに繋がる。ハードの面では、水門整備や高速道路の嵩上げのため80億円規模の無償資金協力を実施している。

国家的課題としての洪水対策、高い日本への期待

タイ政府は、国家的課題として、短期と中長期の水資源・洪水管理計画を作成することとした。これは、海外の投資家の信頼を回復するために、取り組まなければならない課題でもあった。タイ政府は、まず、ウィーラポン元副首相を委員長とする洪水復興・未来建設戦略委員会(S C R F)とキティラット副首相兼財務相を実質的な委員長とする水資源管理戦略委員会(S C W R M)を立ち上げ、その後プロトプラソップ科学技術大臣(当時、その後副首相)を長とする一元指令機関として国家水資源・洪水政策委員

会(NWFPC)とその実施機関として水資源・洪水管理委員会(WFMC)をそれぞれ設立した。

タイ政府は、堤防の復旧、運河・水路の浚渫等の短期的な洪水対策を実施するとともに、2012年1月には、中長期的な洪水対策の基礎となる「水資源管理マスタープラン」を発表し、これに基づいて、7月には、約3,200億バーツ(約8,160億円)を事業規模とする洪水対策プロジェクトの概念設計について国際コンペを実施する旨発表するに至っている。日タイ混合コンソーシアムも、これに参加しており、2013年4月に落札者となれば、その後詳細設計と施工を担当することとなる。皆様がこの稿をお読みになる頃には、結果は判明していると思われるが、日タイ混合コンソーシアムの成功を祈りたい。

洪水対策とともに、タイ政府は被災企業支援のための輸入関税の免税措置、工業団地輪中堤建設のための建設費の補助、500億バーツ(約1,276億円)の拠出による「自然災害保険ファンド」の設立等の措置をとってきた。今後、この制度の一層の拡充を期待したい。

日本政府としては、様々なレベルで、洪水対策のあり方、日系企業支援策等について説明を求め、申し入れを行った。また、洪水

対策に関する協力プロジェクトの提案や日本の優れた技術の説明も繰り返し行った。これに対して、キティラット副首相には、丁寧に日本側の話を聞き、要望に応じていただいた。このような協議が、具体的なプロジェクトに結実し、上述の自然災害ファンドの新設にも繋がった。

2012年6月に皇太子殿下が訪問された折には、チャオプラヤー川の船上で、プロトプラソップ大臣自身が今回の洪水発生状況と洪水対策について説明をくださった。同大臣は、洪水対策に日本が参加するよう繰り返し、期待を表明しておられた。また、JICAから派遣された竹谷JICA専門家は、タイ政府から高い信頼を得て、洪水対策の策定に大いに貢献した。

日本は、これまでタイの洪水対策においてハードとソフトの両面で長い間協力を続けてきており、日タイ混成コンソーシアムが洪水対策事業に参加することを含め、様々な形で大きな貢献をなすことができる。その結果、洪水対策への日系企業の信頼も高まると考える。

日タイ間の絆を強めた大洪水

今回の洪水は、日本とタイが投資・貿易を通じて、いかに緊密に結びついているかを改めて示すものであった。タイは、日本、さらには世界の製造業のサプライ・チェーンの

中核に組み込まれているし、タイの製造業は日本の存在なしには、発展することができないと言っても過言ではない。このことが、改めて明らかになった。

経済面のみならず、日タイ間の精神面の絆も極めて強い。東日本大震災後、日本人社会は、タイへの感謝を表し、力強い日本の復興を見てもらうため、「ありがとうタイ・がんばろう日本」キャンペーンを行っていた。今回の洪水被害を受け、「ありがとう、がんばろう。日本・タイ」キャンペーンとして、継続していくことにした。このキャンペーンの下で、様々なチャリティ・イベントや文化行事が行われた。また、日本人会の行った募金活動の結果集まった約20万バーツは、大橋寅治郎日本人会会長と筆者より、シハサック外務次官に届けられた。

大洪水、その後

2012年10月にバンコクを離れた者にとって、その後の洪水対策の進展状況、被災した日系企業の復興状況、日本からタイへの直接投資の状況等は、常に気になるところである。まず、2012年には、2011年のような大洪水が発生しなかったことは、本当に喜ばしいことである。

短期的な対策は、比較的順調に進んでいるように見える。中長期的な洪水対策については、そのための第一歩である国際コン

ペが成功裏にとり行われることを期待したい。被災された多くの企業は生産を開始されたようであり、生産拠点を、タイの別の場所に移転することはあっても、タイから撤退する企業が少ないのは、1997年のアジア通貨危機の後の日系企業の対応を思い出させるものであり、タイ政府・国民の日本に対する信頼が一層増すことに貢献していくのではないかとと思われる。

さらに、日本からの直接投資は、大洪水後も大幅に増加しているようである。これは、タイ政府の洪水対策への信頼の表れであろうか、日本での投資環境の悪化によるものであろうか、あるいはアジア全体の中でタイの相対的な魅力が高まったことを意味するのであろうか、興味のあるところである。

日本とタイは、不幸なことに2011年、歴史的にも例を見ない規模の自然災害に見舞われた。日タイは協力して、自然災害に強い国造りを進めていくことが期待される。そして、この協力の経験をA S E A N関連会議、国連等の場で共有していくことができる。タイが洪水問題を克服できれば、国際社会、特にメコン流域諸国にとってモデルになるであろう。そのための協力を続けていくことが強く期待される。

本稿は筆者の個人的な見解である。

個人的体験を下に概観した 日タイ文化交流

前チェンマイ日本国総領事
柴田 和夫

1.日タイ文化協定成立記念冊子

今、オフィス内の私の机の上に、「ワッタナタム・タイ・イーブン」(タイと日本の文化)と題する日・タイ双方の言語で書かれた古びた一冊の雑誌が置かれています。この雑誌は、神田の古書会館にて開催された古書展にて、偶然見つけたものです。1942年の日タイ文化協定署名後の翌1943年に、日タイ文化協定成立記念号として日タイ文化会館(注:現在この会館は存在していません)が編纂したものです。

目次を捲りますと、日タイ文化協定成立を祝してという項では、ピブン総理大臣及び東条英機総理大臣、両国の外務大臣及び大使の他、広田弘毅、近衛文麿等日タイ両国の綺羅星のような要路の祝辞が網羅されており、その豪華な顔ぶれに驚きます。同時に、鈴木大拙の「禅の二類型」、タイ国芸術局長を務めた三木榮による「タイの美術工芸」、そして、タイ民俗学の碩学アヌマーン・ラーチャトーン「文学上の美人」と題する論文等、当時の両国の第一級の文化人による論文も数多く掲載されており、本当に、よくぞこれまで著名人の祝賀挨拶及び論文を取り纏めたものだと思心せざるを得ません。

この雑誌からは、当時の日タイ双方の要



「ワッタナタム・タイ・イーブン」

人の文化交流に対する意気込みのようなものがヒシヒシと伝わって来る様です。

文化交流というものも、畢竟、その時代を取り巻く政治、経済情勢等から大きく制約或いは規定されざるを得ないと考えますが、その時代の背景にある種々の要因の影響を受けつつも、自己増殖を繰り返し、独自の発展を遂げて行くものではないかと考えます。

文化交流は、単に、文化度の高いところからその低いところに流れていく様なものでも無く、その交流を通して双方がそれぞれに影響し合い、切磋琢磨し、淘汰され、発展していくものではないかと考えます。

2.日タイ修好百周年記念事業

1987年、日タイ修好100周年祝賀記念事業の一つとして我が国におけますタイ学の両巨頭、故石井米夫先生及び故吉川利治先生が、「日タイ交流六〇〇年史」を出版して下さいました。この本は、日タイ交流関係六〇〇年を概観した大変素晴らしい本で、私の座右の書ともなっています。

前述の「ワッタナタム・タイ・イーブン」は、日タイ文化協定成立後の翌年、その成立を祝賀して記念出版されたものであり、「日タイ交流六〇〇年史」と併せて、日タイ両国の文化交流を考える上で大変貴重な資料だと考えます。

先般、日本人会事務局より、創設百周年祝賀記念号への投稿依頼がなされました。当初、上記二冊の資料も踏まえて、日タイ文化交流史全体の概要を取り纏めてみるのも面白いかと考えました。しかし、あまりにも無謀な試みであり、浅学非才の私の手に負えるものではなく、まさに、群盲が象を撫でるような作業ともなりかねませんので、そのような大それた野心は一先ず横に置くこととしました。

私は、これまで、在バンコク日本国大使館及び在チェンマイ日本国総領事館並びに外務本省南東アジア第一課タイ班での勤務を通し、タイの専門家として多くの体験を重ねることができました。

今回のバンコク日本人会事務局からのリクエストに対しては、私が、これまでにタイ

にて過ごしたそれぞれの時代における個人体験を回想しつつ、特に、日タイ文化交流の現場にスポットを当てることとしました。私の極めて個人的な体験を少しなりともシェアしていただけるのであれば、望外の幸せではないかと考えます。

1.初めてのタイ

私が、最初にタイ国に足を踏み入れたのは、1979年でした。チトラダー宮殿近くのタイ人公務員の下宿から、毎朝、バスに乗りシーロム通りのサーラーデンにて下車し、そこから徒歩で、サートン南路にあったタイ語の学校に通い、タイ語の勉強に明け暮れておりました。

当時、シーロム通りとラーマ四世通りの角に、木造建築の小学校がありましたが、子供達が砂煙を上げてサッカーボールを追っていた長閑な風景が、何故か今でもありありと臉に浮かんで来ます。

バンコクは、歩道が不備かつ不十分なこともあり、散歩が自由に楽しめるスポットが少ない街ではないでしょうか。その様な状況下、タイ語学習に少しは慣れて来た頃、散歩が出来、かつ、日本と同じ漢字文化圏である中国文化が色濃く残っている蠱惑的なヤワラートに魅力を感じ、足繁く通うようになりました。

ヤワラート通りと平行して走っているニューロード通りのフアランポーン駅の近くに、当時、日活ポルノ映画を上映している映

画館がありました。日本の映画をどのような人が見ているのか大変気になり、ヤワラート散策後、その映画館の中を覗いたことがありました。映画館の中は、労働者風のタイ人で一杯で、映画自体、映倫によるボカシやハサミが沢山入っていましたが、食入のように熱心に映画を見ている人達に圧倒されました。

語学留学が半年過ぎた頃、名門チュロンコーン大学政治学部への留学がようやく許可され、若い学生に混じって主に国際関係の授業に出席することが出来ました。大学のキャンパスでは、偶然に、東北タイ出身でヴィトナム系の青年ウィラットという学生と出会い、タイ政治に関する小さな読書会を契機としてその友好を深めることが出来ました。

読書会后、ウィラットとは、サームヤーンの海鮮料理の美味しい店に、よく食べに行く機会があり、ビールを飲みながらいろんな話をすることができました。ウィラットは、子供の頃、映画館にて穴戸錠の映画をよく見た話を何回も聞かせてくれました。頬を膨らませ、エースのジョーと呼ばれた穴戸錠が、ピストル片手に悪人をなぎ倒し、スクリーン一杯に活躍する様子見て、「僕の子供の頃の憧れは、穴戸錠」、と本当に嬉しそうに話すウィラットの様子はとても印象的でした。

日活ロマンポルノや穴戸錠の映画は、多分版權が安いことも手伝って、当時のバン

コクの間末の劇場や田舎の劇場にて上映が可能となったのではないかと考えます。映画自体の出来不出来は兎も角、当時、我が国の所謂B級映画と呼ばれた映画でも、タイの庶民の心に届き影響を与えていたことは間違いないことでしょう。

2.1980年代のバンコク

我が国のタイ華僑研究の第一人者である樋泉克夫南山大学准教授は、今から約30年前、バンコク日本人会創設70周年記念号に、バンコクのチャイナタウンであるヤワラートに関する文章を投稿し、当時のヤワラートに住む華僑の生活振りを活写しています。

私自身も、当時、在タイ日本大使館の専門調査員であった樋泉先生が足繁く通った潮州劇の劇場の前を何度か素通りしたことがありました。劇場前には、潮州劇宣伝の中国語のポスターがガラス戸の中に寂しそうに貼られ、切符売り場には、客が皆無でシーンと静かな佇まいでした。バンコクにおける潮州劇の劇場がその役割を終え、時代と共に消滅していくその最期の様子を辛うじて自分の目で目撃することが出来ました。

当時、バンコク市内にあった日本料理屋は数える程でしたが、シーパヤー通りの「花屋」にはよく通いました。改修なった現在の建物の入り口付近に、中曽根総理のタイ国訪問時の写真及び日本留学組の出世頭ソンマーイ大蔵大臣等の写真が飾ってありま

す。その写真を見る度に当時のバンコクでの色々な記憶が鮮やかに蘇ってくるようで、とても不思議な感じがしております。

当時の日本料理屋でのウェイトレスの挨拶は、何故か「ラッセエーマセ」という発音で、浴衣の着方もちょっとだらしがなく、日本語ができるウェイトレス自体も皆無に近かったのではないかと思います。

あれから30年、ラーメン横丁、鰻の専門店、日本蕎麦の専門店、B級グルメの専門店が立ち並ぶショッピングモール等々、国外で屈指の日本料理の激戦区と言われるバンコク、そして、タイ全体で、現在、1600店舗以上の数の日本料理屋が進出しているという事実、また、日本語を上手に話せるウェイトレスが驚くほど増えたこと、これらのことを、30年前の当時、バンコクに住んでいた邦人で、一体誰が予想することが出来たでしょうか。

3.タイ人アヤさん

語学研修を了し、在タイ日本大使館勤務を命ぜられてから少し経った頃、タイのテレビにてタイ語吹き替えの「オシン」の放映が始まりました。当時、独身で、一軒家に済んでいた私は、以前、住んでいたアパートを出る際に、大家から、アパート家業を辞めるので、女中さんを一人連れて行って欲しいと嘆願され、目の大きなゲウター（ガラスの目?）というおとなしいアヤさんに女中さんとして働いてもらうこととしました。

当時独身の私は、仕事も忙しく、毎晩、家に帰るのは遅く、家は単に寝るだけの場所でした。ある夜、仕事の終了後、珍しく真直ぐに家に帰りましたら、アヤさんのゲウターが目一杯涙を浮かべているのに気がつきました。どうしたのと聞きますと、TVでオシンを見ていたとの答えが返って来ました。

苦労が絶えないが、健気に一生懸命頑張っているオシンの姿を見て、そのオシンの人生が自分自身の人生と重なり、一種のカタルシスが起ったのではないかと思います。

ゲウター同様、当時、オシンの番組を見て感動し、共感を覚えたタイ人は、アヤさんであれ、肉体労働者であれ、本当に多数に上ったことと思います。

外国のTV番組であるオシンが、タイ社会に与えた影響力は、私達の想像を絶するものがあつたのではないのでしょうか。それから永い時間が経ち、韓国の「冬のソナタ」及び「デージェンダム」がタイ人の心を掴んだのは、皆様ご承知の通りです。

当時、トンソン通りの入り口付近に、日本式の小さな鉄板料理屋があり、そこで食べた焼きそばが大変美味しかったこともあり、ゲウターに、実際に焼きそばを試食してもらい、家で作ってくれるようにとお願いしたことがありました。その日の夜、美味しい焼きそばが食べられるものと勇んで帰宅しました。

しかし出てきたものは、焼きそばとは似て

も似つかぬものでした。それは、なんと、うどんをケチャップで炒めただけの料理でした。

「焼きそばを勉強してくれと言ったはずだ。これは、焼きそばでは無い。焼きそばというものは、バーミーとその具をソースで炒めるものだ。この麺はうどん、バーミーではない。ソースにケチャップは使わないのだ。」と、下手なタイ語で相手を責めまくりました。

その時でした、私の罵詈雑言を我慢して聞いていた彼女が、やおら、「おお、そこまで言いますか。上等じゃないですか。私にも言わせて下さい。」と、かなりな早口で、その日は指定の鉄板料理屋が閉まっていたこと、他の日本料理屋に行っても焼きそばがなかったこと、友達に、料理方法を聞いたところ、日本の麺を炒めたものと言うので、スーパーで日本の麺を購入し、一生懸命作ってみました。それなのに、その努力、それをあなたは、全て否定するのか!」と激しい剣幕でした。その剣幕にたじろぎつつも、「作り方がわからないならば、作らない方が良かったのではないかと反撃を試みました。その時です、この戦いは、ひょっとしたら考え方の相違から来る文化衝突では無いか、という考えが頭を過ぎりました。ゲウターは、お腹をすかした私のことを考え、焼きそばの細部よりは、先ずお腹をみたすことが最優先、と考えたのではないかと考えました。

日本人とタイ人の思考方法の違い等、これまで、日タイ文化摩擦等に関する本は身

の丈以上に読んで来ていましたので、文化摩擦についてはそれなりに理解していたはずなのですが、たかが、焼きそば如きに理性を失って、アヤさんとやり合うこのザマは一体何だと、自分で自分が情けなくもありました。女中さん一人、きちんと言葉で説得できなくてどうするのだとの思いもありました。

その後、タイ語の能力も伸び、コミュニケーション能力も少しは上がった筈なのですが、種々の場面で、日本人とタイ人の思考の違いから生ずる日タイ文化摩擦を感じる事が多々ありました。完全なタイ語が使えず、日本的思考法でのみ考え、タイ文化の海の中を溺れそうになっている自分が見えました。ここはタイであり、日本ではないのだ、と頭で理解していても、日本人の考え、また、日本の文化を押しつけようとしている自分を発見して、何度赤面したことでしょう。

その昔、ソーイ26の奥にあったゴルフ練習場に通ったことがありました。その日、練習場はかなり込んでおり、多くの人が、練習の番を待っている中、練習マットの直ぐ後ろの椅子に陣取り、ビール片手にチャーハン、それはそれは見事な程、悠然と味わっているタイ人がいました。みんな並んで練習場の空くのを待っているのに、あなたの自己本位のその態度は何なのだ、少しは恥を知れと、思わず口に出しそうになるところでした。

また、エレベーターのドアが開くやいなや、傍若無人に横入りしてくるタイ人もいま

した。その様なタイ人を見ては、「ねー、みなさん、本当にそれでいいの?」と本気で切れ掛かっている自分を、もう一人の自分が上の方から見ていました。

ただ、「あなたは、ここでは所詮異邦人、ここは日本では無くタイなの。日本のやり方をいくら主張しても無駄なの。」という声が何度聞こえて来たことでしょう。

他方、タイでの生活が長くなるにつれ、日本人の物差しを一応ポケットに入れることが出来るようになり、優柔不断ではあるが、非常にしなやかなタイ人の思考方を目の当たりにして、「タイ人は、いい加減って表現は正しくなく、多分、良い加減という表現が妥当ではないか、タイ人は、程よい加減がわかっている人達ではないか。」と、頷いている自分を発見しました。

「よりおおらかに、よりしなやかに、より優しく、そして、もっと楽しく。」と、私は、タイの人達から、人生で大変有意義なことを学ばせていただいたと感謝しております。

4.NYのカオニオ・マムアン 1986年

二年間の語学研修、引き続いての在タイ大使館での4年間の勤務と、合計6年間のタイ生活で、身も心もタイ(退?)化した私に、NY勤務の辞令が下りました。花のNY勤務と喜び勇んで赴任しました。しかし、そこは、世界の中心でしたが、まさに魔都。タイ生活ですっかり南洋ボケした私には、NYは生き馬の目を抜く場所でした。当時、NYは治安

が極端に悪く、それは恐ろしい世界でした。

或る日突然、中身の詰まったコーラ缶が私の顔の直ぐ横をビューンと音を立てて飛んでいったこともありました。仮に、頭にでも当たっていれば、大怪我をしたことでしょう。また、場末の日本料理屋で日本酒を飲み、ほろ酔い機嫌で外に出たら、黒人男性に後ろから羽交い締めにされたこともありました。喉を締められ、血痰が出て、しばらくは声も出ない程でした。

その様な中、NYのチャイナタウンには良く通いました。「プーピン」という名の、タイ料理の素材や、タイの週刊誌及び新聞等を売っている店がチャイナタウンの中にありました。その店は、懐かしいナムプラーの匂いもしたことでした。また、タイ語のメニューまで置かれている、美味しい海鮮パミー・ナムをサーブしてくれる麵専門店もあり、寒い冬の日にはよく出かけました。また、ベトナム料理屋もあり、物騒なNY生活の中、チャイナタウンは、東南アジアが身近に感じられ、至福の癒しの時間が味わえる隠れ家的な場所でした。

一度、報道関連の研修でNYに来ていたタイ英字紙の女性記者と意見交換する機会があり、某ホテルのロビーにて落ち合うこととなりました。二人で話をしていたほんの僅かの間の出来事でした。ソファーに置いた女性記者のハンドバッグが置き引きされたのです。彼女の沈んだ気分を少しでも慰めてあげようと、その晩は、ホテル近くの馴染

みの寿司屋に誘いました。ショックの彼女に色々話しかけましたが、かなり上の空で聞いている様子でした。出てきた寿司を前に、思わず、外国暮らしの日本人にとり、生もの(寿司や刺身)は欠かせないのだけれど、とところで貴女にとって、今一番食べてみたいタイ料理はなあにと訊ねてみたら、なんと、「カオニオ・マムアン」(生のマンゴーと餅米にココナッツシロップかけたもの)との返事が返って来ました。

北風吹くNYの一夜、ハンドバックが置き引きされ、失意のどん底にいた彼女でしたが、その目がほんの一瞬耀いたかの様に見えたことでした。

5. アユタヤ歴史研究センターの改装なったアネックス(元日本人村跡)

2007年、日タイ修好120周年を祝賀する目的で、バンコクにあるタイ日協会は、アユタヤ歴史研究センターのアネックスを大幅に改装し、大航海時代のアユタヤの港市としての役割に重きを置く展示場を開設しました。新装なったアネックスの開所式には、シリントーン王女殿下がご臨席され、御朱印船時代に日本に大量に輸出され、赤やピンクの染料として使われた蘇木の苗木を、同アネックス内の庭園にて御植樹されました。

また、王女殿下は、アネックス内の特別展示用として、平戸の松浦(まつら)資料館の学芸員が持参した「暹羅船の図」を大変熱

心にご覧になられました。

初代タイ公使を務めた稲垣満次郎は、奇しくも平戸の生まれです。その平戸には、旧平戸藩主松浦家の建てた松浦資料館があり、歴代の藩主が集めた貴重な資料が収蔵・展示されています。同資料館の所蔵資料の中に「唐船之図」があり、中国の色々な地域からの唐船に混じって、タイからの船が暹羅船としてその絵図の中に遺されていたのです。私もその絵を見させていただきましたが、色鮮やかで、船の各部位の寸法まで正確に記述されていることには驚きました。

各部の寸法がきちんと記述されているその絵図は、そのまま設計図にもなることから、以前、台湾の台南市において「唐船の図」を下に台湾船が復元され、実際にその船を走らせたことがあったと聞いております。

将来、暹羅船が復元され、長崎若しくは平戸の港からその昔、朱印船が辿った中国沿岸の航路をとり、アユタヤ向け試験航海をしていただくことを密かに希望しているのですが。

種子島に鉄砲を伝えたポルトガル人は、実は、ポルトガル船に乗って種子島に漂着したのではなく、アユタヤから中国のジャンク船に乗って中国渡航を企てようとした少数のポルトガル人であり、中国に向かう途次、暴風雨に遭遇し、種子島上陸を余儀なくされ、種子島で鉄砲を伝え、その後、同じ中国船に乗り、再度アユタヤに戻ったとされています。

アユタヤを頻りに訪問されている草野栄信さんは、シャム湾の海底やアユタヤ近辺の川底から拾い集めた「水中の遺品」を1千点以上収集しているタイ水中考古学研究所の研究者達と交流を深めています。草野さんは、1999年9月29日付日経新聞の文化欄に、「栄華のアユタヤ水古伝」と題する記事を投稿していますが、その主旨は、タイの海やチャオプラヤー等の川底に沈んでいるかも知れない日本からの交易船である朱印船を引き揚げてみたいとするものでした。その記事が掲載されてから既に10年以上が経っています。「ところで、あの話はどうなりましたか?」と、草野さんと再会の際は、その後の研究の進捗振りを伺ってみたいと思っています。

6.日本人街跡発掘計画

日タイ修好120周年の際、その祝賀記念事業の一つとして、アユタヤの日本人街跡にあるアユタヤ歴史研究センター・アネックスの場所より更に南に下った辺り、アユタヤ時代にポルトガル人の建設したイエズス会の教会の河を挟んだ反対側に存在していたと言われている日本人街跡を発掘しようとする計画がありました。

然し、種々の障害もあり、残念ながら、その計画は夢と潰れてしまいました。

歴史学者東恩納寛博博士は、その著作「泰ビルマ印度」の中で、谷田部公使(当時の大使)が、アユタヤにおける日本人街跡

発掘現場視察した時の様子を書き残しており、日本人街跡から発掘された仏像や、屋根瓦、茶碗のかけら等から、現在の日本人街跡が特定されたとしております。その当時、発掘された仏像等は、上野の山の芸大に持ち帰られたと仄聞しておりますが、どこかに散逸してしまった様で、アユタヤ時代の日・タイ交流を示す証拠物件が消えてしまったことは、かえすがえすも残念でなりません。

なお、日本の徳川時代にあたるアユタヤ王朝との間では、交易が大変盛んで、侍が乗馬する際、鹿革の袴を用いるため、大量の鹿皮がアユタヤから永年に亘り我が国に輸入され、それが、タイの鹿の絶滅の原因とされている由です。

7.我が愛しの小泉武雄先生

東京農業大学名誉教授の小泉武夫氏は、雲南省や東南アジア地域の醸造文化に造詣が深い方です。小泉先生は、沖縄の泡盛の製造方法は、大陸経由ではなく、タイから直接琉球に渡ったものと、その著書「白酒」の中で論述しております。現在、沖縄の泡盛は、タイから輸入したうるち米を使って黒麴菌で麴を作り、製造しており、タイ米でない泡盛のあの独特の風味は出てこないとのこと。

以前、NHKにて「素晴らしき地球の旅 発酵食品のルーツを求めて 雲南食紀行」と題する特別番組が放映されたことがありました。その番組は、まさに小泉ワールド、

雲南の生鮮市場や、少数民族の部落を先生が訪れ、同地域特有の発酵食品を、大変美味しそうに食べまわる小泉先生の生き生きとした様子を伝えてくれました。

何十年も寝かせた淡水魚のなれ寿司を頬張りながら、現地の人と蒸留酒を煽り、心ゆくまで歓談し、その後、グデングデンに酔っ払った小泉先生が、現地の人と支え合いながら、見事な造形美の橋を渡る姿には、同じ発酵文化圏に住むアジア人として大いに親近感を感じました。

なお、タイの発酵文化と雲南省の発酵文化もかなり類似しており、琵琶湖のフナ寿司、魚醤、納豆等日本の発酵文化を見ても、日本の発酵文化は、タイの発酵文化と繋がっている様です。

小泉先生に、雲南省、インドシナ地域そして日本と三つの地域の発酵文化の類似性に関する講義を行っていただけたら大変興味深いものとなるのではないかと考えたことがありました。種々智慧を絞り、トライしようとしたのですが、未だに実現に至っていないことは残念でなりません。

外務本省勤務中の2010年、外務省の裏門近くで偶然にも小泉先生に遭遇する機会がありました。ポッチャリした体型で、優しく丸い大きな目をして、少し汗をかかれています。遠くから見て、一目で小泉先生とわかりました。なんと声をかけたら良いのか迷いましたが、先生の愛弟子であるタマサート大学副学長のソムチャーイ先生を

思いだし、直ぐ側まで来られた先生に思い切って声をかけました。それは、僅か数分の出来事で、自己紹介とソムチャーイ先生の話で先生との邂逅は終わってしまい、肝心の東アジア発酵文化に関する特別講義についての依頼をすっかり放念してしまいました。

8.インドシナ半島に広がるタイ族について

1984年、タイからベトナムの首都ハノイに出張した際、ベトナムとラオスの国境地域にある黒タイ族のマイチョーという小さな部落を訪問する機会がありました。その村では、サトウキビで作られた焼酎の地酒を飲ませていただきました。味は、沖縄の泡盛似で、口の中で荒駒が暴れまくっている様な味がしました。その村では、タイ語がそれなりに通じることに大変驚きました。また、蔓草のスープ、餅米、魚醤で味付けした炒め物等その料理もほぼタイ料理そのもので、住まいは高床式家屋、精霊が宿るとされチェディーの形をした防御壁のある水汲み場、米作、そして米作を支えている灌漑技術の存在、全てタイのタイ族のそれと同様でした。

その後、機会があり、ラオスのルアン普拉バンに住むタイ・ルー族の村、中国雲南省昆明から更に飛行機を乗り継いで下って行った景洪はシプソン・パンナーのタイ・ルー族の村、タイ国内メーホンソーン県に散在するタイ・ヤイ族の村、タイとミャンマー国境脇にあるミャンマー・シャン州内の

古邑チェントン近辺に住むタイ・クーン族の村等、インドシナ半島に広範囲に散らばっているタイ族の村々を訪問する度に、それぞれの言語、生活様式、慣習、文化等がタイ国内のタイ族とほぼ同様であることを知り、タイ族同士の文化の類似性、また、タイ族文化の多様性の面白さに、すっかりはまってしまいました。

現在、私が住んでいる北部タイの山奥には、「ワ」若しくは「ルワ」と呼ばれるタイ族が住んでおり、タイ族の本体が雲南省から南下してくるずっと以前から、先住民族として住んでいたとも言われております。

その「ワ」族の部落の入り口には鳥居があります。鳥居は神様のお使いである鳥が居るところですが、鳥居の内側をサンクチュアリーとしてその外側と分離する役割がある由です。

また、建物の屋根の上には、当地では「ガレー」と呼ばれる伊勢神宮の社の千木にも似た装飾が施されています。「ワ」族は、紫の餅米を食べ、焼酎を飲み、子供達は、竹馬や独楽で遊んでいます。日本の倭族とも繋がりがあるとの学説もあり、遙か遠い昔、雲南省近辺より「ワ」族の一部は日本に船で渡り、また、別の「ワ」族のグループは、東南アジアに南下して来たとされております。

2013年1月、北部タイと国境を接しているミャンマーのシャン州の古邑チェントンの山奥の「ルワ」族の村を訪問する機会がありました。その村の入り口の鳥居、玄関の注連

縄、そして日本人に似た村民の顔を見て、これは、日本の倭族と何らかの繋がりがあってもおかしくないと感じ、鳥肌が立ったほどでした。

1984年、ベトナムの黒タイ族の村を訪問したその日の夕刻、作家辺見庸が「ベトナム挽歌」で描写したタンソニット・ホテル(現在のメトロポール・ホテル)の中にあったNYのアルゴンキン・ホテル内のバーを彷彿させるレトロ感覚のバーにて、外務省後輩のベトナム語専門家とビールを飲んでいましたら、東南アジアの魚醤研究のためベトナム入りしていた国立民俗学博物館の石毛直道氏とケネス・ラドル氏と出会うことができました。

当時、邦人の入国が厳しく制限されていたベトナムで、日本人学者と邂逅できるとは全く思ってもみませんでしたので、その時の記憶は、今でも鮮明に残っています。石毛氏は、その時の調査結果を取り纏め、「魚醤とナレズシの研究 モンスーンアジアの食文化」という本を上梓していますが、その本のページを捲る度に、ベトナムのヌックマム、タイのナムプラーの匂いがそこはかたなく漂って来るような気がします。

9. 鶏卵素麺(フォーイトーン)

タイ料理のプッフエには必ずタイのお菓子がついています。卵で作られた黄金色の細長い糸を細く束ねたフォーイトーンはタイのスイーツの中でも私の好物の一つで

す。

航海の神様として奉られている媽祖以外に、タイでは、航海の神様として鄭和を奉っている寺(社)が、アユタヤ、トンブリー及びチャチュンサオの三カ所に点在しており、外国出張の多い、私も道中(航海)の無事を祈って三カ所の寺社を参拝したことがあります。

その三カ所の一つの、チャオプラヤー河を挟んでバンコクの対面にある旧都トンブリーのセント・クルス教会の直ぐ側のガンラヤニーミット寺院に参拝した帰り道、フォーイトーンの製造現場を見させていただく機会がありました。

フォーイトーンは、ポルトガルから長崎の平戸に安土桃山時代に渡来した南蛮菓子で、ポルトガル語ではfios de ovos(卵の糸)伝来したとされており、タイでは、日本、ポルトガル、タイの混血であり、当時のギリシア人で宰相となったフォールコーンの妻でアユタヤ王朝の厨房にも入ったマリー・ギマルドによりタイに広められたとされています。

フォーイトーンは、長崎の「鶏卵素麺」と全く同じ形、色、味で、大航海時代にポルトガルからタイへまた、ポルトガルから日本へ直接伝わったことが実感できます。大航海時代、日タイ双方の国に入って来た西洋の菓子文化が、タイと日本で現在でも文化遺産として受け継がれていることは大変興味深いものです。

10.漫画、一休さん、ドラえもん、そしてウルトラマン

それは、日タイ修好120周年を祝賀する前年の出来事でした。2006年の9月にバンコクにて開催された日本語弁論大会の際の出来事は、今でも鮮明に覚えております。

高校の部にて、制服を着た可愛い女学生が、スピーチの開口一番「好き好き好き好き好き好き、一休さん」と歌い出したのです。当時、私を含め、審査員全員が、一瞬、啞然としてお互いの目を見合わせてしまいました。我が耳を疑いましたが、歌は直ぐ終わり、スピーチが始まりますと、小さい頃TVで見た「一休さん」が大好きになり、その影響で、日本語の勉強を開始し、将来の夢は日本留学と流暢な日本語で締めくくってられました。

その時、とっさに旧知のスティンさんを思い出しました。スティンさんは、温厚で笑顔の素敵な東北出身のタイ人です。高校時代から我が国の学芸大附属高校に留学し、その後慶応大学にて経済学の博士を取得した人物で、一時期、国家経済開発委員会事務局に奉職していましたが、現在は、NGOにて働くかたわら、タイの中高等学校の先生達に日本の経済を教えたりしています。

そのスティンさんは、幼少の頃、テレビでウルトラマンの番組をよく見ていたそうです。悪を懲らしめ、良いことを行っても、決してそれを他人には自慢しないウルトラマンに心底憧れ込み、いつか、ウルトラマンの住

む日本に行ってみたくらいという夢が生じ、その夢が日本留学への引き金になったと教えてくれました。

「三つ子の魂百まで」とは、よく言ったものです。一休さんやウルトラマンの他にも、ドラえもん等の漫画もタイの多くの子供達に素晴らしい夢を与えてくれたのだと思います。

本年1月12付英字紙ネーションは、2A面にて「READ IN CHILDHOOD, REAP AS ADULT」と題し、小さい頃ドラえもんの漫画を読んだことが、その後、創造的な会社であるタイ・グーグルに就職する契機となったとする女性のコメントと共に、「星の王子様」他推薦図書7冊の写真を掲載しておりました。

その7冊の図書の内、2冊が、「トットちゃん」と「ドラエもん」であり、日本の本及び漫画が数少ない推薦図書に選ばれたことに日本人として大変嬉しく感じました。」

11. 叩きの技法について

チェンライ市内のディンデーンには、タイ人陶芸家ソムラックさんが陶磁器を焼いているギャラリーがあり、常時、外国人観光客等で賑わっています。ソムラックさんは、以前、唐津の第十三代中里太郎右衛門さんの工房の門を叩いた方で、そこで作陶技術を磨き、日本人の感性に強く訴えかける素晴らしいお茶碗を焼いています。

外務省のベトナム語専門家にベトナム陶

磁器に大変詳しい先輩がおり、その先輩から第十三代中里太郎右衛門さんを紹介していただき、太郎右衛門さんが、東京にお出でになる度に、浜松町にある太郎右衛門さん行きつけの中華料理屋で美味しい料理をご馳走になりながら、中里家に伝わる「叩き」の技法や、東南アジアにおける骨董探しの旅等について種々聞かせていただきました。

太郎右衛門さんご自身も、叩きの技法を駆使して素晴らしい茶器を作っております。また、御茶碗釜として名高い唐津中里家に歴代伝わっている叩きの技法のルーツを探すため、これまで、朝鮮半島のみならず、タイ、ミャンマー、インドネシア等叩き技法の残っている東南アジア等の国々も回って研究されている話もお聞きました。

チェンマイ近郊の素焼きの土器を作るところでは、今でもロクロは使用せずに叩きの技法を使って造形を行い、土器を焼く際は、稲藁や竹を土器の上に直接乗せて野焼きするだけの簡単な方法で土器を制作しています。

第十三代太郎右衛門さんは、残念なことに、既に鬼籍に入られてしまいましたが、以前、NHKの番組で、インドネシアにて、叩きの手法で自らが制作した土器を、昔ながらの方法で野焼きしている映像が流れ、その野焼きの様子を見て、タイやミャンマーの焼き方と全く同様であることに驚きました。以前、福岡への出張の際、飛行機の時間を

待つ間に、唐津に第十三代太郎右衛門さんを訪ねたことがありました。豪邸の中に素晴らしい茶室が2つもあることに先ず驚かされましたが、それよりもなによりも、カンボディアの骨董の黒釉の少し長い壺に、茶花が何気なく生けてあり、その可憐な白い花とカンボディアの黒釉の色のマッチングの美しさはそれは感動的でした。

12.花食文化(花食う人)

天城の湯ヶ島町は、アマギ・シャクナゲを町の花に指定しており、その町民は、シャクナゲの花の料理にも強い関心を抱いている様です。

1988年、湯ヶ島町は、静岡大学との共催にて「アジア花食文化に関するシンポジウム」を開催しており、私は、そのシンポジウムを記録した本を偶々入手することができました。記録によりますと、王立森林局の技術副所長がタイからシンポジウムに出席し、タイの花食文化についての講演を行ったとしています。タイには、22科47種もの食用花卉があり、その名前、生育地及び調理方法等を詳しく紹介し、タイにおける花食文化の豊穡さがシンポジウムの中で一際目立った様です。

タイ式焼きそば「パットタイ」は、私の好きなタイ料理の一つです。その料理には、バナナの花の蕾が添えられており、少し甘い味の「パットタイ」に苦みを添える意味で、摩訶不思議なマッチングとなっております。

30数年前、現在のイセタンが入って入るビルの斜め反対側に大丸百貨店が入ったビルがあり、そのビルの中に、大変美味しい「パットタイ」をサーブしてくれるお店がありました。当時ラーチャダムリに住んでいた私は、家から直ぐ近くのそのお店に足繁く通った程です。当初、苦いと感じたバナナの花の蕾も、次第に慣れ、それが添えられていない「パットタイ」は問題外と豪語するようになりました。

苦い味のバナナの花の蕾との出会いは、強烈でした。しかし、その後、少しずつタイの花食文化に興味を持ちはじめ、タイ花食文化の奥深さに畏敬の念を感じるようになりました。

バブル経済華やかなりし頃、米国西海岸から「エディブル・フラワー」(食用花卉)なるものが、日本に上陸し話題となったことがありましたが、バブル経済の崩壊と共に短期間で話題にも上らなくなった様です。

タイの花食文化は、スープや、ヤム(和え物)等にして食べるほか、タイ・ヤイ族の様に天麩羅として食べる文化もあり、美味しく、かつ、健康にも良く、タイの花食文化を多くの邦人に知っていただきたいと願っております。

毎年5月、東京の代々木公園の恒例行事、「タイ・フェア」は、毎年40万人近い参加者で賑わう、都内で最も大きなフェスティバルの一つになっていると聞いております。そのタイ・フェアに、タイの花食文化を紹介

するテントが、そろそろ出現しても良い頃なのではないかと思っています。

滋賀県の大津市には、1200年前から伝わる坂本キクと呼ばれる菊があり、ちらし寿司、天麩羅等をはじめとする菊の料理10品からなる菊のコース料理もある由です。タイのチェンマイでは、国王プロジェクトにより、タイ国内で最高峰のドーイインタノーン mountain 裾近辺で観賞用の菊が栽培されております。北部タイ地域の人達は、菊を食べることはない様ですが、いつか、公邸の料理に菊の天麩羅を紛れ込ませタイの人を驚かしてみたいと企んでおります。

最近、公邸料理人にお客の目の前で天麩羅を揚げてもらい、タイ人のお客に揚げたての熱い天麩羅の美味さを味わっていただいておりますが、タイの花の天麩羅種は菊以外種々試してみましたが、何故か、白いドーク・ケーの花が一番人気となっている様です。ドーク・ケーの天麩羅、是非、一度お試しあれ。

「2人の明治人が見たバンコクにおける日本人と中国人」

愛知大学教授
元外務省専門調査員(在タイ日本国大使館勤務)
樋泉 克夫

タイ国日本人会が重ねた100年の歴史は同時に日本の東南アジア進出の歴史であり、日本人が東南アジアの人々とどのように関わったかの歴史だろう。

平和な時代も戦争と混乱の時代も経験した。世界第2位の経済力を背景に東南アジアに大きな経済的影響力を発揮した時代もあった。その頂点が85年9月のプラザ合意によってもたらされた「円高」の時代ではなかったか。やがて90年代初頭にはバブル経済が破裂する。以後、日本経済は「失われた10年」「失われた20年」に象徴される長期低迷の時代を過ごし、いま、日本政府は東南アジアを「世界経済の成長のエンジン」と看做し、チャイナ・リスクを回避すべく本格回帰を打ち出す。

この間、いつの時代であれ日本人は現地には根付いている中国人(時代によって「支那人」、「華僑」、「華人」と呼び方が違うが)と付き合い合ってきたわけだ。

■「忍耐結合の二方に富み商界を疾駆す」

タイ国日本人会が成立した大正2年(1913)を遡ること17年。明治29年(1896)も押し詰まった12月20日、岩本千綱と山本銀介の2人の日本人が「シャム[暹羅]国バンコック[磐谷]府を發し、翌三十年四月九

日、安南国[ヴェトナム]東京[北ヴェトナム]ハノイ府に出でた」。彼らが「通過せしはシャム、ラオス[老撾]、安南三国跋涉せし山河は無慮一千二百七マイル、ために一百十一日の日子を費やす。この間の日々を、岩本は『三国探検実記』(中公文庫 1989年)に綴っているが、旅の道すがら中国人に接している。

いまから120年余りの昔、「猛獣、毒蛇の害は言を待たず、群盜昼出でて人を殺し、時に森林悪熱、猖獗を極め、命を殞す者十中八、九なるを常とす」る一帯を、ことばも判らず地理も不案内なままに踏破しようなどという行動力は何に支えられているのか。無鉄砲が過ぎるが、ダメモトの剛毅な楽天的精神に溢れていたことだけは確かだろう。

岩本は土佐出身で陸軍幼年学校、士官学校を経て任官したが、不図したことから上官の忌避に触れ軍を離れた後、シンガポールからシャム(タイ)を貧乏旅行。当初は熊本農民のタイ殖民事業に乗り出す。これに後述する宮崎滔天が一枚噛んでいたというから面白い。この事業が失敗したことで宮崎の関心は孫文による中国革命支援へと移り、一方の岩本はタイとの貿易事業に手を染めるものの、これまた失敗。かくて「この国(シャム)存亡は東方の大勢に関するところ

じつに藪なからず」と確信した末の探検旅行になった。

巡礼僧に扮した2人は、先ずバンコクからアユタヤへ北上。道を東に取り東北タイの要衝・コーラートで北に転じ、ノンカイでメコン川を渡ってヴィエンチャンから仏都・ルアンプラバンへと進んだ後、東北方面に向かい黒河(タイ川)、紅河(ソンコイ川)を越えハノイに辿り着く。

かくして旅の先々で中国人に接し、彼らの振る舞いに対する思いを綴る。

「今バンコクの人口を仮に四十万と見做し、その半数を支那人」というから約20万人を数えるということだろう。当時のバンコクでは「蓋し・・・日本商店の商品といえば手をだも触れず」とのことだが、彼らに日本商品は相当に嫌われていたらしい。それもそうだろう。この年の2年前に勃発した日清戦争で日本に完膚なきまでに敗れ去り、翌1895年には彼らにとっては屈辱的な下関条約の締結となったわけだから。

日頃から「倭」などと軽蔑していた日本に破れたのだから、日本が憎かったに違いない。屈辱の憂さ晴らしを日本商品にぶつけたのだろう。日貨排斥である。「坊主憎けりゃ」ではないが、日本が憎けりゃ「日本商店の商品」だって憎らしく思えたに違いない。おそらく日清政争の敗北は、それほどまでに彼ら漢民族の自尊心を傷つけたということか。

だが「商品といえば手をだも触れ」ない

客が20万人余もいたということは、日本商店としては商売アガツタリだ。かくて「日本品を購買するものは五百余人と幾百人の上等インド〔印度〕人、マレー〔馬來〕人および少数なるシャムの皇族、貴族」だけという状態だったらしい。これではバンコクの日本商店に大きな商売は期待できそうにない。

2人の旅は続く。

コーラートの手前では、「かつて日本より渡来せし鉄道工夫中この地において死亡せしものある由を聞きたれば、その墓所を」訪れ、「小斧を借り受け路傍の大樹を白し、鉛筆を以って」、「南無日本鉄道工夫之靈頓生菩提」など「数文字を記」した。コーラートまでの各所で「鉄道工夫たる支那人」の小屋を散見しているが、日本人も中国人と共に、コーラートへの鉄道工事に苦汗を流していたのだ。

やがてコーラート到着。ここでも住民の半分は中国人だった。「(コーラートの)戸数四千余、人口殆ど四万に近し。おおむね商いを以って業となす。居民は支那人その半数を占め、・・・また支那人が営むところの商業は過半まで諸物産の問屋にて、近傍各部落より輸入し来る象、虎豹、水牛、普通牛の諸皮およびその牙、角、骨並びに米、樹脂、唐木類を買集め、これをバンコクに転漕せり」。

当時すでに確固たる流通ネットワークを築いていた。このネットワークは、現在にも通じているのだ。つまり「支那人は資本豊富



岩本 千綱



宮崎 滔天

なる上数十年の経験を積み、かつ忍耐結合の二方に富み商界を疾駆してきた。これに対するに、「薄資無経験にしてかつ耐忍に乏しき日本人が到底商戦に勝ちを奏する能わざるや明らかなり」ということになってしまふ。これでは商戦の帰趨は最初から判っている。

かくて岩本は、「将来日本が当国に対する商略は今日の如き売り一方の方針を改めて、反対に大いに買い方に進み、深く内地に入りて欧米人もしくは支那人の足跡到らざるところを発見し、日本人独占の好産物地を取得すにありと」説いた。

「薄資無経験にしてかつ耐忍に乏しき日本人」VS「資本豊富なる上数十年の経験を積み、かつ忍耐結合の二方に富み商界を疾駆」する中国人——岩本の記述から、日中両国民の当時のタイにおける対照的な姿を読みとることが出来そうだ。

■「将来の世界に於いて實に絶大無比の勢力者」

岩本の提唱する熊本農民のタイ移民策

に賛同した宮崎滔天が20人の移民と共に神戸港を出航したのは明治28(1865)年10月2日。途中、門司、香港を経て15日後の同月17日にバンコクに到着。現在のドウシタニ・ホテル辺りにあったと思われるスリサツク農商務大臣宅を訪れ拝謁している。2回目は翌明治29(1896)年3月11日に横浜を立ち、香港、汕頭、シンガポールを経てバンコク着は4月2日だ。

宮崎はタイにおける見聞を明治29年2月から同30年7月の間、「国民新聞」などに断続的に発表しているが、それらを収める『宮崎滔天全集 第五巻』(平凡社 昭和52年)から興味深そうな記述を拾ってみたい。(止むを得ず、漢字のみ現行漢字に改めた)

先ず日本人については、バンコクでは予想外に「もて」ているが、それは「在留の日本人が重きを為せしものとも思われず」、やはり日清戦争における「戦勝の余勢」が背景にあるのだろう。諸外国人の間で日本人が優遇されているのは、とどのつまりは「政治上の意味に於いて」であり、それがビジネスに好影響し、「支那人の物品より日本人の物品と云う形勢」だ。この好機を生かし政治的にも経済的にも「日本人の信用地位を高むる」べきだろうが、「適当な人物なきは遺憾千万に存候」と綴る。

一方の中国人については、シャム「と云ふ国の真相を知るには、是非とも、当国の支那人を説明する必要がある」とし、バンコクで「第一に目に立つものは矢張支那人なり」。

シヤムは彼らに依って立ち、彼らによって維持・運営されている。「凡そ社会の需要物は」総てが彼らによって動かされ、彼らが「一旦万事を休止して本国に立ち帰るとなれば」、この国は「もぬけの殻となって、其儘寂滅するに相違なかる可し」とまで言い切り、その逞しい限りの生存力から判断して、「将来の世界に於いて實に絶大無比の勢力者」と説く。

また宮崎は日本人と比較して、「一気呵成の業は我人民の得意ならんなれども、此熱帯国にて、急がず、噪がず、子ツツリ子ツツリ遣て除ける支那人の気根には中々及ぶ可からず」と評し、「一気呵成」が得意な日本人と「急がず、噪がず、子ツツリ子ツツリ遣て除ける」中国人の振る舞いの違いを指摘する。

——いまや中国は世界第2位の経済力を踏み台に、中国は超大国への道を進みつつある。“漢族の熱帯への進軍”ということばに象徴されるように、タイをはじとする周辺国への影響力は拡大の一途だ。岩本や宮崎の時代から120年余。タイにおける日本人の立場が再び問われているだろう。ならば多くの先人の“見聞と知恵”を振り返ってみるべきではなかろうか。その役割を担うのは100年の歴史を経たタイ国日本人会であると、強く思う。

長政の果てた地「六昆（リゴール）」

岩城 雄次郎

山田長政は、タイではオークヤー・セーナーピムックというアユタヤ時代の官職名で知られ、ヤマダーという名前でも通用している。

六昆とは、今のナコーン・シータマラートのことである。バンコクのはるか南部にあり、バンコクから空路では611キロ、鉄道では832キロ、車道では約820キロの地点にある。ここは長政の活躍したアユタヤ時代にもナコーン・シータマラートと呼ばれ、その意味は「仏法の王都」である。昔使われた「リゴール」という呼び名は、この地でラコーン(タイ語＝芝居)が盛んだったことから、当時ここにいたポルトガル人が「ラコーン」を「リゴール」と呼び間違えたことに由来するらしい。

タイ芸術局の発行による『ナコーン・シータマラート博物館案内』の中のナコーン・シータマラート史に関する記述は、次のようである。

【ナコーン・シータマラートが有史時代に入るのは、仏暦12世紀(仏暦を西暦に換算するには、仏暦年から543年を引く)のことである。ここで発見された碑文によれば、この時代にインドとの文化交流が見られ、ヒンドゥー教が伝えられたが、そのことは、こ

ちらに残る古代遺跡や遺物で確認される。このヒンドゥー文化は、タイ南部固有の民族文化と融合し、仏暦13～16世紀において、さらに伝来したランカー派の南伝仏教の影響を受けて全盛時代を謳歌することになる。

ナコーン・シータマラートは、仏暦19世紀以前はマレー半島における大国のひとつであった。そして遅くとも仏暦12世紀からは商業の中心地となっていて、強大な兵力をもち、とりわけ海軍が強かったので、ランカー(今のスリランカ)を2度も攻撃、ナコーン・シータマラートの国王はロップリー(当時はクメール帝国の支配下にあった)にも兵を送って攻め入ることが出来たのである。

仏暦18～19世紀は、ナコーン・シータマラートが自由な国家であり、もっとも繁栄した時期であった。当時の国王はシータンマ・ソーカラート大王と名乗ってマレー半島の12か国(訳注・パタニーその他の地名が並ぶのだが、このうちの5か国は現在のマレーシア諸州に相当する)を支配したのである。この頃はタイの南部で仏教が最も栄え、ナコーン・シータマラートはその中心地としての役割を果たしたばかりか、チャオプラヤー川流域からスコタイに至るまでの北部の地方とも友好関係を保った。ところが仏

暦 19 世紀から 20 世紀にかけて、ナコーン・シータマラートはアユタヤ王国の一部分となった。しかしながら、南部半島における諸外国との交易センターであることには変わりがなく、ポルトガルやオランダ、イギリス、フランスなどから貿易商人が続々とやって来た。そして西欧諸外国間の貿易競争があったために、ソクラーやパタニーのような商業都市が生まれたのである。

西暦 1629 年のことである。幼年王アーティッタヤウング王の命により、日本武士義勇団の長であったオークヤー・セナーピムック（長政）がアユタヤから下ってナコーン・シータマラートの国主に任ぜられた。が、ここの官吏たちは新国主に対して大変な不満を覚えた。オークヤー・セナーピムックが死亡すると、ここには反乱が起こった。そこで新国王のプラサート・トング王がアユタヤから軍団を送り、平定した。そしてナコーン・シータマラートは以前のようにアユタヤ王国の支配下に落ちた。その後トンブリー王朝、バンコク王朝の 1 級都市に低落、ここがタイ王国の 1 県になったのは立憲革命後、1933 年のことである】（以下省略）

さて、私が初めてこの地を訪れたのは 1972 年 4 月のことで、このナコーン・シータマラート出身の作家であるピンヨー・シージャムローン（1934～2009）と一緒にあった。この時の取材旅行記は、すでに日本人会発行の『クルンテープ』誌 197

3 年 2 月～5 月号に「六昆への旅」として掲載され、1974 年 5 月における単独取材による旅行記は、74 年 7 月～10 月号に「六昆へ再び」という表題で連載された。ここでは、その重要な発見などを、その後現在に至る取材の旅を加えて記したいと思うが、残念ながら紙面の都合でその一部を省かざるを得ない。

最初にピンヨー氏と一緒に訪れたマハータート寺院（プラ・プロムタート寺院とも呼ばれる）では、ここで買い求めた寺院史の中に次のような文を見出したのだった。

【仏暦 2171 年（西暦 1628 年に当たり、オランダ商館長だったファン・フリートの長政死亡に関する記述とは 2 年の誤差がある）強敵パタニー軍が攻め寄せて来たので、わが六昆の国主は街の北部に砦を築き、船団と 5 万余の兵力でこれを迎え撃ち、七日七晩戦った。その際、敵軍はターポー寺院を焼き払い、国主は死亡した。国主の遺骨はプラ・タンマサーラーの舍利塔に安置された】

プラ・タンマサーラーはという仏殿は境内のすぐ近くにあり、その中にある舍利塔を見ることが出来た。ピンヨー氏は、長政死亡の年に 2 年ばかりの誤差があることは考えられることだし、ちょうどその頃に死亡した六昆の国主は他にいないことから、これは長政の墓に違いないと思い込み、そのことを 72 年 5 月 7 日のタイ字紙「デイリー・

ニュース」に寄稿したのだった。

しかし、私にはまだ確信がもてなかった。出来ることならこの本の著者に会って長政の死亡年の誤差を追求したいと思った。74年5月に六昆へ行ったのはそのために、その著者はマハータート寺院付属図書館の館長でもあるサワット氏であった。サワット氏は、この国主は長政と同一人物ではないと答えた。あの時代に亡くなった六昆の国主は何人もいるからで、当時は政情が不安だったので、という答えだった。そして、プラ・タンマサーラーに歴代の国主の遺骨が納められたとは考えられないとも言われた。長政はパタニー軍との戦闘中に負傷した脚に猛毒を塗られて果てたというのが有力な説で、その加害者は罷免させられた前国主の弟、オークラ・マリットであった。長政が殺害されればナコーン・シータマラートに騒乱が起こるのは当然のことで、その状況を伝える資料は見当たらない。長政の墓は造られなかったと考えるのが妥当だろう。

1986年8月、私はナコーン・シータマラート教育大学付属の南タイ文化研究所を訪れ、所長のウィチエン・ナ・ナコーン教授から「長政を恐れる子守歌」が存在することを教えられた。そして、これは今でも歌う人がいるという。拙訳で紹介すると、

子どもよく聞け、かわいい子ども
アユタヤ下りの日本の殿が
我が物顔でこの国荒らし
子どもは捕まえ

娘も若い衆も
町中さらって
思うがままにするんだよ

私はこの子守歌を、後ほどマハータート寺院の管理人であるディレーク氏と文盲の老婆プリークさんに歌っていただき、録音を済ませた。そして1996年に上梓した長編小説『暹羅国武士盛衰記・・・真説ヤマダナガマサ』（光和堂）の冒頭に書き込んだのである。

山田長政は確かに有能な武将であり、優れた人物でもあっただろう。彼は次の王位を狙うオークヤー・カラーホームの説得に従ってアユタヤから属領のナコーン・シータマラートへと下り、新国主として思う存分その統治能力を発揮したことだろう。だが、ここはアユタヤに対して反感をもつ異文化圏でもあった。長政は、そのことをよく弁えていなかったのかもしれない。だからあの悲劇的な死を迎えることになったのだろう。

ところで、市街の中心地ともいえるラーチャダムヌーン通り（御幸通り）の西側に位置する県庁と裁判所の反対側（東側）に、「長政屋敷横丁」がある。その横丁を入るとアパートが建っているのだが、たぶんこの辺に長政の屋敷があったと想像されたのだろう。命名者は、今は亡きナコーンの歴史学者ノーム・ウップラーマイ先生で、この地方の古戦場その他について、私は72年以来実に多くのことを教えて頂いた。

1941年12月8日の早朝、すなわち真珠湾攻撃の朝、このナコーンでは、許可なく上陸を開始した日本軍とタイの軍隊との間に激しい戦闘があった。7時から11時に至る4時間の激戦であったが、これはバンコクの陸軍総司令官からの11時の指令によって中断された。【戦闘を中止せよ。日本軍を通過させてから、次の指令を待て】

タイ側にとっての予期せぬ事件とその屈辱的な決着ともいえる停戦後のことなどについては、91年にここで発行された『タイの英雄50年』に詳しく書かれている。また、市内の北部には、戦闘中に死亡した英雄の慰霊碑が立っている。私自身は、ノーム先生のご案内でこの地を取材中にふと出くわした老婦人に、あの激戦中に日本兵に家を焼かれたことから、日本人だと知られた私が怒鳴りつけられ、気まずい思いをしたことがある。

2001年8月、現国王の王母殿下の名を冠したソムデット・プラシーナカリン公園内に「山田長政この地に眠る」の石碑が建てられようとしていることを知り、私はこの地に飛んだ。市の「タイ日文化交流センター」の建設計画を推進し、長政の記念碑を建てるのに主体的な役割を果たしている市長に会ったとき、「長政は六昆の市民に恐れられてもいたのです。今後何も知らない日本人観光客との間にトラブルが起らなければいいのですが」と心配すると、「大丈夫でしょう。長政にせよ誰にせよ、すべて

の面で優れていた人はいなかったでしょうから」と、余裕のあるところを見せるのだった。

あれから11年が経つ。石碑を立てることに反対した市民からの反発と多少の嫌がらせはあったようだが、「山田長政この地に眠る」の石碑は今も健在である。折しも2012年8月、ラーチャパット・ナコーン・シータマラート大学（前のナコーン・シータマラート教育大学）に「タイ日文化交流センター」が開設された。やがてこの大学は金沢の北陸大学と姉妹校になるそうである。十数年来の知己である現学長のチャッチャイ先生は、昨年お目にかかった時にこんなことを言われた。

「歴史的に重要なこの街のマハータート寺院は、ユネスコの世界遺産になるべき要素を兼ね備えているので、つい最近、500ページに及ぶ英文の資料を作成しました。私は近いうちに奈良へ行きます。参考になることを調べたいのです」

長政の果てた地・六昆は、今後さらに多くの日本人に知られることになるだろう。

クルンテープ誌の思い出

外務省研修所タイ語講師
安藤 浩

貴日本人会がここに生誕百周年を迎えられたことは極めてめでたいことなので、まずは「上寿おめでとうございます」とお慶び申し上げます。75周年、90周年に続いて今回もクルンテープ記念誌というか記念特別号発行に当たって声をかけて頂いたのは嬉しいことです。

手元のメモによれば、「1913年9月1日盤谷に暹羅日本人会創設。当時在留邦人約150名」とある。この「暹羅」は江戸時代(～1867年)までは「シャムロ」と読み、明治(1868年～)以降は「シャム」と読まれた。「盤谷」は「バンコック」で戦後に改定されるまではこう書かれた。

タイの国名の変遷については誤解されている方が少なくないようなので、ここにその説明を試みよう。タイではその昔、欧州留学少荘文部官を中心とした人民党が1932年6月24日に革命を起こし、従来の先制君主政体より立憲君主政体に移行した。武断派の領袖ポー・ピブーンソングクラム大佐(当時)が1983年12月16日に政権に就いて、タイ人のタイ国建設を標榜してラッタ・ニヨム(国歌信条)を定めた。その第1号「国名について」で従来の「サヤーム」を「タイ」に変更した。日本では漢字で「泰」を当てた。

憲法上は国家信条を受けて、1939年10月3日公布の「仏歴2482年国名に関する憲法」により国名を「タイ」とし、憲法条文中の全ての「サヤーム」という語を「タイ」に変更した。憲法では外国語による国名には触れていない。ところで、終戦後に開始された英国及びインドとの終戦協定(調印は翌46年1月1日)の交渉に先立って1945年9月7日に英語国名を元の「Siam」に戻したが、1949年5月11日に再び「Thailand」に変更し、今日に至っている。これら英文国名の変更は政府告示でなされたので、憲法上の国名「タイ」は何ら不変である。

私がタイで初めて足跡を印したところはクロントウイ埠頭で、大戦が始まったのはその半年後のことであった。約三千人の在留邦人は、敗戦により1945年9月半ばにバンコク北北西約50キロのバーンボワトーンの抑留所に収容され、鹿兒島に引き揚げたのは翌'46年7月3日であった。抑留所は周囲に警官が着剣した銃を持って見張りに立ってはいたが、50メートルおきに竹竿が立っているだけで塀も鉄条網もなく、物売り等も自由に出入りができた。そこでの生活はその地名(金の蓮咲く水辺の村)に相応しく、何らの労働をさせられることもなく、タイ側

が支給してくれる食材は米、野菜から卵、肉に至るまで全て豊富であった。いつ帰国できるのかが判らないという唯一の不安を除けば気になることは何も無かった。地域住民や監視の警官の目には敗戦国民に対する侮蔑の色など全然見られず、その態度は極めて寛大かつ友好的とさえ思えた。しかも引揚船の出港直前にバンコク市長名で、当時日本では貴重品だった米と砂糖(3キロと1キロくらい)を一袋ずつ三千人の全員に別れの土産として渡してくれた。タイは大戦中は日本に協力してくれたが、終戦の翌日に対英米に宣戦布告無効の宣言を発し、米国から承認を得たが、英国とは翌年始めに終戦協定を締結した経緯がある。その英軍の監視下で帰国する日本人に対するこの行為は仏教的というか人道的なものとはいえない思いがけないもので、その温かい心遣いは嬉しいものであった。立場が逆であったなら、日本は同じことを果たしてなし得たかと思うと感謝の気持ちで一杯であった。

その引き揚げの時にタイ政府から残留を認められた邦人は僅か126名(実際に残ったのは107名という)であった。その後講和条約を発効して海外渡航が許可されるようになって僅か1年後の1953年5月に、バンコクに日本人クラブが発足した。タイ国日本人会として復活したのは翌54年2月であった。日本人会の機関誌クルンテープが創刊されたのは私の4度目の在勤間もなくの1968年1月で、それは貴日本人会の生誕か

ら55年目のことであった。私は当初より編集委員に加えられ、次の在勤期間と合わせて2期計8年間に渡って委員を務めさせてもらった。最初の委員会で機関誌がクルンテープと名付けられたのは懐かしい思い出である。私は毎号のようにタイ事情あれこれの解説を試みた。時には同一号に複数の解説を載せたので、実名のほか筆名を使った。年間を通じて連載で紙面を汚したものには、タイの民話、タイの年中行事、タイの諺、切手に見るタイ、やさしいタイ語などがある。筆名「牟田白皓」は留学時代にタイ語を始めタイの全てを教えて頂いた恩師の名字を基礎にしたもので、その家族とは現在も文通が続いているのは嬉しいことである。

日タイ間の交流は17世紀の日本人町衰退以降ほとんど途絶えていたのが、1887年に日泰修好に関する宣言が署名され、これにより両国間の公式外交が始まった。私の退職翌年の1987年は日泰修好百周年に当たり、その11月下旬に祝賀民間使節記念行事が開催された。私は日本各地の観光協会からの総勢数百名と共に、日本代表として渡盤し、旧知のタイ側代表元蔵相ソムマーイ・フントウラクーン氏と共に、各種日本文化を披露した日タイ週間の行事を盛り上げ、それにタイ人にも楽しんでもらえたのは忘れ難い思い出である。

太平洋戦争に巻き込まれて

写真家

瀬戸 正夫



ドイツが欧州で連合国を相手に引き起こした第1次世界大戦が勃発したのは1914年7月28日だった。日本は同年8月23日にドイツに宣戦布告し、9月2日に山東省竜口に上陸を開始し、山東鉄道沿いの駅を占領したが、中国政府から「日本軍は山東鉄道を中立侵害だ」と抗議された。しかし、日本は拒否し、更に11月7日には青島を占領した。このため、1915年2月25日に上海で、国民対日同志会が結成され、上海、漢口、広東で日貨排斥運動が起こり、中国人の暴動により日本人の家屋が放火されたり、殺傷されたりする事件が発生し、海外にまでおよんだ。

日本は第1次世界大戦でドイツに宣戦布告したが、主に中国軍と交戦し、除々に中国大陸に介入していった。1919年6月28日、ドイツはベルサイユで講和条約に調印し、第1次世界大戦はドイツの敗北で終戦となった。だが終戦後も、関東軍による中国内でのいざござは継続されていた。1931年9月18日、関東軍の陰謀により奉天郊外の柳条湖の満州鉄道を爆発し、満州事変となり、引き続き、1932年1月28日、日本の海兵隊は上海で、中国第19路軍と激戦となり、上海事変が勃発し、1933年2月5日にはハルピンを占領し、更に1937年7月7日の深夜、蘆溝橋で中国軍と火蓋を切り、いつ終わる

とも知れぬ支那事変へと拡大した。

第1次世界大戦で参戦した日本軍は、主に中国戦線で戦火を交えていたが、日本の26倍もある膨大な960万平方キロにおよぶ33%の山岳地帯に囲まれた中国大陸に足を突っ込み、中国戦線の泥沼に嵌まり、身動きできない窮地に追い込まれたまま、休む暇もなく大東亜戦争(第2次世界大戦)へと突入したのである。第2次世界大戦が勃発した切っ掛けは、1939年9月1日、ドイツ軍のポーランド侵攻作戦が開始されてからだった。日本はドイツ、イタリア両国と肩を並べ、1940年1月18日、ベルリンで日独伊三国同盟協定に調印し、密談で「東経70度から米国西沿岸を日本の作戦地区とし、東経70度から米国沿岸を独伊の作戦地区とする」と決定し、ソ連を凝視していた日本は「北進南守る」を「南進北守る」と方針を決め、海外に軍事基地を確保し、まず、開戦と同時に英軍の堅固な要塞を誇るシンガポールや、ビルマ、フィリピン、ボルネオ、セレベス、ジャワ、スマトラ、チモール、ビスマルク諸島、香港攻略を企画していた。戦略上南方作戦で特に日本軍が重要視していた拠点は、太平洋とインド洋に挟まれた南部のマレー半島に細長く延びている当時約6万の兵力しかなかった弱国、タイ王国だった。

日本はまだ南方作戦を企画していなかった頃から、東南アジアの各地に医者、歯医者、写真師、雑貨商、大使館員、会社員、ホテルのボーイ、坊主、商人などに変装した私服の特務機関を派遣し、地下工作を始めていた。タイの場合は、インド工作の光機関、マレー半島工作の藤原機関、ビルマ工作の南機関および、軍の出先だった大南公司や、軍部に頼まれて密かにスパイ活動をしていた在留邦人などが、日、タイ、米、英、中国などと入り乱れてスパイ合戦が展開されていた。タイ国内で特に注目されていた地点は、ビルマと国境を接していた北部の鬱蒼とした密林に覆われていた山岳地帯のメーホーンソーン、チェンマイ、チャンラーイ、西部のカーンチャナーブリーの三塔峠があるビルマ国境であり、シンガポール攻略にとって大事な拠点とされていたマレー半島と国境を接していたシンゴラ(現ソクラー県)だった。

父が人口一万人ほどしかいなかったソクラーに移住し、ドーンラック寺の前にあった2階建ての洋館式の大きな家を借り、医者として「回生医院」(ローン・モーカイセイ)の大きな看板を掲げ、我が家を本部とし、特務機関としてスパイ活動をはじめたのは、1935年頃からだった。一方、北部ではチェンマイのナワラツ通りのピン川に面したナワラツ橋の近くの綺麗な教会の横にあった木造建ての2階家を買取り「Chiangmai Photo Studio」写真館を開業していた田中盛之助写真師と波多野秀さん2人が内密に

メーホーンソーン周辺の国境地帯の調査にあたっていた。

開戦間近になってきた1941年3月、ソクラーに領事館を開設するために、サミラービーチに近い灯台の傍の野生の猿が一杯いたシースター通りに面したシーサムランホテルを借りて改装し、同年4月1日、公式にソクラーに日本領事館が開設された。開所式の日は、中国から着任した中国通の剣道4段の勝野敏夫領事の招聘により、バンコクからは天田六郎領事、浅田領事、西野書記官、三菱の森さん、地元の南部タイ近県の邦人を含めて約30人の邦人が参列した。晩餐会は浜辺の公会堂で開催され、ソクラーのオルダム英国領事、邦人、地元の華僑やタイの高官を含めて約300人が集まった。なお、同年の8月16日、マッカサンの日本公使館は大使館に昇格し、坪上貞二大使が初代大使となった。更に、7月16日にはチェンマイの郊外にあった旧チェンマイ王子の洋館建ての御殿に、日本領事館が開設され、原田忠一郎領事が赴任し、タイに上陸する皇軍の受け入れ態勢を整えた。

当時のタイの首相はピブン・ソムクラーム大佐(後に元帥)だったが、国防大臣兼内務大臣も兼任していた。タイは戦雲渦巻く世界の情勢を感知し、タイの独立を守るために、常に「厳正中立を守る」と声明していたが、日本と交戦する仮定で、国土防衛準備にも着手し、外交面では独立を守るために日米英の戦乱に巻き込まれないように、タイは

弱国であると、中立を宣言していた。だが突如として、開戦間近に迫った12月4日、地元紙に「日本軍は12月8日から15日の間にタイに攻めて来るであろう。それは案外12月10日の憲法記念日の日かもしれない」といった記事が掲載され、国営ラジオからは盛んに国民の志気を煽るルアーツ・スパン（スパンの血）の歌を流していたが、国民はあまり関心を示さず平穏無事だった。ただし敏感な華僑は、商店街に並んでいた商品を瞬く間に蔵に隠してしまい、早めに店閉めした所も多かった。地元紙に掲載された12月4日の記事は、奇しくも偶然だったのかもしれないが、日本が12月2日の御前会議で、大東亜戦争開戦日を12月8日と決定し、同日大本営は午後2時頃「ヒノデハヤマガタ」（日の出は開戦日、山形は8日）の暗号電を発信したあとだったので、海南島の三亜、サイゴンのサンジャックや、その他の基地で待機していた南方作戦部隊の精鋭11個師団、36万人の将兵を満載した224隻（マレー半島攻略部隊は59隻）の輸送船団は、既に12月4日の早朝護衛艦に見守られ、荒波を蹴立てて東支那海および、シャム湾（タイ湾）に向かって進路を取り、上陸地点目指して航海中だったのである。

12月7日の日は晴天に見舞われた快適な日曜日だった。何事も起こらず平穏無事に暮れ、バンコクの街角に灯火が点る頃となったが、何処にも緊迫した様子もなく、ワンサラーンロムのステージでは、スントラポ

ーン楽団のメロディーの流れにステップを合わせて舞っていた、タイのハイソサイティグループによるダンスパーティーが開催されていた。一方12月7日は、在留邦人の安全対策を思考した日本人会でも、会館内の日本人学校の古い囲いのない講堂で「映画の夕」がある日だった。映画は恋愛物語だったが、緊迫した事情も何も知らないで来た人や、貴重品を持って来た人もいたが、映画が終わってから、老幼婦女子は、会館内の敷地に停まっていた十数台の日高洋行のトラックに乗り、寝静まったスリヴン通りを通過し、チャローンクルン通りのヤンナワー寺の先の右手にあった三井ワーフへ向かった。運良く途中で何事も起こらず無事に三井ワーフに到着し、岸壁に停泊していた4383トンの大阪商船のがんぢす丸の黒い巨体に架かっている細長い梯子を上り、日田豊明船長以下乗組員に優しい眼差しで迎えられ、蒸し暑い船室で寛ぎ、緊迫した上陸部隊の経過待ちとなった。

南方軍が企画していたマレー半島の上陸地点は、マレーのコタバル空軍基地、南タイのシンゴラ（ソクラー県）、パッターニー、ナコーンシータマラートのターペー空軍基地、チュムポーン、スラートターニー、プラチュワプキリカンの空軍基地および、サムップラカーン県の小さなバンガローが並んでいるバーンプー避暑地だった。12月8日の未明、日本軍の第一陣は、まず、マレーの堅固な空軍基地があるコタバルに第18師団の詫美

支隊が敵前上陸を執行した。続いて11隻(熱田丸に旅団長河村少将、那古丸、香椎丸に師団長松井中将、竜城丸に軍司令官山下中将、関西丸に21聯隊長岡部大佐、笹子丸に11聯隊長渡辺大佐、浅香山丸、青葉産丸、九州丸、佐渡丸、波ノ上病院船)の輸送船を伴い、第5師団の松井兵団部隊が第1次上陸を執行し、レームサーイ、サミラーピーチや、カウセーン空軍基地周辺でタイの守備隊と交戦が開始されたが、山上のスワントゥーン大砲陣地からの砲撃により激戦となり、最後には友軍の艦砲射撃と、海軍機の爆撃によって食い止め、ソクラーの警察、郵便局、発電所、空軍基地、駅を占領し、鉄道部隊とハイウェーを銀輪(自転車)部隊が、途中でタイ軍と交戦を交え、ハートヤイ目指して進撃し、午後2時頃ハートヤイで逮捕されていた邦人十数人を無事に救出した。

ソクラーでは日本軍の上陸が素早かったため、邦人を逮捕する時間がなかったが、ナコーンシータマラートでは、上陸の際に空軍基地があるターペーへ行く運河の水路を間違え、手間取ったために、写真屋を開業していた中川さんや、マル歯科店で歯医者兼医者をしていた入江茂夫妻は警察署に監禁されていた。この他に、ラーチャダムヌーン通りのラーメースワン橋の北側の袂に2階建ての一軒家に、大南会社の社宅兼事務所があったが、ここにも6人の邦人が警官に監視され、軟禁されていた。ナコーンシータマラートには、三池丸と善洋丸2隻から

2607人の兵力を満載した歩兵第143連隊の宇野支隊徳島部隊が午前3時頃から上陸を開始していたのだが、ターペー空軍基地に到着したのは午前7時頃だった。空軍基地では豪雨の中で待ち構えていたタイ軍と双方で銃剣で刺し違えて戦死するほどすさまじい白兵戦が展開され、激戦となった。大南会社に軟禁されていた6人の同胞は、警官の隙を狙い、逃走しようと試みたが、警官に見つかり、小銃でパンパンと撃たれ、更に背後から銃剣で刺され、悲壮な最期を遂げた。タイ当局は、6人の日本人が警官に殺害されたことを隠すために、6人の遺体をラーチャダムヌーン通りのチャマウ寺に埋めたが、のちに日本軍に問いただされ、遺体を掘り返し、シータヴィー通りのシータヴィー寺で、6人の邦人の告別式が行われた。タイ側からは軍、警、役人、一般市民など約300人、日本側は軍部の代表者10人ほどが参列し、戦争犠牲者となった、海外土木の小石原収助さん、海外土木の猪俣義夫さん、昭和通商の富檻一彦さん、昭和通商の竹下好男さん、大南会社の奥田正知さん、三菱商事の京谷秀郎さん6人の厳かな告別式が行われた。小さな白木の箱に収められた6人の可哀想な霊は、6人の同胞の手によってバンコクに届けられ、12月25日に、トゥリーペツ通りのリヤブ寺の日本人納骨堂で慰霊祭が行なわれ、坪上大使を筆頭に、第15軍飯田軍司令官、在留邦人ならびに、タイの高官も参列し、悲哀に満ちた慰霊祭が行なわれた。

プラチュワプキリカンを目指したジョホール丸は、船団から離れ、単独で航海し、目的地のプラチュワプキリカンの島影に隠れていた。船内には宇野支隊の将兵1007名と軍馬100頭が待機していた。プラチュワプキリカンも雨が降っていたが、市内の県庁にあたるマナウ湾を目指す中村中隊と、主力の、市内から約3キロ離れた第5航空隊の空軍基地を目指すプラチュワプ湾に突進する2班に分かれ、上陸用船艇に分乗し、上陸を決行した。宇野支隊は山に立て籠もって空軍基地を死守したタイ軍と、33時間にわたって戦ったが、通信機が破壊されていたために、停戦命令が発せられたのもしらずに戦い、双方に多数の死傷者を出した。プラチュワプキリカンの停戦協定は、バンコクのカウパーブ新聞社にいた逆瀬川澄夫通訳官の機転によって停戦となった。調印式は第5航空隊の将校集会所で行なわれ、日本側は、宇都宮少佐、一宮中尉、飯塚中尉、逆瀬川通訳官、タイは第5航空隊司令官モムルワン・プラワート・チュムサイ中佐、シーサク少尉、他3名の立会いの下に協定が結ばれ、終止符を打った。

日本軍はタイ進駐に関し、陸路からも進撃する準備を整えていた。12月8日午前7時に武力進駐開始の出動命令が下り、仏印に待機していた近衛師団第15師団の5連隊第1大隊(戦車1中隊、野砲1中隊)は岩畔豪雄大佐指揮の下に、2組に分かれ、トラックでグラン・ラック北岸シェムリアップからワッタナコーンの国道を通過し、住田勲通訳官を先

頭に、バンコクに向かって進撃を開始した。途中でタイ空軍機と友軍機の空中戦に遭遇し、3機を撃墜したが、それ以外は大した小競り合いもなく、大隊の先発隊は9日の明け方バンコクのドーンムアン空港に到着した。一方、何の抵抗も受けずに午前3時頃バーンプー避暑地に到着した白馬山丸から上陸した1100人の吉田支隊(近衛歩兵第4連隊第3大隊、速射砲1小隊、聯隊砲中隊)は、ラーマ六世橋を占領する命令を受けていた。バンコクで老幼婦女子ががんぢす丸に避難した。

在郷軍人会長だった日高秋雄(としお)さんは、田村武官と打ち合わせをし、20台のトラックを飛ばし、途中でパークナム周辺の電話線を切断しながらバーンプーに駆けつけた。バーンプーでは既に、吉田支隊と警官隊が対峙し睨み合っていた。その時点では、まだピブン首相と平和進駐の交渉も決まっていなかったので、停戦命令が出るまで待つべきであると、判断したバンコクで戦況の状況を監視していた第15軍参謀八原博通中佐と補佐官の徳永賢二中佐の2人は、バンンプーに急進し、吉田支隊を指揮していた吉田中佐に会い徳永中佐との話し合いで、ピブン首相の停戦命令が出るまで待機することになった。そのお陰で吉田支隊は午後1時40分頃無事にバンコクに到着し、聯隊主力隊に復帰した。徐々にバンコクに進駐した日本軍は、チュラーロンコーン大学に軍司令部を置き、タイの学校や、ルムピニー公園に駐屯し、バンコクの守備にあたった。

日本語はあまり話せなかった僕は、まだ路地の所々にタイ式の高床式の家があった歩道もない草むらを山羊や羊が群れを成してメーメー鳴きながら歩いていたスリヴォン通りのメナムホテルに預けられ、ソーイサップの盤谷日本尋常小学校に通うようになったのは、1939年の春頃からだ。盤谷日本尋常小学校は1926年6月1日、シーパヤー通りの日本人会館内に開校し、1932年7月に日本人会と一緒にソーイサップに移転し、1941年4月1日に盤谷日本国民学校と改名した学校だった。当時、文部省から規定されていた教育方針は、一年生は「アイウエオ」を片仮名から習い、片仮名を覚えてから平仮名を習っていた。天皇陛下は神様であり、僕たちは神の子であると習い、中国人のことを、支那人、チャンコロ、ロシア人のことをロスケ、アメリカ人とイギリス人のことを赤鬼と習い、学校で英語や中国語で話すことをは禁じられていた。学校の科目は、国民科が修身、国語、国史、地理の4科目、理数科が算数、理科の2科目、体錬科が体操、武道の2科目、芸能科が音楽、習字、図画、工作、裁縫、家事の6科目、加設科にタイ語があった。通信表の点数の付け方も、甲乙丙ではなく、優、良、可と記載されていた。武道の科目には、剣道と柔道だけでなく、軍事教練も含まれていた。太平洋戦争が始まる前までは、軍事教練はなかった。しかし、日本の軍艦がパークナム(河口)に寄港したりしたときは、児童生徒は

日の丸の小旗を持ち、パークナム行きの電車で揺られて歓迎に行っていた。だが行く度に、魚雷の発射の仕方や、艦砲の角度の向け方や砲撃の仕方などの説明を聞いたりしていた。時々ドーンムアン空港に日本の軍用機が飛来したときも、バスで歓迎に行っていたが、男子だけが機内の操縦席まで案内され、風向きや操縦の仕方、機関銃の撃ち方、爆弾の落とし方などの説明を無関心で聞いたが、それが知らぬうちに頭に叩きこまれていたのである。1941年12月8日未明に太平洋戦争が勃発したとき、戦争の怖さも何も知らなかった僕は3年生だった。戦争がはじまって数日経過した頃から爆弾が落ちたときは、伏せて両耳を親指で塞ぎ、人差し指と中指で目を押さえるように、と教えられ、爆風でガラスが飛び散らないようにするために、学校の窓ガラスに新聞紙を細長く切って、糊で十文字に貼ったり、焼夷弾をリレー式に砂袋と水で消す練習をしたりした。バンコクが初空襲を受けたのは、1942年1月8日の午前4時頃だった。ウーウーと鳴り響くサイレンの音を聞き、夜空に飛行機を探索するサーチライトが照らされ、高射砲の弾が空中で炸裂すると同時に、飛来した2機の敵機から落下傘の先にぶら下がった明るい照明弾が降下され、続いて爆弾が地響きを立ててドカーンドカーンと落ち、生まれてはじめて爆弾の威力を、戦争の怖さを知ったのである。

その頃、バンコク市内には防空壕はまだ

何処にもなかった。爆撃に遭遇し急遽防空壕が造られたが、フワランポーン中央駅の前にドーム形の防空壕ができ、ルムピニー公園内の東口の垣根の所や、ドウシツ動物園に矩形の大衆向けの防空壕ができた。タイ人の家庭では、水がめを埋めただけの蛸壺式防空壕もあった。日本人学校にも運動場の真ん中を掘り、セメントで固めた上に土を山形に盛った防空壕が二ヶ所にでき、兄弟姉妹は別々の防空壕に入るように指示された。薄暗い防空壕には招かざる細長いとぐろを巻いた蛇が避難していることもあったので、気をつけなければならなかった。だが、不思議なことに誰も噛まれた者はいなかった。日本人学校の生徒は、戦争が勃発するまではヘルメットを被っていたが、やがて戦闘帽を被るようになった。兵隊とすれ違うときは、声を張り上げて「敬礼」と叫んで、お互いに敬礼を交わしていた。戦争のお陰で、音楽の時間には軍歌ばかり習うようになり、休み時間には慰問の練習が繰り返され、駐屯していた部隊を訪問し、歌や寸劇を披露し、慰問する回数が増えるようになった。学校では時々全校生で、チュラーロンコーン大学の先にあった職業学校内に祭ってあった英霊奉安所へお参りに行っていた。お参りに行くときは、学校から一年生を先頭に二列に並び、両側に運河が流れていたねむの木並木に覆われたパヤタイ通りの木陰を、足並み揃えて行進し、前後二部合唱で軍歌を歌いながらチュラー大学の前を通り、英霊奉安所にお参りに行っ

ていた。学校で町田実先生の指導の下に軍事教練の真似事がはじまったのは、アメリカが反撃を開始した1942年の末頃からだった。はじめの頃は、細長い棒を鉄砲代わりに担いで一列に並んで行進したり、伏せたり、突撃の練習をしたり、手榴弾を立ったり、伏せたりして投げる練習程度だったが、その内に、リュックサックに石を詰めて、二つの防空壕の山を素早く駆け上がったり、ろくぼくで腕の力だけで上まであがったり、梯子を立てて、下の段から順々に二階の高さぐらいになるまで、飛び降りたり、池に細い水道管を渡して、水道管の上を池に落ちこまないように渡ったり、大きな丸いビームに両足を縛り、両手でビームをぐるぐる廻し、止めてから、倒れないように真っ直ぐに走る練習や、水泳では、犬かき、クロール、平泳ぎ(競泳と遠泳2種目)、背泳、バタフライ、横泳ぎ、横泳ぎ一段、横泳ぎ二段、大拔手、小拔手、潜水の種目があり、50メートル息無しクロールや、潜水50メートルの特訓などがあり、遠泳では、午前8時頃から午後4時頃まで、飲まず食わずで泳がされたりした。この他に柔道、剣道、相撲、弓、薙刀があった。

学校で先生に指導されていた軍事教練は楽だったが、ルムピニー公園の独立混成第29旅団所属の外池(とのいけ)部隊(第162大隊・隊長外池七郎大佐)で毎週日曜日ごとに、軍人によって指導された軍事教練は、軍人並のハードなものだった。男女別々にされ、女子は挺身隊として、包帯を巻いたりす

る傷の手当てや、二人で担架を持って速足で歩いたり、走ったりする訓練が実施され、最後に万一の場合は手榴弾で自決する方法まで指導されていた。男子は、はじめは手ほどきにモールス信号のアイウエオのツーツートントンの暗号および、送信受信の仕方や、手旗信号でアイウエオの合図を送る手の振り方などを覚え込み、本物の三八銃を担いで行進したり、走ったりする訓練からはじまり、軽機関銃や、重機関銃の運び方、解体して急いで組み立てる組み立て方や、銃剣術の訓練、布団爆弾を背負って敵の戦車に体当たりする方法や、最後には切腹の仕方まで指導された。軍隊式の試合は、練習のときは、負けた者が勝つまで残る厳しいものだったし、ちょっとでもしくじったりすると、ビンタが飛んでくる「痛いか」と聞かれて、素直に「痛いです」と答えると、またビンタを張られるので「痛くありません」と答えなければならなかった。軍事教練で受けた教訓は、人の急所を全部覚え込み、先に敵を殺す殺人方法を叩きこまれ、最後には日本軍が管理していた戦勝記念塔の傍にあった炎天下の射的場で、大勢の大人に混じって実弾射撃の練習までさせられ、命知らずの特攻精神を植え付けられ、怖いもの知らずの少年兵となるように指導されていたのである。

タイに駐屯していた日本の将兵は、スリウォン通りに開店した白雲荘、白木屋、赤玉屋、ソーイサップのタイの赤線区域、クローン・トーイの中国人の女性が100人ほどいた慰安所などで闊歩していたが、タイの風習文化法律

も無視し、まるでタイを占領したような気分になり、ルムピニー公園や川岸で、ふりチンで水浴びしたり、タイ人を「ばかやろう」と怒鳴ったり、ビンタを与えたりしていたが、バーンポーンではタイ人が尊敬している坊主にまでビンタしたために、タイ人の反感を買い、険悪な事態となり、双方に数人の死傷者を出す事件まで発生した。このために、大本営では温和な第15師団の中村義部隊長(中村明人中将)をタイに赴任させることにした。中村閣下は1943年1月21日ドーンムアン空港に到着し、華僑工作をしていた中原報の藤島健一社長に依頼して、南サートーン通りの2階建ての中華総商會を借りて義部隊司令本部とし、更に同じ南サートーンの現ジャスマック裏手の左寄りの広い敷地に、義部隊長の官邸を設置し、敷地内に鳥居と大義神社を建設した。大義神社の神殿では、邦人の目出度い結婚式を挙げたりしていたが、毎月8日の日には在留邦人が集まり「戦争に勝ちますように」と、祈願していた神社だった。だが、日本の戦況はあまり芳しくなく、太平洋上の孤島では相次ぎ玉砕が続くようになった。連合軍に制海空権を牛耳られ、内地からの補給も不可能な事態に直面していた。日本の輸送船は連合軍の潜水艦や空軍機の群れに狙われ、タイの近海でも沈められていた。タイ湾では、びるま丸、荒尾山丸、ソクラーで金鈴丸、秋田丸、チュムポーンで越南丸、高砂丸、スラーターニーで新東邦丸、第5南明丸、チョンブリーのシーチャン島で寿洋丸、まだ工事中だったバンコクのクローン

一い港で九龍丸、アンダマン海のプーケットで豊橋丸、第1東曹丸、すまとら丸、開南丸を含めて、14隻が撃沈し、224名の乗組員が戦死していたのである。

外地部隊は自給自足で戦わなければならない状況に追い詰められ、バンコクでは数ヶ所で軍需品の生産をはじめていた。日本人学校の斜向かいの独立家屋では私服の兵士が迫撃砲の弾を造っていた。トロークチャンで藤原現三郎さんが経営していた藤原鉄工所では手榴弾や他の武器を造り、亀山衣服店では軍服を、北庄司会社の工場では軍靴を、日高洋行では飯盒、ベルト、軍靴を造り、木造船は三井物産が手がけ、スリヴォンのソーイ・タングアンスワイにいた石畑さんが味噌、醤油を軍部に納めていたが、この他にも、華僑の商人にも武器その他の製品の発注をしていた。しかし、華僑の場合は共産党と国府軍の抗日地下工作分子からストップ令がかかり、思うように捗らなかった。日本人が使っていた労務者もほとんどが華僑だったので、同じく地下工作の誘導で、スト騒ぎが頻繁に起き、生産が捗らず厳しい事態に直面していた。

ビルマ戦線では、ウインゲート旅団が反撃を開始した1943年2月頃からバンコクの空襲頻度も酷くなり、今まで数機で飛来していたB24爆撃機が昼夜を問わず数十機で、しかも低空で爆撃に来るようになった。1943年12月23日には、ニューロードのボルネオ倉庫、中元床屋の裏の路地の中にあつた日高家、路面電車が走っていたシーロム通りのロートシ

ン病院および、東京食堂が爆撃され瓦礫と化した。1944年10月10日の夜、マッカサンの日本大使館が直撃弾ですつとび、14日にはトゥリペツ通りのチャウプラヤー川に架かっていたサパーン・プツ(プツ橋)が爆撃され不通となった。1945年1月2日に鉄道も通っていたノントプリーのラーマ六世橋が落され、3月に水道局、4月14日に、ワツ・リヤブ発電所および、納骨堂があるリヤブ寺と、サームセーンの発電所が同時に爆撃され、バンコクはその日から水道も電気もない暗闇の世界となった。

インパール作戦で失敗した日本軍は総崩れとなり、タイが戦火に見舞われる可能性が強くなった。破竹の勢いで日本軍を追跡していた英印軍の、英第14軍のスリム中将司令官率いる第33軍団の第2英師団、第19インド師団、第20インド師団、第17インド機械化師団、第255インド戦車旅団、第7インド師団、ルシヤイ旅団、第28東アフリカ旅団を含め、約17万の兵力と戦車約400輛および、空軍機約600機の強力なウインゲート空挺部隊が北部のメーホーンソーン、チャンラーイ方面から進撃して来る恐れあり、その時期は1945年の11月か12月頃になるであろう、と予測されていたので、軍部では、7月の段階でバンコクの婦女子約1000名を8月初旬に、プラタボン(当時タイ領だったバツタンバン)に疎開させる方針を立てていた。はじめの頃は全員を疎開させることになっていた。だが、8月初旬に入った時点で希望者だけとなり、終戦となったのである。

バンプアトーンキャンプの出来事

写真家
瀬戸 正夫

終戦間近のバンコクは昼夜を問わず、毎日のようにウーウーウーと鳴り響くサイレンの音とともに、編隊を組んで高層を飛来するB29爆撃機の空襲に見舞われ、防空壕に飛び込む日々を送っていた。だが、1945年8月15日の早朝、晴れ渡った静かな青空に、爆音を轟かせ、銀羽を光らせたB24爆撃機が1機低空で飛来し、バンコクの上空を旋回しながら無数のビラを撒き散らして飛び去った。空から風に乗ってヒラヒラ舞いながら落ちてくるビラを、僕も大勢の群集と一緒に追いかけて拾ってみると、タイ語で「日本は降伏した。戦争は終わった」と、印刷されたビラだった。途端に、ビラを手にした街角の隅々から「チャイヨー、チャイヨー、ジーブン・ヨームペーレーウ」、（万歳、万歳、日本は降伏した）と、小躍りた群集の歓喜に満ちた歓声が響き渡り、約3年8か月間続いた悲惨な太平洋戦争は、残念ながら日本のポツダム宣言無条件降伏受諾により終止符を打った。敗戦と同時に、日本人は連合国の敵国人と見なされ、在留邦人の資産は即座に凍結され、家財道具も含めてすべてを、敵産管理局に没収されてしまうはめとなった。ただし、タイの慈悲深い仏教心により、有難いことにリヤプ寺（当時お寺の本堂は爆撃で瓦礫と化していたが納骨堂は無事だっ

た）の境内に安置されていた、藤島護三郎さんが設計した鎌倉時代の金閣寺形の納骨堂だけは没収されずに残っていた。

終戦当初、バンコクの在留邦人は、約2200名に過ぎなかった。だが、戦争のどさくさで近隣諸国から集まってきた邦人（邦人と称した軍人も含む）含めて約3600名だった。だがこの他に、ビルマ方面から進撃中の英印軍スリム陸軍中將司令官率いる英第14軍、兵力17万の部隊と、タイで決戦を挑もうとしていた第18方面軍の将兵軍属を含めて、約11万7750名の日本軍が駐屯していた。

終戦後8月末頃までは自由に外出できたが、釈放された連合軍の捕虜だった豪州兵などが堂々と土足で日本人の家庭に踏み込み、金目の物を物色し、車も含めて好き勝手に略奪するようになった。だが悲しいかな、同胞はただ身の危険を感じ、抵抗することすらできず、ただ無言で危害を加えられないように見守る術しかない哀れな身だった。1945年9月2日、東京湾に停泊していた米軍の戦艦ミズリー号の艦上で、連合軍最高司令官マッカーサー元帥立会いの下に、重光大臣と梅津大本営参謀長両氏が日本を代表して、降伏状に調印した同日に、シンガポールから、駐タイ英軍最高司令官イー

バンス少将がドーンムアン空港に到着した。到着後、各地で日本軍の武装解除が行われると同時に、尋問も取り調べもなく、一方的に戦犯容疑の疑いを懸けられた可哀想な憲兵隊員、捕虜収容所の担当者、お国のために尽くした光機関の関係者など、1344名（軍人1302名、軍属37名、台湾人5名）に出頭命令が下され、即座に英軍に拘禁され、引き続き9月20日には、第18方面軍の司令官中村明人中将以下660名が終戦処理司令部の関係で、英軍のイーバンス少将に管理されたパヤータイ通り（場所不明）の一角に収容されたのである。なお、在タイ日本大使館のすべての機能は9月11日に閉禁され、大使館員は山本熊一大使以下約182名（男71名、女85名、子供26名）は、9月14日から旧ペップリー通りの、大使公邸と隣接していた2階建ての日泰文化会館内に軟禁されたが、一般邦人は隣組の連絡により、9月17日午前12時から外出禁止、自宅軟禁となり、門前に細長い旧式の小銃を肩からぶら下げたタイの警官が24時間体制で見張りに立つようになった。自宅軟禁後、外部との連絡がほとんど取れず、日々お先真っ暗な不安に駆られ、明け暮れしていた同胞は、バンコクの西北40キロほど離れたノンタブリー県のバーンブアトーンキャンプに抑留されることになった。バーンブアトーンキャンプに指定された場所は、内務省の管轄で、戦時中は空襲の際に、タイ人が避難していた2ヶ所にあった避難所だった。

バーンブアトーンの意味は、バーンは村、ブアは蓮、トーンは金、従って「黄金の蓮の村」となるが、同胞のバーンブアトーンキャンプへの移動が開始されたのは、9月20日からだった。僕が呼び出しを受け、トラックでオリエンタルホテルの近くにあった旧税関の棧橋で降ろされ、待機していた50トン積みのトイレも何もない舢舨の板の間に荷物と一緒にすし詰めになされ、2隻の舢舨を引っ張った小型の蒸気船が、ポンポンポンとリズムカルな音を響かせてチャウプラヤー河をノロノロと北進し、バーンブアトーンキャンプへ向かったのは10月はじめだった。僕が乗った舢舨には子供は僕だけだったが、運良く先輩の、ソクラーの我が家にいた滝川虎若ドクターと、ナラティワートのバンナラーにいた父の友人の芝儀一ドクターの家族と一緒にだったので、心強かった。未知の地、不安と好奇心に満ちたバーンブアトーンキャンプに到着したのは、夕陽が沈みかけた午後4時頃だった。第1キャンプはもう満員だったので、僕たちのグループは第1キャンプをす通りして第2キャンプに上陸したが、僕たちが一番乗りだった。だが、土手の上にあがってみてびっくり、僕たちが入るキャンプは一面の水浸しで、田圃の中に竹の柱にニッパ椰子の屋根とアンペラで十部屋に仕切った細長い長屋式のバラックの棟が、水浸しの中に遠くまでずらりと並んでいたのである。朝から4隻の舢舨に一組50人ほどに分けられて分乗し、ボートに引っ張られた蒸し暑い舢舨の中で

一日中缶詰にされ、飲まず食わずで疲れ果てた同胞は、手荷物を持ち、膝まである濁った水の中を足元に気をつけながらジャブジャブ歩き、各々が指定された各班の棟に入居し、板の間にごろりと横になり、電気も水道も何もない静かに暮れゆくきらきら輝く無数の星を見つめ、原始的な抑留生活を体験することになった。

バーンブアトーンキャンプは運河に面して約1キロ置きにあったが、第1キャンプに、1227名（男1037名、女100名、子供90名）の邦人と、この他に、台湾人約450名が第24、25、26班の大部屋（1棟約150人）と、家族持ちは十部屋に仕切られたバラック建の棟に入っていた。第2キャンプは一番大きなキャンプで、運河の両側に沿ってキャンプがあり、南岸は家族向けの独立家屋のみと、北岸に一棟を十部屋に仕切り、一部屋5名に割り当てられた長屋式のバラックの棟と、東よりに家族向けの独立家屋がずらりと並んでいた。第2キャンプは邦人のみで、1967名（男1667名、女300名）子供の人数は不明だが、日本人学校の寺小屋学校、ひばり幼稚園などがあり、子供が大勢いたが、広々した大空の下で自由に飛び跳ねて遊べた子供の天国だった。第3キャンプは、後から急増されたキャンプで、有名な横田仁郎画伯、フランスで有名だったグラフィックデザイナーの里見宗次さん、チェンマイの主と言われていた田中盛之助写真師や波多野秀写真師、潜行三千里で有名な辻参謀の部下

で、坊主に変装した7名の特攻隊員および、大使館員多数を含めて、約270名（男220名、女41名、子供9名）が収容されていた。

3村の人数を纏めてみると、3464名（男2924名、女441名、子供99名）の同胞が収容され、共同生活を余儀無くなくされたが、キャンプ内で日毎に起こる様々なデマが飛び交う中で、不安を抱きながらも祖国へ帰れる日を待ちわびていたのである。タイ当局に管理されていたバーンブアトーンキャンプは想像に反し、キャンプの周辺には鉄条網も何もなく、遙か彼方まで田圃が続き、銃を持った数人のタイの警官が土手に立って見張っているだけで、心配していた強制労働も何にもなかった。しかも日が暮れると、商人に変身した警官が小舟で商いに来るので、買い物も頼めば何でも買えたので、大助かりだった。毎朝バンコクから運ばれて来る配給品も、野菜類、豚肉、鶏、砂糖、塩、米、炭、マッチ、松脂などが配給され、食べ切れないほどあった。だが、食べ物は豊富に配給されていたが、肝心の飲料水だけはなかった。バケツの底に小さな穴を開け、バケツの中に石ころ、砂、炭などを入れて、運河で汲んできた水をバケツの中に流し込み、バケツの穴からチョロチョロ出てくる水を溜めて明礬で澄まし、更に沸かして飲んでいた。

キャンプにはランプも懐中電気もなかったが、夜は、豚の油を煎じて小さな器に入れ、細長い紐を油に滲ませてたのを点し、

炎がゆらゆら揺れる薄明かりの中で凌いでいた。後に蝋燭やガスランプを光々と照らし、夜更けまで麻雀をしていた棟もあった。キャンプ内の強制労働はなく「日本人村」と呼ぶようになった。やがてキャンプの村興し自治運営が始まり、第1、第2、第3キャンプ3村の総合代表者が三井物産の森支店長に決定し、各班の村長、委員も決まり、各班の各部屋から男を1人ずつ使役として出すことになった。僕等の班は第2の2班だったが、僕の部屋には女性しかいなかったの、僕も手伝うことになった。僕らの班に課せられた作業は、まず、トイレへ行くには、トイレはバラック建ての真後ろにあったが、水の中をジャブジャブ歩いて行かなければならなかったの、竹で各部屋から自由にトイレへ行けるようにするために、細長い太目の竹を並べて橋を架ける作業をし、続いて土手まで歩けるように、土を掘り起こして積み重ね、歩けるように畦道を作り、更に、川岸に竹とニッパ椰子で囲った水浴場の小屋を数ヶ所に造ったりした。他の班では、大きな貯水池を掘ったり、給水塔を造ったりする大掛かりの作業に取り組んでいたが、キャンプの外れには病棟もでき、体の弱かった蓑和芳子さんのお父さんが入院していた。キャンプには、細かい小銭がなかったので、三井物産の会計部長だった宮崎雄一さんの案で、白い矩形の紙に1パーツ、5パーツと書いた手製の2種類のキャンプマネーが発行され、キャンプ内で第一陣の帰還組みが引き揚げ

る1946年6月10日頃まで使用された。

洪水で水浸しだったキャンプの水は、11月はじめに引き、水上生活を余儀なくされ、体を持ってあまし退屈していた同胞は、急に活気付き、土を盛って土俵を作ったり、運動場やバレーボールコート、それに、演劇用の野外舞台などが瞬く間に築かれ、あっちこっちで様々なスポーツが始まった。魚釣り大会、水泳大会、相撲大会、バレーボール大会や、第1キャンプ対第2キャンプの野球大会などが行われるようになった。4月29日の天長節には盛大な運動会があったが、残念ながら途中で土砂降りの雨となり中止となった。スポーツの他にも野外講座グループが生まれ、タイ語を筆頭に、英語、フランス語、スペイン語、中国語、農業講座、仏教講座、法律講座、手芸、絵画、土木、短歌、俳句、書道、歌謡愛好グループ、演劇グループ、碁や将棋の手ほどきなどが野外の木陰で行われるようになった。この他にも、軒下で鶏、あひる、がちょう、豚などの家畜を飼っていた人たちも多かった。第一キャンプの邦人ゾーンには、「川端屋の甘いぜんざい」、うどん専門の「おかめ屋」、コロケと鋤焼の「御影屋」、「大黒のすっぽん料理屋」、困った人のための「十三質屋」、「モミナ喫茶店」、大福餅屋、豆腐屋、納豆屋、アン巻き屋などがずらりと軒を並べていた。この他に、400余人ほどいた台湾人のゾーンにも大きな看板を掲げた支那料理屋、うどん屋、シャム料理屋や、景気よくレコードを鳴らしていた喫茶店

などがあり、飲食店街は活気に満ちていた。

それと、第一キャンプでは演劇も盛んだったので劇団も多く、金蓮座、明朗座、十三劇団、三登劇団、パゴダ劇団、三つ輪劇団、バンバトンシャンソンなどの劇団ができ、劇団員の熱演により、いつ祖国へ帰還できるか知れない不安にかられたキャンプの人々に微笑みと希望を与えたのである。

第1キャンプは第2キャンプより先に日本人学校が再開されていた。第2キャンプに学校が再開されたのは11月初旬だったが、第1と第3から上級だけが小舟で通ってくるようになった。授業は午前中だけだったが、教材もなにもなく、初めて英語を習い、主に算数と読み書き、あとは楽しい野球の練習があるのみだった。1946年3月25日、6年生の侘びしい最後の卒業式が行われたが、授業は6月4日迄継続され、最後のお別れとなった。

第2キャンプには、東亜同文書院出身の浅井源次郎さんが園長をしていたひばり幼稚園があった。そこには30名ほどの可愛い悪戯盛りのやんちゃな園児が元気よくわいわい騒いでいた。その中に瞳の大きな浅井さんの次女、ブー(信子)ちゃんがいた。1946年1月5日に演芸会が開催され、ガスランプに照らされた舞台上、可愛い勘太郎役に扮したブーちゃんを、三菱商事の大場巧さんが背負い、赤城の子守唄を歌いながら舞台上に現れた途端に大喝采で迎えられたブーちゃんの初舞台だったが、のちに、小学5年生の時、日活映画「緑はるかに」で子役のルリ子

に扮し、出演して以来「浅丘ルリ子」の芸名で有名になったキャンプの桧舞台で誕生したスターである。日本への帰還は1月頃から話題になっていたが、第1キャンプにいた台湾人が一足先に台湾へ帰還することになった。日本人と一緒に集団生活を共にしていた台湾の人たちは複雑な気持ちでいたのではないと思う。要は、戦時中は日本人とされ、終戦後は中華民国政府から中国人であると言われ、中国政府の要望で、約450名の台湾人は、1946年4月1日、一足先に日本人に別れを告げ、一旦ノンタブリー島のバックケツの収容所で帰還船待となり、4月28日、残留組約100名を残し、350名が台湾へ引き揚げたのである。邦人の帰還が具体的に6月頃に決まったのは3月頃だった。一方、日本へ帰りたくない残留組もあり、第2キャンプの夕陽が丘や、ひばりが丘で、残留問題について会議が開かれ、残留希望者は、残留嘆願書を提出することになった。残留希望者は一時1000人余りになった。だが、タイ当局から規定された2月25日、5月10日、5月13日に得た回答は、タイに残留できる資格のある者は、「特殊な技術がある者」、「40歳以上であること」、「長年タイに永住している者」、「1939年9月以前にタイに入国した者」、「妻子がある者、但し正式に結婚届けした者」、「内縁関係があってもタイ人の妻子がある者」、「タイ政府によって推薦された者」だった。従って、ほとんどの人たちが振り落とされてしまい、最終的に残留で

きたのは、約107名にすぎなかった。

バーンブアトーンキャンプから第1陣約3300名が引き揚げたのは、1946年6月10日の早朝からだったが、帰還組みの名簿を揃えなければならず、6月7日の日、武田さんと藤井さん2人が徹夜で名簿を仕上げたのだった。キャンプを後にした一行は、クロントーイの英軍が管理していたセメントの上にテントが張ってあるお粗末なニューライフキャンプに收容された。ここで戦犯容疑者の取調べがあり、検問所で「DETAIN」と「CLEAR」と記入した2種類のカードがあり、「DETAIN」のカードを渡された人は、戦犯容疑者の疑いで、英軍が管理していたバンクワン刑務所送りとなった。無事に検閲をパスした同胞は、6月15日、午前4時半にニューライフキャンプからクロントーイ港まで1時間半ほど歩かされて、待機していた船に乗船したが、棧橋で船に乗る間に、タイ政府からお別れに、1人5キロの白米を施され、バンコクに別れを告げた。船はチャウプラーヤ河を下り、シーチャン島へ向かい、待機していた辰日丸に乗り換え、7月3日無事に鹿兒島に入港したのである。

第1陣が去ったあと、第2キャンプにはまだ302名の残留組が残っていた。第2、第3キャンプに残っていた残留組は、6月15日に第1キャンプに移動することになり、各自の荷物は13日に運ぶことになっていた。だが、タイの要人と交渉していた江畑組の江畑朔哉さんの奔走で、第2、第3にいた江畑組93

名は6月13日、ボートに分乗して一足先にバンコクへ去り、暫くソーイ・ナーナーに住んでいた。第1キャンプ集合した残留希望者はまだ400名ほど残っていた。バーンブアトーンの町へも自由に遊びに行けた。しかし、何時になったら残れるのか、どうなるのかと、不安に駆られた気持ちで日々を送っていた矢先、7月6日の朝、突如としてモーリス中佐がキャンプに現れ、「今後キャンプからの外出を一切禁じる」と宣言して帰って行ったが、7月8日にはグルカ兵を伴い、日高秋雄さんを筆頭に、149名の同胞が戦犯容疑者として、英軍が管理していたノンタブリー県の川岸に面したバンクワン刑務所に連行されたが、刑務所内には義部隊長の中村明人中将以下、約700名の将兵が戦犯容疑で投獄されていた。7月30日にもバーンブアトーンキャンプから、更に19名が投獄され、続いて8月3日の日にも江畑組の仲間93名のうち64名が逮捕され投獄されたが、あとの29名は逮捕寸前に逃走し、江畑朔哉さん、園山さん、城村照雄さん、椿賢志さんたちを含めて10名がある海軍大佐の取り計らいでサタヒープ軍港に匿ってもらい、逮捕されずに助かったのである。8月1日だったが、また、モーリス中佐が数隻のボートを伴ってキャンプに現れ、140名の人たちが、第16日本陸軍病院へ連行され、日本へ送還されることになった。主に戦犯容疑でバンクワン刑務所に連行された家族の人たちだった。しかし、僕の場合は、父が日本軍の特務機関だっ

たので、スパイの子はタイには残せない、と言った理由だった。だが、僕は父が何をしたか何も知らない。僕はタイ生まれで日本は知らない。ぜひタイに残りたい、と頼み、辛うじて残れたのである。陸軍病院に收容されていた帰還組130名の同胞は、8月7日の午前5時にトラックの人となり、クローントイ港を目指し、病院の門から姿を消した。一方、戦犯容疑の疑いをかけられ、バンクワン刑務所から釈放された日高秋雄さん以下225名の一行は、病院の一行とクローントイ港で家族と合流し、軍人の帰還グループおよそ2100名と一緒にリバティ型V93号上陸用船艇に乗船し、コ・シーチャンでウィリヤムデン・ハウエル号 (S/S William Den Howell) に乗り換え、午後7時頃日本へ向かって出航した。帰途、基隆港に寄航し、8月16日午後7時、進路を祖国に向けて出航し、8月22日午後2時無事に浦賀に入港した。だが、2500名の検便および、その他の調査や手続きが手間取り、最後に身体検査が終わりDDTを撒かれて、本船と別れたのは8月26日の午前10時頃だった。

第1陣、第2陣が引き揚げたあと、バーンブアトーンキャンプ、バンクワン刑務所および、第16陸軍病院3ヶ所の收容に残っていた約126名に、公式に残留許可書が発効されたのは、1946年9月23日だった。約1年ぶりに抑留所から釈放されて間もなく、また、英軍の取調べがあり、タイランドホテルと藤原鉄工所を営んでいた藤原一家、歯科医師

だった松尾一家、ナラティワートで医者をしていた芝さんの家族、その他を含めて15名が送還されることになったが、残留許可書を貰っていた陸軍病院にいた日高邦夫さんの家族4人も一緒に帰国することになった。総勢19名は10月中頃約300名の軍人と一緒にクローントイ港で船に乗船し、シンガポール経由で日本へ向かったが、迎いの船が遅れたため、ジョロンのゴム園で帰還船待ちとなり、1946年11月23日、無事に長崎の佐世保に入港し、最後の帰還組となった。

完

山本一元日本人会会長と「錬武館」の思い出

タイ国空手連盟名誉顧問

貞廣 鉄夫

山本一元日本人会会長に初めてお会いしたのは46年前の私が24歳のときでした。

1965年に剛柔流の山口剛玄最高師範の勧めで、渡タイした日大芸術学部空手道部の同期M君からの「空手指導と森林伐採会社設立」と言う誘いに、翌1966年3月11日同期のY君と共にフランスに郵船の貨客船で、横浜から出航しました。香港、マニラと船旅は進みましたが、サイゴンは解放戦線の爆破事件で寄港が取り止めとなり、3月22日にチャオプラヤー河を遡り、クロントイ港に入港しました。

しかし、現実はいづれ様子が違う。M君は剛玄先生に紹介された将軍を訪ねたが、政変で失権しており、また、当時剛柔会タイ国支部長のS元大尉も厳しい状況下におかれていました。しかもムエタイと言う伝統的な格闘技のあるタイで、空手道と言う格闘技を教えるのは至難の業で、拓大柔道部出身のOさんが教えておられた中国人街の柔道場で空手指導をしていたのです。

その柔道場で我々3名が空手を教えていた一方で、M君が知り合っていたX氏を社長に亜細亜大学合気道部のF君も交え、森林伐採会社は設立したものの、肝心な南タイの森林伐採の許可がなかなか下りない。我々4人はX社長宅の四畳半ほどの一室で

共同生活をし『日給は4人で20バーツ、出社は徒歩で4キロ、帰りはサムロー、タバコはバラ買い、ビザの書き換えにラオスへ3ヶ月毎に行く』という日々でした。苦労は覚悟の上でしたので、タイに長くお住まいの方々や同年輩の友人たちのご支援もいただいて、何とか会社と空手を軌道に載せようと奔走していましたが、半年後には事業は行き詰ってしまいました。

しかし、日本の連続TVドラマ「空手三四郎」がタイで放映され、急速に空手が知られるようになりました。その頃、約20キロ離れたバンケーの柔道場に請われ、空手道場を開きました。夕方になるとタイ人の弟子たちがオートバイで迎えに来てくれるのです。道場と言っても屋根と床板だけの建物でしたが、皆熱心に稽古に励みました。12月には、第5回バンコク・アジア大会で時事通信のガリ版書きのバイトをしていました。

翌1967年1月、F君が「Kライン(川崎汽船)で働かないか?」と言って来ました。彼は、その前から、Kラインの観光部門で働き始めており、「未だ他にも空手の連中が3人居ます。」と上司に話をしたらしいのです。当時Kラインは、荷主さんから海陸一貫輸送などを要請されており、幾らでも人手が欲しかったようです。「早速、3人を連れて来

い。」ということになり、面接で即採用が決まりました。その時の責任者が日本人会会長になられた山本一社長であり、鈴木収蔵副社長でした。山本社長は、ガダルカナル戦線を経験されておられ、剣道五段の烈士で、武道をこよなく愛しておられました。鈴木副社長は後に日本のテレビでキックボクシングの解説者もされたりするほど磊落な方でした。Kラインに入った我々は陸送部などに配属され、日本の主な企業や工場が次々に進出してくる第一次ブームの中、東奔西走して働きました。ラオスのナムグムダムや各地のダム、道路や工場建設資機材の輸送は体力勝負でしたが、体力には自信があり、かなりの山奥まで舗装された米軍の軍用道路などを往復しました。

1968年に「日タイ親善の夕べ」で「プミポン国王ご夫妻御前」でタイの弟子たちと共に演武をご覧に入れ、「世界空手道連盟」に「タイ国空手道連盟」として加入もしました。それを期に「我々の道場が欲しい」との切なる我々の熱意を、急激な日系企業の進出で徐々に芽生えつつあった反日感情を憂えておられた鈴木副社長が、「タイに対する御礼を込めて武道場の開設」をと、山本社長に進言してくださり、お二人率先で、1970年にニューロードの中央郵便局前のビル4階にKラインの厚生施設として「錬武館」道場が開設されました。（「錬武館」という名前は、偶然にも戦前、その近くに元日本人会理事日高秋雄氏がタイ初の柔道場として開設さ

れていた道場と同じ名前でした。）山本館長、鈴木副館長、M君、F君、私、そしてKラインの要請で日本から呼び寄せた後輩たちの体制で運営される200畳程の空手道と合気道の道場、しかも「日本人指導者の手で武道の稽古をすることによって日タイ親善に役立ち、いくらかでもタイ国に恩返しが出来れば」と言う山本社長の意向で開設されたKラインの厚生施設なので指導料を一切取らなかったため、生徒の数は増えていきました。

同年10月第1回世界空手道選手権が日本で開催されることになり、私が団長で8人の遠征チームを作りました。遠征費の工面のため奔走しましたが、当時のタイ国空手道連盟はタイ体協の傘下団体では無かったため協力を得るのが難しく、見かねた山本社長からもご援助をいただいて、漸く参加できました。しかし、一回戦で日本チームと当たり惨敗でした。それでも世界選手権への出場は選手たちに大きな自信と将来への意欲を持たせました。即ち、空手をやって強くなれば外国に行けると言うことです。この世界大会に参加した選手たちは、後にタイ国空手界発展の推進者となっています。

1971年、我々の環境に転機が訪れます。山本社長のご推薦で我々が川崎汽船本社の社員に採用されたのです。また、1982年には第6回世界空手道選手権（台湾）で、鈴木副社長のご子息雄一君が世界チャンピオンとなりました。「高知へ小象を連れて来る

会」の依頼で1年かけて輸出許可を取得、発送前の検査で2頭の内の1頭が「白象」と分かり「国王陛下に献上」したこともありました。他方、Kラインの厚生施設として盛っていた「錬武館」がビルオーナーの死去に伴い閉鎖を余儀なくされました。しかし、こうしてKラインにバックアップされたタイの空手道は20年後の1987年念願のタイ国体育協会の傘下となりました。これは日本大使館、日本人会、世界・アジア・日本空手道連盟の多大なご支援の賜物です。同年11月に第14回ジャカルタS E Aゲームに初参加し今日に至っています。

この前年1986年には、当時の日本人会青少年サークル日高富士夫部長はじめ多くの方々のご協力で「空手道部」が13番目のサークルとして認可されました。サークル加盟当時は、稽古場所の確保が難しく、日本人会の幼稚園、駐車場、屋上なども利用させていただきました。

その後、私に再び転機が訪れました。S社(タイ)のT社長からベトナム工場開設のため不在になる同社の社長就任を要請されたのです。1972年の沖縄返還で沖縄へ米が輸出出来なくなったタイ国商務大臣から苦情を受けた厚生大臣がタイ米の視察をT社長に要請、その結果ご本人が独立することになり、タイにもタイ内閣の特別認可で会社を設立、Kラインが進出当初から、通関、輸送を引き受けていました。いよいよベトナム工場が操業と言うことになり、長

年お世話になったKラインを退社させていただきます。1994年S社に入社することになりました。

1998年12月には、第13回アジア大会がバンコクで開催されました。タイにとっては4回目のアジア大会主催ですが、私にとっては、来タイした1966年以來の身近で且つ大切な大会でした。と言うのは、前回1994年の第12回広島アジア大会で初めて空手道が正式種目となったからです。私も競技実行委員長として4年間準備に邁進しました。1997年にタイの通貨危機で大会予算も厳しくなり、大会の1週間前に「ストレスで心臓悪化、即入院」を医者に宣告されましたが、それを振り切って大会に臨みました。タイの成績は、銀1、銅2でしたが、各方面から大会成功を祝われたことが何よりも喜びでした。空手指導を支援していただいた山本社長、鈴木副社長、そしてKライン、S社のT会長、日本大使館、日本人会、その他の皆様のご好意とご協力が走馬灯のように臉をよぎりました。

ムエタイがふるさとの国での空手道普及はまだまだ道半ばです。世界的な「スポーツ空手」の普及で「武道としての空手道」がどうあるべきか？難しい問題も抱えています。しかし、タイ国日本人会100周年のように、40数年前の我々の夢が脈々と続いている限り、日タイ友好親善、空手道の技と精神の継承を目指して老骨に鞭打つつもりです。押忍

日本人会青少年部サークルを 立ち上げたエピソード

元理事、名誉会員
日高 富士夫

はじめに

日本人会創立100周年に、青少年部が発足した当時の話を書いて欲しい、と編集部からの依頼があり、40年近く続いている青少年部の生まれた時の内輪話を語り継ぐことも、何かの参考になるかと思い、思い出を書くことにしました。ただ、30～40年前の事柄で、年数や事実など間違いが起こることと思いますが、ご容赦ください。

きっかけ

ベトナム戦争が落ち着いた1970年代初期の頃、日本人学校の卒業生で、学校の課外活動を応援してくれていた石井良一さん（現日本人会理事）が、学校の課外で器楽サークルの指導をして居られた坂下先生を私のオフィスに突然お連れし、課外活動が続けられるよう協力して欲しいと相談に來られました。

事情を聞いた処、学校の放課後四時以降子供を指導することは違反である。君たちのやっていることは売名行為ではないかと職員会議でせめられている。何とか続けられるようお力添え願いたいと云うことでした。

私として、それが本当ならとんでもない事と感じました。

私たち昭和ヒトケタ生まれの子供時代は、放課後勉強をはじめスポーツや遊びなど、先生が暗くなるまで付き合ってくれるのは当たり前のように育ったので、反対される事が理解出来ません。子供の将来のためにも何とかせねばと思いました。

当時私も日本人仲間でラグビーチームを作り、対外試合など続けるためにも日本人会の運動部に籍を入れてもらい、同好会として活動を続けていた実績があったので、子供達の問題も親が責任を持って運営すること、即ち日本人会に入れてもらってはと考えた次第です。

日本人会活動として

早速理事会にこの件を持ち出し、先ず教育関係であると思い、教育部で扱ってはと出しましたが何故か断られました。そこで改め、青少年部の立ち上げを持ち出した処、今度は案外すんなりと賛同が得られました。

条件として、親は日本人会会員であること、次に費用などは親御さんが別途払って頂くことでした。これは会として会員増と、特に予算を余り増やすことはないと云う一石二鳥のメリットと思いますね。

私はその時点はクラブ担当をしていた

ので、無所属の理事の方に担当してもらいました。ところが青少年部初代理事は、半年余りで帰国されたので、改めて私が二代目担当理事で再スタートした次第です。それは多分1974年頃と思います。

内容を充実

当時のサークルは、確か器楽サークルの他に、2、3のサークルで余り活発でなかったのを、改めて編成変えを検討しました。スポーツや文化など幅広くにと、書道、剣道に空手、水泳、野球、サッカー、バスケット、バレーや器楽にコーラス、演劇、茶道など現在あるサークルを作り、指導者も募集して説明会で皆さんに協力をお願いして居りました。

その時の校長先生と思いますが、“そんな大風呂敷を広げないように!!”と注意を受けました。しかし結構盛り上がっていましたのでスタートした次第です。

運営と活動

第一、設備

可能な限り学校内の設備を使わせてもらう。

第二、世話人会

活動現場では親御さんから選ばれた世話人会を作り、会費集め、その管理や指導者の選任などに責任を持ってもらう。

第三、運営委員会

世話人会で経験された方から推薦頂き、

運営委員会を作り各サークルで処理が難しい問題を担当理事を交えて協議する。

私の時は年度始めに世話人や委員の方に集まって頂き、社会奉仕活動(ボランティア)の説明から始まり、子供さん達の将来に有意義な教養を身につける活動にご協力をお願いしてきました。

当時サークル会員はいつも500人を超え、世話人の方の親御さんも大変熱心に協力してもらい活気があふれていました。何十年経った今でも、仲間の結束は世話人を含めとても盛んで、人生に潤いを与えてくれます。

この活動を始めて20年程経った頃と思いますが、新しく来られた校長先生に、最近日本では学校と地域社会が協力して活動をすることを検討しているが、バンコクのサークルは正にこれの先取りをしていますねー、と誉められたことがありました。

私の手伝った水泳では一般サークル練習とは別に、土日曜祭日は選手を選んで特訓をしました。

バンコクに合宿に来た日本の女子チームが持参した競技用の置時計やキャンバス製バケツを寄付してもらい、時計とにらめっこして泳いだりバケツを足にしばって腕を鍛えたりもしました。

当時タイの水泳大会では、日本チームはマークされる程レベルが高く張り合いがありました。

他のサークルももちろん、盛んに昇級試

験や対外試合に参加しておりました。

最近の学校の先生方のご協力

最近の日本人学校の先生方にお聞きしたところ、ほとんどの先生方がサークルに参加しておられるそうで、とても嬉しくこの紙面を拝借してお礼申し上げます。

うれしかった話

サークル活動初期のころ、父親は高校野球のスラッガーで子供にも野球をして欲しかったのだと思いますが、体力作りに、小4の頃水泳サークルに入ってきた子供がいました。体格が良かったので目立った選手になりましたが、気性がおとなしく一寸不器用なタチだったので、君は野球に向かない水泳を続けなさい、それも長距離を専門にすると将来性あるよ、とアドバイスしました。

日本に帰国して、ひたすら長距離専門で大学時代は全国でも五指に入る一流選手になったそうですが、その彼が卒業前にバンコクにやって来て、父は一流メーカーに就職を希望しているが、学校のある県では近く国体があるのでぜひ教育委員会に入って県の水泳を強くして欲しいと望まれている。将来のためどちらがよいか？小父さん決めてください。と相談をされました。

これはやっかいな問題と緊張し悩みましたが、彼の人生の方針を相談されたことは、何と云うか、指導者冥利につきるとは、こういう事なのかと、正直嬉しい体験をさせて

もらいました。

私も帰国子女

私自身も、親の仕事の関係で大陸で生まれ育ち、昭和8年に内地に引き上げた帰国子女の先輩です。日本での幼稚園、小学校といじめらしきものは当時でもありましたが、余りにせず過ごせたのはスポーツ好きで積極的に活動に参加していたおかげかと思えます。サークルの子供たちにも、その体験から一芸に秀でることは学校生活でも自信が持てるので、何でも集中出来ることを今から身につけようと指導していました。

余談ながら私の父も100年余り前の日露戦争直後、ウラジオストックの日本人学校卒業一期生。母も生まれ育ったのは台湾でした。

私が父の赴任地香港で生まれ、近所の教会内の幼稚園で英国人の仲間と仲良く過ごした記憶は残っていますが、戦争により中国人のテロ行為がひどく、家族一同日本に引き揚げさせられたりの激動を体験したおかげで少々のことでは動じなくなりました。もちろん戦時の日本での経験や戦後を生き抜いた記憶は強烈で、よく生き延びたものと不思議な思いですね。この人生経験をプラスにして、サークルの子供たちにいろいろアドバイスをさせて頂きました。

おわりに

私もバンコク滞在は半世紀以上になりま

すが、外から日本を眺めていると現代でも日本は閉鎖的というか、島国風土は余り変わっていませんね。

その意味では、恵まれたバンコクで育った大らかな子供たちが日本の将来のため指導的人物に成長されることを願っております。

とりとめもないお話で、横道にそれたり申し訳ありませんでしたが、年寄りのつぶやきにお付き合い頂きありがとうございました。

私とクルンテープ誌について

(発行から80周年記念号まで)

川満 富子

日本人会創立百周年ということで、まずお祝いを申し上げると共に“クルンテープ誌”について書く機会を得たことに、感謝申し上げたい。“クルンテープ誌”の創刊は、1968(昭和43年)、今年45周年ということになる。私は日本人会月刊誌“クルンテープ”が発刊された年に日本人会に入局し、退職するまで33年間編集委員として事務局



の仕事として深く係わってきた。バックナンバーをひもとけば、本当に沢山の皆様の協力でできてきたのだなと感慨を深くする。“クルンテープ誌”はいうまでもなく、“会員のための会員による機関誌”である。45年前は日本語の活字にふれることも少なく、“クルンテープ誌”が日本人向けの唯一の情報誌だったといっても過言ではない。今では、昔の日本人社会のことを調べるのには貴重な資料ともなっている。

創刊当時のこと

当時、日本語の活字は全くなかったため、山本みどりさんのレタリングといってペンの書き文字で版下を作成して印刷していた。当時“バンコク日本人商工会議所”と“タイ国日本人会”は同じ場所にあって、みどりさん

は会議所の所員だった。そこで、少し前に会議所の所報をこの方法で発行していた。

それから、日本人会の機関誌もということになり、みどりさんはこの二つの冊子作成の仕事をもって会議所を退社、印刷会社を立ち上げた。みどりさんは、デザインを勉強されていたので、その道のアイデア豊富で写真特集などのレイアウトを手がけると見違えるように見栄えもあるものになった。発刊の年の7月、彼女が出産を控えて協力できる人を探している頃に、私も縁があって日本人会事務局におり、手伝うことになった。私もたまたま大学時代新聞部に所属していて編集に興味があったし、レタリングも少しやっていた。

自分の書いた字が冊子となって印刷された時は感激したことを覚えている。また、当時の会報部長は西野順治郎氏で、私が寄稿

した文がきっかけで編集委員にと声をかけて下さった。以来、日本人会を退職するまで33年余、“クルンテープ誌”の編集に係わらせて頂き、貴重な体験と仕事をさせて頂いたことに心から感謝している。

月刊誌の名前は、既に紹介されているが、公募した中からバンコクのことを歌った詩—天使の都—クルンテープマハーナコーン……の最初の節からとつたものである。(大阪外大の富田竹二郎先生の記)

バックナンバーをひもとくと、タイに係わられた著名な学者や専門家がほぼ会員に登録された時期があり、“クルンテープ誌”に登場されておられる。今は懐かしい方々、現在もお元気で活躍されておられる方々、同好会などで日本人会活動を支えてこられた方々と正にボランティアの結晶とでもいうべきすばらしい冊子だと思う。

特に45年も前の頃、今のようにタイ関係の書物も少なかった当時、“クルンテープ誌”でタイ語の勉強、タイの歴史、タイの民話、ことわざ、JICA専門家の寄せるタイに関する専門的な記述、タイの年中行事や習慣など等知ることができ、新年号での特集—日本国大使、会長の挨拶、記者団の新春放談などで、当時のタイ社会のビッグイベント、あるいは抱えている社会問題、タイ社会の慶祝行事、日タイ交流イベント、日本人会活動ビッグイベントなどが紹介され、いろんな立場の皆さんの文、写真、座談会などで過去45年間のタイ社会における日本人会の役

割などもよく理解できてくると思う。

編集はどんなふうに行われているかというところが私に関わっていた頃は理事の中から編集委員長が就任され、大使館や日本人学校(今は泰日協会学校)、JETRO、JICA、ESCAP、報道関係など各界からの代表、それに女性編集委員2-3名と約12-13名で編集委員会が構成されていて、毎月委員会を開催、編集企画案を提案、それと会員よりの寄稿原稿の読み合わせなどを行った。NHKドラマ“おしん”のタイ語吹き替えをされたタヌース先生も編集委員で、タイに関する記述の審判など仰いだ時期もあった。

編集では、タイで編集許可を受ける際タイの王室、政治批判は行わないことが条件になっていてそれに当然ながら“個人の誹謗中傷に当たる記事は不掲載”ということに留意していた。(勿論現在も同様と思う)

編集発行人は当時、タイ国の永住権がある、タイ語が理解できる、大卒以上とか条件があって、編集内容で問題が生じた場合は、国外退去のような罰を受けることもあるのだといつも西野編集長がいわれていた。(発刊当時から編集発行人は西野順治郎、川満富子、日高龍雄、レヌカー・ムシカシントンと引き継がれてきている)

事実、発行年の号のコラムの内容で注意され、そのために7-8月号は合併号となったという経緯がある。当時は、発行を許可するCID(内務省外国団体審査部)にも1部送付していたので、そこでのチェックによるものだった。

“クルンテープ誌”は、他にも日本の国会図書館、日タイ協会、大阪外大、東京外大、などにも送付サービスしていた。国会図書館からは届かなかった号があると再送付するようにと所望してくるほどだった。帰国された会員にも実費で送付サービスをしていた。

また、当時、会員向けのアンケートをとった際、会員のメリットとして月刊誌“クルンテープ”が購読できるからというのは形としてのメリットということもあり常に上位だった。どんな記事が好評でどんなことを取り上げてほしいかなどの意見も参考にした。

毎月の号にしても記念号にしても編集委員会で、編集方針や具体的な内容がきまると誰が原稿を依頼するか、今会員が必要としている情報は何か、それをどう具体化するかなどアイデアを出し合い、白熱した議論を交わすこともあった。そこで、決まった取材記事を実行に移すのは、事務局、女性編集委員と、それに印刷デザイン担当の山本みどりさんも加わっての3人3脚だった。

数年経って、日本語の活版印刷ができるようになり、さらに会員増で予算がとれるようになりカラー特集も組めるようになった。

日本人会のイベントの紹介、それからタイの花特集や名所旧跡、タイの料理、会員の趣味のコレクション紹介などをカラーで紹介するとぐんと引き立ったものになった。低コストでカラー特集を組む工夫もしたものである。

毎月の号の原稿整理、下刷の読み合わせ

で行う校正、座談会を開催すればそれをひもとき、原稿化するなど分担して行い、また、アイデアを出し合っただけの情報交換など今思えば多忙の中でも楽しいひとときでもあった。

女性編集委員は歴代、博物館ガイドグループやジムトンプソンガイドグループの方で引き継いでいて、知識も豊富、チームワークで取材に当たった。バンコクの有名な寺院から博物館、宮殿、パレス、などを初めとしてその内、アユタヤやロブリ、チェンマイ、スコタイまで協力で広がり、80周年記念号ではその特集ともなった。

取材編集で印象的なのは、チャトゥチャク（昔はサンデーマーケット）やヤワラ街を汗を拭き拭き手分けしてカット入りマップを作成したこと、スクムビット地区のマンション、アパート分布図を作成したことである。このアイデアは正に女性編集委員のアイデアが発端で“まるでアイデアのパイオニアね”などと自我自賛していたものである。

取材では、在留邦人の間で話題になった所には、できるだけ出かけて記事にし、参考にしてもらった。夕方にならないと出てこないこうもり山のこうもりが噴出してくるのをたそがれる夕方、車の脇でじっと待ったり、ワットパイロムに季節的におとずれるコウノトリを取材に傘をさして訪れ、その白い糞で枯れ木と化した木々の風景に圧倒されたり、ホアヒンのパイナップル工場に続く道路が未舗装で、窓をしめてもほこりが入ってきてたま



らなかったことなど今思えば懐かしい。編集委員の方々は帰国されても“クルンテープ誌”への愛着は脈々と続いていて、タイにいらした際は事務局を訪れ、日本でお会いしても話題の共通点があるので、すぐ話が盛り上がった。

座談会もバンコクの日本人会社会で話題になっているテーマを選んで子育て、趣味、旅行、みやげなど皆さんの関心事をテーマとして度々行った。テーマ選び、出席者の選択、依頼、そして座談会、2時間にもわたる座談をまとめるのは大変な作業だが、チームワークで手際良く行き、写真などと共に掲載、ちょっとしたバンコク社会の話題づくりでもあった。また、学校便りに登場するお子様の作文、絵、写真も何かの記事で掲載された際のご両親や祖父母の喜びようもまたひとしおでその号を大事にとっておかれたり、身近な方々に配布されることも今も昔もかわらないほほえましいことである。

70周年〔1973年〕、80周年〔1983年〕記念号と横田仁郎氏の絵が表紙を飾り、タイと日本の王室、皇室の交流、大きなイベント

などが一目でわかるようにまた日本人社会の歩みが手にとってわかるようにすることを主旨として編集された。

“クルンテープ誌”のバックナンバーを羅列するだけでも興味深い記載になると思うが、それは膨大なものになるので難しかろう。70周年記念号に掲載された一歴代の日本人会長の紹介を写真付きで掲載、(これは日高秋雄氏がこつこつと写真を集め、紹介文を書いたもの)80周年号にはその後の会長を紹介した。日本人会の設立から現在まで、日本人納骨堂の歴史、各同好会の歴史、移り変わり、50周年、70周年、80周年、90周年と記念号が出されている。

特に70周年、80周年の記念号では、①タイ国及び日タイ関係について社会、経済、文化交流を紹介しながら、日本人会の活動の記録も掲載、次代の参考にする、②タイの社会、生活、習慣、文化、日タイ関係の歴史などの観点からよりタイの理解の手立てとなるような知識となる記事の掲載を心がけるといのが編集方針だった。

“クルンテープ誌”が今後も会員の参加をいろいろな角度から取り入れることによって益々充実し、日本人会員のメリットになっていくことを祈りたい。何事もしかりだが、“継続は力なり”、45周年を迎える“クルンテープ誌”に心からの声援をお送りするものである。(元編集委員&事務局長)

紙面が許せば、80周年記念号の目次にある執筆者を掲載させて頂き、回想のよすがにさせて頂ければと思う。

日本人会創立80周年にあたり	日本人会会長	丸子 博之
祝辞：	日本国駐タイ特命全権大使	藤井 宏昭
祝辞：	日タイ協会会長	小山 五郎
祝辞：		高瀬 長幸
祝辞：		三村 洋三
カラー特集 バンコクの新みどころ		高橋 康敏
花とお寺		太田 吉昭
日泰関係の歴史		西野順治郎
泰国日本人会会館取得まで		本多 忠勝
文化交流からみた日タイ関係	広報文化部	浦林 紳二
	国際交流基金	坂元 洋子
バンコク日本人学校小史（ここ10年）	学校長	安富 秀夫
日本人会創立80周年記念行事について		川満 富子
会長時代の思い出		大峽 一男
日本人会創立80周年に当たり		小谷亀太郎
納骨堂について		長原 敬峰
日本人納骨堂だより		加門 知龍
私とクルンテープ		安藤 浩
カタカナによるタイ語表記法について		富田竹二郎
変わらないタイのとつきあい		赤木 攻
「王様と私」のころのタイ		河部 利夫
タイ文学界・現在		岩城雄次郎
タイの人間関係は不思議だ		橋田 信介
アユタヤー歴史散歩		湯川 和子
ロップリー市		山本みどり
北タイの旅		永井 文
ソンクラーとその周辺		沢田 秀穂
楽しい旅へのお誘い		信岡 祐治
タイ料理		本村 理子
写真提供		瀬戸 正夫
表紙絵		横田 仁郎

タイでの現地入営、除隊時代の回想

西浦 三郎

アジア太平洋戦争下の昭和19年10月にバンコクで現地徴兵された私は、翌年の8月の敗戦までの約10か月間、タイ国で日本軍の兵士として軍隊生活を体験しました。何分いまから約70年近く以前の若い頃の古い出来事なので、今では断片的な記憶しか残っていませんが、思い出すままに当時の回想を文章にまとめてみました。

入隊

昭和16年12月8日に、日本軍のマレー半島奇襲攻撃で開始されたアジア太平洋戦争は、開戦後1年を経過した頃から戦局が急速に悪化し、海外在留邦人に適用されていた兵役延期の制度も昭和19年には廃止されて、当時タイ国にいた日本国籍のある徴兵適齢19歳以上の兵役未経験の男子すべてが、根こそぎ現地徴兵されることになりました。

徴兵検査の結果、頑強な体格でない私は、甲種合格から外れて第一乙種でしたが、戦時下の日本軍隊では乙種でも立派に合格となり、バンコク市内のルンピニー公園に兵舎を構えていたタイ国駐屯日本軍「義」部隊配下の独立混成第29旅団所属の外池部隊(独立歩兵第162大隊)に入隊することになりました。

入隊した人数は100名程度であったと思いますが、中にはタイ国で生まれ育った者や、古くから南洋に住み着いて暮らしていた者もいて、入隊前の職業や年齢、経歴もいろいろでした。入隊した後、班別編成作業が行われ、各自がそれぞれに小銃班、軽機関銃擲弾筒班、重機関銃歩兵砲班、工兵班、衛生班のいずれかに所属することになり、私は小銃班に配属されました。

編成に当たっては、過去の経験等も考慮し、その適性に応じて配分されたものと思うのですが、別段詳しい聞き取り調査はありませんでした。ただし、重い兵器を取り扱う重機関銃歩兵砲班に配属される兵士には特に強い体力が要求されるとのことで、その選考に当たっては、大隊長が直接、入隊者全員を整列させて見て回り、比較的ドッシリした体格の者を見ると一歩前へと命令して、若くて頑健そうな者を選び出しては重機歩兵砲班に配属させました。

衛生兵には、過去にそれに関係した者か、或いはひ弱い感じのする連中が多かったようです。何の特技もなく、乙種合格のヤセ型の私は小銃班に編入されました。小銃班には他の班への配属から外れた比較的年のとった者や、私のように特技も持たない頑強でない体格の者が多かったと思います。

入隊した場所はルンピニー公園にある外池大隊でしたが、実際に新兵教育を担当するのは、ルンピニーから南へ12キロ離れたプラカノンに兵舎があった同じ独立混成第29旅団に属する駒沢部隊(独立歩兵第160大隊)でしたので、新兵100余名は、入隊後直ちにルンピニーからプラカノンに移動させられました。

当時、駒沢大隊のあったプラカノンは、周辺一帯が殆ど人家も少ない田園地帯で、わずかに小さな市場や寺院、それに女学校などが点在しているバンコクの郊外でした。この田園地帯の中にある駒沢大隊の兵舎は急造した直後の感じで、兵営内の道は砂利を敷き詰めただけの状態でした。

私が所属する小銃班の初年兵教育を担当する班長は三浦軍曹、それに班付き助手として弓削兵長と福田兵長の二人が付き、それらの上司である教官は師範学校出身の松村少尉で温厚な人でした。班付き助手の二人の兵長は、新兵の私たちと同じ班内で起居を共にし、身の周りの細かい指導を行うという体制でした。

駒沢大隊での訓練は、入隊早々の新兵の体力を考慮し、基礎体力づくりを重点に始められましたが、最初に味わった苦痛は営内で、この砂利道を裸足で歩かされたことです。特に食事時の「めしあげ」当番に当たった時などは重い飯桶を担いで砂利道を歩くので、足の裏に石が食い込み、実に痛かったことを今でも覚えています。

訓練のひとつとして、毎日朝食前に隊列を組んで駆け足をさせられました。最初は500米ほどの距離から千米へと日を重ねるたびに延長され、そのうちに1カ月もすると営門を出て右折してプラカノンの橋までの往復約6キロ、左折するとバンチャーク付近まで往復約4キロを、何とか無理せずに走り終えることが出来るようになりました。

また、入隊後1週間ほど経過した時に兵営内で弾薬庫場所の移転がありました。この時に20キロ入りの小銃弾箱を肩に担いで200米くらいの所を運ばされましたが、これには殆んど全員が参ってしまいました。それから2カ月余りして大隊が移動する時にも使役させられましたが、この時にはなんと白米100キロほどを背負ってトラックから舁に移すことが可能になる体力になっていたので、自分ながら連日の基礎体力づくりの成果に感心したものです。

入隊した新兵の私たちは、外部からは完全に隔離された状態に置かれ、戦局の動向についての情報などは何一つ入手できなかったのですが、ただ1回だけ知らされたことがあります。それは入営直後の昭和19年10月12日に起きた台湾沖航空戦の戦況でした。小銃班の新兵全員揃っている所で、助手の弓削兵長が台湾沖航空戦の日本の大戦果を誇らしげに伝えたことを覚えています。

しかし、この大戦果は全くの虚報だった訳で、戦局は一向に好転せず、連合国軍のバ

ンコク市内への空襲も激しくなる一方で、インドのカルカッタ基地から飛来したB-25爆撃機がプラカノンの兵舎の上を悠々と低空飛行しながら通過していく姿をただ見上げる状態でした。

ところがある日、駒沢部隊の兵士が、上空を低空飛行で通過するB-25をめがけて発砲しました。後日、その返礼にプラカノン兵舎がB-25の爆撃を受け、死傷者も出たと聞きましたが、この時はすでに駒沢部隊が他所に移動したあとで、私たち新兵もルンピニーの外池部隊に戻っていましたが危なく難を免れました。

ルンピニー公園内の外池部隊に移動

駒沢部隊の移動によって我々が再び外池部隊に戻ったのは、昭和19年の暮れも押し詰まった12月下旬でした。プラカノンの淋しい場所とは異なり、バンコクの街の真ん中にある公園内の兵舎での起居は、幾分でもシャバの香りが味わえるものと期待して喜んで移動してきたのですが、結果は期待に反し惨めな感を抱くだけに終わりました。

夜、不寝番などに立ちますと、兵営の塀を隔てた外側はこれまで私たちが以前に生活していた自由な世界。ビールなどを飲みながら歌を唄う声がラウドスピーカーを伝って聞こえて来るのです。この外の自由な街の喧騒を耳にしながら、一步も兵営の外には出られない新兵の惨めさをつくづくと味わったものでした。

ルンピニーでの初年兵訓練は翌昭和20年3月まで続きました。その間、敵機の襲来爆撃は熾烈を極め、マッカサンの機関車庫、ボルネオ埠頭、トンブリー地区の造船所その他目ぼしい軍事施設や交通の要所は次々と爆撃されました。外池部隊もいまに爆撃されるのではと噂されていましたが、幸いにしてここだけは爆撃がなかったのは全くの幸運でした。

連合国軍の空襲が激しくなる中での初年兵訓練ですので、時々、何の説明もなく訓練の予定が中止になって待機させられる場面も何回かありました。入隊するまでに得ていた情報で、昭和19年7月のサイパン島の玉砕や東条内閣の総辞職、ビルマ方面でのインパール作戦の挫折中止などを知り、戦局が悪化しつつあることは分っていたので、入隊後の情報が入手できない状態の中にあっても、戦局悪化が続いているという気配は、新兵の私たちにもそれとなく伝わってきました。不利な戦争がこのまま続いて行けば、いずれはバンコクも戦場になるに違いない。そんな漠然とした不安と危機感を抱かざるを得ない状況下にありました。

初年兵訓練仕上げの検閲行軍演習

昭和20年3月に、3か月間の初年兵教育訓練の期間が終了し、初年兵の仕上げとなる検閲行軍演習が行われました。この時の行軍は、弾薬食糧を背負った完全武装をした状態で、約40キロの行程を歩くというも

ので、ルンピニー公園の時計台の下にあった外池部隊の営門を昼頃に出発し、戦勝記念塔のあるバンコクの北端の方向に向けて行軍を続けました。

やがて戦勝記念塔を通過し、俗称ドンムアン街道の並木道を小休止しながら北上しました。もうこの辺になると殆ど建物はなく、その先が折り返し地点でした。大休止のあと、帰路はスクムウィットを通過して南下し、夜間のバンコクの街を通り抜けてクロントイ地区の国立埠頭がある広場まで到着しました。

ここでは大休止のあと、夜が明ける頃に暁の総攻撃演習が待っていました。古年兵が守備している陣地を攻撃するのですが、3月はタイ国の真夏期。行軍で疲れ切った上に、この炎天下の攻撃演習は正に死に物狂いでした。這うようにして前進する私の水筒の水は空っぽで、あまりの喉の渇きに耐えかねて、我慢できずに近くのクリークの溜まり水を掬って飲んだのを覚えています。不思議と下痢もしませんでした。

また、小銃班の小野君などは、軍靴の中の足の裏が蒸れて一皮めくれ、痛くて歩けなくなったというので、戦友が小野君の肩を両脇から担ぎ上げて帰隊した一幕もありました。小野君は入隊前に小野商会の店主をしており、運動する機会も少なく、体格も小太りで汗かきの体質だったのでしょうか。足の裏が蒸れて一皮めくれて歩けなくなるとは、暑い南洋ならではのアクシデントだったと思います。

幹部候補生の訓練

昭和20年3月末、3カ月余の初年兵教育が終わると、皆ばらばらになって配属された部隊へと出て行きました。幹部候補生に合格した約30名は、4月1日に上等兵の階級に進み、引き続き外池部隊にとどまって、さらに幹部候補生訓練を受けることになりました。

幹候の教育訓練は、初年兵のそれとは雲泥の差で、比較にならないきついものでした。毎日のように朝ルンピニー公園を出て埠頭演習場に行き、まる1日戦闘訓練が続けられました。炎天下の田圃の中を匍匐前進させられると、乾いた田圃の土がコンクリートのように固くなっており、肘や膝の皮が擦り剥けて血が滲む始末。また、演習中に身を伏せた場所があいにく蟻の巣の上だったりすると、大蟻に噛まれながらも身動きがならず、じっと耐えて我慢した辛い経験も味わいました。

夜は夜で、軍人勅諭の暗誦をさせられました。初年兵の時は勅諭の5か条だけを暗記すればよかったのですが、幹候になると勅諭の全文を暗記しなければなりません。全員が完全に暗記できるまでこの特訓が続きました。この期間中に、偶々、将校だった私の兄が満州から小包を送ってきてくれたのですが、三浦班長から「君はいま教育中で軍務に専念すべき時だから、受け取らなくてもいいだろう」と言われ、班長に一任しますと答えたことで、結局、この小包は最後まで私の手に入らずに終わってしまいました。

その兄も、戦後私が引き揚げ船で鹿児島に上陸し自宅に辿りつく1週間前に奈良の陸軍病院で戦病死し、二度と会うことが出来ませんでした。享年24歳、階級は陸軍中尉でした。

その他にも、幹候教育の演習訓練でルンピニー公園から埠頭演習場へ向かう途中、小休止した場所の近くに住民のタイ人の主婦たちがいて、候補生が休憩の時間を利用して彼女たちにタイ語で話しかけると、「ナーイ・タハーン・デック・プート・ダイ・パサータイ」(将校候補生たちはタイ語が話せるわ)と一斉に驚きの声を上げたことを覚えています。彼女たちは多分、私たちが現地入営するまでは在留邦人であったことなど知らずに、タイ語教育を特別に受けた候補生だと思ったのに違いありません。

ルンピニーからプラチュアアップキリカンへ

昭和20年5月1日に兵長、6月1日に伍長の階級に進みました。この段階で候補生は甲乙に振り分けられました。甲に合格すると将校になるための予備訓練を、乙は下士官として別の道を進むのです。私は甲種に当然選ばれるものと思っていたのですが、どうも訳か甲種には選ばれませんでした。

その理由については、思い当たることがひとつありました。それは初年兵の訓練が終わった昭和20年3月に初めて許された1回限りの外出で起きた出来事でした。班内で私の隣で起居していた森本君と話し合っ

て、外出先をルンピニー公園から近い場所にある私が入隊前に住んでいたサートン社宅に決め、バンコクの街の地理に不案内で同行者を求めている北川君と五十嵐君を誘って、4人一組になって外出した時のことです。

外出先のサートン社宅では中国人の使用人が食事を作って歓待してくれたのですが、酒に弱い五十嵐君がウイスキーを飲んで酔っぱらってしまい、帰隊する時は、私たち同僚が彼を両側から支えて何とか営門を通して班に戻ったものの、そのままダウンしてしまい、彼は夜の点呼にも立てぬという失態を引き起こしてしまったのです。思わぬ事態に私も驚いたのですが、外出中に私が彼に無理やり酒を飲ませた訳でもなく、彼が勝手に飲んだのですから、もし教官から詰問されたら、私には何の責任もないことを説明し、身の潔白を表明しようと思っていました。しかし、教官は森本、北川の両君に事情を問い質したものの、私に対しては何のお咎めもありませんでしたので、てっきり私は五十嵐君個人の自己責任ということで処理されたものと信じていました。

しかし、実際はそうではなかったようです。五十嵐君がどのように申し開きしたのかわかりませんが、どうやら教官は、外出先に私が住んでいた社宅を選んで同僚を誘い、酒食を提供したという私の立場を重くみたのでしょうか、私にとっては全くの心外なことでしたが、多分これが甲種に選ばれな

かった原因だったに違いありません。しかし今さら自己弁護するすべもなく、ただ教官の判定に従わざるを得ませんでした。

昭和20年6月、乙種幹部候補生と決まった私は、ルンピニー公園にある外池部隊を離れ、バンコクから南へ約300キロ離れたマレーに通じる半島中央部にあるプラチュアップキリカン付近のビルマ国境に近い山間部に駐屯する駒沢部隊に配属され、8月15日の敗戦までの2か月足らずの僅かな期間をこの部隊で過ごすことになりました。

ただ残念ながら、この期間の詳しい記憶は殆ど残っておりません。なぜかと言いますと、配属されてから現地除隊になるまでの駒沢部隊での在隊期間は僅か2か月足らずで、私にとってはあっという間の短い期間でしたので、部隊に馴染んで溶け込むだけの時間的余裕もなかったからです。

それに加えて私が現地で徴兵された兵士であるということで、部隊内ではある種の特別扱いされていたことも影響したと思います。実際のところ私は同部隊に在隊中は、専ら本部下士官室で起居し、主に連合国軍捕虜収容所関係の仕事や、タイ語通訳などの仕事に携わり、部隊内の兵士と日常接触する範囲も自ずと限定されていたのです。

同部隊への配属期間中の出来事で私の記憶に残っているものの中に、マラリアに罹って40度を超える高熱を出して、数日間医務室で寝込み苦しんだことがありました。マラリア蚊は綺麗な水に発生するといいま

すが、確かに部隊が駐屯していた場所に流れる小川の水は透き通っていました。熱が下がらなければ明日にでも兵站病院で治療を受けるため後送されるという直前に、急に熱が下がり入院せずに済みました。このマラリア熱は不思議にも日本に帰国してから一度出ましたが、それきり再発しないまま現在に至っています。

またその他にも、部隊長が現地のタイ住民の代表と会食をする席に、臨時のタイ語通訳として呼ばれ陪席したこともあります。また、部隊の近くに連合国軍の捕虜収容所があって、捕虜との連絡や死亡した俘虜の兵士の遺品整理などを行いましたが、遺品といっても捕虜が使っていたスプーン1本と、家族との写真、手紙程度しかないので、その写真や手紙を眺めていると、捕虜にも愛する家族がいるのに再会できず、惨めな状態でこの世を去った無念さが分かる気がして、改めて戦争が個人の家庭までを破壊してしまう残酷さに心が痛むのを感じました。

敗戦による現地除隊

駒沢部隊に在隊中に戦局は一段と悪化しました。ドイツの全面降伏、ビルマの首都ラングーンの陥落、沖縄の日本軍守備隊の玉砕と続いて、日本の敗北は決定的となりました。

日本の敗戦を知ったのは、昭和20年8月15日から数日経過した後のことではないで

しょうか。この時、私は捕虜たちに戦争が終わったことを伝える役目を引き受けて収容所に赴いたのです。それを告げると、捕虜の方から勝利したのはどちらの国かとの質問が返ってきました。さすがにこの時は自分の口から日本が負けたとは言いにくいので、情報は今入ったばかりで詳しいことはまだ分からないとお茶を濁して戻りました。そしてその後、捕虜収容所の中は歓声で沸き返り、捕虜が歓喜していたのを今でも覚えています。

敗戦により部隊では、私たち現地邦人を徴兵したのは、国際法違反になるかもしれないから、現地除隊してバンコクに戻るよにとの指示がありました。それを受けて私は部隊を離れ、帯剣だけを腰に着け山道を歩いてバンコクに通じる鉄道の駅があるプラチュアップキリカンの街まで下りました。

途中どこで合流したのか、同期兵の工藤君や小合君らとも一緒になりました。列車に乗ってバンコクに向かう途中の駅で停車中に、日本の敗戦を知った現地住民が列車に乗っている乗客の荷物を盗もうと近づいてくるのを、同じ列車に乗っていた日本兵が小銃を発射して威嚇し、現地住民を追っ払うという一幕もありました。

列車がチャオプラヤー河を挟みバンコクの対岸にあるトンブリー駅に到着しましたが、連合軍の支配下に入ったバンコク市内にこのまま軍服姿で入るのはまずいということになり、工藤君が自分のいた会社に

電話連絡して、各自の白い平服を届けてもらう手配をしてくれました。

トンブリー駅前の広場では、ビルマから敗退してくる日本軍の兵士を見かけました。その姿を見ると、軍服は泥にまみれ、顔色は生気を失ってどす黒く、身に着けるものは水筒代わりの竹筒だけで、青竹を杖にしながら元気なく歩いてくる姿は、まさに敗残の兵そのものです。戦争に負けることの惨めさを目のあたりにして、明日の我が身がどうなるのか、そんな不安を抱えながらチャオプラヤー河を渡ってバンコクの市内に入り、ここでやっと軍隊生活から解放されて元の在留邦人に戻ったのです。

懇和会

日高 龍雄

泰国日本人会100周年、おめでとうございます。
います。

最初に現在、日本人会事業部の下部組織にある「懇和会」の成立ちについてお話したいと思います。

昭和20(1945)年8月、日本が第2次世界大戦に敗れたため、私達在留邦人は連合国により身の回りの物を除く全資産を没収され、バンブアトン・キャンプに抑留されました。キャンプ生活はそれなりの制約がありましたが、比較的平穏なものでした。1年後、残留を許された約130名を除いて全員、日本に強制送還されることになりました。残留者も財産を無くしているので、当初生活は不安な時もありましたが、やがて日が経つと、以前のような落ち着きを取り戻しました。

そして昭和27(1952)年、サンフランシスコ講和条約が発効し、日本の主権が名実共に回復。日タイ外交関係が正式に復活したのを機に日本の商社マンや強制送還された人達も、徐々にタイに戻って来る様になりました。残留を許された日本人と戦後一早く渡タイした日本人の有志が、昭和28(1953)年4月に日本人会を再建しました。そして春と秋の彼岸などに、当時唯一無二の日本人の財産として残されたワット・リヤブ(正式名

ワット・ラーチャブラナ)にある日本人納骨堂に集まるようになりました。敗戦で日本国の名の付くものは全て没収されてしまいましたが、さすがタイは仏教国だけあって日本人納骨堂だけは免れました。この日本人の財産を護り抜き、先人たちの霊を祭り続けて行かねばならないとの思いから瀧川虎若先生、小谷亀太郎氏、上松次雄氏、日高秋雄氏を中心に「仏教奉賛会」を立上げ、高野山から堂守を派遣してもらう運動をして参りました。参加者は当初20~30名でしたが、参加者を一層増すため、この宗教色の強い名前を1971年9月14日アマリンホテルの2階で開かれた会合で「懇和会」と改め、タイ国日本人会厚生部の所属としました。これを機に、懇和会は親睦を一層深め、より沢山の人の参加してもらえるように毎年、新年会、講演会、バス旅行、会社訪問等を行うようになりました。

この会は会員が病気で入院すれば花を持って見舞い、不幸にも亡くなったりすれば花輪や香料を届け、出来る限り全員でお通夜、葬式に参列します。参加資格は在タイ期間の長短に関係なくタイ国日本人会会員であれば誰でも入会できます。現在の会員数は150人前後です。

次に「日本人納骨堂」の成立とその行事を説明します。

明治20年頃からタイに進出して来た日本人の中に、時の経つに連れ現地で亡くなる人が出て来ました。そうした中、日本人社会では日本人の墓地を造る計画が持ち上がり、明治42(1909年)年頃から資金を積立て始めました。その資金をもとに昭和8年頃、後に日本人会の会長をされた小川蔵太博士(小川医院、第12代会長・昭和9-10年)、三木 栄氏(元タイ国美術院顧問、第15代会長・昭和13年)、日高秋雄氏(日高洋行、第18代会長・昭和14年)、江尻賢美氏(江尻医院、第20代会長・昭和16-17年)、それに溝上正憲氏(溝上洋行)、納骨堂設計者の藤島護三郎氏、高野山より派遣されていた藤井真水師らが建設委員となり、昭和10年に京都金閣寺を模した立派な納骨堂が建てられました。そして小川氏の斡旋で翌11年、名古屋の日暹寺(現在の日泰寺)から本尊釈迦如来像が贈られ、最初のタイ国開教師として終戦まで堂守を務められた藤井真水師の手によってその開眼法要が執り行われました。

先に述べた仏教奉賛会の尽力で昭和36(1971)年、高野山真言宗より戦後初の日本人納骨堂堂守として長原敬峰師が派遣して来られ、師は現在「元開教留学僧の会」の会長としてリーダーシップを発揮しておられます。堂守は大体3年で交代され、現在堂守を務めておられる神田英岳師はその第20代

に当たります。来年は任期満了なので現在、後任を高野山にお願いしているところです。

この納骨堂では毎年、日本人会主催の春と秋の慰霊祭が執り行われております。

日本人会ではこれ以外に、毎年春の日曜日にカンチャナブリで慰霊祭を行っています。ここには戦時中の昭和19(1944)年、当時の日本軍の司令官が建てた慰霊塔があります。この慰霊塔は、第2次大戦下、ビルマに侵攻する日本軍に物資を輸送する泰緬鉄道の建設工事で命を落とされた連合国の俘虜や現地の労務者ら多く犠牲者の霊を祭っています。この2つの行事には日本の国を代表して大使か公使、参事官、日本人会を代表して会長と事業部長が参加するほか、多くの懇和会会員が参加します。

カンチャナブリは、バンコクからバスで2時間半ぐらい掛かりますが、ピクニック気分の軽い気持ちで、参加して頂けると有難いです。慰霊祭の後はクワイ川の辺りで食事をします。過去には現在も一部残っている泰緬鉄道に乗って終点のナムトック迄乗ったこともあります。

もう一つ4月2日にサラブリ県にあるワット・ゲンコイ寺の慰霊祭に参ります。これには日本人会と懇和会の会員が参加します。明治28(1895)年、日本人最初の農業移民でタイに来たものの、生活費を引率者に使い込まれ、当座食べていくため、後に初代日本人会会長の斡旋で、当時始まった東北線

の鉄道建設に工夫とし働きました。その多くが過酷な労働と不十分な栄養により、マラリアやコレラで亡くなりました。日本人会では昭和41(1966)年より釈迦堂を建て、慰霊祭を春に執り行って来ましたが、寺の拡張工事で釈迦堂が取り壊される事になり、代わりに現在の場所に慰霊塔を建て、慰霊祭を続けて参りました。

今から10年程前、偶々日程がずれ4月2日に開催したことがありましたが、その日がゲンコイ寺でサラブリ県知事、ゲンコイ市長や多くの市民が参加して開催される行事と重なり、聞くと1945年のこの日に日本軍を目がけて投下された爆弾が市の中心部に落ち、100名余りの死傷者が出、その犠牲者の慰霊祭を毎年行っているとの事でした。知事、寺の住職たちの呼び掛けでそれ以降、同じ日に日本人移民之碑の法要を行い、その後懇和会の人たちもゲンコイ市主催の慰霊祭に参加。日タイ交流に努めています。

最近企業で働く若い人が増え、こうした行事に関心のある方が少なくなって来ているのは寂しい限りです。明治20年以降多くの諸先輩方が汗水垂らして働き、タイ人に日本人の勤勉さと信頼性を知っていただくことができました。こうして日タイ親善に尽くして来られたお蔭で、今日の日タイの素晴らしい友好関係があることを認識し、こうした行事に積極的に参加して頂きたいと切に願う

ものです。

最後に瀧川虎若先生(1904-2003)と瀧川福祉基金のことについて触れたいと思います。

瀧川先生は戦後よりサムヤーンで長年瀧川医院を開業され、多くの人に赤ひげ先生と慕われた方です。長年、日本人学校の校医、日本人会の理事(厚生部長、婦人部長、副会長)としてタイに住む人たちから篤い信望を集め、懇和会と瀧川福祉基金の初代会長・理事長も務めて来られました。先生は戦後数10年経って働けなくなり、頼れる身寄りもない年老いた人で、故国に帰らないで住み慣れたこの地で余生を送りたい人達の支援を呼びかけられました。1982年頃より毎月第2土曜日にタニヤの浪花で会合を開いていたので、何時からか「浪花会」と呼ばれる様になり、生活にお困りの方に毎月僅かながら支援を継続。1983年11月からは日本人会の厚生部が引継いでいます。その後先生は、1985年7月にタノン・トックの自宅の庭に小さな老人ホームを建てられ、身寄りのない方のお世話をされていました。

1987年10月保科忠治氏(元日本人会理事)の尽力で、タイ政府より「高齢者支援財団」の設立が認可され、翌1988年2月先生はご自宅を売却した資金だけでなく全財産を財団に寄付され「瀧川社会福祉財団」(俗称：瀧川基金)を設立されました。1990年スクムヴィットのソイ・オヌットに土地を購入し1991年7月、瀧川ホームを完成させました。

先生がお元気な間、懇和会の有志がホームに毎月食事を持ち寄り、先生と入居者を励ます会ができました。その会は先生のお好きな相撲の曙関の名を取って「曙会」と名付けられました。支援を受けて来た方々も徐々にあの世に旅立たれ、現在対象者はありません。そんな訳で先生が亡くなられた後ホームは整理されましたが、「曙会」の方は今日も毎月食事を持ち寄って高齢者を囲む会が続いています。

瀧川先生と敬老の日

日本人会では毎年9月15日に行う「敬老の日の祝賀会」に満75歳になられた方をお招きし、会長と厚生部長とでお祝いの食事をするのが恒例でした。瀧川先生は何時も該当者が少なく、お祝い事であるのに非常に淋しいと感じておられました。出来るだけ多くの人に参加して貰って、もっと楽しい会にしたいとの願いで、先生の提案で1993年以降、毎年60歳以上の方を瀧川基金でご招待し、それに懇和会の有志のメンバーも加わって敬老の受賞者達を皆でお祝いするようになりました。今では祝賀会の後、皆さんに楽しんで貰うため懇和会有志による日本舞踊、歌謡曲を皆で合唱、ゲーム遊びや健康の話等盛り沢山、今では参加人数も増え毎回50名以上が参加しております。

懇和会がアマリンホテルで誕生して今年で41年になります。2010年には厚生部から事業部に編入替えされました。先生も日本人

会の活動に懇和会と瀧川基金が深く関わり、大きく成長していく姿を見て大変喜んでいと思います。初代懇和会の会長は瀧川先生、2代目は日本人会の長年事業部長として高野山との信頼関係を築かれた小谷亀太郎氏と受け継がれ現在、私、日高龍雄が3代目を務めております。今後も会員に喜んでいただける懇和会を目指していきたくと思っています。

としお 日高秋雄について

日高 幸子

日高洋行の創立

日高秋雄(としお)は明治38年(1905年)10月21日徳島生まれ。兄が、鈴木商店の香港駐在員から独立し、香港で日高洋行を設立したことから、香港へ渡り、鉄鉱石や石炭の売買を手伝った。昭和3年(1928年)秋雄が23才のとき、バンコクでは鉄道建設で不要になったレールや車輪などの古鉄が山積みになって放置されていたのを日本へ輸出し、今年で創業85年を迎えるタイ日高洋行が誕生する。戦前の全盛期には、トラックが26台、艇(はしけ)が35艘、日本人社員が15人、労働者が200名余りになった。

バンコク日本人社会へ

秋雄は日本人学校の運営にも深く関っており、昭和14年(1939年)には経営者代表を務めている。学芸会など毎年の学校行事では、柔道で鍛えた屈強な体躯を活かし、講堂脇の土俵でまわしを締めて相撲を取っていたと伝えられている。

また日本人納骨堂の建立計画においては、納骨堂建設委員として、小川蔵太博士、江尻賢美氏、溝上正憲氏、三木栄氏、藤島護三郎氏、藤井真水師と共に名を連ねている。納骨堂はワットリアップ境内のバナナ畑の約500坪をタイ当局から永代無償で借り

受け、昭和10年(1935年)5月金閣寺を模した日本人納骨堂が完成、翌年6月には、三井船舶の「乾隆丸」で名古屋の覚王山日泰寺から、本尊釈迦如来像を招来し、開眼法要を行った。

昭和20年(1945年)4月18日、ワットリアップ隣接の発電所が空襲を受け、納骨堂の屋根に損傷を受けたが、秋雄はその修復にもいち早く携わっている。

在郷軍人部会長として

第2次世界大戦が始まると、タイは中立を宣言、当時の首相ピブーンは英米と日本との両面外交を基本方針としていた。昭和16年(1941年)7月、日本軍が仏印南部に進駐、日タイ両軍は国境で対峙する。次いで12月8日、日米開戦と同時に日本軍はタイへ侵入。日本側は、日本軍上陸作戦の一環として、万一に備えた居留民保護作戦を準備していた。秋雄は、徳島商業を卒業後、一年志願制度を除隊し予備役伍長に編入されており、タイでも在留軍人部会長として活躍していた。秋雄は大使館との連携のもと、在留邦人を「映画の夕べ」に集め、自らが用意した輸送用トラックでチャオプラヤー川で待機中の「がんぢす丸」に乗船させた。また、「納涼」の名目で在郷軍人と日本人会青年

部を集め、別働隊としてチャオプラヤー川河口のバンプー海岸に出動させ、吉田支隊の上陸を支援する任務にあたった。この日に備え、秋雄は釣竿を持って釣人を装い、重い石を詰めた兵嚢を背負って、バンコク南部の海岸線一帯を何日もかけて隈なく踏査していた。重装備の軍隊が上陸するのに適した場所を捜すためである。別働隊の一同は日高洋行の社員が運転するトラック20余台でバンコクを出発後、パークナム・ハイウェイ沿いの電話線を切断しながらバンプーへとトラックを飛ばした。電信柱によじ登り電話線を切断するのだが、タイ警察に見つかって発砲されることもあった。バンプー海岸では、懐中電灯を回して吉田支隊の船団を誘導した。しかしタイ警察によって道路が封鎖されており、そのまま強行突破すれば、思わぬ大事に至る危険が高まった。このとき秋雄の機転もあって、バンコクの八原中佐と徳永中佐が現場に急行し、強行進軍を制止することになり、不測の事態は回避された。12月8日になってピブーン首相が軍隊通過協定を正式に調印したことで、吉田支隊も日高洋行社員の運転するトラック20数台を連れ、12月9日の午後バンコクに到着した。バンコク市内ではABCDのグループに分かれて連合国の各国大使館に進入した。すなわち、A－アメリカ、B－イギリス、C－中国、D－オランダである。秋雄はBグループと共に、実弾演習が行われている英国大使館に乗り込み、大使館員を拘

束する任務に当たった。

日本軍進駐後、日高洋行は軍部の物資運送を一手に引き受ける。また在タイの商社などから若手社員のリストを提出させ、必要に応じて軍の通訳などに徴用する任務も行った。会社によっては大事な社員を軍に提供することに反発するところも少なくなかったが、在郷軍人部会長を務める秋雄は、率先して軍部に協力した。自らも憲兵の通訳や機材の発送などを請け負う。タイ事情に精通した秋雄は軍に重用され、軍の後ろ盾を得て、日高洋行の業績を伸ばしていった。また戦線の拡大に伴い、兵站基地としての重要性が増していたバンコクで、軍靴、ベルト、双眼鏡ケースなどの皮革製品や飯盒などを作っては軍に納入した。

藤原機関への協力

昭和16年(1941年)9月、日米交渉が行き詰まり、対米英戦争が避けがたい状況になっていた頃、大本営参謀藤原岩市陸軍少佐は、マレー半島のイギリス軍の中核を占めるインド兵を投降させ、それをインド独立運動の軍団として組織化する特殊工作を命ぜられた。友(Friend)、自由(Freedom)、藤原(Fujiwara)の頭文字から「F機関」と呼ばれた藤原機関である。F機関のメンバーは開戦直前のタイに、外務省の囑託や商社員に身分を隠して潜入するが、中宮五郎中尉は日高洋行の社員となった。中宮中尉は、タノントックの日高の倉庫の2階に起居し、昼間

は日高洋行の社員として働き、夜はF機関としての活動を行っていた。後に、中宮中尉は英軍に連れ去られたラーマン王子(後のマラヤ連邦の初代首相)を救出し歴史に名を刻んだ。

泰緬鉄道

泰緬鉄道は、ビルマ・インド戦線に対する海上輸送が困難になりつつあった日本軍の、新しい輸送路として計画されたもので、インパール作戦(1944年開始)の軍需輸送鉄道として、昭和17年(1942年)に建設が開始された。タイ・ビルマ双方から、ほぼ同時に敷設が開始され、タイ側はノンブロードウクから西向きに263Km、ビルマ側はタンビュザヤから東向きに152Kmの全長415Kmであった。秋雄が率いる日高洋行は建設用資材の運送を引き受けた。入荷する資材と、現場へ出荷する資材が、ひきも切らずに倉庫を出入りする。兵員を満載したトラックが毎日何台もバンコクとカーンチャナブリーを往復する。正に火事場のような喧騒であったが、秋雄は、滅私奉公・報国の一念で、工事の貫徹に向け、不眠不休の日々を送った。

辻正信のバンコク脱出

帝国陸軍で「作戦の神様」の異名を取り、戦後はベストセラー「潜行三千里」を著わして参議院議員となったがラオスで謎の失踪を遂げる、という波乱万丈の人生を送った

辻正信のバンコク脱出行にも、日高秋雄は関わっている。昭和20年(1945年)5月にタイ国駐屯軍参謀となり、8月にバンコクで終戦を迎えた辻は、イギリス軍の戦犯追及の手を逃れバンコク脱出を決意する。秋雄は、バンコクの日本人納骨堂に潜伏するよう手はずを整えた。若い将校や見習い士官の中から7名の僧侶出身者を選別、タイランドホテルの奥の一室で、8人は日高家の婦人達を用意した僧衣に着替え、バンコクを脱出した。

敗残兵の供養

敗戦が色濃くなった昭和19年(1944年)3月、日本軍は戦局の挽回を期して乾坤一擲のインパール作戦を決行した。日本軍は将兵8万6000人を投入し決戦を挑んだが、杜撰な作戦計画と補給不足のため、装備を固めた連合軍の精兵15万には歯が立たず、作戦は僅か四ヶ月で失敗、生き残った将兵は、チェンマイ、メーホーンソーンなどタイ北西部を目指して敗走する。この時「死の鉄道」と言われたあの泰緬鉄道が、兵士の退路となり幾多の将兵の命を救ったが、泥沼と化した熱帯雨林を徒歩で退却しなければならぬ者も多かった。熱帯病と栄養失調で命を落とす者は数知れず、ビルマ東部山地からタイ北西部に至る街道には、軍服姿の日本兵が死屍累々と連なり、「白骨街道」と呼ばれるほどであった。投入兵力8万6000人のおよそ半数の4万人以上が病死、その多

くは飢餓であった。戦死者は3万人で、帰還できた将兵はわずか1万2000人。バンコクでも力尽きて行き倒れになった敗残兵が見受けられるようになり、秋雄は、知らせを受けるとすぐに駆けつけたが、既に息絶えて名前すら判らないことも珍しくなかった。秋雄は、犠牲者を丁重に供養し、日本人納骨堂に祀った。

資産接収と抑留生活

昭和20年(1945年)8月15日、在留邦人は、在タイ大日本帝国大使館官邸に召集され、終戦の勅語を聞くことになる。8月末には在留邦人の軟禁(外出禁止による自宅監禁)が開始され、9月にはバーンブアトーン・キャンプに抑留されることになった。日本人や日系法人の資産は全て凍結され、タイ政府の資産管理局に委ねられることになった。事実上、全資産の没収である。開戦前の昭和17年(1942年)時点では、在タイの日本商社は40社にもものぼっていたが、敗戦によりこれらの各社は、すべて閉鎖させられ、財産を没収されたのである。日高洋行も例外ではなかった。昭和3年8月以来丸17年、秋雄が汗と涙にまみれ、必死の努力で築き上げて来たすべてのもの、日(ひ)の一(いち)マークをつけた船、トラック、艇、倉庫、それら全てが日本の無条件降伏と共に、烏有に帰したのである。

バーンブアトーン・キャンプ

バーンブアトーン・キャンプはバンコクの都心から北北西へ40キロ、チャオプラヤー川のパークレット橋を西へ渡ったクローンのほとりにあった。第1から第3のキャンプと特別抑留所に分かれていたが、このキャンプで秋雄は、簡単な病気であればキャンプ内で治療ができるよう、診療所と病棟を第2キャンプに開設した。また、教師が引揚げ帰国したため6月で閉校された小学校に代わる教育施設の設立に奔走する。臨時教師が出来る人物を探し出し、寺子屋のような学習所を作って、暇を持て余して遊んでいた子供たちの教育を再開させた。軍部に関係のあった人物は、英軍から呼び出しを受けノンタブリー県のバーンクワーン刑務所に連行された。昭和21年7月8日、秋雄を含む149名が、戦犯容疑者として呼び出された。秋雄は2ヶ月にわたる抑留と取り調べを受け、昭和21年(1946年)8月の引揚船で、日本へ帰国することになる。無一文での送還であった。

日高洋行の再興

秋雄は昭和27年(1952年)バンコクに戻ることを決意。昭和28年(1953年)には日高洋行を再興した。かつて日高洋行のものだったタノントックの倉庫も、敗戦で没収されたため、そこを借り受けての事業再興であった。戦前から、日系商社の取引の中心は、日本の雑貨の輸入であったが、同じラインで競合しても商機はないと判断した秋雄

は、いち早くタイ製品の対日輸出に着目する。その一つが、ブリキ缶であった。当時の日高洋行の日本人従業員は、秋雄の甥にあたる日高富士夫(日本人会名誉会員)のほか、従兄弟の邦夫など4名、半年後には8名となった。中華街ヤワラートに近いサムイェークの事務所に入出入りするのには殆どが潮州系中国人であったが、タノントックの倉庫には、日本人従業員とその家族ら十数名が暮らしていた。秋雄はJETRO(日本貿易振興機構)の通信員も兼ねていた縁がありJETROが最初にバンコク事務所を構えたのは、日高洋行のタノントック倉庫の中であった。ブリキ屑の電気分解で活力を得た日高洋行にとって、追い風となったのは、バンコクに進出してくる日系企業であった。昭和40年(1965年)前後から、大手家電メーカーが次々に進出する。自動車メーカーも後を追うように1社2社と増えていった。これに伴い、日高の主要取引先は、それまでの華人系から日系企業へと移行すると共に、増え続けていく。そこまでの足固めを見届けた秋雄は、三男の龍雄が30歳になったのを機に昭和45年(1970年)65歳で第一線を退き、会長に就任、以後会社の舵取りは社長の龍雄に一任し、自らは日本人会や懇話会など日本人コミュニティーへの奉仕に専念した。

日本人納骨堂の再興

戦後の日本人納骨堂は17年間無住の状

態が続いたが、在タイ日本人社会が復興をとりげ日本人会が再組織されると、ふたたび日本人僧を招こうという気運が高まってきた。昭和35年(1960年)小谷亀太郎氏を代表世話人とし、上松次雄氏、医師の瀧川虎若氏、及び秋雄が世話人となって納骨堂奉賛会を結成した。初代藤井真水師の協力もあり、昭和37年(1962年)7月に戦後初代の堂守長原敬峰師が高野山より派遣されて以来、約3年ごとに高野山より堂守が派遣され現在に至っている。納骨堂奉賛会は発展的に解消し仏教奉賛会となり昭和46年(1971年)からは懇和会と名前を改め、現在は龍雄が会長を務めている。

日本人会と日本人学校

戦後の日本人会の再結成にも秋雄らタイ残留組が中心的役割を果たしている。キウヤの小野彰平氏、医師の瀧川虎若氏、大使館領事の高瀬直智氏とともに下準備に奔走する。昭和28年(1953年)4月10日、サトーンの旧大使館で63名の在留邦人が参加して日本人会発足式が行われた。秋雄は昭和6年(1931年)から日本人会役員を36年間にわたって務めた。また昭和14年から15年にかけては、第18代日本人会会長に就任している。これらの功績から、昭和51年(1976年)には日本人会より金メダルが授与された。

戦後、日本人学校が再開されるまでには様々な苦労があった。秋雄は、藤島健一氏

や小野彰平氏、新野芳四郎氏、大峡一男氏らとともに再建運動を展開、その再開に尽力した。学校運営費の問題や、タイの文部省の規定に関する法律問題は容易ではなかったが、昭和31年(1956年)「在タイ日本国大使館付属日本語講習会」として再開させるに至った。

アユタヤ日本人町

戦時中、日本海軍により寄進された長政神社は、敗戦後の放置で荒廃していたが、日本人観光客がタイやアユタヤに来るようになった昭和34年(1959年)ごろから、参拝者のための道路を整備しようという機運が高まってきた。秋雄は、アユタヤ日本人町跡の発掘に熱心に協力援助した。特に道路は、秋雄の指揮で造成され、雨季の増水に備えて一段高く盛り上げた路盤には、大量の鉄屑を入れて流されないよう補強されているが、秋雄ならではの発想であろう。整備が終わったアユタヤ日本人町跡には石碑が建てられ、裏側には由来の碑文が刻まれているが、秋雄は小谷氏と合作で草稿を起案する。その20年後の昭和58年(1983年)に至りテレビ番組「山田長政」が放映されたのを契機に、アユタヤ日本人町が再認識され、大規模な再開発が行われる。昭和62年(1987年)の日タイ修好100周年記念もあって、アユタヤ歴史資料館が建設されるなど累計で総額6億円が投入され、今日も日タイ文化交流の基点として活用されている。

ケンコイ慰霊碑

明治の中頃、バンコクで大規模な運河の開発工事に着手したタイ政府は、不足する農業従事者を補うため日本の農民を受け入れることにした。岩本千綱と石橋禹三郎らが「日暹(にっせん)殖民会社」を設立し、山口県出身の第一次移民32名が来泰した。しかし、農作物が収穫され収入を得るまでの移民たちは、日々の食費にも事欠くありさまで、約半数は東北線の鉄道建設現場ケンコイで、工夫として雇われることになった。過酷な労働と不十分な栄養により、その多くがマラリアやコレラなどで亡くなっていった。程なく、第二次移民20名も来泰したが、既に「日暹殖民会社」は解散しており、同様の運命をたどった。

秋雄は、日本人納骨堂の過去帳に「コーラートに於いて、鉄道建設に従事していた邦人18人」と記されていたことから、昭和36年(1961年)頃からこれら18名の合祀者の調査を開始する。昭和40年(1965年)には、兵庫、岡山、広島、山口各県の地方新聞を尋ねては事情を説明し、70年前の移民の名前探しを依頼した。各新聞社は、こぞって悲しい移民の歴史を報道し情報提供を呼びかけたが、なかなか有力な情報は寄せられず、諦めかけていたところ、漸く山口県の移民の子孫から「自分の曾祖父がバンコクに渡りそこで亡くなった。名前を鍛本作造という」という趣旨の手紙が届けられた。かくして、日本人納骨堂過去帳の第1ページに

は「山口県人鍛本作造以下18名ケンコイ地区にて工夫として労務中、風土病にて倒れる。」と記されることになった。秋雄はこれら先人の霊を慰める為、サラブリー県ケンコイ市のケンコイ寺に釈迦堂を建て、碑文を草稿して彫らせ、日本人移民の慰霊碑とした。釈迦堂にはJETROの展示会で出品されたセメント製の仏像が安置された。以来毎年、日本人会はケンコイ寺で法要を行っていたが100年目を節目として打ち切り、それ以降は懇和会がこの任を引継ぎ、2年に一度の法要を行ってきた。その後、ケンコイ寺の僧坊増築工事にあたり仏像の撤去を余儀なくされたことから、この仏像は日高洋行のボーウィン工場に移されており、毎年4月には、日本人僧を招いて法要が行われている。

日本人会会館建設

秋雄は日本人会理事として、早くから日本人会会館建設を目指して尽力している。昭和45年(1970年)、会館建設に向けた寄付金の募集を理事会に提案したが賛同を得られず、昭和46年(1971年)には総会に会館建設案を提出するも見送りとなる。しかし、この総会で「クラブ設営基金」が創設されたことから、昭和47年(1972年)には会員1名につき一律5バーツの寄付を徴収する旨を提案する。アンケートや協議の結果、有志のみで賛助会員一口50バーツ、会員一口10バーツの寄付金集めが実施された。

しかし、泰国日本人会が自前の会館(現在のサートンターニー・ビル1F)を取得することができたのは、秋雄が没した後の、昭和62年(1987年)のことであった。

カーンチャナブリー慰霊塔

映画「戦場にかける橋」で一躍有名になったクワイ河鉄橋の約100メートル下流に慰霊塔がある。昭和19年(1944年)2月、鉄道建設隊長であった高崎少将は、建設工事に従事し、マラリアや赤痢、コレラなどの熱帯感染症や栄養失調で命を落とした連合軍俘虜、労務者、軍属のために慰霊塔を建立した。慰霊塔の土地はカーンチャナブリーの地主から日本軍が賃借していたものであったが、戦後永らく放置され、所在すら不明になっていた。

秋雄は、小谷亀太郎氏らと共に現地を踏査し、密林に埋もれた慰霊塔を発見する。外務省から在外墓地修復費の予算を得て、戦時中の銃撃戦で破壊されていた箇所を修復し周辺を整備した。戦後になってからの土地の賃借料は、滞納したままになっていたが、秋雄は地主と交渉し1ライ以上の土地を、僅か5000バーツで買い取ることに成功、日本人会の所有として登記され、現在に至っている。

柔道の普及

この他、徳商時代に柔道の全国制覇を果たした秋雄にとっては、タイでの柔道の普及

がもうひとつのライフワークであった。スワ
ンクラブ高校で柔道を教えたほか、昭和
12年(1937年)には、日本人会のビリヤード大会の優勝賞金50パーツを元手に、タノ
ントック倉庫の2階に45畳敷の錬武館を作り、その後永年に亘りタイ人柔道家の育成
に心血を注いだ。戦後、再び来タイした後
は、サパン・カオ・ポリハンで柔道を教えた。
またタイ警察、海上警察、陸軍などでも柔道
を教えたため、警察や軍の幹部との交友も
広まり、軍、警察内部で「ヒダカ」の名が広く
知られるようになって行った。秋雄の柔道指
南は、最後まで無報酬であり、永年タイの柔
道の発展に寄与し、柔道を通じた日タイ親
善に尽くした功により、講道館六段が授与
された。またタイ柔道連盟の名誉会長にも
なっている。

眠する。家族に囲まれ、安らかな大往生で
あった。

勲五等瑞宝章

昭和50年(1975年)11月、日高秋雄は日
本大使館を通じて、勲五等瑞宝章を拝受し
た。

昭和53年(1978年)創立50周年を迎え
た日高洋行は翌年6月、サムットプラカーン
県のサムロン地区に土地を購入、工場およ
び事務所を建設する。日高洋行にとっては、
敗戦によりタノントックの倉庫もろとも全財
産を没収されて以来、初めて自前の土地と
工場を所有することになった。74歳を迎え
ていた秋雄は、このサムロン工場を見て安
心してしまったのであろうか、その年内に永

戦中、戦後一タイでの忘れ得ぬ思い出

藤嶋 健

一終戦までの日々一

私たちの家族が盤谷に着いたのは、昭和17年3月初めでした。

私は戦前、小学校入学の時に、国民学校、戦後の中学入学時には新制中学となった。2回の学制改革を経験した世代です。その中で小学1年生の時に3回の転校を経験して、心理的に不安の連続で、盤谷に着いた時は、やっと落ち着けると思ったのが、忘れられぬ事でした。

昭和16年、米国オレゴン州ポートランドの幼稚園に在籍中の6月に、帰国が決定したため、「咲いた咲いた、さくらが咲いた」だけを教えられて帰国。目黒の碑文谷小で数か月、同年秋には父の生まれ故郷、長崎県平戸に転校。次いで、翌年3月初めに盤谷日本人学校で一年生の修了書を受け取りました。

戦後二十年が経過した頃、瀬戸正夫さん達と苦労して同窓会名簿を作成し、先生方とお逢いする会を何回か開きました。金井校長先生を始め、優秀な先生方が揃っていたことを、今でも感謝しています。

戦争中で空襲などの危険な目には遇ったものの、戦後帰国した時に、日本での学習には遅れることなく、むしろ進んでいたと思います。

以下 印象深い事柄を順不同、思い出すままに記します。

一戦時中の思い出一

(1)中村司令官

当時の中村司令官(中将)が、時々来校されました。馬に乗って、温和で威厳がある方でした。人格者だと大人の人達の間での評判でした。

戦後も他の国々で統治に問題を起こした一部の人は違った感じでした。

戦後十年位して、一度ご挨拶に伺った時も、父との関係(注1)もあってか、優しく接して頂きました。

(2)加藤隼戦闘隊

加藤隼戦闘隊が、ドンムアン飛行場から戦果をあげる度に「加藤隼戦闘隊歌」を歌い、加藤隊長が亡くなられた時も涙を流しながら、追悼した記憶があります。

(3)陸軍部隊

インパール作戦で負傷した兵隊さんの慰問に、ワッター陸軍病院にお見舞いに行ったこともありました。最後にはバンコク市内での市街戦をすとの噂話もあり、我々もルンピニー公園に駐留していた陸軍部隊に“一日入営”として、木で作った銃剣術の訓練と手榴弾のこれも模型でしたが、投

げる練習をしました。当時五年生の私は、野球に熱中していましたが、遠投しないと自爆する結果になると脅され、真剣にやった事が忘れられません。一方、銃は重いので土嚢を積み、固定して撃つ練習もありましたが、実弾ではありませんでした。

(4) 野球と水泳

学校生活は初めは空襲もそれほどではなく、野球も在留日本人の試合を見たことがあります。当時外交官の鶴見?さんが内野で華麗な守備をしていたことが印象に残っています。

水泳は体育の町田先生がご出身の鹿児島島の学校との記録を競うために猛特訓をされて、記録の競争で抜きつ抜かれつでした。

初心者はプールに放り込まれるという恐怖の儀式を、誰もが例外なく受けるやり方でしたが、親たちからの苦情もなく、そのお蔭で、当時の在校生は全員溺れぬだけの自信は身につけていたと思います。

(5) 剣道の大会

日本人会が主催したものだと思いますが、剣道の大会で、父の中学(平戸の猶興館)の後輩の白石5段が自分より大柄な4段に惜敗した試合を何故か記憶しています。白石さんは後で書く収容所の歌を作詞された方で、確か三菱商事の駐在員だったと思います。小柄な私も白石さんに憧れて、剣道の校内大会で5人抜きをして6人目で引き分けた経験が思い出です。

(6) 空襲の被害

当時は先ず焼夷弾が落ち、燃える場所を目標に爆弾が落とされると聞いていました。

如何に素早く消火するかで、生き残れるか否かが、かかっていると子供達にも厳しく徹底して教えられていました。シーロムのワットケーキ近くにあった最初の家は、2階建ての洋館でした。防空壕は、隣家とも相談の結果、我が家が全額負担して、隣家の庭に、両家共同の防空壕を建設することになりました。資材は父が社長をしていた新聞社の印刷用の太巻き用紙が木枠で巻かれていたものを柱代わりに何本も埋めていたのを覚えています。“紙管巻き”と言うものだと思います。火災にも振動にも強いという話でした。

我が家には、後で調べたら、20発前後の不発弾が落ちていました。また家の中にも不思議なことに、数発の不発弾があり、翌朝、弾に付着したブルーの布を外してマッチをすると、火がついて飛び散り、類焼をおこす仕組みに驚いたものです。

また別の焼夷弾は、二階の屋根を突き破り、ベッドの上の枕を突き抜けて不発。避難していなければ、即死していたことでしょう。

もう一つの不発弾は二階の床も突き抜けて一階の応接間にある黒塗りの半身木像の置物の横に落ちていました。この像は家にいた使用人達(女中、コック、運転手等)が日頃から、山田長政の像で魔除けのものとっていたもので、そのお蔭で助かったと

いう話になり、後々までの語り草でした。

(7)阿波丸事件

国際十字のマークをつけた船舶が、台湾沖で轟沈されたのは、昭和20年4月1日ですが、我々家族も乗船することになっておりました。荷物は全て積み込み済みでしたが、直前に軍の指示だと思いますが、乗船を拒否されたお蔭で、難を逃れました。しかし、後に我々の下級生の中に、乗船して亡くなった人がいたと判り、大きなショックを受けました。

(8)シーロムからバンカピーの家へ転居

近くには前述の陸軍病院と通信基地があり、通信隊に収容できない人達に対して、我が家の庭に、数十人が住めるバラックの長屋を建築し、部隊の解散まで食事などを提供しておりました。毎晩のように兵隊さんの話を聞き、モールス信号と飛来する飛行機の高度を当てる訓練をしました。ここでは、昼間、機銃掃射を受けたことがあります。

8月15日の天皇陛下の終戦のお言葉は、父が弟の様に可愛がっていた通信隊の若い小隊長以下隊員が、わが家のラジオで聞きました。その小隊長とは戦後二十年以上経過してから、私が商社でステンレスの販売に従事している時に担当した某プラントメーカー社長の実弟であることが判り、父が一時帰国した際に、再会したという不思議な巡り合わせを経験しました。

—終戦後～帰国—

(1)豪州兵のギャングの被害に遇う

戦後暫くは平穏でしたが、武装解除が済んで日本兵が居なくなってから事件が発生しました。近くにあった満州映画関係の人々が住むところに昼間、進駐軍による強盗が入ったという噂が入りました。当時は子供でも、中国の海南島、英米ではオーストラリアが流刑の島ということを知っていました。或る夜、トラックに乗った12名の豪州兵が我が家へ押し入り、帰国の準備で荷造り済みのトランクなど、鍵が掛っていたものでも、力任せに壊し、目ぼしいものを強奪していきました。後で知ったことですが、トラックには機関銃を据え、家に来た者たちは自動小銃を持っていました。

家の裏口はクリークのようになっていたので家の中を荒らし回る彼等の何人かは、其処に落ちて、泥靴のまま、また家の中を荒らすという状態でした。私はその物音で起きてトイレに行こうとしたら、トイレまで銃を突きつけられ、恐怖で暫く用が足せなかった記憶があります。

父たちは書生3名と飲酒の最中で、強盗のボスらしき人と話をしていました。トラックには手当たり次第に強奪した品物を積んで、更に最後には父の車、大型シボレーにも略奪した荷物を入れて車ごと持ち去りました。

武装解除した後の、民間人の家に来た彼等の言動は、到底許せないのは勿論のこ

と、その事がトラウマとなって、今なお豪州には行く気が起きません。

(2)バンバートン(バーンブアトーン)の収容所時代

タイ政府の配慮か、詳細は判りませんが、バンコク市内の日本人を保護する目的で、収容所が用意されたと聞きました。

当時メナム河と教えられていたチャオプラー河の支流に作られた収容所へと日本人の移動が始まりました。

外務省や一部の人は除かれました。第一キャンプから、更に上流に沿って、第二/第三キャンプまでが出来ました。この段取りなどは、日本人会中心で処理されたと聞いていますが、詳細は不明です。

当時の日本人会長は三井物産支店長の森廣三郎さんで、戦後東レの社長をされた方です。父が、「森さんに頼まれて云々」と、収容所でも言っていたのを聞いた事があります。収容所と言っても塙や柵はなく、後に作られたバンバートンの歌“みんな元気”の歌詞にあるように“竹の柱にニツパの屋根も…”の長屋状のものと、戸建のものがありませんでした。

私達は第二キャンプの一戸建でした。誰がどこに入るかというのは、予め計画的に決められたのか、私の回りではトラブルもなく、整然と入居しました。その後も、後々まで食料の配給や色々な連絡等、困難な時にも日本人の秩序だった行動は、他国の人々が

感心するところだという気がします。

収容所に到着当時は、家の回りは水浸しで、カヌー型の舟を利用するしかありませんでした。電気、水道は勿論なく、火は七輪でおこし、便所も共同のものしかなく、本当に不便なスタートでした。夜はランプの明かりが頼りでした。水は私が担当で、早朝カヌーで家からなるべく遠い水田の近くまで漕いで行きました。濁りの少ない場所を選んで、バケツに上澄み水を掬って持ち帰り、ミョウバンを入れて茶色の水を沈殿させて、更に上の部分をヤカンで煮沸する方法で食用の水を確保したものです。

家の回りの水が引くまでには、蛭に悩まされ、大きなムカデに、あちこちの家から悲鳴が聞こえました。実際、雑巾など水分のあるところや長靴に潜んでいて、怪我をした人もいました。事実、父がゴム長を履く前に、逆さに振って、その上に、手まで突っ込んで何もなかったので、安心して靴を履いた瞬間に、ムカデに足指を噛まれ、足がみるみる腫れ上がって一時意識不明になったことがあります。

その時は、足首を縛り、毒が全身に回らないようにして、医師の資格がある母が、傷口を切開し、吸い出して助かりましたが、其れまでの間、父の後輩で柔道四段の猛者が、押さえ込んでも、小柄な父が跳ね飛ばすくらいの暴れぶりでした。後で、正気になった時の父は、意識不明の時は、何故か浅草を歩いていたと言いました。これは一例です

が、毒蛇もいる環境で、衛生状態も良くない
処での生活は、簡単には説明できません。

水が引いて、川岸の船着場からそれぞれの
の住まいに、濡れずに往来出来るように
なってから生活は一変しました。

まず、タイ政府のお蔭だと思いますが、バ
ラックではありながら、第二キャンプの教室
での授業が帰国するまで続きました。同時
に皆でグラウンド造りに励んで、野球の試合
が盛んに行われました。私達は56班でした
が、班別にトーナメントがあり、それぞれプ
ロ野球の球団名を名乗り、私達のチーム名
は「巨人軍」で、運良く優勝出来て大騒ぎと
なりました。

他のスポーツとしては、相撲大会があっ
て大勢集まって観戦しました。娯楽関係で
は浪曲の会もあり、演劇もあったと思いま
す。子供たちを集めて、同盟の記者だった吉
川亨さん(後に日本タイ文化協会理事長を
歴任された)が脚本を書いた”こぶとり爺さ
ん”で、私は鬼のボスとして主演したことが
あります。今も活躍している女優、浅丘ルリ
子(本名 浅井)さんのお姉さんが日本舞踊
を小さい時から習っていたそうで、ここでも
活躍していました。その彼女とはお父様が
仲人をされた結婚式で、私が雄蝶、彼女が
雌蝶で三三九度の杯に酒を注ぐ役をしたこ
とがあります。浅井さん一家とは、お父様が
父の大学の先輩で、タイに来られてからは
父のやっていた華僑対策の会社でお手伝
いをして貰った関係です。

娯楽面だけでなく、色々な方々がご自分
の専門分野での講座の講師を引き受けて
いたのを見聞きました。一例を挙げると、
父の大学(注2)の後輩で、のちに長く日本
人会長をされた丸紅の大峽一男さんが、こ
の収容所では早朝にフランス語の本を持っ
て勉強の帰りだと私達の家へ寄られた記憶
があります。また、ある夜は星座について
の話が聞けるというので、グラウンドにゴザを
敷いて、寝ころがって「南十字星は日本に
帰ったら、絶対に見られぬから」という解説
を聞いたものです。

解説者はどんな人だったのでしょうか？

戦争末期には東南アジア各地からバンコ
クに流れて来た人も多くいたようです。殆ど
財産もなく困窮していたようですが、不快な
話としては、よく「馬賊が来る」とか「強盗団」
の噂を流す人達や、「貴金属の検査に役人
が来るから没収される」とか、まことしやか
に言う人達もいました。

人々の不安を煽る話等を我々子どもの前
で平気でいう人に、子供心に疑問も起こり、
デマとか煽動とかアジビラという言葉を知
ったのもこのキャンプででした。

その一方で、自警団も出来たと記憶してい
ますが、あんな塀も柵もない無防備の収容
所で、大きな事故がなかったのは、頼りにな
る人達がいたからだだと改めて感謝してい
ます。

不思議なことは、あの茶色の川に死んだ動物が何頭となく流れるところで、我々は毎日泳ぎ、潜っては泥の中から貝を取っていて、病気にもならず、また”それを”黙って見ていた親たちの度胸はどこから来るのか？今思うと判らなくなります。

最後にバンバートンの歌”みんな元気で”を記憶が少し怪しいですが、書いてみます。

1. 蓮華花咲く仏の国の
メナムのほitori バンバートン
竹の柱に ニッパの屋根も
住めば都の日本村
みんな元気で みんな元気で
行こうじゃないか
2. 村を流れる小川の水も
なれりゃ楽しいアプナムだ
老いも若きも力をあわせ
待てば帰りの船もくる
みんな元気で みんな元気で
行こうじゃないか

—追記—

帰国の船に乗る為には、来た時とは反対に、奥の第三キャンプから第二、第一の順で撤退した訳ですが、私達第二キャンプの人達は、第三の人達が通る時刻に川沿いに出て見送り、別れを惜しんだものです。

父は、第一と第二キャンプの間の独房に入れられました。戦犯容疑でシンガポール

へ移送される前に、何方か存じませんが、現地の巡査に手をまわして下さり、私一人でその巡査のカヌーで独房まで会いに行き、30分位父と最後になるかも知れないひと時を過ごしました。父は、我々より遅れて、無罪で帰国出来ましたが、バンバートンはその意味でも、忘れ得ぬ場所でした。

以上

(在東京戦時中の盤谷日本人学校生徒)

藤嶋 健

.....

(注1)

父健一が外務省のタイ大使館情報部に赴任して華僑工作のために、言論機関を把握する目的で漢字新聞社”中原報”の運営を任された経緯は、本人の自伝”激動する戦争の裏ばなし(我が回想録)”と”タイ国に於ける華僑”などに書かれています。それによりますと、毎朝、大使館情報部と軍司令部参謀室に顔をだしてから新聞社に出勤していたようです。また軍司令部が使う建物を借りるについて、華僑との交渉などもやっていたので、中村司令官の信任は厚かったようです。又、当時の官吏は服務規程により”中原報”が実質外務省と台湾総督府の運営する機構でありながら、タイの法律による株式会社であるため、父は外務省を退官せざるを得なかったそうです。本来なら外交特権で逮捕などされない筈の父が、戦後戦犯容疑でシンガポールに送られた一因だったのです。

(注2)

大学は上海にあった東亜同文書院。当時日本各地、台湾、及び朝鮮より選ばれた学生が学んだ。父が24期生、大峯さんは36期生であった。

百周年のお慶びの言葉

第2代（戦後初）日本人納骨堂堂守
長原 敬峰

タイ国日本人会創立百周年、お目出渡うございます。心よりお祝いを申し上げますと共に記念事業の一環であります百周年記念誌に、寄稿させて頂きます事を有難く存じます。

私がバンコクのワットリャップ寺の境内にあります日本人納骨堂の管理僧として高野山真言宗総本山金剛峯寺より派遣されましたのは、今から半世紀前の昭和36年から39年迄の3カ年でした。

時の大原智乗管長猊下から激励のお言葉を頂き昭和36年2月16日、神戸港から母親、友人達に見送られ、イギリス船籍の貨客船で香港経由2週間の船旅でした。2千屯たらずの船で、東支那海の大時化(しけ)を体験しました。3年毎の現在の管理僧は、航空機での渡航ですが、振り返ってみますと2週間の船旅が海外留学僧への心境作りにもなるのではないかとの気持ちも致します。

メナム河岸にあるバンコク港に、当時の日本人会事業部長でありました小谷亀太郎氏がお迎え下さった当時の事が昨日の様になつかしく思い出されます。私が戦後初

めてめての日本人納骨堂の管理僧として御地にお世話になった由来は、クルンテープ誌に「タイ半世紀の今昔」で寄稿させて頂きました様に、戦前納骨堂建立に盡力なされ、又初代管理僧であられた横浜僧徳院(故・藤井真水大僧正)の御推挙によるものであり、お世話下さいましたのが、現在ある「懇和会」の前身にもあたる日本人納骨堂奉讃会諸氏各位のお力によるものですが、日高秋雄氏(日高洋行)・滝川虎若氏(滝川医院)・上松次雄氏(河内屋食堂・花屋ホテル)・小谷亀太郎氏のお世話下さった方々のお名前がなつかしくうかんで来ます。当時大使館に奉職中だった故・石井米雄氏・日本人会勤務の林氏にも特別の御配慮を頂きました。3カ年の在タイ生活の中でも一番思い出に残っているのは、アユチャの碑の建立です。私が始めてアユチャを訪れた時には、メナム河の支流の船着場の横のうすぐらい場所に「アユチャ町の跡」と書かれた板搭婆(いたとば)がまつられタイの老婆が日本人参拜者に線香を渡して小使銭かせぎを致していました。

昭和37年頃に荒廃したアユチャの日本人街の跡を日本人会として何とかしなければいけないとの気運が起こり、当時事業部

長だった小谷亀太郎氏より、アユチャ日本町の旧蹟の記念碑を、高野山に注文する橋渡しを私に依頼されたことです。記念碑の除幕式は、昭和38年3月10日に行なわれ、当時の朝日新聞に「故国から名石運び」と大きく報道されました。一部を紹介しますと記念碑は、和歌山県高野山の石で造り、海路タイ迄運ばれて来た物で、碑面の「アユチャ日本人町の跡」の文字は、高野山の堀田真快大僧正猊下が書かれ、この縁にちなみ除幕式の法要も当時高野山からタイに留学中の長原敬峰氏によって行われたと、紹介されています。堀田真快大僧正は、昭和の名僧能筆家と知られ、揮毫当時は大本山宝寿院門主、後に高野山真言宗管長、金剛峯寺座主になられました。大僧正の実弟が戦後日本政界の指南番であり「平成」という元号の名づけ親として有名な安岡正篤氏です。当時は小高い丘にありました碑も、現在は日本人町の入口に移されています。アユチャにするかアユタヤにするかは、当地の日本人役員会でも議論があった様に耳に致しました。

日本に戻り神戸のお寺に住職、84歳を迎えています。上座部仏教の研鑽のおかげで僧侶として、持戒の必要を体得したことを感謝しています。

私が会長を務めています「高野山タイ国留学僧の会」では3年毎に青年層が御地で比丘(びく)生活を務めています。大使館、日本人会をはじめ、在タイの皆様方、特に大

橋会長、小野事業部長、日高懇和会長にお世話になって居り、有難く感謝致して居ります。日本に戻った私達は、夫々の分野でタイとの交流を深めたり、3カ年の比丘生活の体験を生かしての寺院生活に励んでいます。

今年は3年に1度実施している、訪タイの年に当たり、11月30日(土)に日本人納骨堂で法要を勤め度く予定しています。日本人会創立百周年の年でもあり記念法要を企画しています。

何卒よろしく御協力下さいませ。最後になりましたが、バンコク日本人会の益々の御隆盛と会員諸氏の御多幸を祈念申し上げ、お慶びの寄稿とさせていただきます。

合掌

日本人納骨堂のはじまり

第二十代日本人納骨堂堂守

神田 英岳

本稿は、バンコクを中心にあるワットラーチャブーラナ(以下、通称のワット・リアップと表記)の日本人納骨堂の建立とそれまつわる歴史について、そのあらましを書き記そうと思う。本稿を書き進めるために参照した主な資料は『泰国日本人納骨堂建立五十周年記念誌』(私家版、1987年)に掲載される諸論文である。本書は、今となつては一般において入手が非常に困難な書物となった。本稿を書き記すにあたって、現在においてもバンコクに唯一存在する日本人納骨堂建立当初の歴史について語り直しを行うことは、決して無駄な作業ではあるまい。

日本人納骨堂がバンコクに建てられたのは、戦前にあたる昭和10(1935)年のことであった。納骨堂の建設資金について瀬戸正夫は、「明治初期頃から同胞への思いやりを込めて、30~50サタンずつ苦勞しながらみんなでこつこつ溜めて完成した※1」と述べる。バンコクに長年住む在留邦人にとり、多くの人々の思いを込めて建てた念願の御堂であったことであろう。納骨堂は金閣寺をモチーフにして、藤島護三郎が設計した。納骨堂が建つ土地は、それ以前はバナナ畑であったという。御堂が完成した約一年後に、本尊として日泰寺(名古屋市)から

鎌倉時代に作られた(室町時代作の説もある)木造の釈迦如来座像が招来され安置される。翌年の昭和11(1936)年6月のことである。本尊の奉安式が執り行われた6月12日には、当時の日本人会会長であった鈴木宇治氏が先導となって、藤井真水師、日高秋雄氏、伊藤輝元氏をはじめとする多くのバンコク日本人会関係者が参列した。その行列の両側には在留邦人のみならず、大勢のタイ人も見守ったという。明治33(1900)年に釈尊の真骨がタイより日本へと送られ、その安置をする為に日泰寺建立の認可が下りたのは、明治36(1903)年のことであった。約30年以上の時を経て、今度は日泰寺よりタイへと日本の仏像が送られることになったということになる。※2

日本人納骨堂の初代堂守として着任したのは、真言宗の僧侶、藤井真水師であった。藤井師は納骨堂完成前である昭和7(1932)年よりバンコク近郊にあるワット・アノンガランに滞在しており、すでに沙弥戒を受けて上座部仏教の戒律研究に取り組んでいた。また同時にバンコクの在留邦人たちとも親交を深めていたという。日本人納骨堂の管理を依頼されることは極めて自然な流れであったといえよう。このように納骨堂の管理体制が順調に整っていく中、第2次世

界大戦の大きなうねりがバンコクを包みこみ、日本人納骨堂もその渦の中へと巻き込まれていく。

開戦前より納骨堂は真言僧だけではなく、日本山妙法寺(日蓮系)の僧侶も止住し、宗派を越えた僧侶が出入りするようになっていた。例えば、開戦の年となる昭和16(1941)年には日本山妙法寺の小此木上人が納骨堂に止住する。小此木上人は大戦中は、北タイ方面の従軍僧として部隊とともに行動し、長期にわたって納骨堂には駐在していない。※3

それとほぼ同時期に、高野山から高野山大学在外研究員として、上田天瑞師(後に高野山大学学長、高野山成福院住職)がバンコクに入る。上田師は開戦から間もなくして、ワット・リアップに入り戒律の研究を行った。後年になってその日々の模様を「小生は現在は寺中にあつても全く自由の生活をしておりますが朝の御勤には参列、泰僧と共に巴利(パーリ)語の御経を読んでみます。毎日巴利語学校の先生をしてゐる青年僧が来てくれてこれを助手に研究しております、小生には非常に有意義です」と述懐している※4。その後、藤井師と上田師は陸軍の要請を受け、ミャンマーへと移動する。藤井・上田両師がミャンマーに移ったことにより、納骨堂の管理は日本山妙法寺の僧侶が代理をすることになった。大戦中に納骨堂に止住していたのは、日本山妙法寺に所属する智野藤吉上人であった。智野師は「60に近

いが壯者をしのぐ元気で毎日太鼓をたたき、「南無妙法蓮華経」を高らかに唱えながら、投石や嘲笑に目もくれずバンコクの街を歩き廻ったという人物であった※5。大戦も終りに近づいた昭和20年(1945)年4月には、ワット・リアップの本堂が連合軍の空爆によって全壊する。しかし、納骨堂は甚大な被害を免れ本尊も無傷であった。

終戦後間もなくして陸軍大佐の辻正信が上座部仏教の僧侶の黄衣姿となり、納骨堂に潜伏活動をする。当時の納骨堂の状況は「水道もなく電燈もなかった。雨水を屋根に受け、樋(とい)で大桶に集めたものが唯一の飲料である。……朝は味噌汁と漬物だけ、昼と夜は乾野菜の煮しめか、塩魚の一片で、たまには街から買わせた生魚が乏しい食卓を飾った※6」という過酷な生活環境であった。終戦後間もなくしてからイギリス軍がバンコクに入り、在留邦人たちはバンブアートンに抑留されるようになる。その動きに合わせ、辻正信は納骨堂を脱出。その潜伏期間は約2ヶ月、昭和20(1945)年10月28日のことであった。翌29日には、智野、小此木上人達は集中営へと収容される。これ以後、納骨堂は特定の堂守が居ない時期が長年続くことになる。納骨堂が在留邦人の為にその活動を再開するのは、終戦から約15年以上もの時を必要とした。昭和36(1961)年に長原敬峰師が来タイする。長原師の招聘は、藤井真水師をはじめ、小谷亀太郎事業部長、日高秋雄氏、瀧川虎若氏、上松次雄氏

といった日本人会の人々の尽力によって実現した。長原師以降、日本人納骨堂には高野山から高い志しに燃える青年の真言僧たちが、タイ比丘の黄衣に身を包み、上座部僧、そして真言僧として研鑽する日々をおくる。

【参考文献】

藤井真水「日本人納骨堂建立への概要―日泰仏教親善交流を含めて」『泰国日本人納骨堂建立五十周年記念誌』（私家版、1988年）。

金井純雄「在盤谷日本人納骨堂について」同上。

平等通昭「盤谷日本寺のこと」同上。

小谷亀太郎「戦後の在留邦人と納骨堂―納骨堂建立五〇周年によせて」同上。

長原敬峰「タイ仏教との邂逅」同上。

※1 瀬戸正夫『バンコクの灯』東京堂書店、2002年、171頁。

※2 日泰寺の歴史的な変遷については、加藤龍明『微笑みの白塔―釈尊真骨奉安百周年』中日新聞社出版局、2000年が詳しい。

※3 辻正信『潜行三千里』1950年（2010年、毎日ワンス）、53頁を参照。

※4 戦中における上田天瑞の行状については、大澤広嗣「戦時期ビルマにおける宣撫活動と日本人仏教者―上田天瑞を中心に」『宗教学論集』27、2008年が詳しい。

※5 辻前掲『潜行三千里』36頁。

※6 同上、39頁。

戦前・戦中の世相 —日本人学校を軸に振り返る

タイ国日本人会理事
佐藤 実

バンコク週報に、「戦前・戦中のタイ日本人学校『盤谷日本人尋常小学校万華鏡』」と題する50回に亘る(1995年7月から96年6月)連載記事が掲載された。筆者は秋山輝晃氏。オムニバス風に秋山氏の文章を繋ぎ合わせ、学校を軸に当時の市井を炙り出してみたい。

まずは戦前にタイに渡航した人々の描写から。そして定着した日本人にとって直ぐに子女の教育が緊急の問題となる。

1995年7月14日～20日号「同連載2」より

大正時代や明治時代にタイにやってきた人たちの様子はかなり違う。「昔は呼び寄せの方法で来るのが常道で、私は伯父が当地で写真業をやっていたので之に願って大正三年に日本郵船の欧州航路で、シンガポール経由でシャムに来ました」。「私は海外で発展しようと、パスポートなしで門司を出港、香港、シンガポールと外国船を利用してシャムに来ました」。

明治三〇年の記録では既に、男性二二名、女性二六名、合計四八名の日本人がタイ国内に住んでいると記されている。女性の方が男性より多いのが注目される。

職業別内訳は、男性は職業店主や店員

を中心として、医師・画工・鼈甲師・写真師、それに醜業者戸主等となっている。これに対して女性は半数以上の一五名が醜業婦と分類され、さらに通常人の妻(元醜業婦)が五名、醜業者の妻が二名となっている。

日本が進出する際の「先兵」であったからこそ、彼女たちは娘子軍(じょうしぐん)であった。しかし、醜業婦と分類されたことわかるように、彼女たちはあくまで日陰の存在であった。

1995年7月21日～27日号「同連載3」より

明治三〇年の記録からは、娘子軍、いわゆるからゆきさんを「先駆」とした南方進出の形が見られたのであるが、大正時代になると、日露戦争に勝った勢いで南方で一旗揚げようという雰囲気が出てくる。

大正八年の記録によれば、当時バンコクには、男性一七一名、女性六三名、地方には男性に四五名、女性二八名、合計三〇七名の日本人が在留していた。在留者の主な内訳として、雑貨商、写真業、売薬業、理髪業、洗濯業、行商、商店店員その他事務員、それに酌婦などがあがっている。

現在と違って会社員、銀行員、官公吏の数は多くない。

こうしてやってきた人達のほとんどは、生きていく場を自らタイに求めた庶民であった。

こうした人達にとって、日本の国の保護などあてにはできなかった。その代わりに、日本の政策や国益とも縁の無い存在であった。そうでありながらも、心の中に、「自分は日本人だ」という意識が強かった。「自分は〇〇人だ」という意識はどこの人でも持っていて当然なのだが、「日本人だ」という意識が、「日本人はタイ人や華人とは違う」、もっと言えば「日本人はタイ人や華人よりも上なのだ」という意識と結びついていることが多かった。

ところでタイに住み着いた人たちは、否応なしに子供の教育をどうするかという問題に直面するようになる。

それを解決する一番の方法は、日本人のための学校を作ることであった。形態として、日本人会を経営母体とし、日本の国から正式に認可された学校が一番望ましいと考えられた。こうした学校設立の運動が実を結ぶのは一九二六年（大正十五年）である。

こうして一九二六年の九月三〇日には首尾よく在外指定小学校に認可されたのである。「大和魂」を持った「日本人」を育てるのだという盤谷日本人尋常小学校の基本方針は、既にこのとき出来上がっていたともいえる。

1995年10月6日～12日号「同連載14」より

それまでタイで地盤を築いてきた在留日本人達は、小規模ではあるがコツコツと自分の足で取引網を築いてきた。そこへ資本力と組織力を持つ大商社が進出してきたので、営々と地歩を築いてきた人達は苦境に立たされることになった。それまでタイに渡るといえば、知人の呼びよせなどによる者が多かった。タイにやってきて、成功すると個人商店などを営む庶民がほとんどであった。大企業から派遣されてやってきた駐在員というのはそれまでは非常に少なかった。

だから日本人学校にはタイ生まれの子供たちが多かった。そういう日本人社会の南方進出の形が変りつつあった。企業の駐在員が増え日本人社会の質が変りつつあった。

1995年10月13日～19日号「同連載15」より

一方でバンコクの日本人学校の場合は他のアジア地域の日本人学校とは根本的に違う環境に置かれていた。他の国と違ってタイは独立国であった。西に国境

を接するビルマと南に接するマライはすでにイギリスの植民地であった。東部で国境を接するラオス・カンボジアはベトナムと共にフランス領インドシナ連邦となっていた。周りの国々が全て植民地化された情勢の中で、タイは懸命に独立を保持しようとしていた。盤谷日本人尋常小学校はそういう情勢の中でタイの私立学校として認可されていた。

タイの私立学校であったから、各教科の授業時数についてはタイ国文部省から認可を受ける必要があった。日本語教科書の使用についても、タイ国文部省より条件がつけられていた。尋常小学校修身書は朗読のためだけに使用すること、小学書き方と小学国語読本は日本語の時間だけに使用すること、という注文であった。

1995年10月20日～26日号「同連載16」より

タイ国文部省から「許可」された授業時数によって時間割を作れば日本の小学校と同じ様な授業はできないわけだが、この点に関しては、中国人子弟のための学校に対するのとは違って、監査が厳しくなかった。タイ国文部省の視学官は、学校にやってきてただ雑談をして帰ることが多くて、時間割の内容を厳密に調査されることはなかったという。

盤谷日本人尋常小学校の運営や授業内容は、ある意味では日本とタイとの民族意識の接点とすることができる。しかしこの接点には、背後にある日本の軍事力が大きく影を落としていた。時間割を詳しく調べたり、タイ語講師をあくまでタイ側で指定したり、万が一にも盤谷日本人尋常小学校を閉鎖することになれば、どういう問題がおこっただろうか。学校に来て雑談だけして帰る視学官には、その結果は充分すぎるほど予測できたに違いない。

盤谷日本人尋常小学校は結局のところ、在外指定学校令により日本の国内の小学校と同様に運営され、タイ政府からあれこれ規制されることは実質上無かったのである。

子供達の作文から当時の様子を覗いてみよう。

1995年12月1日～7日号「同連載22」より

「えんそく」 二年男子 K. E

あさおきてももうおかあさまはおきていておべんとうも出ていました。外はまだうすぐらくてでんきをつけました。たまごはまだでんきれいぞうこにはいっていました。おかあさまが水とうに水とおりをいれました。ごはんをたべてしたくができたので「いってまいります。」いひました。

学校へつくともうおともだちが六、七人来ていました。しばらくたつとかねがなりました。校長先生からおはなしをうかがってから女の小さい方からバスにのりました。

—中略—

まもなくバスが止まりました。そこからあるいてバンパーへ行きました。かにやあるくおさかながたくさんいて、へびもいました。やすみばのやねは風が吹くとさらさら音をたてました。ぼくたちはそこでおべんたうをたべました。

素真さんが下のうみの水たまりへさざを落としてしまひましたのであそんでいたシャム人の子どもをよんでひろってもらひました。先生が「あつまれ」とおっしゃた時おねえさまが風のためにぼうしを落としました。シャムの子はいくらよんでもこないで国偉さんが取ってくれました。それからさん橋のおはりの所でしゃしんをとりました。

バスにのってパクナムへいきました。パクナムのお寺の池にはかめやすっぽんやおさかながいました。それからバス所へ一度もどってメナム川のうみにはいる所を見にいきました。

—後略—

「一年から六年まで」六年女子 Y.U

私が一年の時、お兄さんは六年でした。あそびの時間に私がげんくわんにすわっ

ていたら、りんさんが、私とあそびませうと、いったのでいっしょにあそびました。

そのころの、校長先生は、ひらよし校長先生です。子供が三人か四人います。いちばん大きいのは、せっちゃんといふ、女の子で、私と仲の好い友達です。私が二年になる時、お兄さんがちょうどそつぎょうなので、日本へかへりました。

かへる日、校長先生が、せいとをつれて、みおくりにいきました。私が、一年から二年までの、うけもち、校長先生でした。先生のをばさんが、わたしに、学校のやうふくを、つくってくださいました。

私が三年の時、校長先生が、かへりました。

四年の時ふるいせいとが、だんだんへっていきました。私は、そのころ、みんなに、なかまはずれにされました。

五年の時、りんさんたちが、そつぎょうしたので、いっしょに、あそぶことになりました。

六年の時、私とぢらうちゃん二人です。ぢらうちゃんがかへったので、私一人になりました。

私は一年、二年の、時が、一ばんたのしかったきがします。

盤谷日本人尋常小学校の卒業者を調べると、入学者や在校生の数に較べて卒業した者の数は少ない。作文にかかれてるように、「ふるいせいとが、だんだんへって」いったからだ。駐在員の子供たち

は何年かすると日本へ帰っていったし、父親の転勤で日本へ帰って行く生徒だけでなく、高学年になると中学受験に備えて日本に帰って行く生徒がけっこう多かったからだ。このあたりの事情は、今の日本人学校と変わるところがない。

しかし長閑な生活も忍び寄る軍靴により大きく変わって行く。

1996年1月5日～11日号「同連載26」より

一九四一年七月、日本軍は今のベトナム南部とカンボジア、当時のフランス領インドシナ南部に進駐した。

不安を感じだした東南アジア各地の日本人がバンコクに集まりつつあった。盤谷日本国民学校は、そういう子供たちで急速に生徒数が増えていたのである。とはいうものの、タイは独立国であり懸命に中立を保とうとしていた。タイの在留日本人の間にはまだ穏やかな空気が広がっていた。

1996年2月9日～15日号「同連載31」より

学校は日に日に軍事色が濃くなっていた。爆弾が近くに落ちてきたとき、どうしたら助かるか教えられた。爆風にやられないためには、とっさに物陰に飛び込むか、とにかく地面にうつぶせに伏せる、と

教えられた。素早く地面に伏せ、親指で両耳を押え、残りの指で目と鼻を押さえ口を開けて爆風から身を守る訓練が行われた。開戦前までは白い布を巻いたヘルメット帽をかぶって通学していたものが、日本軍の戦闘帽を被って登校するようになった。日本の軍人に会うとどこでも「ケイレイ」と大きな声を出して敬礼のポーズをとった。

1996年3月29日～4月4日号「同連載38」より

日本と比べるとバンコクは平和で物が豊かであった。戦争はどこでやっているのだろうと概ウライは思っていた。

しかし輸入品はあきらかに欠乏してきたので、バスなどは車両後ろに大きな釜をつけて木炭を焚きながら走っていた。学校ではガリ版印刷用のロウ原紙がなくなった。プリントが作れないので先生はひたすら黒板に書き付け、子供たちはそれを懸命に写すようになった。

日本から持ち込んでいた学用品も不足してきた。帳面や鉛筆などが手に入りにくくなった。鉛筆を削るとにきは芯を折らないように気をつけるようになった。短くて持ちにくくなった鉛筆には軸を長くするキャップを付けて使った。誰が一番短くなるまで使ったか競争したこともあった。一番短くなるまで使われた鉛筆はわずか一センチだった。いよいよ使え

なくなった鉛筆は、学校で新しいのと替えてくれた。

昭和十八年中ごろからは教科書も足りなくなった。心配した中原報社長 F 氏が教科書を作るための紙を寄付してくれた。印刷製本は盤谷日報が実費で引き受けてくれた。そうやって作られた教科書で子供たちの勉強は続けられた。

しかし食糧は豊富だったので、放課後には水泳の練習が続けられていた。

1996年4月19日～25日号「同連載41」より

厳しくなった軍事教練

学校では、授業の他に慰問や軍事教練などがよく行われていた。勝った勝ったと浮かれていたときは軍事教練といっても比較的楽だったという。ところが戦局がはっきり悪化しだした一九四三年末頃から、教練はだんだんと厳しくなってきた。そのうえ、頻繁に行われるようになってきた。

一九四四年（昭和十九）六月二十六日、盤谷日本国民学校児童は外池部隊に一日入営した。入営して体験した訓練は一段と厳しかった。命令に対する復唱は大きな声ではっきりと、てきぱきした口調で言わないと何回でもやりなおしであった。うまくできなければ、最後には「このアホの脳無しめ」と、ビンタをくらった。ビンタの後、痛いかと聞かれ、「はい」など

と答えようものならまたビンタであった。

1996年6月21日～27日号「同連載」より

外務省令第四号 外務省在外指定学校規則及び大東亜省在外指定学校規則は、これを廃止する。

昭和二十一年九月三十日

外務大臣 吉田 茂

盤谷日本人学校が廃校とされた、一片の通知であった。

母について

松浦 荔子

(クリッタコーン コムパッタナボン)

タイ国日本人会創立100周年記念において、私は川満様と共に母について書く機会を得ました。委員会の方々には、2004年に亡くなった母のことを今でも覚えて下さっていることに感謝いたします。

母・山本美都里は1928年に京都で生まれ、父である中国系タイ人と結婚後、1963年タイに移り住み、2004年の享年76歳まで人生の半分を超える40年以上をここバンコクで過ごしました。

母自身の生涯記「六度目の辰」によれば、バンコクに来て6ヶ月になるころタイ国日本人会で職員募集の掲示を見てから日本人会との関わりが始まった。日本人会が創立50年位のころです。

事務局に勤めた母の功績に日本人会機関誌がある。退職後も、日本人会から信頼され会報誌「クルンテープ」等の仕事を行い様々な特別号では母が手記を記載していた。現在でもこの会報誌「クルンテープ」は、生活情報や趣味や娯楽だけでなく日本人会と会員の情報の伝達手段となっている。

また、母は日本人会で、仕事を得ただけではなく日々の楽しみや趣味、社会貢献等に長く深く関わっていた。最優先に取り組んでいたのが「メナム句会」である。私の記憶では、母は毎月この会に参加しており、時折幼

い頃の私も一緒に出掛けました。メナム句会は非常に活気がありました。スクムビットの畳のある日本レストランの四角い部屋の一番奥に白髪の横田先生がおり母は出入り口に近い末席に座っていた。メナム句会の会員の多くは帰国され、また、お亡くなりになられたが母は活動を止めることなく俳句を作り続けた。現在でもメナム句会は日本人会に存在している。

叔父によれば、母は子供の頃からよく本を読んでいた。おそらく仕事をしてからも書くことが好きだったのはそのせいであろう。俳句の他にも活動は「バンコク短歌会」にも及んだ。

母がタイに来た当初は、タイに関する知識は少なく「タイを知る会」を多くの日本人の方々と発足させてタイに関する研究を行い会報誌の「クルンテープ」や折り込みで発表した。また、国立博物館ではボランティア・ガイドの活動を実施した。

懇和会にも母は楽しんで毎年参加していた。特に新年会や忘年会では歌や劇とくじ引きの景品を楽しみにしていました。

一時期、母は文化祭の劇に力を入れていて私も何年かこの劇に参加させられた。ただし、母は常に歌うことを避けていたが、いつぞや母が日本人会の沢山の会員の方々とお

揃いの薄いグレーのロングスカート姿で舞台上に立ち合唱をした。服がライトに反射してキラキラしていたのを私は鮮明に記憶している。

いつ頃だったか、母は、「国際結婚友の会（JIC）」に誘われ参加するようになった。タイ人、ヨーロッパ人、アメリカ人と国際結婚した在タイ日本人の会です。ホテルで行われた会合に2回程、私も一緒に参加した記憶がある。

会員の入れ替わりは激しかったが、母が高齢になってから特別な技能を所持した方により日本人会では「唄い」や「ヨガ教室」、「陶楽の会」など様々な活動が、始まった。

私が結婚して子供が出来てからは、母は孫と日本語で会話ができるようにと孫を「バイリンガルの子供のための日本語同好会」に参加させた。母が亡くなってからは私と子供で、2012年、子供が高校1年生になるまでの約10年間参加した。これは日タイの二重国籍児童にとって非常に有意義な活動です。

これらの活動は私の記憶によるもので、本当は私の知らない様々な日本人会の活動に参加していたかもしれません。

そんな母は、日本人会に関りながら、当時日本語の情報の少ない時代に東南アジア初の日本語新聞、週間バンコクを父と共に創刊し、私が13歳の時、父が他界し、バンコク週報と名前を改め事業を継続、政治活動に関わったことはなかったが、昭和62年の日タイ修好宣言調印百周年の際の外務大

臣表彰状を頂いた。13年続けた後に、その事業は売却した。

2000年、母の干支の十二支の6周期にお祝いをしてくれた方々に、お配りした自分の生涯記の中に下記のように書いている。

「読者の方もお気づきと思うけれど、私は冷徹な頭脳も綿密な計画も持たず、時々運命のままにそれこそ「川のながれのように」生きて自然と幸せの岸辺の方へ吹き寄せられてきた。これはやはり「見えざる大きなご加護」の力によるとしか思いようがない。

リタイヤー後の私の最大の関心事は生涯の夢だった「陶芸」。これまた幸いにも私のリタイヤーとほぼ同じくして日本人会文化部に「塔楽の会」が誕生し早速入れて頂いて土と格闘しているのだが、これが思いの他の難行苦行で意のままには行かない。だが競わず、頑張らず、「遊」の境地に徹すべしと自ら戒めているこの頃である。

この文章から、私は疑うことなく日本人会が母にとって大切なものであったと確信しました。

最後に、百年前に日本人会創立にご尽力頂いた諸先輩方、長きに日本人会をご支援して下さった会員の皆様に対し感謝申し上げますと共に、小さな砂粒が大きな石になるべく日本人会が多くの方々の助けになるように皆様のますますのご活躍を心よりお祈り申し上げます。

山本みどりさんの遺稿から

タイ国日本人会理事

稲富 哲夫

山本みどりさんはクルンテープ誌の創刊以来長い間その編集に係わってこられ、クルンテープ誌にも多くの記事を執筆されているが、自ら出版された「六度目の辰」の中から特に1963年の渡タイ直後の部分を抜粋して掲載する。

山本みどりさんは1963年にバンコク在住の華僑・許敦美氏と結婚してタイに渡り、渡タイ半年後に、「ソイオリエンタルに曲がるあたりのニューロード沿いに今は跡形もないがプリンセス・ホテルという小ホテルがあって、その裏手に1階がジェットロ、2階にタイ国日本人会と磐谷日本人商工会議所の共同オフィスがあるビルがあった。」(六度目の辰より)という日本人会の事務局員募集に応募され、磐谷日本人商工会議所の所報、しばらく後に日本人会会報誌クルンテープの創刊、編集に携わられた。

退職後は夫君と「美美影業公司」を創業、その後「週間バンコク(後のバンコク週報)」を創刊。2004年にバンコクにて永眠された。

— 以下「」内は、注を除きすべて「六度目の辰」からの抜粋である。—

「1963年、私はバンコク在住の華僑・許敦美と結婚してタイに渡った。その時、私を一

番驚かせたのは華人の会話の荒っぽさであった。勇敢にも私はタイ語はもちろん英語、中国語もろくに話せないまま、海外へ飛び出したのだから、蛮勇としかいいようがない。その上、さらにタイに関する知識、情報も皆無といってよい。きらびやかに着飾った象に乗った山田長政の絵本ぐらいしか知識がない。もちろんタイ行きが本決まりになった時は、私なりに本屋に行ったり、タイに関係ある知人を探したりとそれなりの努力はした。しかし当時の日本ではタイに関する情報を得るのは至難のわざだった。37年前(注：出版当時から)の日本ではタイという国はそれほど人の注目を引かない東南アジアの小国にすぎなかった。町中の乗り物が象の背中じゃないかという疑いも首をもたげたが、あまり気にもならなかった。私はなにしろ戦後のあのすさまじい無残の中を生きて来たという妙な自信があった。不安はあったが、若さゆえの好奇心の方が上回った。

この年の6月末、はじめてBBC航空に乗って日本を後にした。今でこそ海外旅行は朝飯前の日常茶飯事だが、当時は外貨の規制もあったし、水杯とまではいかないまでもかなりの重い覚悟が必要だった。まして何の予備知識もなくひとりのコネもない、夫となる人と知り合ったのも、僅か半年ほど前という

のであれあば、今思えば無茶苦茶な無謀とおもえる。しかし、その時わたしは30をいくつも越えていたし、それまでの日本でのものものしがらみを捨て去る事にむしろ一種の快い潔さを感じていた。

タイはその時雨季の真っ盛りで、着いた夜にも猛烈なスコールが襲って来た。当時のスコールは今のような弱弱しげなものではない。最初に荷を解いたH家の女中部屋（旦那は日本語の勉強のためと称して、日本人H家の使用人部屋を賃借りしていた。）は隣が厨房になっていてそこにガッシリしたチークの食卓兼調理台の大テーブルが置かれていた。沛然とスコールが襲って来ると厨房には鉄砲水のように流水がなだれこみ、見る見るうちにその大テーブルの脚は60センチほども水没した。60センチが限度でスコールはハタッと止み再び見る見る内に水は引き10分後には全く何事もなかったように辺りは元の静けさに戻った。スコールは日に2度とはなく、またない日はなかった。スコールが上がるとウンアーンが鳴き出した。

ウンアーンは手の平に乗るほど小さな蛙であるが、その野太くでっかい鳴き声は野牛の咆哮にも似る。私をはじめタイに着いた夜、スコールは夜に襲ってきた。わが亭主は無慈悲にも新婚の妻を一人家に置き去りにして夜の商売に出かけていった。その頃、亭主は日本映画の輸入・興行の仕事をしていたのである。私は来る前、タイには蛇やトッケーというトカゲの仲間がいることは

知っていたがウンアーンについては全く知識がなかった。着いたばかりのH家の木造南国風の女中部屋に身を縮めて、窓ガラスを叩き破らんばかりのすさまじいスコールが過ぎ去るのをじっと待っていた。

スコールは10分もするとぴたりと止んだ。と、真っ暗なガラス窓の外すれすれの所にウンアーンという野牛のような動物の第一声が挙がった。私は飛び上がってベットに潜り込みふとんを被って耳をふさいだが、その見た事もない小山のような動物の声はどんどん数を増して今にも窓を蹴破って部屋に乱入してくるのではないかと血も凍るような恐怖に身が堅くなった。37年もたった今もあの夜の恐怖は昨日のここのように思い出される。」

「1962年、昭和37年9月13日、中秋にして仏滅の日に私たちは結婚式を挙げ彼はそのまま3ヶ月ほど秋津のうちに滞在し38年の正月に一人でバンコクへ帰った。私は言を左右にしてこの年の7月まで家にぐずぐずしていた。なんのかの偉そうなことを言っても見知らぬ外国へゆくのが怖かったのだらう。7月に敦美がB B C航空のチケットを手配してくれたので、いよいよ決心してバンコクへ発つことにした。前日庭の花をつんで小さな花束をつくった。幸い飛行機の座席は窓際だったので、窓ガラスに花束を押しつけてくるくる回しながら見送りの人にサインを送った。さすがに心細かった。だが私はそんな事

で泣くような女ではない。

タイ国に最初の一步を踏み入れた時、竈の中に入っていきような暑さに仰天した。当時はドンムアン空港からバンコク市内に入る国道沿いは一望の田園と蓮沼ばかりで道端をパートウンやパーチョンカベンを穿いた裸足の人が歩いているのを見て「ああ・・・異郷に来たなあ」の感慨を深くした。連れて来られた所はニューロードに近いH家の邸宅で、いかにも南国風の木造のオープンなお家であった。H氏は敦美の上司であり、このお家の使用人部屋を彼が間借りしていたことは前にも書いた。私はタイへ着いてからの三日間何一つ食べ物が喉を通らなかった。私は美食家ではない。美食家どころか、前編に繰り返し出てくるようにカス団子(注：戦後の困窮期に下宿で毎度出てきたすいとん風のもの)を食べて飢えを凌いだ経験もある人だから、たとえどんな所へいっても食べ物が口にあわずに苦勞するなんて全く予想もしていなかった。それがどうしても食べられないのである。臭くてポソポソの御飯も喉を通らないし、今思えば今でもきれいなパクチーが何にでも入っていたせいもあったかもしれない。うまいまずいの領域を越えたこんな食物を食べて生きている人がこの世にいることが大きなショックだった。何も食べない私を心配した敦美が「スキヤキなら食べられるかな」とつぶやいた。「エッ すきやきがあるの。なぜ早くそれを言わな

い・・・」と喜び勇んで連れて行かれたタイスキの店で、タイスキの椀を前にはじめて涙がポロポロ、ポロポロと湧き出て止まらなかったことを覚えている。「なんで泣くの？」敦美が不思議そうな顔をしていた。異国の文化に身を置くことがこれほどのカルチャーショックとは初めて知った。」

山本みどり氏が来タイされたのは、今からちょうど50年前になる。\$1=360円という固定レート時代であり、庶民の海外旅行などほぼ皆無であった。現在のようにインターネットで自由に情報を得られる時代でもなく、まったく知識もなかったタイに来た当初のカルチャーショックは想像を超えるものがある。しかしながらその後日本人会事務局の仕事に携わられ、夫とともに事業を起こし、このタイの地で其の生涯を全うされた。クルンテープの創刊をはじめ、山本みどりさんが泰国日本人会に貢献された業績は多大である。

著書「六度目の辰」の冒頭には、「十七の 飢えた少女で ありし我 かかる平和な 晩年を得き」の一句に添えて、「この一書を豊穡の国『タイ国』と亡夫 許敦美の靈に捧げる」とある。

あらためて山本みどりさんのご冥福を心よりお祈りする。

昭和15年の頃(1940年)

大峡 一男さんの遺稿から

タイ国日本人会理事
佐藤 実

百年史ともなると苦労するのは前半50年のモザイクをどう完成させるかであります。又、歴史の節目の出来事に関してはそれなりに文献は残っていますが、歴史のイベントとは離れた市井にフォーカスを当てて描写するのは大変難しい作業です。

幸いな事に、28代会長(1961-1968)の大峡一男氏が残された多くの随筆の中に、「昭和15年頃」と題された追憶の文章があるので転載させていただきます。1940年は既に世界各地で戦争が局地的に開始され日独伊三国同盟が結成された年ですが、戦争前夜というか何か将来に不安を抱えつつほのぼのとした平和なバンコクの描写になっています。

(引用)

追憶(その二)

昭和15年頃

迎えの人々の歓迎を受け、1920年代製と思われるオースチンのぼろ車にのせられて、バンコクの町に入る。聞けばこの車はタクシーで町中に僅か数台しかないと言う。当時の市内交通機関は、サムロー、人力車(ロットチェック=支那車と言った)。電車、白バス位なもので、自家車をもっている人は、数えるほどしかなかったと思う。私達が

利用したのは、専らサムローであった。事務所へ通うのも、商売に行く人も、サムローであった。住んでいた所がサトーン路、事務所がシピヤー路であり、毎日通うのに二人乗って15サタンであった。夜映画を見に(※観念)に行くにも、女友達とルンピニー公園に遊ぶにも、すべてサムローであった。

たまたま、シーピヤー界隈の飲み屋で一杯はいい、気が大きくなって、そこいらにいるおんぼろタクシーに乗り、一晩中遊んで朝方までのりまわしても、たかだか5バーツ位だった。若い連中は相乗りしてよく町中を遊んで歩いていた。

当時はまだ大東亜戦争の気配もなかったもので、在住日本人が殆どが、商売人であった。銀行は横浜正金、商社は、三井、三菱、その他関西系の繊維商か、雑貨商が主で、在留日本人は台湾系を含めて約500名と言われていた。昭和15年に日本人会誌が発行されたが、それには詳しく書いてあったと記憶している。

日本人社会も小ぢんまりとしており、暫く住んだ人には、町で出会う日本人は殆どが顔見知りであり、三大節などに公使館に集まっても誰一人として知らぬ人は、おらなかつたようである。

こんな日本人社会であったから、飲んだり、食べたり、遊んだりする所も数少なかった。私の記憶にある所としては、ラチャオン路の角に、サンスターと言うサッポロビール屋があり、シーピャー路の角近くには、キリンビヤホールと称するしもた屋風の店があった。(現在花屋入口の右側)この二ヶ所はタイ娘が気持ちよくサービスしてくれ、また値段も安かったので、毎晩のように行ったものである。キリンビヤホールの筋向いに、花屋があり、上松さんが新婚早々で、すしを握っていた。この店に来る人達は、どちらかと言うと一杯やりながら、食欲の旺盛な人であった。シーピャ路からナレート路にまがる少し手前の右側に、東京食堂があった。日本からの娘さんが数名いて、歌を唱ったりしてサービスしてくれた。スリオン路には、宝亭、赤玉旅館などがあり、飲ませてくれたし、遊ばせてもくれた。シーロム路には、ラマホテルの筋向かいあたりに、盤谷食堂があった。三味線をひく女性などもおり、中年以上の方が利用していたようである。ニューロードをずっと南に下り、トクチャンの近くに、東洋亭と言うのがあった。

日本からの美女を数名かかえていた。この付近は、船の時代バンコクの表玄関であった。三井ワーフがすぐ近くにあり、日本からの船は殆どがここに横付になったのである。

当時の思い出で、はっきり印象に残って

いるのは、ルンピニー公園に、ラマ六世ワチラウット陛下の銅像が建ったこと。ラーヂャダムヌーン通りが立派に出来上がったこと。それから失地回復の反仏運動がはじまり、学生、庶民、サムロー運ちゃんなどが町中を、愛国の歌(ラックムアンタイ)、行進曲(スパンプリーの血)などを歌いながら、デモ行進をしたことなどである。

私も若かったし、この運動には興味をもち、拍手喝采して一緒に歌ったものである。

ラーヂャダムヌーン通りに、ホンデン(赤い部屋)と言う喫茶バーのようなのが出来、赤い制服をきたメツチェンがサービスしてくれた。当時制服を着たホステスのいる所はなかった。また缶詰のビール(昨今では珍しくないが)を飲ませてくれた。

この店だけだった。“ブルーリボン”と缶にプリントしてあるのが気に入り、あこがれの場所となり、月給袋の底をたたいて通いつめたものである。現在のロッター局の近くであった。

戦後名古屋市で100m道路が造られ、話題を呼んだが、バンコクでは戦前にあのような幅の広い美しい通りが出来ていたのである。

ついでながら、ヤワラート路付近である。ニューロードはバンラック市場付近から、チャラムクルン映画館ぐらいまでの間は昔も店屋が並んでおり、だいたい平屋か二階建ての長屋であり、バンコクのメインストリートで市電も走っていた。中央郵便局も

昭和15年に完成し、その筋向いに英国系百貨店ロビンソンがあった。シーロム路、スリオン路、サートン路は殆んど住宅地区であった。ルンピニー公園から、ラパソン、パトナムに向う右手は王室財産の建物で、外交団関係者の住宅になっていたようである。旧サニーシャトウは満州国大使館であった。

サートンの真中はクローンが流れており、両側が道路であり、11月頃はクローンがーばいになり、小舟をこいで隣近所の娘さん達と遊んだものである。シーロム路、ラマ四世路、ラーチャダムリ路、ピヤタイ路、ワイヤレス路、ペブリー路、すべて片側がクローンであり、並木が植っていた。今はその面影もない。ホテルも有名なのは、オリエンタルとトロカデロであった。映画館はオディオン館とチャラムブリー館で、あとはヤワラートに中国系映画館が二つ三つあっただけである。

中国料理屋はなんと言っても、海天楼が一番有名であったし、その屋上にはバンコク唯一のダンスホールがあり、広東姑娘とタイ娘が、おどりの相手をしてくれた。

まことに静かな平和な時代であった。

(元会長)

反日運動

西野順治郎さんの遺稿から

タイ国日本人会理事

佐藤 実

現在のような友好的な日・タイ関係において反日運動といっても場違いな感じは否めませんが、このタイにおいても反日運動が吹き荒れた時期があったことは忘れてはなりません。1973年のクーデターをきっかけに学生運動の延長で反日運動が始まりましたが、本稿では1971年から9年間に亘って日本人会会長を勤められた西野順治郎氏がクルンテープに寄稿されている文章から当時の様子を窺うこととしましょう。

1974年の年頭所感では次のような記述があります。

「タイでは、73年10月に学生運動に端を発した政変が起こり、旧政権は追放され民主政治への胎動が急速に進展しつつある。強力な軍事勢力をバックに東南アジアでは最も安定したかに見えていたタノム前政権が、われわれ外国人ばかりではなく多くのタイ人たちの予想も裏切ってアッ気なく一夜にして倒れたのは、タイ国民の民主政治への強い意欲と独裁と汚職に対する反発があったからであろう。われわれ在留邦人としてもタイ国において明るい清潔な民主政治が成長することを心から期待し、又、歓迎するところである。しかし乍ら、タイでは政変後の解放感と前掲石油問題などに拍

車をかけられているインフレ・ムードのため73年末より全国到る処で山猫ストが起こっているのは遺憾である。従来賃金ベースでは低過ぎたとはいえ法律に規定されている調停や予告の手段も無視されていることは、労資双方はもとより当局も反省すべきである。殊に日系企業の給与ベースは一般現地企業に比して高水準にあることも念頭におかれ慎重行動されるようお願いしたい。当地における一部の人たちが云う反日感情を気にしすぎて、何でも現地スタッフの要求には屈服するという卑屈な態度はとるべきでなく、理を通すべき処は頑張るべきであるとする。

対日批判の問題であるが、これは一昨年11月学生が貿易の不均衡・進出日系企業の態度等について非難したが、貿易尻については、産業投資を行って工業製品の輸出振興までいかない限り早急の解決ができないこと、又、進出企業に関してはタイの経済発展に貢献している点など充分認識されていなかった処に問題がある。これは、或る程度識者に認められ対日非難の声も一時下火となっていたが73年11月末バンコクで開催されたアジア太平洋学生会議では先進国からの経済援助の必要性を説き、乍らも反面において日本及び米国の態度は経済

侵略であると抗議している。そしてこれらの攻撃の矢面に立たされているのは、われわれ現地の在留邦人である。従ってわれわれの行動、現地の人たちと相互理解を深めることこそ、われわれに対する非難を和らげる最も重要なファクターとなることは言を俟たない処である。

われわれは常に他人の家に住まわせて貰っているという気持ちを忘れてはならない。日本人は封鎖的で仕事の話以外は外国の人と交わらないと良くいわれている。仕事に関係なく進んでタイの人たちと接し、親交を深めることが現地に住んでいるわれわれに与えられた重要な任務ではなからうか。日頃のゴルフでも時にはタイの人たちと一緒にするという気持ちを持って貰いたいものである。」

又、1976年の年頭所感でも更に下記のように言及されています。

「戦後、日本経済は驚異的な成長を遂げ、その貿易と海外投資は著しく伸びた。しかし、国際間の相互理解を欠いた結果、各地で種々の問題を引き起こした。特に東南アジアにおける反日運動はわれわれの記憶に新しいところである。最近では東南アジア諸国自身の内政にも種々問題があり、又日本側でも反省の声が聞かれ、その態度を改めんとする努力が払われているせい、これら諸国における反日運動も下火となって

来ている。

しかし、われわれはこれで安心してはならない。この問題はまだ解決された訳ではなく、日本側の反省の態度を見守っている段階と云ってよからう。進出企業で現地人を登用していないと云われると、或る人は自分の会社では現地人を何名部課長に登用したと云われている向もある。しかしながら現地人の部課長と日本人の平社員を比較して、どちらに多くの権限と信頼与えているかが問題である、京大東南アジア研究センターの矢野暢氏がその著『日本の南進と東南アジア』の中で従来の東南アジアにおける日本人の姿勢を評して『場末あるいは僻地とみる見方がいまだに根強い』そして『理』のないところと見て振る舞っていると述べている。この書を通して矢野氏は日本人は余りにも東南アジアを知らなさすぎる、そして現地にいる人たちは一握りの知日、親日派と称される人がいるだけで真の東南アジアの社会をしらないと云っているが、これは誇張の酷評ではないと思う。

タイにおいても厳しい反日運動や、外国人に対する企業規制、終業規制制が起こってから慌てふためいているが、これには当然起こるべき理由があったことであると見極めている人が少ない。そして排日も下火になって来たからこれらの運動も緩和されるのではないかと楽観視する向きもあるようだが、タイ人社会の根底に根強く存在す

るナショナリズムを考えると、そのような安易な考え方は許されないであろう。われわれはこの機会に過去を回顧ないし反省すると共に、彼らの社会を出来るだけ深く研究し、かれらとの関わりについて正当性をもちうるためにはどのような条件が満たされねばならないかということ、に対してもっと感受性を働かすべきである。」

西野氏のような滞在国への愛着ある鋭い洞察を持った先輩達のお陰でタイは反日の再発はありませんが、時々はこうした負の歴史を遡るのも良いでしょう。

(上記は西野氏の文章の引用ですが本稿のタイトルの中での編集の責任は小生にあります。)

小谷亀太郎さん遺稿「授戒」 故人を偲びながら

タイ国日本人会理事
石井 良一

「百年史」の編集委員会に参加する機会をいただき、敬虔な仏教徒でもあった大先輩、小谷亀太郎氏が遺した随筆を整理していく中で、会報誌「クルンテープ」に「授戒」という作品を見つけました。

そこには私が予てから知りたいと思っていた事がそのまま記されていました。

50年前は母親に連れられ、その後は送り迎えの「ついで」という、今から考えると少々不謹慎な気持ちで臨んでた法要ですが、ここ3年間は日本人会の理事という立場で、静粛な心持ちで参列させていただいております。

その際はただ手を合わせるだけでなく、耳から覚えた言葉を戒師の言葉につづいて唱えようと努めています。タイで生活をしていく中、皆さんもお寺でこれから何度も体験されるであろう授戒をここに、小谷氏を偲びつつ引用させていただきました。

(以下引用)

タイ国は仏教徒であり、黄衣をまとった多くの僧侶が寺院に住み毎朝托鉢に出てその日の食事の供養を受ける。「食事は午前中に」「婦人は直接僧にふれてはならない」など、タイ国に在住している人なら大抵のことはご存知である。

南方仏教について、色々紹介された書物があり、造詣の深い方も居られる。又タイの寺院で得度生活を体得された方も居られるし、ワットリヤブやワットパクナムには日本人留学僧がきびしい戒律を守りながら、日夜研修して居られる。

この様な人をさしおいて、タイ仏教を語るのをおこがましい次第であるが、仏事の実際について、知って居られたら参考になると思われるような事を、折にふれて“クルンテープ”紙上を借りて紹介してみたいと思う。

タイ国では王室の儀式をはじめ、公私の儀式や祭典、いづれの場合でも仏式による儀式が行われ、国民は深い信仰のもと、日常生活と切りはなせない関係にある。

皆さんが嘗て経験され、又これから経験されるかも知れない儀式に結婚式、誕生祝い、落成式、開店式、慰霊祭、通夜、葬式、などがある。芽出度い時は5人・7人・9人と奇数の僧を迎え、不幸な時とか慰霊祭などには4人・6人・10人と偶数の僧を迎えて儀式を始める。

この場合祭主は勿論参列者一同が、戒師から五戒と三宝を授かるのが、ならわしになっている。

比丘(プラー)は二二七戒、沙弥(ネーン)は十戒、メーチ(尼僧)は、八戒を守るとされ

ているが、俗人の場合はその儀式の日とか、ワンプラー(坊さんの日)には寺に参拝し、五戒(又は八戒)と三宝を授かるのが普通である。ふだん多忙な人でも、せめてこの日だけは齋戒して五戒(又は八戒)を守り、仏に帰依することを誓うのが、仏陀の教えでもっとも大切な儀式である。

五戒とは

1.不殺生戒

(命あるものを愛し殺生はいたしません)

2.不偷盜戒

(浪費を慎しみ与えられないものは取りません)

3.不邪淫戒

(性行為やみだらな行為はいたしません)

4.不妄語

(言葉をかざり、嘘、いつわりは申しません)

5.不飲酒戒

(飲酒はいたしません)

八戒の場合はこの外に

午後食事をしない。歌舞などの娯楽をしない。又装身具、香水などを用いない。高く大きい寝台を用いない。の三戒が加わる。

三宝とは

聖徳太子17カ条憲法に出て来る、「篤く三宝を敬ひ」とある仏・法・僧の事で、ほとけ、ほとけの教え、及びそれを実行する人、即ち僧のことである。授戒は式のはじめに行われ、祭主が参列者を代表して僧の前に出て、三拝の礼から始まる。前々日本人会納骨

堂々守、佐々木弘伝師が書き残して下さった手本をたよりに供養者の授戒次第・作法及びに得を述べる。これは春秋2回の納骨堂の慰霊祭に行われるものであるが、要領は他の行事の場合も同じである。

慰霊祭では、日高秋雄氏が時には筆者が祭主(日本人会会長)に代わって唱えるが、実際は祭主の他、参列者が揃って唱和する。言葉は全部バリ語である。

祭主は僧侶が揃うと、祭壇の燈明と線香に点火し、三拝の礼をする。そして、祭主が次の如く唱える。意味は「私達に五戒と三宝を授けて下さい。」

○マヤンバンテー、ウイスン ウイスン、ラッカナターヤ、ティサラネーナ、サハ、パンチャ、シーラーニヤーチャーマ

○トウティヤムピ、マヤンバンテー、ウイスン ウイスン、ラッカナターヤ、ティサラネーナ、サハ、パンチャ、シーラーニヤーチャーマ

○タティヤムピ、マヤンバンテー、ウイスン ウイスン、ラッカナターヤ、ティサラネーナ、サハ、パンチャ、シーラーニヤーチャーマ

次に戒師が、次の言葉を三遍唱えられた後、異口同音に三遍唱える。意味は「あまねく真理を悟られた釈迦牟尼仏に帰依し奉る。」

○ナモータッサパカットーアラハトーサムマーサムブッタッサ

次に戒師の後をついで、一句一句オウム返しに次の通り唱える。意味は「仏法僧の三宝に帰依する事を誓う。」

○ブタン サラナン カッチャーミ。

タマン サラナン カッチャーミ。

サンカン サラナン カッチャーミ。

○トウティヤンピ ブタンサラナン

カッチャーミ。

トウティヤンピ タマンサラナン

カッチャーミ。

トウティヤンピ サンカンサラナン

カッチャーミ。

○タティヤンピ ブッサンサラナン

カッチャーミ。

○タティヤンピ タマンサラナン

カッチャーミ。

タティヤンピ サンカンサラナン

カッチャーミ。

これが終わると戒師は

○ティサラナカマナンニティタン(正に今、三宝
に帰依し終った)

と唱える。

今度は参列者一同が

○アーマパンテー(畏りました)と唱和する。

ここで受戒者は、自分の為、家族、近親者の為に、苦難、災難、病苦の大難は小難に、小難は無難にのがれられる様に、僧侶を経文を唱えて下さる様に願う。

この経文をお願いするのは結婚式や誕生祝い、開店式、新築落成式などの吉日の時、供養主だけが次の如く唱える。

◆ウィパッテ パティ パーハーヤ

サツパサムパッテ

シッティヤー サツパトゥッカ ウィナーサーヤ

パリッタン パルータ マンカラ

◆ウィパッテ パティ パーハーヤ

サツパサムパッテ

シッティヤー サツパパヤ ウィナーサーヤ

パリッタン パルータ マンカラ

◆ウィパッテ パティ パーハーヤ

サツパサムパッテ

シッティヤー サツパローカ ウィナーサーヤ

パリッタン パルータ マンカラ

次に高座の僧侶は、大蔵經の、スートラの中にある十三項の経文をとる。このお経は長いものであるから時には数項が省略される事がある。

死者の供養、追善供養(納骨堂慰霊祭)などの為には経文をとらえてもらい、又説教を願う時は次の文句を用いる。

◆プランマーチャローカ ティ・パティ

サハン パティ

カッ アンチャリー アンティワラン

アヤーチャヤ

サンティー タ サッターツ パラ チャッカ

チャーティカー

テーセートゥ タマン アヌカムピマン

パチャン

この場合大蔵經アビタムの中のお経を唱えられる。説教はこの場合は、物故者の霊をなぐさめ、冥福を祈る為におこなわれる。

読経が済むと今度は僧侶に対する供養が行われる。式が午前中の場合は、11時頃までに済むようにし、それから僧侶に食事を差し上げる。食べ物を差し上げる時は、パーケンと云って必ず手渡しする。僧侶はこれを手で受けとる。前におく尤では僧侶は食事をすることが出来ない。女子が差し上げる場合は僧侶の差し出す布ぎれ(パークラップー礼拝するの意)の上におく。僧侶は布ぎれを自分の方へ引いてこれを受取る。

それから供養物(布施物)を差し上げる。食事を差上げないときは供養物尤である。この時も必ず僧侶に直接手渡さねばならない。手渡しが終わると僧侶達は供養を受ける旨の読経が行われる。この経文はアヌモータナカタールといって供養を喜んで受けるといった意味である。この読経が始まると、供養主は予め用意しておいた供養器(ティットナム)を取り上げ、今日のこの功德があまねく一切に及ぼして、お互いが、共々幸せになれます様にと念じ乍ら、供養水を鉢に移す。普通これで式は終わるが、目出度い儀式の時には次に述べるプロムナムモンをさずかる。ここで先ず、サーイシンの儀式について述べなくてはならない。サーイシンというのは木綿の糸を9本合わせて作った細紐の事で、糸の数が9本というのはカウナーといってタイ国では、前進という事で目出度い事を意味する。儀式が始まる前に予めサーイシンが用意される。先づ式場の祭壇に安置された仏陀像の台に

サーイシンを巻きつけ、その糸玉をのぼし、落成式とか開店式の時は、その建物の周囲にめぐらし、慰霊祭や追善供養の時は、位牌や写真に巻きつける。又目出度い時は、水を入れた鉄鉢(カンナムモン)を用意し、矢張りサーイシンを巻きつける。そして残りの糸玉を盆にのせて僧侶の横に置いておく。式が始まると、先づ供養主が糸玉をカンナムモンがある時は、これを上座の僧侶にパーケンする。僧はその糸玉を次々と順番に渡していく。そして僧は親指と人差し指の間にはさんで合掌し、経文をとる。

ナムモンは読経の途中(ラタナスタンという経文をとる時)上座の僧侶がろうそくに点火し、流れる蠟をカンナムモンの中の水に落とし、さきに作っておく。そして式一番の最後に供養の読経がすんでから、上座の僧が参列者一同にヤーカー又はバイマヨムの草や葉をたばねたものにこのナムモンをふくませて振りかけてくれる。参列者は合掌し乍らナムモンを顔や体にふりかけてもらう。参列者だけでなく、建物、店内、設備、施設などにも振りかけてもらう。ヤーカーというのはすすきの様な草で、釈尊はその草の敷物に座って悟りをひらかれたという。ナムモンは仏陀のご利益(りやく)や経文のご利益で災厄を除き、幸福と反映をもたらすという有難い水で、参列者は進んでこのナムモンをふりかけてもらう。

以上、普通我々が時に経験するかも知れない儀式のあらましを申し述べたが、これら

の儀式を通じての作法、心得などに就いて一寸述べておきたい。

タイ国では仏陀像や僧侶の前で、特に儀式の時は三拝の礼をする。三拝は矢張り仏、法、僧即ち三宝に帰依することを意味する。仏陀像や僧侶の前で端座両手を合わせ、次に手を床において頭をさげる、この礼を三回くり返すのであるが、我々の習慣にないこの三拝の礼は仲々やりにくいタイ式の儀式の時には、努めてするように心掛けるべきだと思う。式が始まって授戒から読経がすむまで皆合掌する。これは三宝に帰依する事を表し、且つ精神統一のために行うのである。南方仏教では儀式の時に①ターン(供養)②シーン(授戒)③パワナー(精神統一)の三つの行為をして始めて供養した事になり、この中の一つでも欠くとごりやくは預けないとされている。

式が長くなった場合、合掌の心得ができていないとつい退屈になり隣の人と話をする。眠気を催し、いねむりをしたり、あくびをしたりする様になる。これは大変失礼なことであるから、申し述べた意義をよく理解し、協力合掌に努めるべきで一度合掌すると心がさわやかになり、その習慣が身につくものである。

食事をタワイ(寄進)するのは正午まで、それまでに終る様に供養者の方で心掛けなくてはならない。如何なる理由があろうと正午以降の食事は流動飲物以外は許されない。一度パーケンした食物には僧侶仲間

以外はふれる事は出来ない。ふれるとその食物は僧侶は食することが出来ない。

僧侶に儀式に参列願うときは食事を供し、花や日用品を布施する外に金銭を包む。二二七戒には僧侶は金銭にふれる事を禁止しているが、貨幣経済が進んだ今日、僧侶と雖も、時には金銭に依存せざるを得ない。供養者が金銭を布施する時には、バイパワラナーと称する、布施する金額を記入した小切手を日用品などと共に僧侶にパーケンする。その際現金は同道しているネーン(小僧)又はデクワット(寺に寄宿している少年)に渡すのである。寺院内での場合は、各寺院に金銭を取扱う会計係があり、尼僧担当しているところもある。バイパワラナーには「出家者のよりどころとすべきパッチャイシー()パーツ分を寄進します。この金額の範囲内で、御用のものがあれば、デクワットに申し付けて下さい。」と書いてある。パッチャイシーとは、4つの必需品の意味で、その昔から清貧を重んずる僧侶の生活を象徴的に示すもので、

1. 死人のまとったものをきる。
 2. 樹の下を住家とする。
 3. 托鉢によって食物をえる。
 4. 病めば自分の尿をくさらせて薬とする。
- 即ち、チーウオン(衣)ビンタパーツ(托鉢)セーナサナ(住)キラナーパッチャイ(薬)の4つである。儀式が終わり、小休の後、僧侶達は帰院するが、僧侶の送迎は時間には車を用意し、失礼にならぬ様に心掛けるべき

である。

序でに、バリー語(パリー語)について一寸ふれておきたい。バリー語はサンスクリット語(ぼん語)の様に古代印度の言葉で、もとマカダ地方の言葉と言われ、印度で仏教の盛んな頃、即ち釈尊が布教に入った時にこの地方で使われていたが、印度に於ける仏教衰弱と共に亡んでしまった言葉である。ところが印度仏教を受け入れたタイ・セイロン・ビルマなど南方諸国がその伝播と共に、経典の言葉として使われる様になった。大蔵経をはじめとする凡ゆる経典はバリー語が使われており、僧侶達が読経しているそれは皆バリー語である。バリー語を解さないと経典を解さないという訳で、タイ国は僧侶間のみならず民間でもバリー語の勉強が盛んである。バリー語習得の度合いを段をもって表し、初段から九段までである。九段の最高をきわめないと寺院の住職にはなり得ないとのことである。

(世界仏教徒連盟本部)

小谷亀太郎略歴

小谷さんは大正5(1916)年大阪の羽曳野市でお生まれ、昭和14(1939)年頃来タイ。

山本願弥太商店の番頭さんとして活躍、終戦でバンブアトーン抑留所第2キャンプ第2班にお兄さんと一緒に入り、カメラマンの瀬戸正夫さんとも同じキャンプだと聞いています。昭和22(1947)年からこの地で建設資材を商なう貿易会社 Pacific & Orient Co. Ltd.をロイアルオーキッドホテル近くにあるブッシュ・レーンに設立し会長として活躍される傍ら、昭和28(1953)年戦後の日本人会復活にご尽力され、創立時から1989年迄の30年間という長期にわたり日本人会事業部長を勤められた。戦後日本人納骨堂の堂守が不在になっていたのを、小谷氏を中心とし仏教奉賛会が高野山真言宗総本山に管理僧の派遣を依頼、昭和36(1961)年 戦後初の長原敬峰師をお迎えし、約3年毎の交代で今日迄続いています。

一方ワット・リヤップの日本人納骨堂に限らずタイ国における日本人留学僧の父として慕われ、昭和35(1960)年、氏は世界仏教徒会議[WFB]事務局次長に就任され、日タイ両国の仏教界の信頼に努められた。

そうした功績に対し1987年11月3日、日本国より勲6等単光旭日章を叙勲された。

1999年7月13日没(83歳)

(注)1971年～1977年の7年間 空白期間があった。

追想一世紀(自伝)

瀧川虎若先生の遺稿から

タイ国日本人会第49代会長
小野 雅司

最初に

瀧川虎若先生の事は南日本新聞(1972.12.31)に「タイ国に生きるバンコクに生きる鹿児島人」に紹介されている。先生は明治37(1904)年12月26日鹿児島県出水市米ノ津のお医者さんの息子に生まれ、お父さんの診療ぶりを見て薬の調合なども覚えて育った。その後天理大外語科を卒業したが、医師を志して再び猛勉強していた時、友人から、「タイの医師になる気はないか」と勧められたのがタイに来る動機だったと。また、毎日新聞(1988.2.4)に「タイの赤ひげ」先生 老人ホームづくりに情熱 と紹介されている。

(引用)

回想一世紀 その1

昭和10年5月神戸港から乗船して20日ばかりで目的のバンコック港に上陸。当時日泰の唯一の定期船貨客船の大阪商船すばや丸で灼熱のメナム(チャオピャ河)を徐々にバンコック埠頭に向けて上って来た時は私もまだ30才の青年で希望に胸を膨らませながらの上陸であった。

今も昔も変わらぬミルク、コーヒー色のメナム河はやはり初めての異国情緒の感じであった。暑いながらも河の兩岸の緑は誠に

美しく5月の白光に輝きところどころに火焰樹の花が燃えているのは全く日本内地の風景と異なり南の国と云う感を深くしたものである。

昭和初頭の不況の日本での苦しい生活には当時の若さをもってしても打開の道は狭く、南の方に活路を求めて当時の金100円をやっと苦しい親爺どのからせしめ60円の船賃を支払って神戸港から脱出?やれやれと云う気持ちですらばや丸の三等船客として雑居の大部屋の汚れた畳の上に寝転んだ時はむしろ解放感の方が強かったように思う。親爺どのからせしめた100円の内60円を船賃にして残りの40円はまだ吾が懐に納まっているので当時唯一の日本人経営のバンコックホテルに1週間天国に来た解放の気分を満喫しながらそろそろ就職探しである。幸いにその道の薬局で拾ってもらい日の出医院と云う診療所を分担させられた。月給50円で食住は院主持ちと決まり早速タイ式ののんびり生活が始まったのである。業務の面その他の文化水準も当時の日本に比べ10年から20年の開きがあるのではと云う感じを受けた。仮に当時の医師免許制にしてもバンコック周辺は実施されていたが地方はまだ施行されておらず吾々も将来の事を考え先づ医師免許取得

のために地方県に行く事を企図したものである。それでも当時バンコック市内での医院開設なども何等届出もなく堂々と開業している医師は多かったようであり日本人仲間も可なりいたようであった。

さて当時のバンコック風俗の一端である服装であるが今は殆どお目にかかれぬ男女を問わず古典舞踏劇などでのみ見られる袴を後の帯にたばさんだような下着であったが実に優美な服装であったと今は懐かしい想出である。殊にその帯たるや金銀の鎖を用いていたが今はその帯もお目にかかれぬ。タイ婦人には一種の財産であり富裕の階層は金銀を使い金の色も金の含有値段も異っていたようで金屋即ち金行には店頭指輪と共に並べられていたものである。特に上層階級の服装は美しく女性はサロンなども特有の美しい布地であったと思う。このサロンは現在でも使用され特にタイダンスの時など好んでこのサロンを用いているように思う。

当時在留邦人も300から4~500人と云う程度であり商社マンと云っても大手は少く個人企業が大部分と云うものであったと思う。従って吾々のような流れ者に近い者が放浪していてフリーな立場で飯場に有りついていた者である。又割合気安く拾って飯を食わしてくれる小企業もあり便利に利用してくれたのであろう。吾々の先輩の山田長政以来ゲンコイで鉄道工事に協力してマラリヤ其の他の悪疫に斃れた人達も何か摺

む物があるだろうと云う気持ちで渡来した邦人が多く、吾々の時代にもやはりその放浪気分が流れていたのではあろうと思われる。当時吾々より10年も以前にこの地に来た人達の実話であったが何となく船に乗ってシンガポールで降ろされ流れ流れてバンコックに着く。そして途中のシンゴラで止まった人パタニー、ナラティワートに止まった人、チェンマイ迄行った人と色々流れついたところも思い思いであった。

これ等の先輩は先づ前記のように飯場に不自由はなかったのであるが、やがては一家の大黒柱となるべく自分の得意な職業を探し落ち着いたのであったが一番手っとり早く飯に在り付くのは洗濯屋、床屋、写真屋、次が薬屋、そして医者と云う順で落ち着いた人が多く、バンコックでは料亭、ホテル業、と少し資金のかかる仕事を始めた方も出たり、そして、ビヤホール、飲み屋と店開きされ、日本からの航路が軌道に乗り来泰者が多くなったところでいわゆる「引き込み宿」等も姿を暗の中に現しはじめていたと思う、それ等の日本婦人の中には唐ゆきさん仲間がかなり残留しておられたようで、終戦後も二、三居られたようであったがいつの間にか帰国され姿を見なくなったようである。

尚男性の方の古いお話しでは前記シンガポールで降ろされ当てもなくバンコックまで放浪して来られた嘘のような実話等を聞かされたものであった。勿論当時シンガポールからの汽車もなかった頃、石嶮や仁

丹齒磨き等を行商しながら野宿のような旅を続けてバンコックに辿り着いた人も可なり居り、この楽しい旅を2回も繰り返した物好きもあったと云う話を聞かされた事もあった。今では全く考えられないよき時代であったと懐かしい思い出でもある。

当時昭和10年頃のバンコックの人口も50万と云われたものであったが華僑の密入国が多く実数は6、70万でなかったかと推察される。

扨てこの天国?安住の日の出医院でのんびりムードにいつまでもあぐらをかいてもおられず、日本で呼び寄せを待ち焦がれている女房どのを忘れるわけにもゆかず、2ヶ月後の7月には呼び寄せた。がその席も温まる暇もなく前述の医師ライセンス取得のため南泰ソクラー市に移る事になり、2人でバンコック駅を当時バンコックホテルの女傑女將に送られて未知の地に向けて出発した。右も左も異国人ばかり、言葉も碌に判らぬ汽車の旅であった。

ソクラーは又美しい海岸で、空気もよく保養地のような別天地であった。既に先着の瀬戸医師、少し遅れて着かれた西野歯科医師と三家族の協同の診療所が開始され、三様ののんびりムードの生活が始まったのであった。昭和10年10月である。他の瀬戸、西野の両医師は既に他界されておられるが、瀬戸氏の令息で今朝日新聞カメラマンの正夫氏、西野氏の令嬢で満里子女史は目下スクムビットで歯科医として活躍中である。二

人の遺児も私とは家族のようにしていた方である。

ソクラー生活も所詮はライセンス取得の為の一時の腰掛けであり、ライセンス取得後は西野医師はバンコックに戻り私も国境近くに或る日本人医師の後を譲り受け、それぞれ巣立ちの独立開業を始めたのであった。

独立開業の船出と云えば華々しいようであるが、そろそろ日支事変が怪しくなり始めお得意さんの中国人が相手の商売であれば又そろそろ台所に影をさすと云う事になるが幸いに南泰の国境地区はマレイ人が多くその点割に影響も少なくてすんだと思う。

やっと生活の軌道に乗りかけた時はもういよいよ本格的な大東亜戦争勃発の昭和16年12月8日であった。私達の人生を裏返しにしたこの戦争は吾々にはいつまでも忘れる事のできない大きな山場であった。シンガポール陥落まで弾の下で脅かされて解放されたもののその後敗戦まで後方部隊協力でマレイ地区病院管理をして涙の敗戦となった。

力も希望も消え失せ肩を落として裸にされた敗戦者は紙屑の軍票を只一累の望みをつないでカバンに詰めマレイから汽車と船に乗りついでバンコックに護送され、バンパトーンキャンプに収容されたのが昭和20年10月であった。一累の望みをつないで持参した軍票は勿論兌換はできず全くの紙屑に化し焼き捨てたのであった。これ一

つとつても戦争の無駄な悲惨さを知る事ができるであろう。

それにしてもバンブアトーンキャンプ生活のよき思い出は又一生忘れる事ができない。立派な働き盛りの男も女も諦めに徹したのんびりムードの生活であった。食住共に向う様もちで毎日自由を楽しんでいたと云う事になる。演芸会、講習会、相撲、野球、と任意に希望を充たしてくれ、若者はバンブアトーン川にもぐりしじみ貝を捕えて味噌汁を作っていたのであった。

翌21年になるとそろそろ送還される事になり順次左様ならでなつかしいキャンプとのお別れ組が続き僅かに残留組が取り残されて最後のキャンプにお別れを告げたのは10月であった。さらばバンブアトーン又来るまではでこの項を終わりたい。

続回想一世紀 その2

いよいよ吾が人生180度転換のスタートがバンブアトーンキャンプ解放である。1年間の抑留生活の雑多な想出を残して昭和21年10月、この画期的な吾が人生の方向転針の門出の日を忘れる事はできない。この懐かしいキャンプを後にバンコクに辿り着きやれこれが世間かとしみじみ夜明けのすがすがしさを味わった事である。

人間には各自その人生の区切りと云うか、それぞれの環境によって基準の定め方がある。私の場合幼青年期を第1幕とし、バンコク上陸の30歳から敗戦の11年間を第2幕

と定めたのである。その後のキャンプ解放後の現在までを第3幕と定規付けたのであった。

第1、第2期間は何れ又の機会に譲るとして第3幕の終戦後の足跡について簡単に思い出を辿ってみたい。第2期のバンコク上陸から終戦まではまだ年齢的にも30代であり青年後期から壮年の初期であり、若い血潮に燃えて不安定な環境の中に浮遊している生活の不安も若さで押し切っていた。西も東も定でない外地上陸にあってもあまり気にならなかったような気がしていた。戦争開始の昭和16年従軍するまでそれ程落ち着いた職業でもなく細々とやっと土地に慣れた程度であり放浪に毛が生えた位であったが、不安な心を痛めた状態ではなかった。

いよいよ第3幕の幕開けで借家探しから始まり開業となったのである。頃合いの家も手に入り、診療所の看板も掲げたのであったが、市内はまだ戦争の爪跡厳しく何れの商店も物資不足で淋しい店頭であった。吾が医療衛生材料も例外でなく不足していたのであった。幸いに敗戦日本軍の引き揚げで軍病院跡等各所で競売が行われており、それを足繁くあさり歩いて買い集め当時としては割合整った診療所ができあがり一応患者の対応が可能になり殊に中国人系の患者が来るようになり飯の食いっぱぐれもなくなり落ち着きをとり戻した。いよいよ大きな平和の流れがバンコクにも訪れ、人々の明るい生活が市に充ち活気を呈した頃



瀧川夫妻(中央)、小野夫妻(前列左)、(後列左から)森園、石井、校長先生夫妻らと共に、タイ国日本大使館玄関にて

は日本の商社は勿論世界中の各社が市内の各所に足場作りを始め在外公館(当時在外事務所であった)も開設され法人の数も年毎に増し日本人会も亦曲りなりに発足の運びになったのであった。がその仮日本人会事務所も整わないまゝにあちらこちらと追いつめられては移転を繰り返しやっと現在に至ったのである。日本人学校とて例外でなく当時在外事務所の裏側にひっそり肩をすぼめての開校は寺子屋式のみじめなスタートであり教官も多少経験のあられる商社の方に呼びかけ指導を願って恰好をつけた小学校であった。現在のタイ日協会学校を観ると感深いものがある。

瀧川虎若先生

1954年度から66年年度、1969年度から85年度 通算30年間理事、主として前半は厚生部長、後半は婦人部長を勤められ、82・83年度は副会長を兼任された。

尚、1975年12月1日大使公邸にて藤崎大使より勲5等瑞宝章を授章された(写真参照)また退任された1986年5月の理事会で名誉会員に推挙され、2003年99歳で逝去。

サークル・同好会 100周年に寄せて

文化部

- ブリッジ同好会…………… 255
- 将棋同好会…………… 256
- 女声コーラス…………… 258
- バンコク混声合唱団…………… 260
- 歌謡コーラス…………… 261
- 絵画同好会…………… 263
- クルンテープ写真倶楽部…………… 264
- タイを知る会…………… 265
- 陶楽の会…………… 267
- 国際結婚友の会…………… 269
- バイリンガルの子供のための
- 日本語同好会…………… 270
- 編み物・手芸の会…………… 272
- クルンテープかるた会…………… 274
- メナム旬会…………… 276
- バンコク短歌会…………… 280
- 社交ダンス同好会…………… 282

運動第二部

- 女子テニス同好会…………… 285
- バレーボール同好会…………… 286
- バドミントン同好会…………… 287
- ラグビー同好会…………… 288
- 卓球同好会…………… 289
- 走遊会…………… 291
- 太極拳同好会…………… 292
- 剣友会…………… 294
- ヨガ同好会…………… 296

青少年部

- 水泳サークル…………… 297
- テニスサークル…………… 298
- 演劇サークル…………… 299
- バレーボールサークル…………… 300
- 野球サークル…………… 302
- 剣道サークル…………… 304
- 柔道サークル…………… 306
- バスケットボールサークル…………… 308
- サッカーサークル…………… 310
- 茶道サークル…………… 312
- ブラスバンドサークル…………… 314
- 空手道サークル…………… 316

ブリッジ同好会

政岡 絢子

約40年前、バンコク在住のブリッジ愛好家の方が設立され、同時に「日本コントラクトブリッジ連盟」バンコク支部として、スタートしました。その当時の方が今でも、澁刺とプレイされる様子を見て、お手本にしています。

1970年代、タイ国代表として数名の日本人の方がメンバーに加わり香港、日本、フィリピン、ニュージーランドで開催された国際試合で活躍されたことがあり、私達会員の誇りでもあります。

また、1996年の「アジアバンコク選手権」が当地で開催され、会員6名が参加し優勝戦まで進み、惜しくも2位になった事もあります。

バンコクはブリッジを楽しむために、大変恵まれた環境で、日本人会主催の試合は毎週月曜日午前中(ナイラートパークホテル)で行われ30名の会員が、楽しんでいます。

その他、タイブリッジ連盟主催、IWC主催と数多くの会場があり、交流をかね親善も深めています。最近では会員を増やす目的で、日本人会別館でオープンゲームを、行っています。



初心者の方の教室もあり、いくつになっても楽しめるコントラクトブリッジを、多くの方に広める事も、同好会の大切な役目だと思っています。

将棋同好会

塚原 正男

将棋同好会は1962年に始められた日本人会でも1、2の歴史を誇る同好会で、月1回例会を行なっていました。80年代に例会の他、第3日曜日に子供将棋会を開催し、第1回目は30名以上の子供達が参加し、盛況に10年ほど続けられましたが、交通事情悪化などで参加児童減少で子供将棋会を止め、将棋例会を毎週日曜日午後



で行うことにして現在に至っています。例会は自由参加で棋力も年齢も問いませんのでお気軽にご参加ください。例会の他には、毎年春、秋に将棋大会を開催し、子供達やタイ人も参加して賑やかに真剣に対局しています。1999年より3年毎に日本将棋連盟主催で国際将棋フェスティバルが日本で4回開催され、日本人会将棋大会でのタイ人優勝者が代表として参加しています。その他、将棋プロ棋士がほぼ毎年来タイして指導対局をして頂いています。来タイが一番多いのが師範の大野八一雄六段で、次は高田尚平六段の8回です。

1979年に日本将棋連盟バンコク支部となったきっかけは前年の米長邦雄九段の来タイで、翌年には大内、灘九段、蛸島女流名人〔当時〕などが来タイして、指導対局、支

部対抗戦などを行ない、プロの強さを再認識させられました。

1991年には第4期竜王戦第1局がバンコクで開かれました。谷川浩司竜王、森下卓挑戦者に中原誠名人が立会人、大山15世名人が特別立会人で講演も行ないました。(翌年亡なくなられました)神吉解説者、(スキャンダル直前の)林葉直子女流名人、小野プロなどが来タイされ、普段日本でも会えない豪華な面々と一緒に食事やカラオケなどに行った事も良い思い出です。

1997年より小林健二九段が中心となり、東南アジア支部(シンガポール、マレーシア、台湾、香港、タイ)と日本の6カ国対抗戦が行なわれ、第2回マレーシア大会では、井丸さん、タリンさん、塚原3名で参加して見事優勝しました。シンガポール、マレーシア、タ

イ、香港開催と続きましたが、小林九段もお忙しくなり諸般の事情でその後は開催されていませんが、2012年にシンガポールより7名が来タイして、バンコク支部との対抗戦を行ないました。

女声コーラス

2012年度 女声コーラス部長

福留 美穂

1972年、日本人会文化部女声コーラスは安藤先生（男性）のご指導により活動していたとの先輩Kさんのお話から1975年に1年程入部した私の記憶を辿って女声コーラス部の行事の一端をお話してみましょう。

ある日、安藤先生の紹介でチュラ大の学生さん方によるタイの楽器の伴奏を得て、国立小

劇場の舞台でタイの歌と日本の歌などをご披露する機会に恵まれ、部の貴重な体験となりました。当時のバンコクは未だ車も少なく、路地にはクロンが流れ、長閑な風情がありました。

1991年、丸尾先生のご指導となり、当時のT先輩の紹介で私は再入部を果たしました。1997年、めずらしく北海道旭川の先生方からなる混声杉の子合唱団来タイ、ジョイントコンサートに参加、重厚な合唱を皆さんで堪能しました。

2000年、末広先生在任中、タイでエイズ救済の為、5グループによる合同コンサートに参加出来、タイの社会に微力ながら貢献出来たことを皆さんで喜び合いました。2001年、新しく藤田先生をお迎えし、女声コーラスは益々エネルギーが



充実、翌2002年のコンサートに名曲、カルメンメドレーが登場、一人ひとりがヒロインとなつての熱演でした。その日の最後のステージは先生のソロでイタリア歌曲の中から「パパお願い」を聴かせていただき、会場の御客様と感動を共にしました。

2003年、先生はご帰国時に後任の盛田先生をご紹介下さり、この年からチャリティーコンサートのスタートとなり、より心のこもった練習に励んでいます。幅広いジャンルの曲に遭遇したりまたレッスン中に特に難しい個所で突然、「この小節を一人ずつ歌ってもらいます。」の言葉に、エーッと飛び上がる思いがするのですが、歌えた後の清々しさは感謝と相成ります。また、忘れ難い存在がピア

ノ担当の先生方でした。現在は、高原先生担当です。何時も部員への心配りを頂き、ご多忙中をおしての多大なご協力に、一同頭の下がる思いが致します。

2011年、日本とタイの災害時、女声コーラスからも微力ながらお力添えさせて頂きました。今後とも、私達の歌声が皆様方のお心に届きますことを切に願ってやみません。ありがとうございました。

中尾 紀子

…いつも私たち部員を暖かく見守ってくださる大先輩、中尾紀子さんに寄稿をお願い致しました。文化部女声コーラスは発足40年となります。毎回私たちらしく明るく楽しくそして美しく！活動しております。これからも私たちらしく、活動を応援してくれる家族に感謝しつつ、この国で歌を楽しんでまいります。

最後になりましたが、タイ国日本人会の益々のご発展をご祈願致しますと共に、タイ国のご繁栄を心からお祈り致します。

バンコク混声合唱団

団長
今村 友昭

2001年12月、バンコクでチャリティコンサート「アジアの第9」が開催された際に、一般応募で合唱に参加した日本人メンバーの有志が、今後もバンコクで歌い続けられる合唱団を創ろうということで結成されたのが、バンコク混声合唱団(通称B混)です。



当初のメンバーは約50人、2002年4月に王宮前広場で行われたバンコク都政220周年の記念イベントに参加したのを皮切りに、これまで定期演奏会、ファミリーコンサート、日本人会文化祭への参加など、多くの演奏を行ってきました。

団員の大半が駐在員とその家族であるため、メンバーの入れ替わりが多いですが、設立当時からのもットーである、毎回「楽しく歌う」を引き継ぎ、現在では月3回、土曜日の午後、日本人会別館にて練習に励んでおります。

結成以来10年が経ちましたが、これまでに歌ってきた曲は、「水のいのち」、「蔵王」、「筑後川」など代表的な合唱組曲、木下牧子、信長貴富など現代日本の合唱作品、クラシックの名曲といった、いわゆる正統派合唱曲から、歌曲、オペラ、童謡、アニソン、タイ語の歌など、幅広いジャンルに亘っています。最近では、モーツァルト、フォーレ、ブラームスの各レクイエムに、毎年チャレンジしています。2007年には日タイ修好120周年を記念して開催された「第9」に団とし

て参加した他、過去には、オペラ「フィガロの結婚」や、タイのTV番組「クンプラチュウアイ」への出演など、貴重な機会にも恵まれてきました。

また、混声合唱団の中の男声団員で構成する「マーマーヨ」は、2005年2月、第1回アジア日本人男声合唱祭をバンコクで開催、KL(マレーシア)、ジャカルタ、マニラ、香港など、近隣の日本人男声合唱団との交流を始めました。以降も毎年、各国持ち回りでの合唱祭に遠征参加(第4回大会からはバンコクグリークラブと合同参加)し、ユニークな演奏で注目を集めています。

帰国した団員が日本でOB会を結成し、年に何度か集まり、盛り上がっているのに対し、現役のほうは近年団員数が減少し、伸び悩んでいるのが少し残念なのですが、これからもっと仲間を増やして、さらにいろいろな合唱曲に取り組んでいきたいと考えております。

最後に、タイ国日本人会のこれからの益々の発展を祈念致します。

歌謡コーラス

“歌謡コーラス”に心から感謝!

政岡 勲

「もぉっ!」、「はい!もう一回!まだ!もう一回!」練習で先生の叱咤が部屋中に響きます。私たちの相変わらずの、日本人会別館での練習風景です。

日本人会百周年!心からお喜び申し上げます。私達も今年の記念冠イベントとして去る7月6日の第14回定期(チャリティ)コンサート



にはタイの学生さんと一緒に楽器を交えてのコーラスを楽しみました。又チャリティは3年目ですが、頂いた寄付金はタイと日本の被災者へ寄付させて頂いています。皆様の暖かいお気持ちに心から感謝します。

光陰矢の如し!私がこの会に入会したのは、13年前の2000年1月でした。偶々、「歌謡同好会」→1997年発足→「歌謡コーラス」に変わり、混声のコーラスに変わった時でした。カラオケ大好きな私が混声のコーラスと知り、戸惑い、はたして続けていけるかと不安に思ったのは昨今のことみたいです。あっという間に今年で14年を迎えました。最初は会員も10名足らずでした。練習場所は今の日本人会別館の近くに在り、練習の後、カラオケそして会食もあり(この方が楽しかった!)まさに家族でした。その伝統は今

でも引き継がれています。最初のコンサートはミニ・コンサートと称して会員の知り合いを呼んで、練習会場で開催しました。2001年以降は当初はホテル(ウェスティングランド)で開催しましたが、会場探しには苦労しました。世話役と一緒に事前に何箇所も回り、コスト、場所を検討し、漸く会場を決定してみんなでほっとした記憶があります。2008年以降は会場をプリディパノムヨン劇場に移し、毎年たくさんの方が来てくださっていつも感激しております。

会員は延べ108人、コーラス曲も延べ338曲にもなっています。

これまでも途中、色々なことがありました。喜怒哀楽の人生そのものです。練習の厳しさ、コンサート後の打ち上げ式で皆と分かち合う達成感、感動。親睦会等の楽しさ。なか

には悲しいこともありました。会員の方がお亡くなりなり、法要で泣きながら彼の好きな歌を合唱、嗚咽でまったく歌にはなりませんでしたが。

私達の行事はコンサート以外に日本人会の文化祭、敬老会、懇和会でコーラス、歌を披露しています。

私が何時も心から思っている事は私たちが今あるのは関係の皆様から頂く4つの「お陰様」でということです。

1. 日本人会のお陰です。今後とも宜しくお願ひします。
2. 私たちのコンサートにお越しくださり、エールを送って下さる方々からお元気を頂いているお陰です。
3. ご指導の先生達、特に発足時の先生で今でも編曲をして下さっている坂口先生、そして現在ご指導いただいている永井、竹内両先生の厳しい中にもお優しさが光るご指導のお陰です。
4. 私たち会員の和のお陰です。和の心を大切にし、和気あいあいの雰囲気の中でいつもコーラスを楽しむことが私達の活動のモットーです。

日頃より公私共々お互いが助け合っています。又タイを離れた方々もOBとして毎年来タイしてコンサートに出演し旧交を温めています。

私達歌謡コーラスの特色は

1. 殆どの会員がコーラスが始めて。
2. 幅広い年齢層(25~86歳)。
3. 私たちが歌いたい歌、皆さんがご存知な曲をジャンルにこだわらず絶妙な編曲のもとコーラスを楽しむ。と言う事です。

最後に私事で恐縮ですが、入会して新しい自分を発見し、又学び私の飛躍の原点になっています。お陰で、第2の人生を満喫しています。心から感謝しています。

皆様!楽譜が読めなくても、コーラスが初めてでも、歌が好きであれば大丈夫です!入会大歓迎です!これから何かを始めたい方、友達の輪を広げたい方、ぜひ私たちと、これからのクレシェエンド<(末広がり)人生に向かっご一緒に“歌謡コーラス”を楽しみませんか?ぜひ見学にいらしてください。

絵画同好会

絵画同好会幹事
森澤 美子

この絵画同好会がスタートしたのは、長年タイで絵画の指導をしておられた「メナムの画家」とも呼ばれていた横田画伯が亡くなった後、その功績等を伝えなくてはと、多くの弟子や生徒たちが声を掛け合い、中心となり1987年に日本人会絵画同好会として立ち上げた経緯がありました。



その年の11月には第一回作品展を開催、当時の会場はそごうや、伊勢丹のでデパートで催しました。2004年スアンパッカート宮殿のマーシーギャラリーでの第26回作品展は、2003年から2年もの時を費やし実現、その努力のお蔭で開催にこぎつけられたと聞いております。

会場探しには、あちらこちらと奔走、大変苦労されました。そして2005年～2007年はランドマークホテルにて開催。2008年第36回作品展からはレクサススクムビットのご好意により車のショールームを2週間使わせていただけることになり会場探しの心配が解消されました。

この会場は、スクムビット通りに面し、利便性の良さもあって通りすがりに覗いて下さる方も多く、声をかけてくださり絵画で共感を分かち合える喜びを感じております。

また、この会場では1年を通して会員の

描く、春、夏、秋、冬の四季の絵が常設エリアに展示されています。

日本人会会報誌のクルンテープ「わたしの一枚の絵」に18カ月に渡り会員の作品が紹介されました。

指導者のスチャート先生は、見るからに芸術家の風貌をそなえられ、陽気なお人柄です。ウイットに富んだお話は、わかりやすく楽しい授業をして下さいます。それぞれの、水彩画への思いは異なっても、絵とおしゃべりが大好きな仲間が集まり、タイの食物、風景、旅の思い出等を描いております。

年2回の作品展の他に1泊スケッチ旅行、2回の日帰りスケッチ旅行等の行事もあり会員相互の親睦を深めております。

伝統を誇る日本人会、26年有余の歴史を継続している絵画同好会、これからの活躍、発展を期待しております。

クルンテープ写真クラブの活動内容

クルンテープ写真倶楽部は今から16年前に「写楽会」という名前で発足したと聞いていますが、その後メンバーも入れ替わり、2000年に現在の「クルンテープ写真倶楽部」と名前を変えて活動は継続され、現在に至っています。

他の同好会の例に漏れず、出入りの激しいメンバー構成と人員数の変動がありますが、写真を撮ったり見たりするのが好きな人たちが集まって、バンコクの町や市場でのスナップ、花や鳥、風景写真と、被写体はそれぞれが自由に選んで楽しんでいます。

初心者から、セミプロまで、老若男女とても幅広い年齢の集まりで、2ヶ月に一度、中心的活動である例会を開催し、食事をしながら、それぞれが持ち寄った写真の紹介やカメラや撮り方などの情報交換をしています。又その場にプロの写真家を講師として御呼びして、カメラ、撮影に関する講習会を開催して、腕を磨くべく、さらに研鑽に励んでいます。

撮影会は年に数回開催され、ロイカトーンやソクランのお祭りのほか、最近ではチョンブリの牛レース、お化けの衣装で有名なピーターコン祭りや、ロップリの猿やひまわりの写真などを撮りに出かけました。それらの写真はレクサスショールームの展示場

をお借りして、年2回の展示会を開催し、皆様にお披露目しています。一昨年のタイの大洪水の際には 洪水の展示をして、募金活動を行いました。3ヶ月ごとに入れ替える常設展示もしていますので、是非ご覧になってください。

新たに、アソーク交差点のインターチェンジ21にある、展示場もお借りできる事になりましたので、展示会を増やして、さらに皆様にお披露目できる機会を増やしていこうとも考えています。

日本人会に入会してからは、スポーツ同好会やコンサートなどの撮影を依頼されることもできました。私たちはプロではありませんし、普段は風景写真や花や鳥などに向き合っていて、急に集合写真や、動きの速いスポーツ写真となると、それにふさわしいタレントを持ち合わせていない事も多いのですが、これもほかのサークルを知り、日本人会の横の連携を深める良い機会になるのではと考え、時間の許す限りお引き受けするようしております。

どんなカメラをお持ちの方でもかまいません。写真を見る、撮るに興味をお持ちの方はどうぞお気軽にご入会ください。お待ちしております。

タイを知る会

『タイを知る会』は1989年1月27日に産声を上げて以来四半世紀近く活動してきている女性会員に限られた文化部所属の同好会です。会の発足当時の記録を紐解きますと、『タイの本当の姿、現状を幅広く、そしてたくさん学びたい。さまざまな経験を通じて日本人目線ではなく、タイ側の目でも見られる広い視野を持ちたい(逆に日本が見えてくる)、タイ語を学び、文化を

知り、それを日本に伝えていくことで、留学生をはじめ日本に行ったタイの人たちを温かく迎えてあげられるような日本社会にしていきたい、そんな思いを抱いて生まれた。』とあります。この基本方針は今でも少しもぶれることなく脈々と受け継がれていることを現会員として誇りに思います。今でこそ数多くのフリーペーパーが発行されており、情報過多とも言えるほど情報には不自由しなくなっていますが、そうしたフリーペーパーで得られる情報とは違った、自主的、積極的により深く、より正しく、タイの軒下をお借りしている身として謙虚にタイを知るための活動をするのが本会です。具体的には毎月第一、第三金曜日に例会を開き、実際の活動について企画し、どのように実行に移す



か、会員全員で協議します。タイ社会、政治情勢について、タイの風習、日本との違いについて、タイの伝統芸能について、等々、さまざまなテーマで一般会員を対象に講演会を開催し、また会員だけを対象とした見聞会ではタイ王国国歌、国王賛歌を練習したり、タイ語についての講習を受けたり、プアンマライ作り、タイ料理に挑戦したり、と聞いてみたい、やってみたいという活動と、「見て歩き」と称して行ってみたい、見てみたい、という活動とがあります。ラマ9世病院を見学、ワットジャークデーンでお坊さんと一緒にお食事、船に揺られてノンタブリー訪問、国鉄に乗ってマハチャイ訪問、等々個人ではちょっと無理でも仲間と一緒にならなんとかなるものです。こうした活動の記録、報告を兼

ねて定期的に発行している会報が、2012年12月現在で213号となったことも活動の大きな証です。会報第1号によると、『このままではタイ人、日本人間の溝が広がる、会ができれば出来るだけ協力します。』と発足当時おっしゃってくださった瀬戸正夫氏が、そのお言葉の通り今でもいろいろなお協力をいただけているのは嬉しい限りです。またこの会には協力会員として、日本への留学経験のある著名なタイ人の方々が、日本留学中にお世話になったので、少しでも恩返しができる、とおっしゃって、強力なサポートをしてくださっています。私たちこそタイに住まわせていただいているのだから、少しでもタイへの理解を深め、ささやかであっても両国の友好にお役に立てれば、と願います。

「陶楽の会」設立18年目を迎えて

今年、「陶楽の会」は発足して18年目を迎えます。

もともとは、生け花を習っていた望月秀子さんが、花を生ける花器をご自分で作りたいと、バンコクで陶芸を始められました。当時、陶芸教室は日本でも大人気でした。特に日本風の暖かな色合いや上品な雰囲気の陶器がなかなかバンコクでは手に入らないという事情もあり、数人の方々が作陶に加わりた

いと6名で陶芸教室を始めました。しかし口コミであつという間に希望者が増え、教室の場所など様々な問題が出てきました。そこで、20名集まれば日本人会の同好会に入れて頂くことができるということを知り、早速、認可申請をいたしましたところ承認を頂くことができ、以後、日本人会のご支援を頂きながら文化部同好会「陶楽の会」として活動を続けて参りました。

発足当時からバンコクでの陶芸人気は大変なもので、入会者が2年半待ちの状態でしたが、多くの方を受け入れようと増える一方の会員に応じた作陶教室の確保と、大量の作品を焼いてくれる大きな窯を持った窯元探し、日本からの釉薬や作陶道具の入手な



ど、会員50名以上を抱えた当時のお世話役の方々のご苦労は如何ばかりであったかと改めて頭が下がる思いです。お陰様でアーク様のご理解をいただき工場にある窯で焼成をお願いし、釉薬がけの専用部屋もご提供いただいて、ずっと昨年までお世話になっていましたが、あいにく昨年の洪水により工場が甚大な被害を受けられまして、陶楽の会も今年4月まで活動を休止していました。今はタイ人陶芸家のBathma氏のご支援をいただき、今年6月より彼のアトリエで焼成をお願いしています。

このように、皆さんからご支援を頂き、昨年は開催できなかった作品展示会も、今年は第16回として佐藤大使をお迎えして開催できました事は、本当に感謝でした。

発足当時のことを振り返ると、月日の経つのは早いもので創立当時のメンバーは全員本帰国されてしまいましたが、現在、陶芸への熱い思いを受け継いだ会員30名が、毎週木曜日、スクンビットソイ36の教室に集まって、それぞれ思い思いに陶器の創作活動に励んでいます。今後も自由な発想で、「世界に1つの自分だけの器」作りを目指して会の活動を盛り上げていきたいと思っています。現在は入会希望者を随時受け入れています。陶芸の経験がない初心者の方でも一から指導いたします。陶楽の会で「自分だけの器」を作ってみませんか？

国際結婚友の会について

川満 富子

国際結婚友の会のできたきっかけは、1984年に日本の国籍法が“外国人と結婚した日本人女性の子供も日本籍を取得できる”と改正された際、もっと知りたいということで、日本国大使館の領事をお迎えして“講演の集い”を持ったことです。その後、このように国際結婚した女性たちの共通の問題や情報を共有して定期的



的に集まろうという提案で、会が結成されました。いろんな活動をしましたが、子供たちに会員の母親が日本語を教えたり、新年会、七夕、クリスマスと日本の歳時のイベントを行ったり、今思えば、楽しいひとときでした。

1997年、この会の永続性を考えて、タイ国日本人会の文化部の同好会申請を行い、認められて今年で15年になります。一時、日本行きビザ申請で長蛇の列をなした際には、大使館の領事に特にお願いして別枠受付を認めて頂き、そのサービスがあった際には会員が80数名になったこともありました。

2010年日本人会懇和会と国際結婚友の会合同講演会で当時の石川参事官兼領事をお迎えした際にも再度お願いをし、改善を検討して下さいました。現在、日本人の配偶者あるいは元日本国籍の者に関して、受付を別枠で申請でき、今年半ばからは、3年数次査証が

取得できるようになり、日本へ帰る手続きの煩わしさが軽減されました。嬉しいお話です。

さて、年間活動ですが、新年会は美味しいお節を頂きながら新春の抱負を語り合い、3月と10月にはお茶のひとときです。その他の月は、情報交換や、山川さんの編み物講習会を行ったり、毎月本館で会を重ねてきました。

ダルニー奨学金寄付協力もずっと続けています。1昨年10月からは大口堂遊先生を囲んで“五行歌”を勉強しています。皆、それぞれ個性的な歌を詠み、楽しいひとときです。ここ2年間は五行歌創始者“草壁焰太”先生をお迎えし、拡大歌会を開催しました。

年を重ねてもいろいろなことに挑戦し、いつも友達の輪をひろげていく、そういう精神が若々しさをたもつ秘訣かと思います。今後は、若い世代の国際結婚をした皆さんとの交流を図っていきたくと考えています。

バイリンガルの子供のための 日本語同好会

当同好会は「バイリンガルの子供のための日本語教室」を運営する会です。始まりは1999年。当時から日本人会の本館をお借りしていましたが、2003年にようやく同好会申請が認められました。2007年には会の名称から「教室」を取り現在の名称に。人任せにせず自分たちでやる会であることを改めて示しました。



活動は月2回、1時間半ずつ。年20回だけの活動ですが、将来子供たちが、自分であることに自信を持って生きていけることを目指しています。国際結婚の子供を中心に、多い時で75名、現在は40名ほどです。教師は雇わず、親とボランティアで活動し、自作教材の作成(アソシエーション法カタカナカード)と頒布も行い、研修会やセミナーも2007年から毎年実施しています。

今、教室の活動は、子供の興味・関心のあるテーマで親も子も共に体験する共同体験型です。かつて私たちは「読み・書き」を中心に「教師」になって教えようとしていました。しかし今は、教室にいる大人の多様さ、子供たちの多様さや違いを資源と考え、共に体験する中で言葉が育つ教室作りを考えています。例えば幼児部では3歳ほどの年

齢差がいつも問題でしたが、むしろ差を利用し、大きい子が下の子供の面倒をみるなど色々な役割を持たせたところ、とても張り切り意欲的になり、前より言葉が多く行き交う活発なクラスになりました。子供も大人も多様です。それを生かした活動が大切です。例えば、親の出身県や仕事の話聞いて発表する。工作を作って一緒に遊ぶ。身体や体力を測定し合ってアルバムを作り、年度末に自分や友達の成長を確かめる。植物を植え、親子で成長を観察し教室で報告し合う、などです。2011年には、高等部の子供が運動会を企画しましたが、洪水で流れてしまったのは実に残念なことでした。

言葉に対する親の態度も体験の中で変わりました。以前は「強制的にでも日本語だけで」と考える親が普通でした。そんな中、

高学年は子供たち自身に使用言語を選択させることにしました。その結果、子供同士はタイ語で、先生と話す時や発表は日本語でと、状況に合わせて使いわけるようになり、対話そのものが活発になり、今、日本語だけでと言う親はいません。最近では子供から「全部日本語でやりたい」という意見も出てき、子供同士議論しているそうです。

全ての子供が前より何かができるようになること、そして楽しく幸せな体験を皆で共有できること、そういう場を目指しこれからも同好会活動をしていきます。

編み物手芸の会

まだまだ始まって年数の浅い同好会です。発足して2年になります。会発足で苦労しましたから楽しい同好会にしていきたいと話合っています。

この編み物手芸の会の前身である編み物サークルの歴史は古く、およそ23年前になります。

当時は今ほど日本人会にサークルがありませんでした。また情報誌も少なく、日本のテレビも夕方NHKニュース30分しか見ることができず、ビデオも少なく、趣味を嗜むことや、娯楽といったものはそうそう無く、時間を有効に使うことは大変難しいことでした。

そんなことで、アパート内でのお茶会やお食事会など、外国にいるという気持ちから人との繋がりが度々よくありました。同じ会社の奥さま方から家でも簡単にできる手芸はと聞かれ、場所取らずの編み物をとお勧めしたのが始まりでした。

グループができ、順番にアパートで集まり編み物を楽しむ会が始まりました。

知らない土地での人と人との集まりは楽しく大きな輪だったり、ほんの2、3人だったりしながらそれでも今にいたるまでずっと続いてきました。

スクムビットに日本人会別館ができたことで集まりやすく、そして同好会発足となりま

した。

月2回で始まりました。日本で着るセーターやテーブルセンターなどさまざまな形や種類の編み物を分からないところは講師に教えていただきながら、各自好きな作品を作り始めます。

編み物をやった事が無い方も、いきなり大作を始めたり、会の時しか編まない方やどどん作品が出来上がる方たちなど差がありました。1本の糸から作品ができ、「着てきましたよ〜」と出来上がった作品を見て皆で感心したり何時出来上がるのやらとため息をつく人もあったりです。

過去には材料が少なく、一時帰国時に日本から本や材料を持ってきていました。お子様連れでワイワイガヤガヤ楽しかったこともありました。

5年ほど前から日本人会のバザーに協賛しようとの話になり、バザー2ヶ月前くらいから小物を作りはじめるようにしました。エコたわしが形を工夫しやすく人気もありましたからバザー出品の主流になってきました。編み手の方など広く公募し協力参加もあります。

慣れない海外生活、時には寂しさや文化の違いで何かと不自由な生活をしなければいけない時もあります。そんな日常生活の中

で、日本と同じように編み物サークルの仲間と楽しくお喋りをしながら「ホッ」と一息する時間は、バンコク生活をより一層充実したものに出来ると思います。お稽古の後のランチも楽しみの一つです。

昨年(2011年)はBkkのPimshopが企画してくださって作品展示会とワークショップをしました。

活動日 第2・4水曜日

午前9時30分～12時30分

クルンテープかるた会

2005年、ストーン睦美・競技かるた六段がクルンテープかるた会を設立した。当初は、たった二人の会だった。

競技かるたは、小倉百人一首を用い、全日本かるた協会の定めるルールに則って行う競技である。小倉百人一首かるたの遊びは古く戦国・江戸時代から行われてきたが、競技としてのルール統一は、1904年(明治37)、黒岩涙香による。その後、全国大会が開かれ、日本国内で広まったが、海外普及は殆ど行われて来なかった。外国人に取れるとは、普通、思い付かない。

前人未踏の海外普及。2001年、ストーンは、科学雑誌『サイエンス』記者の夫(アメリカ人)の転勤先、ロンドンで普及を始めた。だが、個人で活動しようとしても、門前払いに遭ったり、白い目で見られたりした。「新興宗教の勧誘ではないのに」と嘆きながら、次の赴任先のカザフスタン、そしてタイでかるた紹介を続けた。

タイでは、国際交流基金バンコク日本文化センターでの百人一首の展示、大学や中・高等学校でのタイ人向けかるた紹介・レクチャー等の活動を経て、2006年に定期



練習会を開始。2007年1月に在タイ日本人向けの第1回バンコクかるた大会を開催、同年7月に初のタイ人の部を加えた第二回大会を開催した。

2007年、ストーンは夫の赴任で北京に移住し、坂東真由美(ワタナーウィタヤー・アカデミー校日本語教師)が会長を引き継いだ。坂東は、勤務校にタイ人生徒だけのかかるた部も創立している。同年12月の第3回大会では、経験者の部として初めて日タイ混合の対戦を実施し、外国人も日本人と同等に競技できることを証明した。このように、百人一首かるたを国際交流のツールとして活用したことは、会の発展にとって非常に大きな要素だったと言える。

2010年7月、日本人会文化部に登録。

2011年には、アナン・ペーンソンブーンが出身地のアユタヤー県に支部を設立し、「外国人による外国人のためのかるた会」を実現させた。同年、国民文化祭(京都)にタイチームを含む海外四チームが初出場。2012年には、競技かるた史上初の国際大会「第1回小倉百人一首国際交流大会in 福岡」が開催され、タイチーム七名が団体優勝した。

2012年現在、会員は、小学生から80歳を超える方まで約30名。2012年12月の第8回大会は、参加者が95名(約7割がタイ人。会員・一般を含む)となった。会員からは、イーブン美奈子三段、坂東真由美二段、アナン・ペーンソンブーン初段、およびミミー・ダーンターウォンジャルーン初段の4名の有段者も輩出している。当会は、競技かるた国際化のきっかけになった最初の会として、今後もレベルアップを図り、教育や国際交流の一環としての活動も続けていくつもりである。

橋正樹、読売新聞アジア総局長の林田裕章、ひろあき

美音夫妻、堀井京子、豊田美帆、当時二十

歳台のイーブン美奈子ら十年近い会員が中心になって句会を支え、現会員は他に河原朴亭、池田けいこ、浮田恒夫、小高国男、それに勝部百合子が加わった。

メナム句会は、平成二四年(二〇二二)で発足からまる五十年。

昭和四五年(一九七〇)には『第一メナム句集』を発刊、これは熊本の本書店へ発注されたが、第二句集からはタイで発行された。
ででむしや我に負うべき荷はひとつ

中条和(第七メナム句集)

流離われブーゲンビリアに吹かれをり

根岸みのる(同)

ブアトシの丘一面の花明かり

長尾 俊郎(同)

休眠の続く塩田夏帽子

嵯峨 春野(同)

トツケーの鳴くを数えて歩み止め

塩谷 敏子(同)

破風飾るシヴァ神の舞い草いきれ

土橋 正樹(同)

チェンマイやナーガの階段初詣で

大山けいこ(同)

水をもて寿ぐ衆の夏猛る

林田 裕章(同)

秋うらら老門番の欠伸かな

林田 美音(二〇〇六)

わが自慢刹くワムオーの器量良し

豊田 美帆(第八句集)

この十年については、『メナム句集』を三年に一度の定期刊行とし、また二〇〇五年から有志が「海外日系文芸祭(みなどみらい文芸祭)」への投稿も始めた。同文芸祭では、イーブン美奈子が海外日系人協会理事長賞、中田朗子が海外日系文芸祭大賞を受賞している。

守宮の子閨は大洋ほどもあり

イーブン美奈子(二〇〇七)

胎の子の高さに続く花市場

中田 朗子(二〇〇九)

最近では平成二四年(二〇二二)に『第九

メナム句集』を発刊し、日本の東日本大震

災(二〇二二)、タイの大規模デモ(二〇二〇)、大洪水(二〇二二)にまつわる時事俳句も掲載した。

東北の健気讚えむ春浅し

堀井京子(第九句集)

赤シャツを見下ろし悽然雲の峰

大口 堂遊(同)

暑季さ中赤シャツもまた燃えてゐる

大口乃り子(同)

水の音水を捜して彷徨えり

藍原 弘和(同)

先見えぬ被災地希望の花であれ

池田けいこ(同)

メコン委員会の川合多哥士・万里子夫妻も十年余り句会に在籍し、大きな力となった。

赤楊、文夫、呉牛、南星ら長老たち亡き後も平成四年帰国まで、みどりと共に、寂れがちだった句会を支えた。夫妻の去る少し前、みどりの努力で、西岡西人、沼館幹夫(現D A C

〇編集長)、松野茂樹(ハロータイランド)大西孝典、水野徹朗ら大勢の若者が入会、句会は一時勢いを取り戻し、在タイの長い教師スリ

ヨン照子、幼稚園園長・泉華枝らも参加した。なにもかも光れる中に花マンゴ

スリヨン照子(一九八七)

パンヤの実ひとつ弾けて次々と

イスランクール陽子(一九九七)

白い綿を吹き出すパンヤの樹はバンコク
のあちこちでみかけたが、どんどん切られて姿を消している。昨今である。

傾ぎたる祠に花ジャスマイン

山本 良子(一九八八)

古い二戸建ての家の庭の一面に土地神が祀られ、今もマンションやビルの屋上、庭の

祠にお供えをする住民も多い。

川に住む人の暮らしに月優し

林 治助(一九九六)

平成に入り、対馬康子が夫、西村我尼吾のタイ駐在で入会、朝日新聞衛星版に「アジア俳壇」を創設した。この俳壇は、平成八年に帰国して、「天為」編集長に就任した後まで計十年間近く続いた。

万緑を天秤棒に卵売る

対馬 康子(一九九四)

間もなく「タイの花の名を知りたい」とタイ語を学ぶ長尾俊郎が駐在、平成八年(一九九六)からワープロで会報を作成するようになった。平川公明、市川彬、嵯峨春野、田口雄作、野村慈水、塩谷敏子と句友が増えて、二十一世紀を迎えた。タイ博報堂社長で日本人会会長となった石平厚一郎も、文化部長時代、暫く入会した。

ラムヤイの季節ですねと便りあり

石平厚一郎(一九九八)

草枯るる野にニョッキリと新工場

市川 彬(同)

一九八五年プラザ合意以降、日本企業の

タイ進出が始まり、加速。空き地がどんどんふさがり、地方に工場が林立した。

俳句にはタイの季節、社会、出来事、行事、動植物など様々なものが詠まれた。日本人会「クルンテープ誌」には発足以来四十年以上も毎月、句会で詠んだ俳句が掲載されてきた。

タイの季節は暑季(三〜五月)、雨季(六〜十月)、涼季(寒季・十一月〜二月)に大別され、日本とはひと味違う季節感覚で詠まれてきた。「花マンゴ」「パンヤ」「ラムヤイ」などは日本の歳時記には無く、メナム句会で生まれた独自の季語だ。山本みどりは『クルンテープ』七〇周年記念号(一九八四)に「バンコク歳時記抄」を掲載、のち句集『しゃむろ』を出版して多くのタイの季語を紹介した。

平成十年代、現代俳句出身の藍原弘和やピアノ教師・大山けいこ入会。その後、ベテランの俳人・根岸みのる、中条和の薫陶を受けた者も多い。元朝日新聞記者の大口堂遊・乃り子夫妻、『MOVE』誌編集者の土

木きよし・ひさ夫妻はコーラートから毎月車を運転して参加した。ベトナム戦争で米軍による東北―首都間を結ぶフレンドシップ道路が完成し、バンコク往復が画期的に便利になった。

雨季明けに北爆息みてなほ暑き、

東 柁村(一九七〇)

ベトナム戦争にはタイ国も参戦、ウタパオ基地から出撃した。

一灯のもとに戦車のいる夜寒

小沢 文夫(一九七二)

軍政、戒厳令下のタイで、一九六三年サリット元帥死後、まるで内閣が代るみたいにクーデターが多かった。

屋上に兵あふれをり鱗雲

山本みどり(一九七三)

一九七三年十月一四日、動乱で多数の学生らが亡くなった。この日は「革命の日」と呼ばれる。軍事政権は倒れ、タノム首相らは海外へ去り、翌年十月新憲法が発布された。惨事の現場からはかなり離れていた郵便局本局にも兵が溢れた。

日本人会会報部長の重松景村や、花岡紅女、東柁村ら入会。山本みどりに数年遅れ山本良子が入会、この二人が後に古参会員となった。当時、横田画塾生(主に女性)が

画伯に誘われ次々俳句会入りした。彼女たちは帰国後、景村(郵)らと「東京メナム句会」、「マニラ句会」設立にかかわった。今も

メナム句会と東京の大河俳句会、マニラメール句会、岐阜あすなる俳句会との交流が続いている。

影絵芝居跳ねて昔の星月夜

多田 稔(一九七八)

テレビが普及していない頃、お祭りなどで催された南タイの影絵芝居は人々に親しまれた。

クリスマスカードまず来る難民より

川合多哥士(一九八三)

着ぶくれし人夫王宮掃き清め

川合万里子(同)

カンボジア難民のためのキャンプがタイにもできJVC(日本国際ボランティアセンター)が発足して手を差し伸べた。

メナム句会には戦争経験者、元兵士、タ

イ人と結婚した人、船会社、銀行、商社の駐在員、国際機関勤務者、その家族など、多様な人々がいた。毎月第二土曜日の夕方、日本人会に集い来て夕食を共にし、俳句を作った。それを後で当番が毎月ノートに記録した。

昭和五十年代、タイに長い保科南星、元衛生兵・町田茵萍いんぴんも加わった。古谷彰宏・多賀子夫妻は積極的に吟行を催し、彰宏は帰国前にチューローロンコーン大学で学生に俳句の講義をし好評を博した。

口の中まで負鶏を洗ひけり

古谷 彰宏(一九七九)

行けど塩田行けど塩田鱗雲

古谷多賀子(同)

み仏に誰が捧げしや野は早

町田 茵萍(同)

噴水や町の四方よもより眺められ

保科 南星(一九八二)

サリット(元帥)首相時代の遺物、大噴水は、今は見られない。

メナム句会 「タイ」を詠んで半世紀

山本良子、イーブン美奈子／共著

編集協力／大口堂遊

第二次大戦下のバンコクでは、在留邦人、軍属、兵士らも含めて各処で俳句の会が開かれた。

灯火管制万戸寂たり稲光

風流

遺書も書き遺髪も切りて月の卓

石橋 秋水(一九四四)



2010年8月1日「クローンスワン百年市場」吟行

このような戦中句も残した「盤谷俳句会」は、昭和十九年一年余に三十四回も句会を開き、毎回十二、三名、多くて十八名も参加した。敗戦で翌二〇年七月八日が最終日となったが、横田赤楊(仁郎画伯、ポチャン美術大教師)らは、バンブアトーン日本人収容所キャンプでも句会を開いていた。

日本人の強制送還後も百二十人余の同胞と共に残留を許可された赤楊は、戦後の貿易自由化で商社員がタイに復帰し始めた昭和三七年(一九六二)、駐在員・井上市三、篠原道明を迎えて日本人会で第一回俳句会を開き、タイに長く俳句に詳しい小沢丈夫、医師・芝一草、井上政利、黒田呉牛(ら熱心な仲間が集まった。会後は後に「メナム句会」と名付けられた。

医師・和田格、歯医者・西野みのる、それに東綿の西野順(順治郎。元日本人会長、タイの有名な小説『クーカム』を「メナムの残

照」として日本語訳したのほか、畑実サゴップら女性も参加した。

スコールや遙かの村を降りつつお

井上市三(一九六二)

訪へばまづ蘭棚へいざなはれ

西野みのる(一九六八)

団らんの赤きアロハや老飾る

西野 順(一九七二)

越冬のつばめ押しくら饅頭かな

黒田 呉牛(一九七三)

シーロム路は乾季にたくさん燕が飛来し、バンコクの風物詩の一つとなっていた。今は電線が地下に埋められ、燕は減っている。

寝叩きぼうふらの水汲んで行く

横田 赤楊(一九七六)

バンコクでも雨水を溜めておく大甕が一軒家の軒下に見られた。

昭和四十年代、電電公社関係、船会社の人たちも来タイして入会、養蚕専門家の青

講演をお引き受けくださった。その数カ月後に亡くなられたが、日本短歌界の偉大な歌人の最後の講演をバンコクでしていただけたことは、バンコク短歌会にとつて忘れ難い貴重な思い出として語り継いでゆきたい。

現在例会は、毎月第四日曜日に行われている。事前に幹事まで送られた一人三首の詠草の中から、各自五首を選歌する。当日合評。選歌の理由など意見が交わされ最後に作者名が明かされる。意外な種明かしにドキドキしたり、脱線したり。このやりとりがなんとも楽しく、苦しく、世界が広がる学びの場である。現在会員は三〇代から八〇代までの男性五名、女性六名。楽しい仲間の集う和気あいあいの会であるが、在タイ期間が限定されている駐在員やその家族も多く、会員確保が最重要課題でもある。

添削指導の先生のないバンコク短歌会では、日本の短歌コンクールに応募することが勉強の場ともなっている。毎年さまざまに短歌賞を受賞する常連の会員が増えていることは喜ばしい限り。短歌は難しい

イメージが先行しているかもしれないがまずは気軽に見学にお越しいただければ、楽しさが実感できるかも。年に数回は吟行にも出かけている。同じ場所と時間を共有し生まれる短歌の合評は貴重な思い出となつて、強烈に心に刻まれる素晴らしい体験である。初心者大歓迎！是非ご連絡を！

最後に会員たちの作品を紹介させて頂く。

秋の花えがくペン先祈りあり

木漏れ日のなか星野富弘

藍原 弘和 (二〇二二)

毒があるかも知れないと思ひつつ

君の指より受け取る林檎

イーブン 美奈子(二〇二〇)

君と行く月の広場という離宮

萌え立つ緑にとけこみたき午後

池田 けいこ(二〇二三)

季節なく咲き誇りるるタイの花

西行芭蕉は如何に詠むらむ

大口 堂遊(二〇二三)

真つ白のキャンバスに夢一つつつ描きてゆけば虹立ちにけり

大口 乃りこ(二〇二三)

真心をこめて書いたるこの手紙

海山越えて確かに届けよ

加古川 ミサ(二〇二三)

スコールの上がりし夕の大虹の

右橋脚はメコシより立つ

小玉 伸(二〇二〇)

泥んこでこてこてになるユニ

フォーム土と水にまみれ育つ子

鈴木 和子(二〇二二)

レリス目をくぐりぬけ来し陽光は

やさしくなりて母子ははこつつみぬ

竹田 伊波礼(二〇二三)

ダージリンの香に目を伏せた一瞬に

雲の羊の耳もがれゆく

森上 美恵子(第一歌集『夢幻無限』二〇〇二)

何もなく何も変わらず迎えたり

日差しおぼろにバースデイの朝

山田 一(二〇二三)

創設四十年 バンコク短歌会

森上 美恵子

タイに於ける短歌会創設者の一人の玉井慶子は、一九七〇年ご夫君の駐在により来タイ。当時日本人会文化部には、メナム句会が戦前からの歴史を引き継いでいた。句会に入会した玉井はタイに永住した元日本兵数名と知己になる。彼らの要望で一九七二年バンコク短歌会を創設。歌を始めた動機を次のように書いている。

「久しく半眠状態の詩ごころを、このタイの風土、社会によって、揺さぶり呼び覚まされたんです。それは人間の生き方、幸福感なども改めて考えさせられる機会をも合わせ持ちました」

その後一九七三年に、短歌新聞社より第一歌集『メナム行く』を刊行、タイ赤十字社賞を受賞している。その中の一首、

真直ぐゆく果てに。パコダの輝きて

背の大夕陽いまを濃く燃ゆ

もう一人の功労者である山本みどりは、東南アジア初の日本語週刊新聞「週刊バンコク」(現バンコク週報)社の創業者でもある。玉井と同じくメナム句会にも所属、共にバンコク短歌会を創設した。

ぎざぎざやごろんごろんや面白き

山容連なる泰緬の山

山本みどり(二〇〇〇)

一九九六年には、日本人会文化部長だった石平厚一郎(後に日本人会会長)の尽力のもと「倭万智講演会」がバンコクの日航ホテルにて開催された。直前の母堂の死を詠んだ一首に、倭万智先生が感銘を受けられたことが話題を呼んだ。

やすらぎのほゝを包みし白菊の

花びらゆれて母旅立ちぬ

現在の当会代表の森上美恵子は、その講演会を聞きに行ったことで短歌と出会う。七年後の二〇〇三年一月にインペリアルクイーンズパーク・ホテルで開催された「第四回国際交流日タイ短歌大会」(日本歌人クラブ主催)では、山本みどりとともに選者を務めた。講演者には日本から春日井建先生をお招きしたが、中咽頭癌の闘病中にもかかわらず、親交の深かった三島由紀夫の『豊饒の海』の、暁の寺を見たいと切望され



社交ダンス同好会

この度タイ国日本人会が百周年を迎えられましたこと、心からお祝い申し上げます。

私たち社交ダンス同好会も日本人会とダンスを愛する会員の皆様に支えられ20年以上共に活動を続けて参りました。日本人会の百周年を機会として歴史を訪ねてみました。



同好会が発足当時を知る方が、現在の同好会の会員の中においででしたので、伺ってみました。

— 社交ダンス同好会ができたのはいつごろのことなのですか？

Aさん:「1989年くらいのことではないでしょうか。もう、20年以上前ということですね。」

当時の同好会の活動はどんなだったのでしょうか？

Aさん:「日本人会の本館がサトーンにありますが、その会議室を借りて、同好会の仲間が集まって好きなダンス音楽のレコードやテープを持ち寄って、会員同士で教え合うという活動をしていたように記憶しています。1989年だと、映画『Shall Weダンス?』よりも前ですので、昔習ったダンスを持ち寄って気ままにダンスを楽しむという会だったように思います。本来、社交のためのダンスですので、新たに仲間加わった人の面倒を見

たり、ダンスが終わった後は一緒に食事したり飲んだりといった活動をしていました。」

— 現在の同好会の活動は、通常はダンス教室でプロのダンス講師に習うという活動ですが、個人的にダンス教室に通うというのとどんな違いがありますか？

Aさん:「個人的にダンス教室に通うというのは、ダンスをうまく踊れるようになるために習うわけですから、目的ははっきりしているし、時間に応じて教習料を払うことになりません。お金はかかりますが、ダンスがうまくなるためには、一番確実な方法だと思います。一方、同好会の活動は、プロのダンス講師に習うわけではありますが、個人レッスンを受けているのではないので、自分のダンスだけを講師が見てくれて、指摘、矯正してくれないので、ダンスの技術自体はあまり向上しないと思います。ただ、個人でダンスを習うと、基本的にダンス講師としか踊らないので、会

員同士で踊ったりする楽しみや、同好会終了後の打ち上げといったコミュニケーションは、同好会でしか得られないものではないでしょうか。」

—同好会の活動の苦労はどんなものがあるのでしょうか？

Aさん:「ダンスというのは、リーダーの男性と、パートナーの女性と、2人が踊るものですから、人数が適当に集まっていることが必要ですし、また、男女の人数のバランスも必要です。現在の同好会が通常の活動時間を土曜日の夕方6時から8時までとしているのも、平日ではなかなか男性が集まりにくいという理由で、男性会員が出席しやすい時間帯を選んで活動をしているからです。また、どんな同好会やサークルでも、そうだと思いますが、色々な思いを持って集まってくるメンバーを取りまとめる幹事さんの苦労はありますよね。」

20年の同好会の歴史の中には、時に会員が3名しか居ないという状況で存続が危ぶまれたという時期もあったようですが、その時々でご尽力してくださった先輩方の皆様のお陰で、現在は会員数20名を越え、ダンスをしたことがないという初心者からダンス歴数10年の会員まで、さまざまなメンバーが在籍しています。設立当時と比べると会の運営方法もかなり変わってきていますが、変わっていないのはレッスン後のビールの美味しさと会員同士の仲の良さでしょうか。世代を越えて仲良く和気藹々とした雰囲気があるのは、設立当初から私たちの同好会に受け継がれてきたものなのでしょう。

あるのは、設立当初から私たちの同好会に受け継がれてきたものなのでしょう。

さて、この機会に現在の同好会の活動を少しご紹介致します。週1回土曜日の夕方6時から8時までの2時間、現ラテンチャンピオンが活躍するダンス教室でプロの先生に楽しく習っています。時にはタイの現チャンピオンから教えて頂くこともあり、そういったときには、ダイナミックで美しい体の動きに皆感動しながら、そして何故自分はこうも違うのかと首を傾げながら習っています。種目はスタンダード5種目(ワルツ、タンゴ、スローフォックストロット、クイックステップ、ヴェニーズワルツ)とラテン5種目(ルンバ、チャチャチャ、サンバ、ジャイブ、パソドブレ)の計10種目を1年かけて習っています。1回のレッスンでスタンダードとラテンを一種目ずつ習い、数カ月毎に種目を変えていきますので、続けて参加していると一年後には知らず知らずの内に10種目のダンスが踊れるようになるという素晴らしい仕組みになっています。先生からステップを教わった後は、会員同士で実際に男女ペアになって順々にパートナーを替えながら踊っていきます。会員の中には普段ダンス教室で習われている方も、自宅で自主練をして頑張られている方も、色々なメンバーと沢山踊れるということで、この同好会の週一回の2時間を楽しみにしている方も多いのではないのでしょうか。普段のレッスンに加えまして、年に2回パーティ形式の発表会もあります。普段練習した

成果をこの機会にお互いに披露しています。ダンスホールを貸し切って盛大に開かれるこの催しは日本に本帰国された方も日程を合わせて来タイし参加されることもあるという程の人気行事です。希望者は会員同士、またはダンス教室の先生をご招待しての数分間のダンスのデモンストレーションを参加者の前で踊ります。同じことを日本でと思うと敷居が高くて仲々難しいですが、タイでは気軽にできるのが人気の秘密です。また、通常レッスンでは普段着や練習着ですが、この時ばかりは皆ドレスアップして紳士淑女になります。仲間のあまりの変貌振りに『え!?あの人誰!?うそ!?○○さん?』と分からなくなる場合もありますが、こういった非日常的な世界を楽しめるのも社交ダンスの魅力の一つです。

他にも社交ダンスの魅力は沢山あると思いますが、筆者自身が魅力と思っているのは何と言ってもペアで踊るということではないでしょうか。相手が居るからこそ苦勞もあります、二人で息が合った時は一人で踊るダンスには無い喜びがあります。一人でできないことも二人ならできる、二人でできないことも仲間が居れば楽しくできる!まだチャレンジされていない方、興味を持たれた方はこの機会に社交ダンス同好会に遊びに来て仲間と一緒にダンスの楽しさを発見してみませんか?

女子テニス同好会

タイ国日本人会100周年記念投稿

日本人会女子テニス同好会

澤田 登志江

タイ国日本人会百周年おめでとうございます。

テニス同好会から最年長者(年齢・在籍・在タイ歴)である私が同好会の思い出を書かせていただきます。

同好会の発足はいつかわかりませんが私が来タイした1996年3月にはテニス人口が多くて4月に入部手続きに行きましたらウェイテング



リストに名前を書かされて、ウェイテング番号は忘れましたが、当時は火曜日と金曜日の週二日活動されていて帰国する方がないと入部出来ない状況でした。しかも金曜日から入部し月例の試合でポイントを取らないと火曜日に移れなかったのです。60名位のメンバーで活動していて私が入部できたのは翌年4月でちょうど1年待たされました。

試合も毎月有り、年2回女子ダブルス、ミックスダブルス、親睦会(これは今も続いて居ります)と年1回のバンコクテニスクラブとの対抗戦(バンコクレディース大会)がクラブ持ち回りで開催されます。他のクラブからの招待テニス試合もあり活気に満ちて居り、私も週四回はテニスをしておりました。

日本の朝日レディース全国大会にもアメ

リカとアジアの代表が参加できて、バンコクとシンガポールと対戦して勝者チームが日本に行くことができ3年続けていくことができましたが、その後は日本だけになってしまい残念でした。当時の人達は皆帰国してしまい今は部員20名と寂しいかぎりですが、お世話役の方々ががんばって部員を増やす努力をされていて少しずつですが増えてきているようです。私も若い人達と一緒に健康維持の為無理せずのんびりとテニスを続けて行きたいと思います。

皆様も一緒にテニスをしませんか?毎週金曜日に活動しています。

日本人会がこれからも発展されていきますよう願います。

バレーボール同好会

タイ国日本人会が創立百周年という輝かしい記念の年を迎えられましたこと、心よりお慶び申し上げます。

当初金曜日に活動していたバレー同好会ですが、金曜日には参加できない男性の方々が集まり、現在の日曜バレーがスタートいたしました。



バレー同好会は部内大会、親善試合、日本人会バレー大会、アジア大会など目標を持ち、人と人の繋がりを大切にしながら活動をしています。

2002年にシンガポールで初めて開催されたアジア大会には、シンガポールからお誘いを受けたタイ国日本人会より「参加しませんか?」とお声をかけて頂き、参加した事がきっかけだったそうです。その頃に活動なさっていた方のお話では、アジアカップが2回目以降も開催されるとは思っていなかったけれど、アジアカップがあるからこそバレーの練習にも熱が入ったのでは、との事。

現在の日本人会バレー同好会はバンコク日本人学校の体育館をお借りして、日曜日の午前9時から12時まで男女混合部員32名で活動しています。体育館の外まで響く掛け声とボールの音は、誰もが覗きに来る有

り様です。女性の参加が多かった練習ですが、男性部員の参加も増え、練習には切れとにぎやかさが増えています。

初心者から経験者まで、仲間と一緒にバレーボールを楽しむことをモットーに、これからも長い日本人会バレー同好会の歴史をタイ国日本人会と共に歩んでいきます。

昨年の第11回アジアカップは男女共に優勝を獲得し、日曜バレー同好会の素晴らしい記念となりました。

バドミントン同好会

2012年度下半期部長

鈴木 真由美

当サークルは、バドミントン競技の技術向上、より健康に、より美しい心の豊かさと社会性を身につけ、併せて国際親善に努めることを目標として発足し、現在まで日々活動をしています。

練習は毎週月曜日、木曜日の2回、スクンビットソイ49にあるラケットクラブにて、A(上級)、

B(中級)、C(初級)のレベルに分かれて行っています。

部員数は36名、大勢で毎週楽しく練習しています。

部員は活動熱心な方が多く、練習が無い日にもタイ人コーチをつけて練習する姿が毎日のように見かけられます。年に部内で個人戦を2回、団体戦を2回行います。

大きな試合としては毎年6月と11月の年2回、個人の方、その他活動しているバドミントン団体との日本人会バドミントン親善大会を行っています。

年々レベルが上がり、現在大会に参加していただける人数は150人前後となりました。



今後ますます大きな大会になっていくであろうと、同好会みんな期待しているとともに、自分たちも負けないように日々練習を重ねていこうと思っています。

ラグビー同好会

ラグビー同好会会長
和気 良文

ラグビーをやりたい日本の若者共が、日高富士夫氏(来タイ1955年、タイ国日本人会名誉会員、現85歳)の呼びかけに集い、ボールを蹴り始めたのが、49年前になります。1960年代にBOI設置に伴い打ち出された産業誘致政策により、繊維・自動車産業などの立上げに当地にやってきた元気な日本の若者がそ



の中心です。そして、最初の対外試合は1966年の対チュラロンコン大学OBでした。この頃チームとしての格好がついたので、日本人会の運動第2部に入り、在タイ日本人ラグビークラブが誕生しました。しかしながら工場の立上げの仕事が終わると多くのメンバーが帰国し、深刻なメンバー不足になり、居残った面々も老い、組織的活動休止の状態が長い間続きました。そんな中、1989年に大国能彦氏(現61歳)が来タイし、部員集めから始め、練習・試合を組み、クラブを組織し、彼らの熱い思いが現在の日本人会ラグビー同好会の基盤を再び築き上げたわけです。1997年にバンコクで始めたシンガポール・香港チームとの試合は、Asian Japanese Rugby Cupという形で毎年アジアの都市で継続され、今年の第15回記念大会にはアジア各地から12チーム400人のラグーがバンコクに集いました。それ以外

にも、シンガポールとマレーシアの日本人会ラグビー部との定期戦、タイラグビー協会主催のリーグ戦など、年間を通しての活発な活動に至っております。また、2006年からは日本人学校の小学生を中心としたキッズラグビーも立上げ、今でも毎週日曜日に30名ほどの子供たちが大人の横で元気に走り回り、年に数回タイ人や欧米人と子供たちと国際親善試合を行っております。このように、年々クラブチームとして充実してきており、このクソ暑い地でラグビーに集う若者を長い間眺めてきた者として大きな喜びとなっております。

最後にこの、日本人会100周年を節目に、そのほぼ半分の50年近くの長い間に渡り日本人会を始め大勢の方々にご支援頂きましたことをこの場を拝借して深く御礼申し上げますとともに、日本人会の更なる発展に期待するものです。

タイ国日本人会創立100周年記念 卓球同好会の紹介

卓球同好会は、比較的新しい同好会で、「初心者でも安心、気軽に楽しめる、笑い笑顔の絶えない卓球」をモットーに活動しています。

現在の会員数は、男性が22名、女性が17名、子供が男女合わせて5名の合計44名で、主にタイに駐在されている方やその家族、長期滞在者等、幅広い年齢構成となっています。時には、事前に卓球同好会のHPを見て、観光等でバンコクに来られた時にビジターで練習に参加される方もいます。

会員の多くは、クラブ活動等での経験がありますが、タイに来て初めて卓球をされた方も数名います。

初心者の方については、経験者のコーチにより、基礎練習等を行っていますが、会員のそれぞれのレベルに応じて卓球を楽しんでいます。

主な活動は週2回の練習ですが、先ず、水曜日は、日本人会別館にて13時より16時まで、日曜日は日本人会本館にて9時30分より16時頃まで練習をしています。

当然ながら水曜日は女性中心、日曜日は男性と子供が中心の練習となりますが、どちらも卓球台が3台と会員数の割に少ないの



で、卓球台を片面ずつ使う練習とか、ダブルスの試合を中心にするとかで、工夫しながら多くの人が参加できるようにしています。

そして、日頃の練習の成果を発揮する場として、それぞれ月1回、最終週の水曜日と日曜日に同好会の公式試合として月例会を開催しています。くじ引きによってダブルスのパートナーを決め、総当たりの試合により、順位を競っていますが、優勝者には、優勝カップに名前を書き入れたリボンを飾るという栄誉が与えられます。なお、5回優勝すると記念のフラッグの贈呈や10回優勝すると記念のカップの贈呈をしています。

ちなみに、これまでに10回優勝の達成者は、水曜日で1名、日曜日で3名います。

その他には、半年に1回、水曜日と日曜日の練習参加者全員による交流会を開催し、試合やその後の食事会により、同好会内での親睦を図っています。

最後に、これまで個別にバンコクで開催された公式試合等に出場することもありましたが、今年はタイ国日本人会創立100周年記念イベントとして、7月にバンコクで開催予定の公式試合に日本人会卓球同好会としての出場を準備中です。これらを機に卓球を通して、タイ人との親睦を図れたらと考えています。

日本人会卓球同好会HP

http://www.geocities.jp/jat_pingpong/index.html

バンコク日本人走遊会繁盛記

偶々日本人が4人出会った。時と所は1995年11月第8回バンコクマラソンスタート前の人ごみの中であった。走ることが趣味のバンコク在住4人であり、マラソン談義のうちに話が同好会設立へと進み話がまとまった。それから1ヶ月余の準備期間で「1996年1月」バンコク走遊会の発足となったのである。以来今日まで

幾多のメンバーは変わっても会は途切れることなく発展し続けています。

暑いタイ国で走ることなど想像できなかった人がタイで思い切り走れると集まった集団が走遊会でそれが会繁盛の原動力です。日本人会運動第2部に属し、まだまだタイ国のランニング環境の十分ではない時代に日本人ランナーは色々な大会でタイ人ランナー達に走る手本を見せる役割を果たしたと言えます。

走る活動以外では毎月クルンテープ誌に「リレーエッセイ」を走遊会メンバーが分担してレポートし、タイ国のランニングに関する話題を日本人の皆様へ提供していたことは古い会員の方はご記憶があるかと思います。

数々の活動の中で特記すべきことは、



2006年3月に主催した我がバンコク走遊会10周年記念のマラソン大会です。日本人会をはじめ日系企業の各社、多くの日本人の方々、またタイ関係者の人達の支援に支えられ盛大に開催できたことです。趣旨はそれまでの10年間タイの各地で、タイ諸機関の主催するマラソン大会に多くのメンバーが参加させていただいたお礼にと開催したものです。男女の優勝者には無論ですが、男女の10歳刻み年代別1位～3位の入賞者に、特別に日本から持ち込んだ日本人形をトロフィーとして贈呈しました。1,700人を越えるタイ人ランナー達の驚きと喜びが今も鮮明に思い出されます。

今年で設立から17年、初代関会長、2代目荒川会長たち先輩の志を引き継ぎ現在

も”速いも遅いも無関係、楽しく走ってバンコク生活を楽しもう!”をモットーに活動を続けています。

現在走遊会の活動は、4月ルンピニ公園のソクランリレーマラソン、7月パタヤマラソン、9月カンチャンブリのリパークエーハーフマラソン、11月バンコクマラソンを走遊会指定4大会とし各大会には30名前後参加しています。また、これらの4大会には日本、フィリピンやベトナムなど海外からの走遊会の先輩会員の参加もあって大会の盛り上げに一役買っています。

「タイはマラソン天国」殆どの大会が当日申込み可。行きの中中で「今日はフルを走ろうか、ハーフにしようか」と贅沢に悩みながらの参加です。タイ各地で年間500を超える大会があり、毎週のように大会参加を楽しんでいます。

毎月第2第4日曜日午後5時半からルンピニ公園で練習会、練習会のあとは近くのタイ料理店で近況報告や情報交換などをしながら会食。走るのが1時間、会食はそれ以上という最近です。

毎週土曜日早朝ルンピニ公園やロッファイパーク、ときにはカオヤイやケンカチャン国立公園へ遠征しての特別練習会。そして毎年6月にチェンマイ合宿。

こんなこつこつと地道な努力が実り、2012年12月に行われたマレー半島の南リレーランニングで優勝することができ

ました。

会員の殆どが駐在員とその家族。健康のため、ダイエットのため、走ったあとのビールを美味しく飲むため、記録を伸ばすためなど、走る目的はそれぞれですが”走ること”を通じて限られたバンコク滞在を有意義に過ごしています。

太極拳同好会

泰国日本人会太極拳同好会

斉藤 芳隣

太極拳同好会は1991年に発足以来、会員相互の親睦と健康増進を目的に老若男女が、2013年の今日まで22年間、活動を続けて来ました。

この間、当同好会に所属し、共に、練習に汗を流し、日本人会文化祭に参加表演し、又、恒例の秋の旅行会に参加した、等の良い思い出を持って、日本にご帰国された会員の皆様は、1,000人を超えるのではないかと思います。

OBの皆様方とは、年に1回、東京にて、新宿の京王プラザホテルや品川プリンスホテル等で昼食会を催し、相互の近況や、バンコック生活の思い出話に花が咲いています。

更に嬉しい事は、OBの皆様が、旅行等でバンコックを再訪された際、数年ぶりで当会の練習に参加し、現メンバーと和気藹々で交流して下さる事と、又、OBの方々が、日本にご帰国された後でも、夫々の地元の太極拳クラブ等で、太極拳の練習を継続されている事です。

中国の北京市武術隊の”花”と言われた張宏梅先生(現在、米国のサンフランシスコ在住)に3回に亘り、バンコックに来て頂き、指導して頂いた事や、日本人会文化祭でも、本場のプロの見事な八卦掌や双剣を、特別表演して頂いた事も、忘れがたい思い出となりました。

太極拳は中国の誇りうる文化で、“国術”と



稽古中の風景

も言われておりますが、中国のみならず、日本も含めて、世界各地で愛好されるスポーツです。そのゆったりとした、無理の無い動作は、忙しい現代生活の中で、見失いがちな部分を補って、余りあると思います。太極拳の動作は、立身中正と言い、背筋を伸ばし、低い姿勢を保ちながら、ゆっくりと流れる様に動く動作が基本ですので、足腰の筋力と柔軟性を鍛える良い機会となります。

特に車での移動が主となり、歩く機会が減っている日常生活の中で、足腰の強化は健康増進/老化防止の原点です。そして継続することが”生命の力”になります。会員には70歳～80歳代の方も居られ、練習を楽しんで居られます。

当会の練習は日本人会別館にて、毎週水曜日(9時半～11時半)と、土曜日(10時～12時)です。皆様のご参加をお待ちしております。

クルンテープ剣友会、黎明期

クルンテープ剣友会は、2001年2月日本人会会員を中心にタイ在留邦人剣道愛好家のために設立された会です。今では日本人学校、バーンラック幼稚園、ラジャモンコン工科大学ポピピムック・キャンパス等で定期的に稽古会を主催し

て、剣友会員とその仲間、初心者も経験者も皆が楽しく交剣知愛の汗を流しています。

実のところ、我々のタイにおける剣道活動はその10年以上前の1998年に、やがてタイランド剣道クラブを創設する数人の仲間たちでスタートしました。最初はスクムビットのダンススタジオを時間で借り、そこを道場として稽古をしていました。ただ、床を踏み抜いたり、壁に竹刀で穴を開けたり、また大声を上げる等で敬遠され、稽古を開始して1年ぐらいいましたが、スクムビット界隈で我々を受け入れてくれるダンススタジオがなくなってしまいました。

その後、あちらこちらと道場となる場所を探して何年もの間ジプシー状態を経験。国立競技場、ラムカムヘン、チュラロンコーン、カセッサート、ポピピムックの各大学、ビッグCの屋上やバンコク中央駅近くのバトミントンコートなどなど。また、時々有る「剣道を習いたいけど…」の問い合わせには、「場所を提



供してくれるなら喜んで教えましょう。」と、剣道の出前のようなこともしばしば行いました。中でもアメリカ大使館職員専用コンドミニアムのスカッシュコートは1年近く使わせてもらいました。剣道を習う大使館職員の本人が「今日は都合が悪い…」という日はむしろ喜んで「問題ないけど、場所は使わせてね!」(笑)と自分たちの稽古を楽しんだものです。バトミントンコートの経験も数年間でしたが今は懐かしい思い出となりました。ラジャダムリ通りワールドトレードセンター向かいのビッグC屋上バトミントンコートの場合、中ぐらいの体育館に40センチ四方の窓がたった一つだけ、ホント。バトミントンに風は禁物というのがその理由でしょうか。そこを日曜の午後2時～5時まで割安で借りました。スレート屋根で保温効果抜群のそれも一番暑い時間帯。だから誰も来ない＝割安の理由。そこは改築で取り壊すまでの1年少々利用させてもらいました。その時の

会員の誰もが、「世界中のどんなに過酷な環境でも剣道ができる。」と自信を持っていたと今でも確信しています。その後紆余曲折を経て、I S Bで数年間、そして今の日本人学校へとたどり着いた訳です。

これからも、あの時代の経験を忘れず、そこに道場が有って稽古ができるという、今ではごく普通のことを、有難いと感謝し、剣道を教える側も学ぶ側も、立場は同じと認識し奢らないよう心がけたいと思っています。最近新しく剣会員になられた方、これから会員になられる方々には、是非とも知っておいていただきたいクルンテープ剣友会とタイランド剣道クラブの黎明期です。

創立

2001年2月14日、タイランド剣道クラブ(1994年世界剣道連盟加盟登録)から派生して誕生。現在同クラブとは姉妹クラブの関係にある。

剣友会の趣旨

タイ国在留邦人剣道愛好家(主に日本人会会員、現在会員数約50名)による剣道活動、定例稽古会を通じて会員間の親睦を深め、定例剣道大会・剣道審査会の実施運営等タイランド剣道クラブの活動に率先協力しタイ国の剣道発展に寄与する。

活動日

水曜日／バーンラック幼稚園(スクムビット・ソイ40) 午後7時～9時

土曜日／ラジャモンコン工科大学ボピピムックキャンパス 午後2時～5時
タイ日協会学校(シラチャ校)
午後3時～5時

日曜日／タイ日協会学校
(バンコク日本人学校)
午後3時～5時30分

級段審査会(タイランド剣道クラブとの共催)

年3回(4月、8月、11月)

剣道大会(タイランド剣道クラブとの共催)

年3回(フレンドシップ剣道大会、タイ中部地区剣道大会、中根杯)

海外遠征

アジア剣道大会香港(毎年)、アセアン剣道大会(毎3年)、世界剣道大会(毎3年)など

連絡先:081-889-3151(志井)e-mail:
shii@loxinfo.co.th

ヨガ同好会

森上 美恵子

ヨガ同好会は1996年に日本人会運動第二部の同好会として活動を始めました。現在月、水、金の週三回別館で午前中に活動しています。月、金はマタニティヨガもあり、当地バンコクでヨガ仲間から数百名の元気な赤ちゃんが誕生しています。



ヨガの基本は「小食」「小眠」「多動」です。腹八分目を心掛け、身体を良く動かし、熟睡することができれば、澁刺とバンコク生活をエンジョイすることができます。

海外で暮らすというのは、時には孤独で、ストレスも多く、体調を崩しやすく、健康の大切さを実感することも多い日々です。仲間存在も大切です。海外暮らしという共通の境遇でのさまざまな苦勞を分かち合い、励まし合って、集まれる場があることは幸せなことと感じます。

身体と心の健康を目指すヨガを実践することで、生き生きと楽しく日々を過ごしませんか。ヨガは老若男女を問わず、どなたにでもできる健康法です。身体が固くても大丈夫。

夫。続けることでさまざまなポーズも出来るようになり、その変化に驚く日が必ずやってきます。呼吸法も取り入れた、やさしく、穏やかな動きです。一回毎の参加が可能です。是非ご一緒に今日から始めてみませんか。ご参加をお待ちしています。

水泳サークル

2012年度下半期部長

鈴木 真由美

タイ国日本人会創立百周年おめでとうございます。

常夏の国で年中泳げる環境にあり活動場所である日本人学校のプールは長水路で、有意義な練習が可能です。入部泳力チェックをパスした部員たちは、タイ人コーチによる指導のもと泳力別のクラスで週3回の活動をしてい

ます。顧問の先生方、保護者の協力を得て安全で楽しく厳しい練習に励んでいます。学期ごとに記録会を行い、タイムを計測して日頃の練習の成果を試す機会を設け、クラス昇級判定をします。

また、現地の水泳大会に選手として参加する機会もあり、応援にも力が入ります。他チームの選手との交流も言葉の壁を超え素晴らしい経験となっています。部員OBも、日本または諸外国において現役活躍中です。

日頃の厳しい練習のほかには、お楽しみ会を学期ごとに取り入れ、学年を超え楽しくゲームをして普段の練習では見られない部員達の様子が伺えます。なかでも全員本気リレーは、たいへん盛り上がります。

寄稿にあたり現部員にアンケートを行いました。水泳は、大好きまたは好きで、大半は就学前に水泳を始めていました。入部の



動機は、泳力向上と体力作りが多く次いで水泳大会に参加することでした。得意泳法の多くは、クロールと平泳ぎでした。普段の練習については、楽しくて厳しいと感じている部員が大半でした。

目標は、記録更新とクラスの昇級で、水泳大会に参加することを目指しています。これからは、学年やクラスの違う仲間たちと過ごす貴重な時間の中で、泳力の更なる向上を目指し、心身を鍛え、水泳大会にみんな楽しく参加したいという結果を得ました。水泳サークルの活動に関わっていただいている方々に感謝の心で、バンコク生活の一部として良き思い出となるよう、「泳心精進」をモットーに水泳サークル一丸となり邁進する所存です。

タイ国日本人会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

テニスサークル

私たちテニスサークルには、初級者から上級者まで、さまざまなレベルの部員がいます。幸い、素晴らしいコートが四面もあるので、部員たちはレベル別にコーチの指導のもと、思いきりテニスを楽しむことができます。

学期に一度の部内試合を始め、年一度のジュニアトーナメントに出場する機会もあります。試合をすることによって、自分の弱点が変わり、さらにレベルアップすることができます。入部した頃はサーブが上手く出来ずに泣いていた子供たちも、数年経つと立派に成長して今では下級生たちに指導が出来る様になりました。

テニス是一生できるスポーツです。子供の頃から、そんなスポーツに出会えた子供達は本当に幸せ者です。そして、2ヶ月に1度、ソイ26にありますAPFアカデミーで無料レッスンを行っております。学校のテニスサークルとはまた違った内容で個人個人を丁寧に教えていただき感謝しております。



最後になりましたが、今回の写真は2012年11月17日(土)に行われたジュニアトーナメントの写真です。涙あり、笑いありの素晴らしいトーナメントでした。

演劇サークル

『はっきり ゆっくり 大きな声
で みんなで創ろう ひとつの
劇!』

演劇サークルでは毎回、活動の最後をこの言葉でしめくります。サークルのキャラクター「演子(えんこ)ちゃん」はサークル発足当時、画家の阿部恭子先生にデザインしていただいたものです。定期的にデザインを新しく変えているサークルTシャツには必ずどこかに「演子ちゃん」が入っています。今後もずっと大事に引き継いでいきたいと思えます。

年に2回の自主公演や部内発表に向けて日々、劇の練習、発声やダンスのトレーニングに励んでいます。さまざまな学年の子どもたちと一緒に、1つの作品を作り上げる達成感や感動を体験できます。

観る側から表現する側に来てみませんか?きっと想像以上に楽しいはずです!メイクと衣装に身をつつみ、ステージ上でスポットライトを浴びてみませんか?

—子ども達のサークル活動についての感想—

- いろいろな役ができる。
- いろいろな衣装が着れる。
- みんなで力を合わせることができる。



演劇サークルの部員

- 必ず役をもらえるから、うれしい。
- お客様がたくさん来てくれる。
- お友達が楽しみに観に来てくれる。
- お客様の反応がうれしい。
- 自分にとってお芝居以外にも得るものがある。
- ドキドキするけど、終わったあとはうれしい気持ちがいっぱい。
- 拍手がうれしい。
- 有名人になれる?
- お友達ができる。

など、いろいろな体験ができます。ぜひみんなと一緒に演劇しましょう!

バレーボールサークル

バレーボールサークル 指導者
増尾 克実

06年にバレーボールサークル外部コーチとして指導するようになりましたので、私の関わったここ数年の活動状況を報告します。練習は火・水曜が1時間、金曜が2時間程です。土日・休業日は設定されていませんので日本の学校と比べると練習時間はかなり少なくなります。日本人学校でのサークル運営には保護者の世話役さんが大きく関わ



ります。ボール用具・消耗品の購入、会計・学校側・担当先生との連絡調整、下校時のバス乗車管理などを当番制で行っています。活動は中学部・小学部に分け指導し、現在は40名ほどの女子だけのチームです。以前は男子も参加していましたし、男女混合で練習します。チーム目標を「試合・大会参加の出来るチーム」に育てるとして指導を始めました。当時は対外試合・公式戦は9月頃行われるタイ文部省大会(14歳以下のタイの全国大会)に特別枠で参加できる可能性があるだけでした。参加を予定し練習・準備しても、大会情報が不確実で大会日程が直前連絡となったりします。06・07年は参加出来ましたが、08年はいつの間にか中止となってしまい残念な思いをしました。そこで当てにならない公式戦・大会参加にこだわらずに地

元の学校との交流戦・親善試合を定期的に行えるように方針の切り替えを提案しました。実現に向けて世話役さんに相手校探し、学校の許可などの折衝、調整をお願いし、先生方の協力を得てチュラ大付属校との試合が実現しました。それをきっかけに地元校との定期的な練習試合の道が開けました。今年度は年間計画の中になるべく多くの対外試合を組む方針としました。世話役さんのネットワーク、手早い手配・取りまとめのお陰で、7月Sai Nam Peung校、Wat Prasri Mahathat校、9月Hallow International School、10月チュラ大付属校、11月Wells International School校との試合が次々に実現し試合経験を積むことが出来き、技術的にもモチベーションも大いに高まりました。

タイ人バレーボールプレーヤーとの国際

交流も深まりますし、タイスタイルのバレーも体験出来ました。昨年度よりバレーボール同好会の理解・協力をいただき、1月の日本人大会への中学生の参加を認めてもらい参加しています。試合設定は練習目標が具体的にになり、格段の進歩・成長が期待できます。限られた時間・条件ですので充実した練習には効率化や工夫が必要ですが、一手間掛けることにより、新たな展開が開け改善されます。今年度の実績を生かして、練習試合・定期戦が定例化して行くことを望んでいます。

野球サークル

日本人野球サークルは、現在中学部20名小学部29名が所属しています。

所属部員は、日本人学校の生徒が100パーセントですが、ご両親が日本人会の会員であればどの学校の生徒でも入部することができます。

練習場所は、日本人学校のグラウンドで、中学部、小学部に分かれて活動しています。

日本のクラブ活動では、小中が同じ場所で練習することはほとんどないでしょう。サークル活動中に、中学部のボールが小学部の練習場に飛び込んでしまうことなどがあり、けがをしないかと常に注意しなければなりません。

けれども、小学部の子供たちにとって、中学部の部員は、身近なあこがれの存在です。早くあんなふうにならなりたいなあと、思うお手本が目の前にいるというのは、目標が持ちやすくなると思います。

バンコクの野球練習は、日本のように恵まれているわけではありません。毎日とにかく暑いので、集中力を切らさずに練習するのが大変です。雨期の時には、練習中に大雨が降り中止になることもしばしばです。



また、野球人口が少ない国の為、対戦相手がわずかしかなりません。試合の数が少ないどうしても練習する目標が持てなくなってしまう。

問題点をあげるときがありません。あれがないから、これがないからできない、ではなくて、創意工夫して野球を続けていっています。

指導してくれているのは、日本人学校の先生方、バンコク在住の方々にボランティアで参加してくださっています。

子供たちにとって、親、クラスの担任以外の普段あまりかかわることのない大人の方々の存在は、とてもいいことだと思います。

野球のことだけでなく、人生にとって大切

なことなど、親が言ってもなかなか伝わらないものです。そんな時に、近くの大人たちが言ってくれれば、子供の心にすっと落ちることがあるものです。

サークル活動を続けていく中で、保護者の協力というのは不可欠で、ときに面倒だなと思うこともあります。仕事、家事、他の兄弟の習い事などで忙しい毎日ですから。でも、子供たちが、困ったとき支えとなる近くの大人に出会うには、私たち大人が普段から協力しネットワークを作ることが大事なのかなと思います。

子供たちには野球を通じて、しんどいなと思うその一歩先の努力をする心の強さ、人から言われたことを言われた通りにこなすのではなく、自分の頭で考え行動することの大切さを学んでほしいと思います。

剣道サークル

「タイ国日本人会」創立百周年おめでとうございます。日本人会のご支援により、多くの子供たちがサークル活動に参加できることを心より感謝しております。

剣道サークルは、現在4名の指導者と日本人学校の教員7名、上は中学3年生から下は小学3年生までの部員数17名で成り立っています。上級生は下級生の面倒見が良

いのも剣道サークルの良いところです。指導者の中で最も長くサークルに携わっている先生は、今年で14年になるそうです。以前は50名程の部員にウェイトイングの状態の時期もあったと聞いていますが、それ以前の活動や発足の時期などの詳細は確認できませんでした。しかし、現在まで活動が存続しているということは、歴代の指導者の剣道に対する熱い思いと途切れることなく指導を引き継いで下さった先生方の努力なくしてはありえないものだと感謝しています。

以前は入手困難だった道着や防具もインターネットの普及により随分と手に入れやすくなりました。今はタイで注文、発注して一時帰国の際に持ち込むこともできます。部発足当時は、海上自衛隊の剣道愛好家の方々



がタイへ向かう船中で自分達の道着を縫い繕い、日本人学校に寄付して下さったエピソードもあると聞いています。

また、剣道指導者の先生方は、常に子供達のことを考えてくださっています。技術の向上だけではなく、大きな声での挨拶や武道に取り組む姿勢、相手への思いやり、困難や怠惰な気持ちに負けない精神的な強さ、部活動を続けていく継続力を育むべく努力していらっしゃいます。そして何よりタイという異国の地でも日本の武道である剣道を存分に楽しみ、「大好き」な状態で日本に帰国できるよう、子供達の気持を第一に汲んでご指導くださっています。

次に、年に二回、十月と二月に昇級審査と十二月に剣道大会があります。子供達はこの審査と大会をいつも楽しみにしています。当

日は、緊張した空気の中「面!」「胴!」の音が体育館に響き渡ります。終了後は、子供達一人一人の級が発表されるのですが、昇級できた子の得意げな顔、昇級できなかった子の悔しい顔を目の当たりにし、見ているこちらまで胸が詰まってしまいます。試合とは常に自分と向き合うことそして自分の力を信じ挑戦し続けられる人が本当の勝者であると思います。

最後にいずれ本帰国または別の土地へ移る可能性を持つ子供達だからこそ、剣道サークルでの出会いや絆を大切にしたい、そしてどんな場所に行っても剣道が大好きで剣道を続けて欲しいと願っています。

柔道サークル

今年の夏、ロンドンでのオリンピックで多くの感動を我々に届けてくれた国際的なスポーツ「JUDO」。我々はより源流に近い基本理念を“精力善用”“自他共栄”とした日本の「柔道」を学ぶべくサークルとして活動しています。そして、子供たちは勝ち負けにこだわらぬ前に、礼に始まり礼に終わる日本の伝統も柔術とともに吸収し、心身ともに日々成長を続けています。

現在活動している子供たちはタイが初めての海外生活という子もいれば、フランスやブラジルで長期間生活した経験を持つ子も居り、本サークルは柔道を通じて日本を学習、再発見すること場となっております。

柔道部の指導をしてくださっているのはバンコクに在住されている有段者の方々や日本人学校の教職員の方々です。礼儀作法に始まり、受け身などの基本もきちんと行うため、子供たちは怪我をすることもなく、性別や年齢差、体の大きさに関係なく「柔能制剛」という合言葉の通り柔よく剛を制する取り組みを楽しむことができています。

年に2回ずつ行われる、昇級段審査や部内大会などを短期的な目標において活動しているため毎回良いモチベーションで練



習に取り組むことが出来ており、保護者もそれらを通じて子供たちの成長を実感し、充実感を味わうことが出来ております。

活動は金曜日と土曜日に集中していますが、様々な年齢層の指導者、小学低学年から中学生までの子供たちが一緒に一つのことに取り組むことで、現在の日本では少数派になってしまった大家族を疑似的に形成し礼儀作法にとどまらず前述した基本理念を自然と身に付けて行っているように感じられます。

受け身の上達とともに技も吸収し、今までは投げることのできなかつた指導者までも投げ飛ばすことが出来るようになり、その自信が他人への優しさとして発揮でき、彼らを強い人間へ育てているのだと思います。

このように素晴らしい活動、日本人学校

の中学生は今年から授業で柔道を実施しています。道着ひとつで参加できる活動です。女子メンバーも複数名活動中です。少しでも興味を持たれたら是非とも柔道サークルを見に来てください。体と精神を成長する理想的なサークル活動の一つです。是非、一緒に活動しましょう。

バスケットボールサークル

泰国日本人会100周年おめでとうございます。

バスケットボールサークルでは、ボランティアコーチとしてお仕事の合間に指導をして下さるお二人のコーチのお言葉を寄稿させていただきます。



《小生と日本人会の関わりは”

泰日日本人学校”のサークルから始まりました。

2000年のバンコクバスケット大会でローカルの学校のお手伝いで引率した際、日本人学校のコーチで前日本人会理事の 原多正信氏との出会いからでした。

登校サークル初日は見学しておりましたが、中学部16名の生徒のみの活動で、時間・規律が守られなくただ時間が過ぎている状態でした。しかし、練習のなかで技能面と精神面の組み合わせから始め、3～4年後には 描いたチームらしさが出来上がりました。

2006年頃から部員数が増えピーク時は90名を超えました。男女4名のコーチが手分けし基礎を築き上げたのがこの時期です。翌年の文部省大会では、中3年生15名

から12名を選ぶ、難しい選択もありました。コーチ陣の勇み足から、保護者からの苦情、コーチが辞退したのもこの時期でした。しかし、選考からもれた3名が制服のままベンチ裏で大きな声援を送り、チームの一体感を感じた感動の瞬間でした。

その後、保護者世話役との意思疎通を図る会を設け、子供達の成長の為の協力体制が出来現在に至っております。

サークル活動を通じ、挨拶や思いやり、家庭で出来る”躰”なども合わせて指導していき、今後も”輝き”の顔の生徒達を大勢送り出して行きたいと思えます。》

《私は日本人学校のバスケットボールサークルのOBです。サークルでは学問だけでは勉強できない、チームとしての行動する規律や挨拶をすること、諦めない気持ち、

仲間への思いやり、努力することの楽しさを学ぶことが出来ました。私自身まだまだ未熟ですが、少しでも自分がバスケットボールというスポーツを通して学べたことを生徒達に伝えたいと思い、現在は小学部のコーチを担当しています。生徒にとってサークルでの活動が良い経験と大切な思い出になるよう、これからもコーチとして応援とサポートをしたいと思います。》

現在、サークル活動の中で、タイの学校・インター校との交流試合など海外校ならではの経験をさせて頂いています。私達保護者は、子供たちが日本とほぼ同じようにスポーツが出来ることに本当に感謝しております。

当サークルを代表しまして、泰国日本人会のますますのご発展をお祈りしています。

サッカーサークル

百年前と言えば1913年、大正時代が始まったばかりの頃です。そんな昔からタイ国日本人会が存在していたとは正直言って驚きました。皆さんどのような活動をされていたのでしょうか。百周年を迎える年に会員としてお祝い出来ることを大変嬉しく思います。

さてサッカーサークルですが、活動を開始したのは今から30年前になります。20年前から指導して下さっているコーチによりますと、当時はコーチ2名、部員80名の規模で、地元サッカーチームと頻りに交流試合を行っていたようです。

現在は部員数が少し減りましたが、コーチは4人に増え、部員一人一人に目が行き届いた指導がなされる体制になっています。また地元交流の伝統を継続し、地元サッカーチームと定期的に試合を行い、子どもたち同士の交流を促進しております。

サッカーサークルの特色のひとつとしては、小学校3年生から中学校3年生までの幅広い年齢層の子どもたちが一緒に活動していることです。学期末には全学年の混合チームで対抗戦を行い学年を越えた部員同士のつながりを深めるなど、大変雰囲気の良いサークルとなっております。



年間行事として、浦和レッズハートフルクラブによるサッカースクール、タイ文部省大会に参加しております。また2012年は、Jリーグ/TPL共催フットボールクリニックにも参加することができました。Jリーグがタイプレミアリーグ(TPL)とパートナーシップ協定を結んだことから開催されたもので、それを通じ幸運にもJリーグ・アジアアンバサダーである丸山良明氏とお知合いになることが出来ました。それ以来日本人会サッカーサークルの活動に時々ご指導を頂いております。

丸山氏は、「バンコクにいる日本の子ども達は、公園など体を自由に動かすことが出来る場所が身近にないため環境が良いとは言えませんが、JリーグとT P Lの提携によりJリーガーが来タイし、プロサッカー

選手のプレーを間近で見れるチャンスが多くあります。」とおっしゃっておられます。クリニックに参加したり、丸山氏に直接ご指導頂けるのも日本人会サッカーサークルならではのことであり、子ども達には恵まれたチャンスとともに成長していってほしいと願っております。

これからもサッカーサークルの特色を生かし、地元の子ども達やサッカー関係者の皆さんとの交流を通じ、日タイ親睦の一助となるべく活動を継続していきたいと思っております。

茶道サークル

2012年度 茶道サークル世話役部長

棚橋 美保

タイ国日本人会100周年おめでとうございます。

100年と言い言いしても、1世紀もの永きにわたり、このタイの地で日本人の先人の方々が活躍され、日本人同士の交流の場となり、またタイとの架け橋となって来られましたことを思うと、一言では言い尽くせない程のご努力があったの事実と心から感謝しております。



さて、青少年部茶道サークルでは、裏千家淡交会バンコク支部からお二人の先生をお招きし、心のこもった丁寧な指導を受けています。部員はお点前やお茶道具の扱いについてはもちろんのこと、日常生活での立ち居振る舞いや季節の知恵などたくさんのお話を学んでいます。

毎年恒例の行事としましては、お茶会、炉開き、初釜があります。

お茶会では、例年、多くのお客様をお迎えし、部員たちの普段の稽古の成果を見ていただいております。お点前をする子、お客様の前で口上を言う子、お運びをする子、お茶のいただき方を説明する子、お客様をご案内

する子等、一人ひとりが役割を分担し、一生懸命取り組んでいます。

今年はいにく場所の都合で、日本人学校内での規模の小さなお茶会となりましたが、数名の先生方にもお越しいただき、緊張した中にも、和やかな雰囲気は無事終えることができました。

炉開きは、夏の暑い時期から冬の寒い時期へ季節が移り変わる11月頃に行う、茶道の中でも重要な行事です。お道具の1つ1つも、夏のものから冬のものへと入れ替わり、お茶の点て方も変わります。これは、寒くなるこの時期に、少しでもお客様が暖かくなるようにという配慮から由来するものです。部員たちは、このような行事を通して、ここタイではなかなか感じられない日本の季節の移り変

わりの美しさや、相手に対する思いやりの心を学んでいます。

初釜は、新年のお稽古の始まりであり、新たな心で、1年間無事にお稽古ができるようお願いを込めて行います。毎年、お正月にちなんだ遊びも行っています。かるた取りや福笑いなど趣向を凝らし、みんなが和気あいあいとした雰囲気の中、楽しいひと時を過ごします。

日々のお稽古は毎週金曜日、楽しいながらも真剣に行われています。中でも季節の美味しい和菓子とお抹茶をいただく時間は格別です。また、部員は学年を超えて全員仲が良く、お互い教え合ったり助け合ったりする姿が自然と身に付いています。これも「和敬清寂」の心を学んでいる茶道サークル部員ならではの姿ではないでしょうか。

茶道サークルでは、新入部員を随時受け付けております。小学3年生以上のお子さんなら誰でも入部することができます。裏千家のお免状も取得可能です。興味のある方は是非一度、見学にいらしてください。部員一同、心よりお待ちしております。

ご見学希望の方は、茶道サークル世話役までご連絡ください。

ブラスバンドサークル

私達ブラスバンドサークルは現在41名の部員と学校の先生方、指導者の方々と一緒に火曜日、金曜日そして学校のある土曜日にサークル活動を行っています。

ブラスバンドサークルでは今夏はプリディパノムヨンにて単独コンサート、12月は日本人会文化祭への参加、そして三学期には校内コンサートというふうに年に数回、発

表の場を設けています。部員達はみんなで作り上げた曲を演奏して多くの方々に聞いてもらう事を目標に一生懸命練習に励んでいます。

今年度は日本人学校からお借りしている楽器が足りなくなるほど入部希望者が多く、新入部員も増えて各パート充実した練習が行えています。

大所帯のバンドになり演奏に厚みもできてうれしいのですが、苦勞していることもあります。例えば、今夏のコンサートでは部員全員が舞台上上がることができず、舞台下に黒台を設置してそこも舞台の一部として使用することで対処しました。また、部員数の増加に伴い練習している部屋の中で様々な楽器の音が混ざり合ってしまう自分の音に集中することが難しいという点も課題と



なっています。

しかしほんの数年前には部員数が足りず、吹奏楽の経験のない保護者も一から楽器の演奏方法を学び、子供達と一緒にコンサートに参加した事もあったそうです。

部員の大半が保護者の仕事の関係でバンコクに住み日本人学校に通う小中学生です。このため部員数の増減はその年によって大きく異なり、演奏レベルも一定に保つことは難しいですが、音楽が大好きな子供達で作られているサークルなのでどんな時でも活動には前向きそして意欲的に取り組んでいます。

また部員たちがバンコクで演奏活動ができるのはいつも快く協力して下さる指導者の方々、学校の先生方、日本人会の皆様、多くの方々に支えて頂いているおかげです。

部員一同心から感謝しております。
今後もコンサート等の色々な発表の機会を
得て、部員たちががんばっている姿と美し
い音楽を多くの方々に見て聞いて頂けるよ
う活動していきたいと思ひます。

空手道サークル

タイ国日本人会の創立百周年、誠におめでとうございます。これからも、ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

空手道サークルは、日本人会青少年サークルの中で最も新しいサークルで、1986年に12名の部員でスタートいたしました。その発足に大きく携わったのが、現指導者でもある貞廣鉄夫先生です。貞

廣先生は、日本古来の武道である空手道をタイ国内に広め、優秀な選手を数多く育ててこられました。当時、父兄からの要望もあり、日本人学校に通う子供たちのために、空手の技術を身につけるだけでなく、礼儀を重んじ、心身の鍛錬と人格形成を育み、タイの青少年との友好親善を図ることを目的として、サークルを立ち上げられたそうです。その際には、日本人会の方々に多大なるご協力をいただいたと伺っております。

サークル発足当時は、タイの情勢も不安定で、練習場所の確保が大きな問題でした。日本人会の屋上を練習場所として利用させていただいたこともあるそうです。その後、今の本部道場となるソイ・ルアムルディにある学校施設を道場に構えました。しかし、今以上にひどい渋滞で、練習時間に間



に合わない生徒が続出したため、日本人学校の施設をお借りして、練習するようになりました。以降、練習も十分に行うことが出来るようになり、大会においても優秀な成績を納めることが出来るようになりました。当初は、土曜日を含む週2回の練習を行っていましたが、学校週休2日制に伴い、練習時間の確保が難しくなって参りました。しかしながら、多いときには70名程の部員を抱え、常に30名程の部員数を維持し、今に至っております。

現在、空手道サークルは、4名の師範と6名の日本人学校の先生方にご指導いただき、日本人学校にて、平日週に2回、土曜日に月2回程度の練習を行っております。部員24名のうち女子部員が3分の1程を占め、部員同士の仲も良く、楽しく活動させていた

だいております。

本サークルは、年間行事が大変充実しているのが特徴です。通常年に2回行われる昇級審査、合同合宿、対外試合への出場、日本人会文化祭への参加、納会、三部合同鏡開き、部内試合などです。

昇級審査は、型、組手の技術を見るだけでなく、日頃の練習態度も考慮されます。礼儀を重んじる武道の精神が磨かれているかどうかを見るのです。空手は、白帯から始まり、黄色、緑色、青色、茶色、黒色と帯の色を見ればそのレベルが一目瞭然ですので、子ども達にとってもわかりやすく、帯の色が上がることは、次のステップを目指す励みにもなっているようです。

毎年恒例のタイ剛柔会空手道の合同合宿は、年間行事の中でも特に大きなイベントです。タイの学校施設をお借りして行われ、タイの代表選手も参加する程レベルの高い合宿で、有段者も多数参加し、子ども達にとって、大きな刺激になります。空手道サークルは、小学二年生から入部できますので、低学年の子どもも多いのですが、大人に混じって、早朝から普段は寝ている夜の時間帯までの練習は、大変つらいものです。しかし、集団生活の中から得られるものは多く、合宿終了後には、全ての子ども達が一回り成長し、大きく見えます。技術の向上はもちろんのこと、達成感と自信が生まれ、その後の練習につながるのです。

空手道サークルは、全泰国空手連盟、全

泰国空手道剛柔会に所属しており、それぞれの主催する大きな大会に毎年出場しています。今年度の大会においては、優秀なタイ人選手が多く参加する中、多数の入賞者を出すことができ、大変盛り上がりました。普段は見られない子ども達の緊張した表情、集中力、時折流す悔し涙、どれも試合ならではのものです、試合ごとに大きな成長が見られます。

日本人会主催の文化祭には、発足当初から参加させていただいております。基本の型や、難易度の高い美しい型の演武、試合形式の組手の披露など、日本人学校の先生方にもご参加いただき、見ごたえのある内容となっています。また、一般の方に、空手道を知っていただく大変よい機会で、子ども達にとっても、練習の成果を発表できる場として、大変貴重な経験をさせていただいております。

毎年年末に行われる、剛柔会主催の納会は、その一年に感謝し、皆揃って餅つきをしたり、お汁粉をいただいたりと、大変楽しいイベントです。普段は会う機会の少ない本部道場の方たちと交流できるよい機会となっております。

三部合同鏡開きは、武道の精神でつながっている、柔道、剣道、空手道の三サークル合同で行っています。来賓の方々をお招きし、一年の始まりに、普段はなかなか見ることのできないお互いの技や演武を披露し合います。武道三サークルの交流の場とし

て、また、お互いを刺激し合う、貴重な機会
となっております。

年度末に行われる部内試合は、1年の練習の成果を具体的に評価できるよい機会です。外部から審判をお招きし、部員同士で本格的な試合を行います。1年間一緒に練習してきた一番身近なライバルとの本気の勝負ということで、子ども達にも力が入ります。

長い歴史の中で、今はタイの情勢も安定し、このような毎年恒例の行事を行うことが出来ること、また安心して空手の練習に打ち込めることに感謝し、これからも、健やかな青少年の育成のお手伝いが出来れば幸いです。

写真で見る日本人、日本人会史



1. 王室皇室交流



2006年(平成18) プミポン国王陛下御在位60周年記念



プミポン国王陛下と天皇皇后両陛下



1931年(昭和6) 箱根の富士屋ホテルでのラーマ7世歓迎宴



1964年(昭和38) 天皇后両陛下(皇太子時代)ご来タイ



1964年ご来タイ当時の美智子妃殿下とシリキット王妃殿下



2012年(平成24) 皇太子殿下ご来タイでインラック前首相と(突然の雨)

2. 戦前、戦中の日本人と日本人会



日本病院 (丸内)三谷初代会長



バンコクの王宮近くにあった日本人商店「大山商店」



日本人の常宿だったシーロム路にあったバンコクホテル



三谷初代会長(右端)と家族



左からリー、先生、タンブージン・カチョーン・パロット、駐日タイ公使夫人、ピット、先生、ヌワン初代留学生(東京にて撮影)



1897年(明治30) 初代駐タイ公使 稲垣満次郎



初代駐タイ公使夫人・稲垣栄子



1904年(明治37) 女子教育のためにタイ政府に招聘された安田てつ(中央)と助手の中島とし(左)、河野キヨ(右)



矢田部保吉公使(昭3~11年まで駐タイ国特命全権公使) 歴代公使・大使のなかで異例の8年もの長きにわたりタイにとどまり日タイ親善のために尽くした功績は高く評価されている



地方を訪れた矢田部公使(左から2人目)と夫人 昭和初期



1941年(昭16)に開設された
タイ南部のソクラー日本領事館



ソクラーのサムロー(瀧川先生夫人)



1936年(昭和11) ソンクラ回生医院の薬局



滝川医院



左からリー先生



サートーンにあった大義神社



1943年(昭和18)頃 大義神社での結婚式



ミスタ일랜드・コンテスト



ニューロードを行進する日本の軍楽隊

日本人会学校



1936年(昭和11)2月 アユタヤの遠足



昭和14年の日本子弟



1940年(昭和15) 日本人学校



1942年(昭和17) フワヒンの臨海学校



1940年(昭和15) 日本人会・日本人学校合同運動会

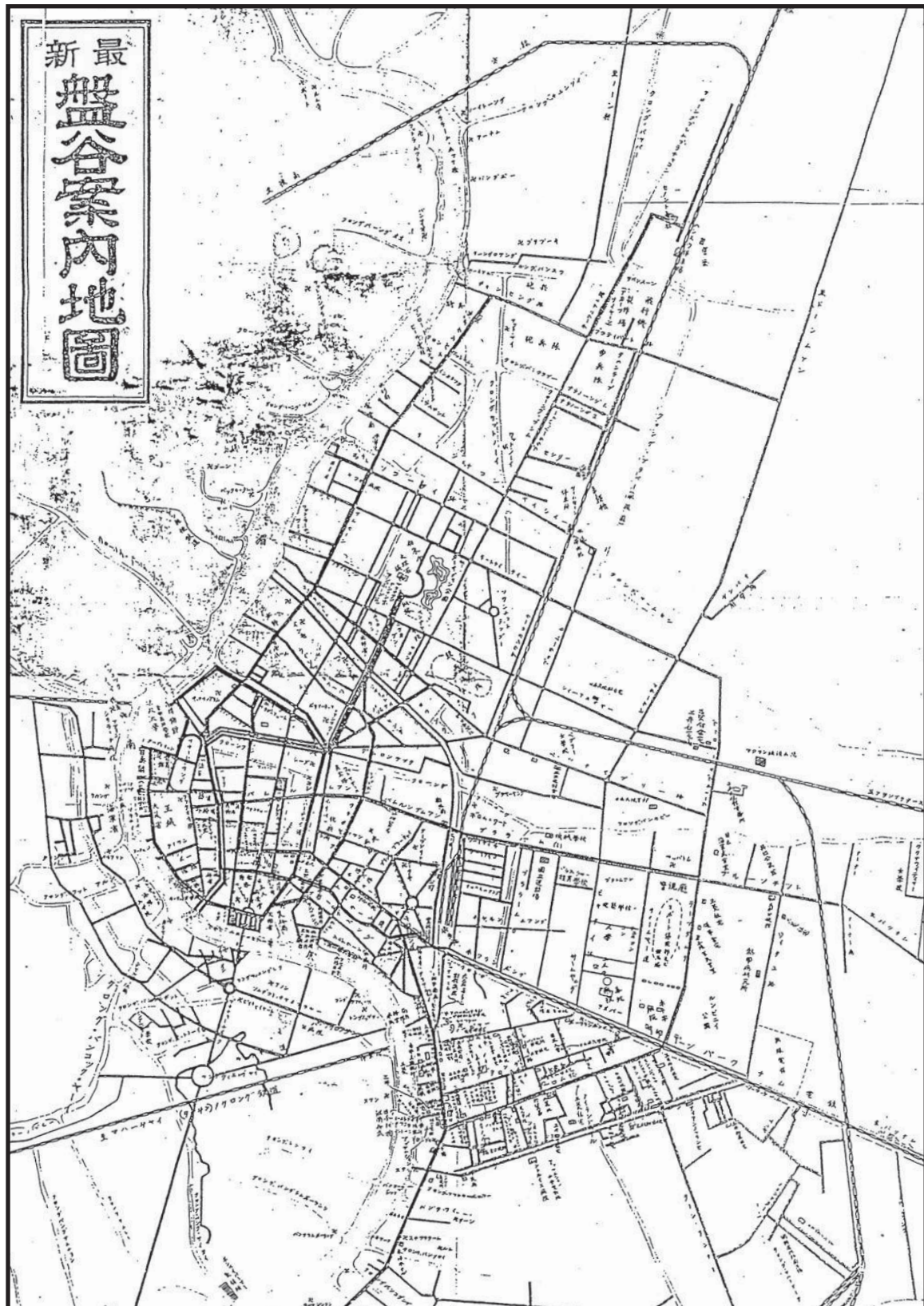


盤谷日本国民学校 第4回卒業記念写真



1945(昭和20) 盤谷日本国民学校最後の卒業式

昭和17年当時の盤谷



バンブアトーンキャンプ(日本人収容所)



グラフィックデザイナー里見宗次さんがスケッチしたバンブアトーンの第三キャンプ風景

3. 戦後の日本人と日本人会



1978年(昭和53)10月 洪水・スクムビット通り



日本人学校のバスを待つ家族



スクムビット通り



スクムビット通り



スクムビット通り プラカノン周辺



1972年(昭和47) 後列右から日高秋雄氏、瀧川虎若氏、前列中央、西野順治郎会長



2011年(平成23) 成人祝賀会



1987年(昭和62) 第1回盆踊り大会



2009年(平成21) ラムウォン盆踊り



日本人納骨堂(大峽会長・当時)



1987年(昭和62)3月 タイ国日本人会納骨堂建立50周年記念法要団並タイ国在留邦人と共に(ワット・ラーチャプラナ本堂正面にて)



2000年(平成12)5月 高野山旅行



ワットリアップ



高野山真言宗タイ国開教留学僧の会一行をお迎えワットリアップ本堂(最近の写真)



2010年(平成22) ケンコイ寺「日本人移民之碑」



バンブアトーンキャンプ見学の途中の運河にて



バンブアトーンキャンプ出身 朝丘ルリ子さん
レストランにて



世界救世教サラブリ聖地見学



ケンコーイ寺にて(中央:泉花枝先生)



2011年(平成23) 得度式



2009年(平成21) 日本人納骨堂



滝川ホームにて



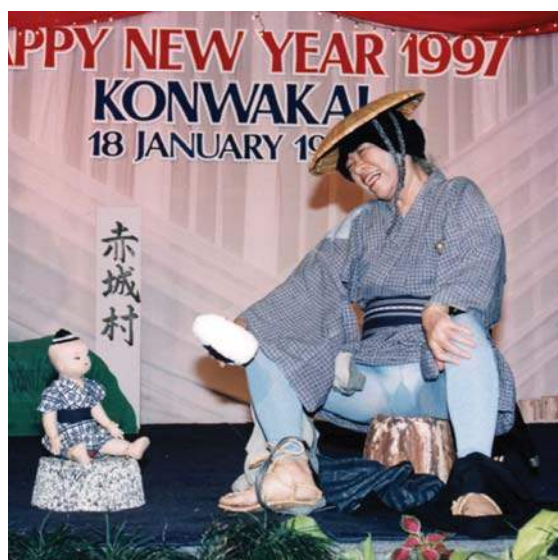
滝川老人ホーム



1996年(平成8) 敬老の日祝賀会・敬老の日の集い



2009年(平成21) 敬老の日祝賀会



1997年(平成) 懇和会新年会



2009年(平成21) 懇和会「タイと日本の国籍法について」



2010年(平成22) 懇和会新年会



2011年(平成23) 懇和会新年会



1996年(平成8) 演劇・コーラスジョイントコンサート



ABK & AOTS Alumni Association (Thailand) 30周年記念式典



2009年(平成21) 婦人部王様プロジェクト



2009年(平成21) 文化祭



2009年(平成21) わんぱく夏祭り



2009年(平成21) バイリンガル七夕



2009年(平成21) ソフトボール大会決勝選



2009年(平成21) チャリティーゴルフ大会



2010年(平成22)
小倉百人一首バンコク
かるた大会



2010年(平成22) 小倉百人一首バンコクかるた大会



2010年(平成22) 文化祭



2010年(平成22) 文化祭



2011年(平成23) 歌謡コーラス



2011年(平成23) 洪水対策



2011年(平成23) 感染症講演会



2011年(平成23)バイリンガルの子供のための日本語同好会



2011年(平成23)バイリンガルの子供のための日本語同好会



2011年(平成23) レインボー幼稚園からの寄付



2012年(平成24) タイ知る講演会ラーマ
キエン



2012年(平成24) 小倉百人一首バンコクかるた大会



2012年(平成24) チャリティーバザー



2012年(平成24) ソフトボール大会



2013年(平成25) 餅つき大会

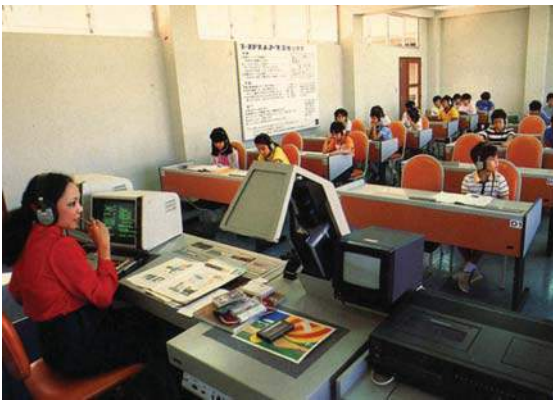
日本人学校



初期の泰日協会学校



泰日協会学校



泰日協会学校



泰日協会学校



泰日協会学校教職員



泰日協会学校昭和62年度入学式



最近の泰日協会学校全景



2010年(平成22) バンコク市内の街並



2010年(平成22) セーンセーブ運河のエキスプレス
ボートサービス



功労賞を受賞した日本人会会員と理事ら、2013年度定期総会にて



2013年度理事



タイ国日本人会70周年記念式典



タイ国日本人会80周年記念式典



タイ国日本人会90周年記念式典・文化祭



1996年6月18日 タイ国日本人会別館(スクムビット)のオープニングセレモニー



2013年9月6日 100周年記念祝賀会

日本人会各部の活動



婦人部活動について

婦人部長
中野 哲也

婦人部の活動の歴史は古く、日本人会が戦後再発足した頃から活発な活動を続けており、全ての女性会員を対象に、バンコクでの生活を豊かで実りあるものにし、会員同士の親睦を深める機会を提供して来ました。また、女性ならではの細やかな気配りで、日本人会主催の様々な行事をサポートしています。この伝統は、今日まで受け継が

れ、企画・運営も全てボランティアの皆様が中心となり、タイムリーで、かつ女性ならではの視点で、懇親会、講演会、講習会、社会見学会、新春の集い、コンサートなどの様々な行事を、ほぼ毎月開催して、参加者の関心を惹きつける活動としております。

初めて海外での生活をされる方から、長年タイで過ごされてきた方まで、まじめに、献身的に、力強く活動をされてきた多くの女性の方々に支えられて、今日の婦人部の活動が絶えることなく継続しているのだと、強く感じています。

本年度の活動の中から、主な活動のいくつかを紹介します。

① ウェルカムパーティー(5月28日開催)

主にバンコクで生活を始めて1年以内の



方々を対象に、不慣れな海外での生活をスムーズにするコツや、バンコクで生活していく上での様々な知恵を、女性ならではの視点で、サポートし、交流の場を提供していくために開かれる懇親会です。多くの参加者の方からも、友人作りのきっかけとして役立っているとの声をいただいています。

② 医療講演会(7月30日開催)

バムルンラード病院内科医として活躍されている、百武加恵(ひゃくたけかえ)先生をお招きして、タイで生活する上で役にたつ、身近な病気についての心得をお話いただきました。タイの状況を良く知りながら、日本人の感覚でわかりやすく説明いただき、安心感を持ったとの声をいただいています。

③ チャリティーバザー(10月12日開催)

日本人会100周年を迎え、在住者をはじめ多くの方々が楽しみにしているチャリティーバザーで、委託店のマネージメントから、当日の会場での進行サポートまで、多くの婦人部のボランティアによって、支えられ、昨年にも増して盛況なバザーとなりました。



④ 花王工場見学(10月22日開催)

本年度、いくつか計画された工場見学の一つです。39名の方が参加され、バスで花王マタ工場を訪問し、毎日身近に使っている、洗剤やシャンプーの製造のようすを見学し、大変興味深い、有意義な工場見学でした。



紙面の都合で、全部の活動を紹介できないのが残念ですが、この他にも、本年度は、ミニ音楽講習会(4月)、JAL訓練センター見学(6月)、エコ①講演会「タイの環境問題」(6月)、ユーカリリース講習会(9月)、ティーパーティー(11月)、写真講習会(11月)、エコ②ヤマギシ農園見学(12月)、クリスマスコンサート(12月)、工場見学(1月、3月)を企画、開催しております。



青少年サークルについて

青少年部長
黄 偉健

青少年部には、現在12のサークル活動があります。水泳、テニス、バレーボール、野球、剣道、柔道、バスケットボール、サッカー、茶道、ブラスバンド、演劇、空手。

サークル所属者は、406名(2012年2月時点)。泰日協会バンコク日本人学校の小学部2年生から中学部2年生までの生徒のほか、インターナショナルスクールや他の学校の生徒、タイ人の子供達も参加し、会員の子供達の生活に欠かせない、スポーツ、音楽、演劇、趣味のサークル等の活動を行っています。

心身の鍛錬と親睦を図ると共にタイの学校との交流も図っています。

泰日協会学校の多大なるご支援とご協力の下、公式の大会やコンクールへの参加をはじめ、サークル内の発表会など、泰日協会バンコク日本人学校の先生方(113名)、世話役の皆様(55名)を中心とした保護者の方々や熱心な指導者の方々(51名)のご協力で充実した活動を行なっております。

明日を担う青少年の皆さんには、是非何かに打ち込むこと、続けること、克己の精神で自らに打ち勝つこと、そして活動を楽しむことをして頂きたいと願っています。

先輩方のその様な営みの積み重ねが、日本人会の百年の歴史に体现されており、今

後も継承されて行くのだと思います。青少年部のサークル活動に、是非ご参加下さい!

広報部の活動について

広報部長
宮治 豊

日本人会広報部の活動を紹介します。当
広報部は主として4つの役割がございます。

1.“入会のしおり”の中身の充実及び年間 予算内にての発行

ご存知のように日本人会への入会者の数
は現在7500名を越えて未だ増加し続けて
おり、そうした新規会員殿への絶好の案内
書とも言うべき同“入会のしおり”は会員殿
にとって絶好の入門書とも言えこの内容の
拡充を他の関係理事他の皆様と連携して
UPDATEしてゆく任務を背負っております。

2.“HOMEPAGE”の中身の充実及び拡充

言うまでもなく、昔と違ってITの発達した
昨今、日本人会の活動内容をHOMEPAGE
を通じて知ろうとされる会員、非会員
(POTENTIALな会員)の数はタイ国、日本
国中心に相当数おられ、こうした方々が月
間5000件程度アクセスして来られます。
(13年10月現在)

日本人会としては2011年4月より
HOMEPAGEを現在のような形式に刷新し
会員皆様の使いやすい、情報の入手しやす
い物に少しでも近づけてゆくべくUPDATEし
てゆく任務を負っています。又最近では月
報“クルンテープ”誌もこのHOMEPAGE上で

閲覧可能となっております。

3.緊急連絡(SMS)の登録推進

2013年10月現在500名強の皆様が同会
緊急連絡網に登録戴いており、主として日
本国大使館他から発信されます緊急連絡
等を会員ご自身お手持ちの携帯端末にて
即時受信出来るようなサービスも開始して
おります。

過去直近の実績でも東日本大地震時、タ
イ大洪水時、タイでの反政府集会関連の注
意喚起情報等をの発信を行なっております。

4.大使館を初めとする関係諸機関との連 携、情報交換窓口

広報文化連絡協議会(月1回、大使館、
JCCC、日本人会にて回り持ち開催)に出席
の上、関係諸機関との間で日本人会開催行
事を中心とした情報の情宣活動を行なっ
ております。

関係諸機関とは、日本国大使館、国際交
流基金、JETRO、JNTO(日本政府観光局)、
JASSO(日本学生支援機構)等です。

こうした取り組みを通じてタイでの日本
人会及びその活動の存在を広く会員及び

会員外の日本人、タイ人その他在タイの外国人等に知らしめ、以ってタイでの日本人社会をよりタイ国及びタイ人に深く知ってもらい、両国間の友好に直接的 間接的に貢献してゆくという大きな任務を負っています。

すくすく会 及び 厚生部の活動について

厚生部長
前田 恒明

厚生部に於ける主な活動、特に若い会員の皆様のニーズにお応えし幅広い活動を行っております、「すくすく会」に関しまして説明させていただきます。

厚生部の活動は一言で申しますと「会員の皆様の福祉、厚生面での向上に貢献する活動」です。「メイドさんの紹介、相談サービス」、「小児育児相談会」、「成人の日の祝賀会」、「バンコクすくすく会」等が具体的な活動内容です。

「メイドさんの紹介、相談サービス」は1974年(昭和54年)4月1日より使用人斡旋相談部が日本人会婦人部の皆様によって始められたサービス活動です。今年で34年目を迎えます。一時的ではありますが運転手紹介のサービスもしておりました。現在のサービス部員は3名おられます。交代で毎週月曜日の10:00~12:00迄相談サービスを行っております。尚、現在の名称「メイドさんの紹介、相談サービス」に変えましたのは2013年1月からです。

続きまして「小児育児相談会」で御座います。今年度の活動をご紹介致しますと、海外医療基金(JOMF)、サミティバート病院のご厚情とボランティアの方々のご尽力によりまして、2013年2月10日~11日の2日間に亘り小児個別相談と歯科相談を開催させて

頂き、約100名の方にご参加戴きました。

「成人の日祝賀会」に関しましては毎年、20歳になられた会員の方をお招きし「成人の日」に祝賀会を開催しております。本年度2013年は1月14日に3名の方をお招きしお祝いさせていただきました。その中の1名が日本人会100周年パーティーで振袖姿も艶やかに祝辞を述べられたのをご記憶の方も多いと思います。

さて「バンコクすくすく会」ですが特に若い会員の皆様のニーズにお応えし1996年に発足した会で、ボランティアの皆様の力で幅広い活動を行っています。活動はソイ39の別館を拠点として行っています。2013年10月末現在で会員数252名、その内ボランティアのスタッフの方は72名在籍されております。活動グループは、「出産準備母親教室」、「おっぱいミーティング」、「わんぱくミーティング」、「離乳食ミーティング」、「さくらんぼミーティング」に別れそれぞれの活動を行っております。日本を離れタイで出産、子育てをされる方、特に初めて海外に来られた方にとってこの「バンコクすくすく会」は力強い心の支えになっています。

各グループの具体的な活動内容を説明させていただきます。まず「出産準備母親教室」

ですが対象者は在タイの妊婦さん及びそのご家族です。日本で上のお子さんを産んで来られた方もいらっしゃいます。活動内容は妊娠から出産までをタイの出産事情と合わせて勉強します。日本では中々出来ない水中出産や無痛分娩等の出産方法も紹介しております。奇数月には出産準備母親教室を行い、出産に関し最低限求められる基本内容を2回に分けて(基本的には第1、2水曜日)勉強します。第一回目の内容は「妊婦検診と処方される薬、妊娠中の栄養管理、出産準備品、フリートーキング」で第2回目は「分娩までの流れ、バースプラン(アクティブバースを含む)、出産後の手続き、予防接種、タイでのお産事情など」です。偶数月には特別プログラムとして初産の方を対象とした「両親学級」と「特別教室」を開催します。「両親学級」の内容は「タイで出産に立ち会った父親体験談、おむつ交換、沐浴のデモンストレーション等です」、「特別教室」は「妊婦さん、産後のママを対象にしたアマロベビーマッサージ、色々な泡っこ紐の使い方の講習」です。

「おっぱいミーティング」は対象の方を妊婦さんと授乳中のママにしております。活動内容は「妊婦さん」に関しましては、母乳育児をスムーズに進める為に母乳のメカニズム、産前から始める母乳マッサージ、ケアの仕方や授乳時の抱き方を実技を交えてスタッフがマンツーマンでお教えます。「授乳中のママ」に関しましては、座談会形式で

お母さん同士の交流をし、出産後の母乳育児に於けるトラブルの対処法や卒乳の相談等、代表例を挙げてお話します。又、「母乳相談」に関しまして、トラブルやその他、母乳に関するご相談を随時メールで受け付けております。

「わんぱくミーティング」は対象者が新生児から入園前までの乳幼児とお母さんですが、次の3つのグループに分けております。グループには分けていますが希望あれば全てのグループに参加可能です。「コアラグループ:ねんね〜こしすわりのお友達中心」、「ペンギングループ:はいはい〜たっちのお友達中心」、「うさぎグループ:たっち〜あんよのお友達中心」。活動内容は手遊び歌やゲームで簡単な自己紹介をしながら一緒に遊んだり、情報交換をします。夏祭りやクリスマス会等のイベントも行っています。

「離乳食ミーティング」は対象の方を生後3ヶ月以上の乳幼児とお母さんにしており、活動内容は、タイで買える食材や食品を使っての離乳食について一緒に勉強します。試食をしたり様々な果物を毎回テーマにして紹介したり実物のパッケージを使っての詳細説明も行っています。疑問に思っている事や一人で悩んでおられる方も多いかと思いますが皆で一緒に解決して行きたいと思っています。

「さくらんぼミーティング」の対象者は双子又は多児出産予定のご家族です。年に2回、開催しており主に情報交換をしながら、

簡単な歌やゲーム等で楽しみ子育ての輪を広がっています。

以上が「バンコクすくすく会」の活動内容の紹介ですが、子供は日本の財産であり宝です。日本の将来は子供に託されています。又、三つ子の魂百まで、とも申します。「バンコクすくすく会」は日本の将来を背負う子供たちを安心して出産、育児して頂くよう今後も活動を続けて行く所存ですが昨今、ボランティアスタッフの数が減っております。是非皆様の積極的なボランティア提供を厚生部、事務局、ボランティアスタッフ一同お待ちしております。

以上

クルンテープ誌について

会報部長
稲富 哲夫

会報部及び会報誌「クルンテープ」の生い立ちや歴史については、巻頭の村嶋英治教授ご執筆の通史に記載されており、かつ本文の中で安藤浩氏、川満富子氏が触れられ、山本みどり氏の遺稿の中でも記述があるのでここで再度触れることは避けるが、創刊は1968年であって今年で創刊45周年である。当初の発行部数は記録に残っていないが、当時の日本人会会員数が1,347名であり、現在と同じ世帯に一冊であるとすれば1,000部強程度であったと推察される。

当時は現在のように日本語情報誌が氾濫していることもなく、ましてやインターネットの発達などはまだまだ先のことなので、タイにおける日本人社会に大歓迎され、日本人会に入会することのメリットの常に上位を占めていたそうである。

現在のような情報過多の時代の中で、「クルンテープ」がタイにおける日本人社会の中で占める比率や役割も徐々に変化してきているが、先達の方々から受け継がれてきた編集の精神は今も綿々と受け継がれて来ている。

『タイ国在住の日本人会会員を中心とする日本人に、タイ国日本人会ならではの幅広いネットワークを活用して、

- 1、興味深く、読んで楽しくかつ有用な記事を作成し、
- 2、見やすくわかり易い紙面構成で提供し、
- 3、会員のためのサービス向上の一助とするとともに、
- 4、日本人会の活動の記録、広報の機能を果たす。』

主な掲載内容は、

- 1) タイの日本人社会に向けた時事、文化、歴史、社会等の特集記事
 - 2) 文化、歴史、社会を中心とした連載
 - 3) 日本人会行事、各部、同好会活動報告、作品発表
 - 4) 投稿記事、写真
 - 5) 泰日協会学校便り、生徒の作文や絵画
 - 6) 理事会議事録
- などである。

フリーペーパーではないので、2万～3万部／回という発行部数にはさすがに合わないが、現在の発行部数は5,900部余り。初刊からのバックナンバーはつい最近電子化されて日本人会事務局に保管されており、近日中にホームページで閲覧できるようになる予定。資料としても是非活用していただきたい。

ゴルフ部の歴史と 運動第一部の活動について

運動第一部長
近内 保利

タイ国日本人会ゴルフ部は、日本人会の中でも半世紀を超える長い歴史を有する部活動であり、ゴルフ部の栄誉ある伝統の維持および継承に努めるとともに、スポーツとしてのゴルフの技術やマナーの向上に寄与し、あわせて会員相互の親睦を図りタイ社会との交流により親善に努めることを目的としています。ゴルフ部は日本人会運動第一部に所属しています。

ゴルフ部の活動は1961年に始まり、最初の時期はアーミーとバンプラGCが使用されてきました。その後、1966年からはバンプラGCのみとなり、1976年からサリカGC、1978年からサイアムGC、1994年からロイヤルGC、2001年からプレジデントGC、2007年からマウンテンシャドウGC、そして2009年からスパブルックGCとなり現在に至っています。

活動内容としては、月例会に加えて、1961年からクラブチャンピオン戦、1971年からはグランドマンズリー戦、1999年からはクラブカップ戦、2005年からはシニアチャンピオン戦を始めています。さらに、二年に一回チュラロンコン大学OBゴルフ部が主催する、タイ国アマチュアゴルフの団体

対抗戦「ゴールデンプラケオカップ」に外国人チームとして唯一日本人会ゴルフ部が招待されています。また、毎月1回ゴルフ部委員会が開催され、月例会の運営や各種大会の実施準備などの打合せが行われています。

日本人会員相互の親睦やタイ社会との交流・親善を目的としたゴルフ大会も開催されており、チャリティーゴルフ大会(1973年に第一回大会開催)、タイ国元日本留学生協会との親睦ゴルフ(1993年から開催開始)、英国人会との親睦ゴルフ(1971年から開催開始、1985年から本多カップとして第一回大会開催)、チュラロンコン大学OB会との対抗戦、出身地別対抗戦「東西対抗」などの運営に永年にわたり中心的な役割を担ってきています。

ソフトボール大会について

運動第二部長
神島 清司

タイ国日本人会が創立100周年を迎えられましたことは、運動第二部会といたしましても、慶賀の至りです。これからも、在タイ日本人とタイ国の絆を一層深めるべく、諸活動を推進してまいりたいと思いますので、会員の皆様方の一層のご理解・ご協力をよろしくお願い申し上げます。

さて、当部会の大きな行事の一つに、ソフトボール大会があります。かつては野球大会として開催されていましたが、1976年に第1回大会が開催され、本年度で実に第37回を数える、タイ国日本人会としても、大変歴史のある活動です。

本年の参加チーム数は30チーム、選手数は600名を超えており、おそらく各国の日本人会で開催されるスポーツ大会としては、世界でも類を見ない規模とレベルのものであると自負しております。ちなみに、2006年からは、「一般リーグ」と「選抜リーグ」の2リーグ制を導入し、一層の盛り上げとフェアな闘いを図られるようにしております。

その一方で、各チームの自主・相互協力による試合運営、熱戦・激戦の中にもアットホームな雰囲気には満ちている点は、タイ国日本人会ならではの温かみのあるところ・素晴らしさではないでしょうか。

ソクランの酷暑も一段落ついた7月初には予選リーグが始まり、雨季の中、10月までリーグ上位チームによる決勝トーナメントが行われます。4か月の間、毎日曜日に日本人学校のグラウンドをお借りし、試合を行っております。お国柄、雨天延期ということもしばしばあり、大変長期間にわたってグラウンドをお借りしていただいておりますが、この場をお借りして、多大なご理解・ご配慮をいただいている日本人学校の皆様方に、あらためて厚くお礼を申し上げたいと思います。

なお、本年の大会結果につきましては、7月7日の開会式・リーグ開幕戦を皮切りに、10月13日の決勝戦で幕を閉じましたが、大きな事故等もなく、無事に運営することが出来ました。特に雨季の試合日早朝には、毎回グラウンドの水取りをするなど、両チームの選手が協力して準備をしていただき、安全かつスムーズな大会運営をしていただきました。今後とも、こうした手造りの良さを活かしながら、かつ改善できる点は工夫を重ねて、より良いものにしていきたいと思っております。

最後になりましたが、こうした活動が続けられますのも、日本人会事務局の皆様方のご尽力によるものであり、また様々な方々からのご支援の賜物であると感謝いたしてお

ります。

これからも、当ソフトボール大会が一層の盛り上がりを見せ、タイ国日本人会の主要活動の一つとして末永く続いていくことを祈念いたします。

<ご参考：2013年大会結果>

◎選抜リーグ

優 勝：アパッチ

準優勝：S P I D E R

◎一般リーグ

優 勝：ウォーリアーズ

準優勝：三井ソフトボールチーム

チャリティーバザーについて

チャリティーバザー実行委員長

古澤 実

毎年9月～10月に開催しているチャリティーバザーは日本人会伝統行事のひとつで、2013年度で第42回を迎えました。

協賛企業、団体、個人の皆様方からの寄附の他、会員の皆様の自らの手作りによる作品もあり、準備や当日の運営は多くのボランティアの皆様方のご協力により行なわれています。

会場には日本人のみならずタイの人々も大勢ご来場戴き、開場前から長い行列が出来るほどです。

このチャリティーバザーの収益は、全てチャリティー基金に繰り入れた上、タイ国内の孤児施設、障害団体への寄附や奨学金に使用されます。

• 2013年度は、10月12日(土)に第42回チャリティーバザーをインペリアル・クイーンズパーク・ホテルにて開催致しました。バザー会場には2000人近くご来場戴き、大盛況でした。

当日は齊藤次席公使にもご臨席頂き、ご来賓の挨拶も頂戴しました。

◎ 2013年度チャリティーバザー

総収入計：1,531,942.25バーツ

商品寄付団体：125社

手作り作品出品団体：12団体

延べボランティア

お手伝人数：270名

入場者数：1,978名

チャリティー基金について

チャリティー基金運営委員長

八亀 博

タイ国日本人会は、タイ国の文化的向上及び経済的発展に貢献する為、チャリティーバザー等のチャリティー行事による収益と有志の方々からの寄付金を原資として、タイ国の孤児施設、障害団体などに対し寄付活動を実施してきております。当チャリティー基金運営委員会は、それら寄付金等で蓄えられた基金を運営、管理する委員会です。

活動内容としては、各施設及び団体からの寄付要請に対し、当運営委員会にて対象先、内容、金額の妥当性を個別に審議し寄付の実施を致しております。

今まで本基金を利用して、タイ赤十字、聾唖協会等への寄付の他、2004年のスマトラ沖大地震による津波被害や2011年の洪水被害への支援を行なってきました。

今後は、更に有効に教育支援資金(奨学金、図書館関連資金)として、或いは孤児院、貧困児童・障害児施設などに寄付して日本人会ならではの新たな取り組みも検討・実施してゆきたいと考えております。

ラムウォン盆踊り大会について

ラムウォン盆踊り実行委員長

北野 俊勝

ラムウォン盆踊り大会は、日本人会が主催する原則2年毎に開催されるイベントです。

ラムウォン盆踊りを開催するに至った経緯については、100年史製本版126ページ、第48代会長 石平氏が寄稿されておりますが、日本人会の設立趣旨に沿った日・タイ交流並びに友好を深める大規模なイベントを開催し、より多くの方々に参加していただける大規模なイベントを実施したいという思いから、タイの“ラムウォン”と日本の“盆踊り”を組み合わせたお祭りを開催しようということで企画されたのが始まりです。

記念すべき第1回ラムウォン盆踊り大会は、1987年2月にチュラロンコン大学の校庭で開催され、日本人をはじめ、多くのタイ人の方にも参加いただき、来場者は当初の想定2千人を遥かに上回る5千人を超え大盛況に終わりました。その後の大会においても、常にタイ人の参加者数は日本人の参加者数を遥かに上回り、正しく日・タイ両国民のお祭りを通じての交流の場として、日本人会の恒例イベントの一つとして定着し現在に至っています。

大会会場は、櫓を設置し、紅白の垂れ幕、提灯等で飾り付けを行い、日本の盆踊り会場そのものを再現しております。また、お祭りには欠かせない屋台も出店し、お祭り定番メニューの“やきそば”をはじめいろいろな食べ物、催し物が用意されております。日本での盆踊りを思い出すことでしょう。

大会のイベントとして、参加者皆様にタイの“ラムウォン”と日本の“盆踊り”を踊っていただき楽しんでいただくことに加え、日・タイ両国の民族芸能の演技やバンコク日本人学校の生徒さんによる演技を披露いただき、大会を盛り上げてきてもらっております。

大会の終盤に差し掛かると、参加者お待ちかねの“日本往復航空券”や“テレビ”等が当たるラッキードローが行われます。参加者は半券片手に耳を澄ませ、抽選が行われるたびに歓喜の声と落胆のため息が会場を包み、会場は盛り上がります。

そして、大会のフィナーレは、国王賛歌に引き続き、会場の真上に上がる打ち上げ花火。時間にして約10分弱、頭上で花開く花火とその爆音は、体の芯まで響き渡り、忘れられない思い出となることでしょう。

最後に、ラムウォン盆踊り大会は、日本人会が主催するイベントではありますが、在タイ日本国大使館をはじめ、多くの企業、団体、個人等からのご協賛、ご協力の下毎回開催されております。

この場をお借りしまして、改めて皆様のご協賛、ご協力につき厚く御礼申し上げますと共に、引き続きのご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

第1回目から開催状況につきましては以下表をご参照ください。

	開催場所	開催日	その他	来場者数
第1回	チュロンコン大学	1987年2月		約5,000名
第2回	青少年センター	1989年11月		データ無
第3回	青少年センター	1990年12月		データ無
第4回	青少年センター	1993年11月	日本人会創立80周年記念 青少年センター10周年記念	データ無
第5回	青少年センター	1995年11月	国王陛下在位50周年慶祝	データ無
第6回	青少年センター	1999年11月	国王陛下72歳慶祝	データ無
第7回	国立競技場	2003年12月	王妃殿下72歳慶祝 日アセアン交流年 日本人会90周年	約4,000名
第8回	青少年センター	2005年12月	国王陛下即位60周年	約7,000名
第9回	国立競技場	2007年12月	国王陛下生誕80年 日タイ修好120周年	約25,000名
第10回	国立競技場	2009年12月	日メコン交流年	約10,000名
第11回	国立競技場 (チンダラック運動場)	2013年12月	国王陛下生誕86年 日本人会創立100周年記念	反政府デモ騒動のため延期

* 1997年はアジア通貨危機の影響、2001年はNY同時テロの影響、2011年はタイ洪水被害の影響により開催を中止。

その他の日本人会の活動

文化祭

日本人会文化祭は、1969年日本人会創立55周年、戦後再開15周年に始まった演芸大会が1985年に文化祭と改めスタートし、昨年までに34回開催されました、日本人会の代表行事の一つです。最近、年1回、11月～12月頃にかけて行われています。ダンスやコーラスなど文化部系のサークル・同好会の発表の場であるほか、一芸に秀でた日本人有志が、得意の芸を披露する場でもあります。

図書館

日本人会では、本館、別館に図書館があり、それぞれ1万冊以上の蔵書があり、本の貸し出しサービスを行っています。運営はボランティアの皆様のご協力を得て行われています。

子ども図書館

別館には小さなお子様向けの子ども図書館があり、こちらも蔵書は1万冊を超えています。子ども図書館では、本の貸出し以外に、子どもたちに絵本の読み聞かせを行うなど、ボランティアの皆様の手で、いろいろなイベントが催されています。

事業部:敬老の日祝賀会

また、1970年より敬老の日には、満75歳以上の日本人会会員の方の益々のご健康と長寿をお祝いし、祝賀会を開催しています。より多くの方でお祝いして差し上げる趣旨で、1993年からは瀧川福祉基金が60歳以上の方をご招待し、曙会と共催で歌や踊りも交え楽しい会を催しています。

事業部:納骨堂法要

バンコク都内、サパーンブット橋の近くにある、ラーチャプラナ寺(ワット・リヤップ)内には、タイで亡くなられた日本人の方を供養する日本人納骨堂があります。1935年に金閣寺を模して建てられた納骨堂の過去帳には、明治27年頃からの名前が記帳されていて現在630名です。代々、高野山真言宗から留学僧を招聘、堂守をお務めいただいています。毎年、春と秋のお彼岸には、日本人会として、大使館の代表者をお迎えして、亡くなられた諸先輩や身近な故人の供養を行っています。

事業部:カンチャナブリ慰霊塔法要

第2次世界大戦中、日本軍はビルマに侵攻した部隊に物資を輸送するためタイとビルマを結ぶ泰緬鉄道の建設が必要と考え、1942年7月に着手し、僅か1年4か月後の43年10月に開通させました。しかし資機材の不足や過酷な地理・気象環境、極端に短い工期などの悪条件下での突貫工事となり多くの建設従業者の人命が失われる結果となりました。余りに悲惨な事態に日本軍鉄道隊は戦時中の44年2月に犠牲者の霊を祭るべくカンチャナブリに慰霊塔を建立しました。塔の裏側に「泰緬鉄道建設に携わり不幸にして斃れた犠牲者(外国人捕虜と近隣諸国の労務者)の慰霊の碑」の意味の言葉が刻まれています。この慰霊塔がある土地はその後日本人会が買取り、1963年以降毎年春のお彼岸の前後に法要を執り行っています。1996年には、慰霊塔のメンテナンスを図るため、カンチャナブリ基金を創設、植樹や芝生を植えるなど、美観の維持に努めています。

事業部:ゲンコイ寺の法要

明治時代(1894年)に最初の農業移民として来タイした一部の人が、当時ジャングルを切り開き鉄道を敷設する工事に携わり苦勞の末に亡くなりました。その慰霊のため、1966年、サラブリー県のゲンコイ寺に日本人会有志で「第一回日本人移民之碑」を建立し、供養を行っています。また、第2次世界大戦中の1945年、ゲンコイ市民は連合軍の爆撃により多くの死傷者を出しており、その慰霊祭が毎年4月2日に行われていることから、1999年以降は、ゲンコイ市と日本人会の合同で慰霊祭を執り行っています。

事業部:懇和会

タイに長期滞在をしようと思っている方々の親睦団体で、新年会、講演会、年1回のバス旅行等を行っています。細かな規定はなく、日本人会会員であれば誰でも入会出来ます。中には入会歴何十年という古い会員もいれば、来て間もない方もいます。会員が亡くなられた時には、会から供花を贈り、喪主(チャオパーブ)を勤め、親しい人をお通夜に参列してご遺族を慰めております。

教育部:英語検定

日本人がタイでも日本の英語検定試験が受験できるよう便宜を図るため、2000年より、日本人学校、学校PTA、及びボランティアの方々のご協力を得て、日本人会教育部が窓口となり、英語検定試験を行っています。試験は年に3回、日本人学校を借りて行われます。2012年度の受験者数は、延べで1,360名を数えています。

日本人学校への記念品贈呈

日本人会は、毎年、泰日協会学校バンコク校(バンコク日本人学校)の小学部、中学部の卒業生に対し、卒業記念品を贈呈しています。2012年度(2013年3月)には、バンコク日本人学校の全校児童、生徒さんが、日本人会創立100周年を記念する人文字を作ってくれましたので、卒業生のみならず、全校生徒に人文字写真入り下敷きを送りました。

もちつき大会

ご家族で楽しめるイベントとして、2008年から企画された、比較的新しいイベントです。毎年2月初めに、日本人会別館裏庭にて、ボランティアの方々のご協力のもとで行われています。毎回、多くの小さなお子様連れの会員で賑わっています。

SMS緊急メール

日本人会の重要な役割の一つである、会員(邦人)の安全確保を、時代に則した手段、方法で行うため、2008年1月より、携帯電話のSMSを利用した会員向けの緊急連絡サービスをスタートしました。開設以来2012年末までに、タイの政情関連の他、新型インフルエンザ発生、東日本大震災、洪水など、計12回の発信が行われました。

レストラン The Japan

本館にある日本食レストラン「The Japan」は、以前は日本人会直営の食堂でしたが、現在は場所をレンタルする形で、運営は外部業者に委託しております。本館隣接するということで、本館を利用される会員の皆様をはじめ、多くの日本人、タイ人にご利用されており、毎月の利用者は3千名を超えています。

優待サービス

レストラン、商店などと提携して、日本人会会員証を提示すると割引を受けられる優待サービスも2006年からスタートし、年々充実を図っています。

編集後記

約2年近くにわたり日本人会100年史の編纂にあたりましたが、作業は予想以上に困難を極めました。

一番の問題は、過去の史実をまとめようにも、参考にすべき記録や書物が十分なかったということです。100年史の編纂にあたりましては、史実を忠実に記載するのは、当然のことなのですが、100年の歴史の中には、第二次世界大戦終戦後に在留邦人が收容所に移住させられた時代もありますし、会館移転の際などには、残念ながら古い書物等をきちんと移設、保管することが出来なかった事情もあると思われます。そのため、限られた資料をもとに、長く在タイされている日本人の方々の記憶にも頼りながら、なんとか事実関係の確認作業を行ってきました。それでも最後まで真相が突き止められなかった内容もございますし、もしかしたら事実と異なっている箇所もあるかも知れませんが、その点につきましては、何卒ご理解ご了承くださいませよう、お願い致します。

一方、歴代の大使、日本人会会長はじめ、たくさんの関係者の皆様からご寄稿賜りました文章は、そのどれもが100年の歴史を誇るタイ国日本人会の歴史的一幕として、大変貴重な資料であります。執筆にご協力いただいた皆様には、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。尚、各執筆者の皆様からご寄稿いただいた文章における、地名、人名などの表記については、時代によって表現の仕方も異なることから、基本的にはご本人の原文の表現を尊重し、できるだけそのまま記載しております。また、日本人会に関係の深かった故人のご遺稿の一部を編集委員会の判断で編集、転載しておりますがご容赦いただきたいと思います。

詳細に亘る完璧なデータは揃わなかったとはいえ、今回の編纂により、タイ国日本人会が創立から幾多の困難、変遷を経て現在に至るまでの経緯や、100年もの間、常に日本人会を支えていただいたタイ王国、タイの関係者の皆様のご支援、そして、その時々日本人会の発展にご尽力いただかれた諸先輩の皆様方のご苦勞や熱い思いを、集大成として後世に残すことが出来たと思います。そうした100年の歴史の積み重ねの上に、現在のタイ国日本人会があるということを、この100年史を通じて、多く皆様にご理解いただければ、大変幸甚でございます。

最後になりますが、今回100年史を編纂するにあたり、お世話になりましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

100年史編集委員長
タイ国日本人会第49代会長
小野 雅司

編集委員会委員

(継省略、氏名五十音順)

委員長：小野 雅司 Kikuya Siam Corporation Ltd.

副委員長：石井 良一 R.M.S Ltd., Part.

委員：伊藤 周一 Panasonic (Thailand) Co.,Ltd.

稲富 哲夫 Sahaviriya Steel Industries Public Company Limited

瀬戸 正夫 Photographer

宮治 豊 NYK Line (Thailand) Co.,Ltd.

※編集期間内の帰国された委員

佐藤 実 Yusen Logistics (Thailand) Co.,Ltd.

電子化委員会委員

稲富 哲夫 Sahaviriya Steel Industries Public Company Limited

宮治 豊 NYK Line (Thailand) Co.,Ltd.

黒江 浩介 Embassy of Japan

磯田 博之 Japanese Association in Thailand

タイと共に歩んで

泰国日本人会百年史

発行日 : 2013年9月
編集人 : 100年史編集委員会
発行人 : 大橋 寅治郎
発行所 : 泰国日本人会

1st Floor, Sathorn Thani Bldg. II
92/2 North Sathorn Rd. Bangrak, Bangkok 10500
Tel. 0-2236-1201(代) Fax. 0-2236-1131
Web : www.jat.or.th E-mail : info@jat.or.th
